国道200号線バイパス関係
埋蔵文化財調査概報

筑紫野市大字隈所在遺跡群の調査

福岡県文化財調査報告書
第 67 集

1984
福岡県教育委員会

国道200号線バイパス関係
埋蔵文化財調査概報

筑紫野市大字隈所在遺跡群の調査

序

この報告書は，福岡県教育委員会が一般国道200号線のバイパス建設に際し，その用地内の埋蔵文化財を発掘調査したもののうち，福岡県土木部道路建設課が九州地方建設局の指導で進めている筑紫野市大字隈地区の調査概要であります。

調査は，昭和56年度から昭和58年度にわたり断続的に実施しましたが，遺跡は弥生時代から古墳時代を通じて中世までのものが建設用地内全域から検出され，当所予想した規模に数倍するものとなりました。このために，やむなく埋没する地区の遺跡の調査は断念せざるを得ませんでしたが，一応の成果を得たものとして，その記録の概要を報告します。

なお，今回の報告は遺物整理が中途のものであり，概要報告となりましたので，今後の出土品整理と報告書作成に努力しなければなりません。

また，発掘調査に際しては，福岡県土木部道路建設課と那珂土木事務所の関係諸氏や地元の方々には，種々のご協力をいただいたとことを心から感謝申し上げます。

昭和59年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　言

1　本書は，一般国道200号線バイパス建設のために破壊される筑紫野市大字隈所在遺跡群を発掘調査した調査概要報告である。

2　本書に掲載する遺跡群の調査と整理分担は下記のとおりである。

Ⅰ－1……栗原和彦
2……柳田康雄
Ⅱ……柳田康雄
Ⅲ－1……栗原和彦・柳田康雄・橋口達也・浜田信也・中間研志・小池史哲・伊崎俊秋
2……柳田康雄・木下　修・馬田弘稔・池辺元明・伊崎俊秋
3……柳田康雄・伊崎俊秋
4……柳田康雄・木下　修・伊崎俊秋
5……栗原和彦・柳田康雄・木下　修・馬田弘稔・伊崎俊秋
6……柳田康雄
Ⅳ－1……永井昌文
2……三辻利一

3　遺物の整理・復原は岩瀬正信，図面作成においては上記担当者のほかに林真理子・安本智子が従事し，写真撮影の大半は柳田が担当した。なお，実測図の製図は，担当者のほかに豊福弥生・鶴田佳子が担当した。

4　本書の編集は，柳田康雄が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ 調査の経過

1．調査経過……1

2．調査組織……2

Ⅱ 位置と環境……4

Ⅲ 各地点遺跡群の調査

1．天神遺跡（第1地点）……6

(1) はじめに……6

(2) 貯蔵穴……6

(3) 住居跡……8

(4) 大 溝……10

(5) 甕棺墓と土壙墓……20

(6) 小 結……25

2．橋詰遺跡（第2地点）……26

(1) はじめに……26

(2) 貯蔵穴……26

(3) 住居跡……34

(4) その他の遺構と遺物……49

(5) 小 結……53

3．平原遺跡（第3地点）……54

(1) はじめに……54

(2) 貯蔵穴……55

(3) 住居跡……58

(4) 甕棺墓……60

(5) 円形周溝墓……60

(6) その他の遺構……63

4．橋詰遺跡（第4地点）……64

(1) はじめに……64

(2) 貯蔵穴群……65

(3) 住居跡……65

(4) 土 壙……67

5．平原遺跡（第5地点東地区）……68
(1) はじめに……68
(2) 祭祀土壙……69
(3) 住居跡……71
(4) その他の遺構……71
6．平原遺跡（第5地点中央地区）……71
(1) はじめに……71
(2) 甕棺墓……74
(3) 土壙墓……75
7．池の上遺跡（第5地点西地区）……76
(1) はじめに……76
(2) 甕棺墓……76
(3) 祭祀遺構……93
8．平原古墳群（第5地点）……97
(1) はじめに……97
(2) 1号墳……98
(3) 2号墳……103
(4) 3号墳……106
(5) 4号墳……108
(6) 5号墳……109
(7) 6号墳……114
(8) 甕棺墓と土壙墓群……115
9．総　括……120
Ⅳ　化学分析
1．池の上遺跡甕棺墓の人骨……122
2．天神遺跡小溝と平原2号墳出土の須恵器胎土分析……124

図 版 目 次

1．天神遺跡（第1地点）　　本文対照頁

図 版 1 (1) 天神遺跡貯蔵穴・住居跡全景（西から）…… 6
(2) 1．2号貯蔵穴…… 6
(3) 3号貯蔵穴…… 6
図 版 2 (1) 5号貯蔵穴…… 6
(2) 7号貯蔵穴…… 6
(3) 8号貯蔵穴…… 6
(4) 9号貯蔵穴…… 7
図 版 3 (1) 10号貯蔵穴…… 7
(2) 11号貯蔵穴…… 7
(3) 12号貯蔵穴…… 7
(4) 18号貯蔵穴…… 7
図 版 4 (1) 天神遺跡住居跡全景（西から）…… 8
(2) 1号住居跡…… 8
(3) 6号住居跡…… 8
図 版 5 (1) 2号住居跡…… 8
(2) 2号住居跡床面の須恵器…… 8
(3) 3号住居跡…… 8
(4) 3号住居跡の投弾形土製品…… 8
図 版 6 (1) 7～9号住居跡…… 8
(2) 4～7号住居跡…… 8
(3) 不整形土壙…… 8
(4) 2号土壙…… 8
図 版 7 (1) 天神遺跡大溝全景（南から）……10
(2) 大溝中央区土層断面……10
(3) 大溝西区断面と小溝……11
図 版 8 (1) 大溝西区中層の土器……11
(2) 大溝西区中層の土器（北から）……12
(3) 古墳時代小溝全景（北から）……13
(4) 甕棺墓地区表採の管玉（実大）……20

図　版　9　(1)　天神遺跡墓地群全景（北から）……20
(2)　2・3号甕棺墓……20
図　版　10　(1)　4号甕棺墓……22
(2)　5号甕棺墓……22
(3)　6号甕棺墓……22
図　版　11　(1)　7号甕棺墓……22
(2)　8号甕棺墓……22
(3)　9号甕棺墓……22
図　版　12　(1)　10号甕棺墓……22
(2)　10～13号甕棺墓（南から）……23
図　版　13　(1)　11.12甕棺墓……23
(2)　12号甕棺墓……23
(3)　13号甕棺墓……23
図　版　14　(1)　14号甕棺墓……23
(2)　15号甕棺墓……23
(3)　16号甕棺墓……23
図　版　15　(1)　17号甕棺墓と4号土壙墓……24
(2)　17号甕棺墓……24
(3)　18号甕棺墓……24
図　版　16　(1)　19号甕棺墓と粘土目張……24
(2)　19号甕棺墓……24
図　版　17　(1)　4号土壙墓……24
(2)　5号土壙墓……24
(3)　6号土壙墓……24
(4)　8号土壙墓……25
2．橋詰遺跡（第2地点）
図　版　18　(1)　橋詰遺跡発掘区全景（弥生期）……26
(2)　1号貯蔵穴……26
(3)　3号貯蔵穴……26
図　版　19　(1)　4号貯蔵穴……26
(2)　5号貯蔵穴……26
(3)　7号貯蔵穴土層断面……26
(4)　7号貯蔵穴……26

図　版　20　(1)　6号貯蔵穴……27
(2)　9号貯蔵穴……27
(3)　8号貯蔵穴土層断面……27
(4)　8号貯蔵穴……27
図　版　21　(1)　10号貯蔵穴……28
(2)　11号貯蔵穴……28
(3)　12号貯蔵穴……28
(4)　14号貯蔵穴……28
図　版　22　(1)　13号貯蔵穴土層断面……28
(2)　13号貯蔵穴……28
(3)　15号貯蔵穴……28
(4)　16号貯蔵穴……28
図　版　23　(1)　17号貯蔵穴……28
(2)　18号貯蔵穴……28
(3)　19号貯蔵穴……28
(4)　20号貯蔵穴……28
図　版　24　(1)　23号貯蔵穴……29
(2)　24号貯蔵穴……29
(3)　27号貯蔵穴……29
(4)　28号貯蔵穴……29
図　版　25　(1)　31号貯蔵穴……29
(2)　33号貯蔵穴……29
(3)　橋詰遺跡調査区全景（古墳期）……34
図　版　26　(1)　調査区全景（古墳期）……34
(2)　1号住居跡……34
(3)　1号住居跡・カマド……37
図　版　27　(1)　2･4号住居跡……39
(2)　2号住居跡カマド……39
(3)　4号住居跡カマド……39
図　版　28　(1)　3号住居跡……46
(2)　5号住居跡……46
図　版　29　(1)　6号住居跡……46
(2)　7号住居跡……46

図　版　30　(1)　8号住居跡……46
(2)　9号住居跡……46
図　版　31　(1)　橋詰遺跡古墳時代住居跡群（北から）……46
(2)　10号住居跡……47
図　版　32　(1)　13号住居跡……47
(2)　14号住居跡……47
図　版　33　(1)　15号住居跡……47
(2)　16号住居跡……47
図　版　34　(1)　10·14·17～19号住居跡……47
(2)　17号住居跡……48
図　版　35　(1)　17～19号住居跡……48
(2)　20号住居跡……48
図　版　36　(1)　9·10号住居跡と掘立柱建物……48
(2)　掘立柱建物……48
図　版　37　(1)　住居跡状遺構……48
(2)　1号土壙墓……49
図　版　38　(1)　2号土壙……49
(2)　3号土壙……49
(3)　中世小溝……49
図　版　39　(1)　2号住居跡出土子持勾玉……43
(2)　1号土壙墓出土ガラス小玉……49
(3)　9号住居跡出土臼玉……44
(4)　L字溝出土有孔円盤・臼玉……50
3．平原遺跡（第3地点）
図　版　40　橋詰遺跡・平原遺跡（第2～5地点）全景（東上空から）……54
図　版　41　(1)　平原遺跡発掘区全景……54
(2)　平原遺跡近景（東から）……54
図　版　42　(1)　1号貯蔵穴土層断面……55
(2)　1号貯蔵穴……55
(3)　2号貯蔵穴……55
(4)　3号貯蔵穴……56
図　版　43　(1)　1号住居跡……58
(2)　2号住居跡……58

図　版　44　(1)　3号住居跡……58
(2)　4号住居跡……58
図　版　45　(1)　5号住居跡と2号円形周溝墓主体部……58
(2)　6号住居跡……58
図　版　46　(1)　円形竪穴……63
(2)　不整形土壙……63
図　版　47　(1)　4号ピット……63
(2)　甕棺墓……60
(3)　1・2号円形周溝墓……60
図　版　48　(1)　1号円形周溝墓……60
(2)　1号墓主体部……60
(3)　2号墓主体部……63
4．橋詰遺跡（第4地点）
図　版　49　(1)　橋詰・平原・天神遺跡全景（西上空から）……64
(2)　橋詰遺跡（第4地点）全景……64
図　版　50　(1)　1～4号貯蔵穴と2～4号住居跡……65
(2)　1～4号貯蔵穴……65
図　版　51　(1)　1号住居跡……65
(2)　2号住居跡……65
図　版　52　(1)　3号住居跡……65
(2)　4号住居跡……66
図　版　53　(1)　7号住居跡……66
(2)　1号土壙……67
5．平原遺跡（第5地点東地区）
図　版　54　(1)　平原・池の上遺跡・平原古墳群遠景（北上空から）……68
(2)　上同（第5地点）全景（東上空から）……68
図　版　55　(1)　平原遺跡（第5地点東地区）発掘区全景……68
(2)　小石室……71
(3)　小石室（蓋石除去後）……71
図　版　56　(1)　祭祀土壙土器出土状態……69
(2)　祭祀土壙（土器除去後）……69
図　版　57　(1)　1号住居跡……71
(2)　2号住居跡……71

6．平原遺跡（第5地点中央地区）

図　版　58　(1)　平原・池の上遺跡全景（東上空から）……71
　　(2)　平原遺跡甕棺・土壙墓群（第5地点中央地区）全景……71
図　版　59　(1)　平原遺跡甕棺墓群（東から）……71
　　(2)　1号甕棺墓……72
　　(3)　2号甕棺墓……72
図　版　60　(1)　3号甕棺墓……72
　　(2)　4号甕棺墓……72
　　(3)　5号甕棺墓……72
　　(4)　6・7号甕棺墓……72
図　版　61　(1)　8号甕棺墓……73
　　(2)　9号甕棺墓……73
　　(3)　9号甕棺墓……73
図　版　62　(1)　1号土壙墓……75
　　(2)　3号土壙墓……75
　　(3)　池の上遺跡（第5地点西地区）全景……76

7．池の上遺跡（第5地点西地区）

図　版　63　　池の上遺跡甕棺墓群全景（東上空から）……76
図　版　64　(1)　1～3号甕棺墓……76
　　(2)　4号甕棺墓……77
　　(3)　5号甕棺墓……77
　　(4)　6号甕棺墓……77
図　版　65　(1)　7号甕棺墓……78
　　(2)　8号甕棺墓……78
　　(3)　9号甕棺墓……78
　　(4)　10号甕棺墓……78
図　版　66　(1)　11号甕棺墓……79
　　(2)　12号甕棺墓……78
　　(3)　14～18号甕棺標石……79
図　版　67　(1)　14号甕棺墓……79
　　(2)　15・16号甕棺墓……79
　　(3)　15号甕棺墓……79
　　(4)　17号甕棺墓……80

図 版 68 (1) 18号甕棺墓……80
(2) 22号甕棺墓……80
(3) 23号甕棺墓上甕……80
(4) 23号甕棺墓下甕……80
図 版 69 (1) 24号甕棺墓……81
(2) 25号甕棺墓……82
(3) 26号甕棺墓……82
(4) 27号甕棺墓……82
図 版 70 (1) 29号甕棺墓……81
(2) 29号甕棺墓壙……81
(3) 29号甕棺墓……81
図 版 71 (1) 31号甕棺墓……82
(2) 32号甕棺墓……82
(3) 36号甕棺墓……82
(4) 40号甕棺墓……83
図 版 72 (1) 41号甕棺墓……83
(2) 45号甕棺墓……83
(3) 46号甕棺墓……84
(4) 47号甕棺墓……83
図 版 73 (1) 51号甕棺墓……83
(2) 52号甕棺墓……84
(3) 18・53号甕棺墓……84
図 版 74 (1) 54号甕棺墓……84
(2) 55号甕棺墓……84
(3) 55号甕棺墓……84
図 版 75 (1) 57号甕棺墓……85
(2) 57号甕棺人骨……85
(3) 58号甕棺墓……86
(4) 59号甕棺墓……86
図 版 76 (1) 60・61号甕棺墓……85
(2) 50・63・55号甕棺墓……85
(3) 64号甕棺墓……86
(4) 65号甕棺墓……86

図　版　77　(1)　1号祭祀土壙……93
(2)　7号祭祀土器群……93
(3)　2号祭祀土壙と土器群……93
図　版　78　(1)　8号祭祀土器群……93
(2)　池の上1号貯蔵穴……93
(3)　平原5・6号墳付近の甕棺墓と祭祀土壙……93

8．平原古墳群（第5地点）

図　版　79　(1)　平原古墳群全景（東上空から）……97
(2)　1号墳（調査前）……98
(3)　1号墳（調査後）……99
図　版　80　(1)　1・3号墳全景……99
(2)　石室と墓道……100
(3)　石室内から見た玄門……100
図　版　81　(1)　1号墳と3号墳（西から）……101
(2)　1号墳石室（北上から）……101
図　版　82　(1)　1号墳の造出……101
(2)　造出上の須恵器……102
図　版　83　(1)　2号墳（調査前）……103
(2)　2号墳と4号墳全景（東から）……103
図　版　84　(1)　2号墳・4号墳全景……103
(2)　2号墳主体部……104
図　版　85　(1)　2号墳西側周溝内須恵器……104
(2)　3号墳（調査前）……106
(3)　3号墳全景（調査後）……106
図　版　86　(1)　3号墳とその付近の全景……106
(2)　3号墳主体部……106
(3)　3号墳北東側裾の須恵器……106
図　版　87　(1)　4号墳全景（東から）……108
(2)　4号墳主体部……108
図　版　88　(1)　5・6号墳遠景（調査前）……109
(2)　5号墳（調査中）……109
図　版　89　(1)　5号墳主体部……109
(2)　5号墳北西側周溝の須恵器……113

図 版 90 (1) 6号墳全景（西から）……114
(2) 6号墳主体部（南から）……115
図 版 91 (1) 1号甕棺墓（土師器）……115
(2) 2号甕棺墓（須恵器＋土師器）……115
(3) 古墳出土玉類……115
(4) 歴史時代土壙墓全景……117
図 版 92 (1) 1号土壙墓……117
(2) 2号土壙墓……117
(3) 3号土壙墓……117
(4) 4号土壙墓……117
図 版 93 (1) 5号土壙墓……117
(2) 6号土壙墓……118
(3) 7号土壙墓……118
図 版 94 (1) 8号土壙墓……119
(2) 9号土壙墓……119
(3) 10号土壙墓……119
(4) 11号土壙墓……119

挿 図 目 次

第 1 図 隈遺跡群の位置と周辺主要遺跡……5
第 2 図 調査遺跡と付近の地形図……折込
1．天神遺跡（第1地点）
第 3 図 天神遺跡（第1地点）遺構配置図……折込
第 4 図 1・2号土壙墓，不整形土壙，1～14・18号貯蔵穴実測図……折込
第 5 図 貯蔵穴・住居跡・土壙出土土器実測図……7
第 6 図 大溝西南土壙出土土器実測図……9
第 7 図 2号住居跡・小溝出土須恵器実測図……9
第 8 図 大溝土層断面実測図……11
第 9 図 大溝中央区出土土器実測図……12
第 10 図 大溝西区出土土器実測図①……13
第 11 図 大溝西区出土土器実測図②……14
第 12 図 大溝西区出土土器実測図③……15

第 13 図　天神遺跡出土土製品・石器実測図……18
第 14 図　天神遺跡出土石器実測図……19
第 15 図　天神遺跡甕棺墓配置図……折込
第 16 図　1 ～ 9 号甕棺墓実測図……折込
第 17 図　10～17号甕棺墓実測図……折込
第 18 図　18・19号甕棺墓実測図……21
第 19 図　3 ・ 4 ・10・19号甕棺実測図……折込
第 20 図　8 ・11・12・15・17号甕棺実測図……折込
第 21 図　4 ～ 8 号土壙墓実測図……折込
2．橋詰遺跡（第 2 地点）
第 22 図　橋詰遺跡（第 2 地点）遺構配置図……折込
第 23 図　1 ～ 9 号貯蔵穴実測図……27
第 24 図　10～21号貯蔵穴実測図……28
第 25 図　22～34号貯蔵穴実測図……29
第 26 図　3 ・ 7 ・ 8 ・13・15・26号貯蔵穴土層断面実測図……30
第 27 図　貯蔵穴出土土器実測図……32
第 28 図　1 ～ 5 ・ 8 号住居跡実測図……折込
第 29 図　6 ・ 7 ・ 9 ・10・13・16・17号住居跡実測図……折込
第 30 図　15・16号住居跡，掘立柱建物実測図……35
第 31 図　1 号住居跡カマド実測図……38
第 32 図　4 号住居跡カマド実測図……39
第 33 図　6 号住居跡カマド実測図……40
第 34 図　8 号住居跡カマド実測図……41
第 35 図　古墳時代住居跡出土土器実測図①……43
第 36 図　古墳時代住居跡出土土器実測図②……44
第 37 図　弥生時代住居跡出土土器実測図①……46
第 38 図　弥生時代住居跡その他出土土器実測図②……47
第 39 図　住居跡出土手捏土器実測図……49
第 40 図　1 号土壙墓実測図……49
第 41 図　L 字溝出土土器実測図……50
第 42 図　橋詰遺跡出土土製品・石器実測図……51
第 43 図　橋詰遺跡出土石器実測図……52
3．平原遺跡（第 3 地点）

第 44 図　1 ～ 4 号貯蔵穴実測図……54
第 45 図　平原・橋詰遺跡（第 3 ・ 4 地点）遺構配置図……折込
第 46 図　貯蔵穴出土土器実測図……56
第 47 図　1 ～ 5 号住居跡実測図……折込
第 48 図　平原遺跡出土土器・土製品・石器実測図……59
第 49 図　平原遺跡出土石器実測図……59
第 50 図　甕棺墓実測図……60
第 51 図　甕棺実測図……60
第 52 図　1 号円形周溝墓実測図……61
第 53 図　1 ・ 2 号円形周溝墓出土土器実測図……61
第 54 図　1 号円形周溝墓主体部実測図……62
第 55 図　2 号円形周溝墓主体部実測図……62
第 56 図　円形竪穴実測図……63
4．橋詰遺跡（第 4 地点）
第 57 図　橋詰遺跡 1 ～ 4 号貯蔵穴実測図……64
第 58 図　1 ～ 7 号住居跡実測図……66
第 59 図　橋詰遺跡出土土器・土製品・石器実測図……67
第 60 図　1 号土壙実測図……67
5．平原遺跡（第 5 地点東地区）
第 61 図　平原遺跡（第 5 地点東地区）遺構配置図……68
第 62 図　祭祀土壙実測図……69
第 63 図　平原遺跡出土石器実測図①……69
第 64 図　平原遺跡出土石器実測図②……69
第 65 図　1 ・ 2 号住居跡実測図……70
第 66 図　小石室実測図……71
6．平原遺跡（第 5 地点中央地区）
第 67 図　1 ～ 7 号甕棺墓実測図……72
第 68 図　平原遺跡甕棺墓・土壙墓配置図……折込
第 69 図　8 ・ 9 号甕棺墓実測図……73
第 70 図　甕棺実測図①……74
第 71 図　甕棺実測図②……折込
第 72 図　1 ～ 3 号，1 ～ 5 ・10号土壙墓実測図……折込
7．池の上遺跡（第 5 地点西地区）

第 73 図　池の上遺跡甕棺墓配置図……折込
第 74 図　1～3・5・6号甕棺墓実測図……77
第 75 図　4・7～9・12・13号甕棺墓実測図……78
第 76 図　11・14・16・20号甕棺墓実測図……79
第 77 図　17・21～23・28号甕棺墓実測図……80
第 78 図　10・15・18号甕棺墓実測図……折込
第 79 図　24・29号甕棺墓実測図……81
第 80 図　25～27・33・36号甕棺墓実測図……82
第 81 図　19・40・45甕棺墓実測図……折込
第 82 図　38・39・41～43・48号甕棺墓実測図……83
第 83 図　44・46・49・53・56号甕棺墓実測図……84
第 84 図　47・51・52号甕棺墓実測図……折込
第 85 図　50・57・60・61号甕棺墓実測図……85
第 86 図　58・59・62～64号甕棺墓実測図……86
第 87 図　54・55・65号甕棺墓実測図……折込
第 88 図　甕棺実測図①……折込
第 89 図　甕棺実測図②……90
第 90 図　甕棺実測図③……折込
第 91 図　甕棺実測図④……折込
第 92 図　甕棺実測図⑤……91
第 93 図　29号甕棺人骨出土状態実測図……92
第 94 図　55号甕棺墓出土石剣片実測図……92
第 95 図　1・2号祭祀遺構実測図……93
第 96 図　祭祀土器実測図①……94
第 97 図　祭祀土器実測図②……95

8．平原古墳群（第5地点）

第 98 図　平原古墳群配置図……97
第 99 図　1号墳地形実測図……98
第 100 図　1号墳墳丘実測図……99
第 101 図　1号墳石室実測図……100
第 102 図　1号墳墳丘土層断面実測図……折込
第 103 図　1号墳出土土器実測図……102
第 104 図　2・4号墳地形実測図……折込

第105図　2・4号墳墳丘実測図……折込
第106図　2号墳墳丘土層断面図……折込
第107図　2号墳石室実測図……104
第108図　2号墳出土須恵器実測図……105
第109図　3号墳石室実測図……106
第110図　3号墳墳丘実測図……107
第111図　3号墳出土土器実測図……108
第112図　4号墳石室実測図……109
第113図　古墳出土玉類実測図……109
第114図　古墳出土鉄器実測図……109
第115図　5・6号墳地形実測図……110
第116図　5号墳墳丘実測図……111
第117図　5号墳石室実測図……112
第118図　5号墳出土須恵器実測図……113
第119図　5・6号墳墳丘土層断面図……折込
第120図　6号墳墳丘実測図……114
第121図　6号墳石室実測図……115
第122図　1・2号土師器甕棺墓実測図……115
第123図　土師・須恵器甕棺実測図……116
第124図　6・7号土壙墓実測図……118
第125図　8・9・11号土壙墓実測図……119

Ⅳ　化学分析

第126図　……125
第127図　……125
第128図　……125
第129図　……125

表　目　次

第 1 表　調査遺跡一覧表……2
1．天神遺跡（第 1 地点）
第 2 表　天神遺跡貯蔵穴・住居跡・土壙出土土器一覧表……8
第 3 表　大溝南西土壙出土土器一覧表……10
第 4 表　2 号住居跡・小溝出土須恵器一覧表……10
第 5 表　大溝中央区出土土器一覧表……11
第 6 表　大溝西区出土土器一覧表……15
第 7 表　出土土製品一覧表……17
第 8 表　天神遺跡甕棺墓一覧表……20
第 9 表　天神遺跡土壙墓一覧表……25
2．橋詰遺跡（第 2 地点）
第 10 表　橋詰遺跡貯蔵穴一覧表……30
第 11 表　貯蔵穴出土土器一覧表……33
第 12 表　住居跡一覧表……36
第 13 表　住居跡出土古墳時代土器一覧表……42
第 14 表　住居跡出土弥生式土器一覧表……47
第 15 表　L 字溝出土土器一覧表……50
3．平原遺跡（第 3 地点）
第 16 表　平原遺跡貯蔵穴一覧表……55
第 17 表　貯蔵穴出土土器一覧表……55
第 18 表　住居跡一覧表……58
4．橋詰遺跡（第 4 地点）
第 19 表　橋詰遺跡住居跡一覧表……65
6．平原遺跡（第 5 地点中央地区）
第 20 表　平原遺跡甕棺墓一覧表……75
第 21 表　弥生時代土壙墓一覧表……75
7．池の上遺跡（第 5 地点西地区）
第 22 表　池の上遺跡甕棺墓一覧表……87
第 23 表　祭祀土器一覧表……96

8．平原古墳群（第5地点）

第 24 表　平原1号墳出土土器一覧表……102
第 25 表　平原2号墳出土土器一覧表……107
第 26 表　平原3号墳出土土器一覧表……109
第 27 表　平原5号墳出土土器一覧表……114
第 28 表　平原遺跡歴史時代土壙墓一覧表……118

Ⅳ　化学分析

第 29 表　池の上遺跡甕棺墓人骨観察表……122
第 30 表　胎土分析資料一覧表……124

Ⅰ　調査の経過

1．調査経過

一般国道200号線は，北九州市八幡西区を起点として筑豊地方の直方市・飯塚市を経て筑紫野市原田に至り，一般国道３号線に連絡している。

福岡県の北部と中・南部を短絡する重要幹線であるため近年の交通混雑の状況はすさまじいものがある。

この状況に対応するために直方市下境から嘉穂郡桂川町までの約20㎞の間のバイパスを建設省が，嘉穂郡筑穂町内部から朝倉郡夜須町朝日までの10㎞を一般有料道路として福岡県道路公社が改良工事を行っている。

すでに前者は完成し，後者は筑紫野市山家から，朝倉郡夜須町朝日までの一期工事分約3.7㎞の間が昭和57年度に開通している。(注１)

今回の調査報告は，福岡県道路公社が建設した夜須町朝日を起点とし，筑紫野市隈までの間を福岡県土木部道路建設課が九州地方建設局の指導により建設することとなった部分に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

昭和49年末に，当庁文化課に計画路線についての合議あり，文化課は路線計画に対する意見を含めて文化財の分布状況等につき昭和51年末回答している。

その後，道路建設課で実施設計が検討され，夜須町朝日から宝満川までを甘木土木事務所が，宝満川以西，筑紫野市隈地区内までの間を那珂土木事務所が工事を担当することとなった。

この管内の埋蔵文化財の遺存していると思われる候補地は，大区割で７ヶ所（甘木工事務所管内で３ヶ所・那珂土木事務所管内で４ヶ所）が上げられた。

このうち，甘木土木事務所管内３ヶ所については，昭和55年７月工事着手と同時に試掘調査を実施したが，遺構は遺存せず本調査は不要となった。

引きつづき，那珂土木事務所管内についても工事着手の時期に合せて昭和55年12月にバックフォーを用いて試掘調査を実施した。

この調査で，宝満川の氾濫原に見られた土器散布地は遺構が遺存せず，調査不要となったが隈地区の丘陵部の３ヶ所全てに遺構の遺存が認められた。

この３ヶ所は，分布調査時点での大区割であり，計画路線内の地形と合せると５地点で分け得る。

道路建設課・那珂土木事務所・文化課の三者協議の結果，文化課は発掘調査を昭和56年２月

から開始することとなり，昭和57年度中に終了する計画に同意した。

発掘調査の結果，遺構の遺存が試掘調査時点以上に多かったことさらに，地表で確認していた古墳群の下に，弥生時代の甕棺墓が２ヶ所，約100基も遺存していたことなどが新たに加わったため，大きく期間等の変更が必要となり最終的に発掘調査を終了したのは，昭和58年９月となった。

なお，発掘調査の遺構の内容等は以下の第１表のとおりである。　　（栗原）

第１表　調査遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	種別	時代	調査期間	調査面積
1	天神遺跡	筑紫野市大字隈字天神	集落・墓地	弥生・古墳	昭和57年３月１日～３月29日 昭和57年８月16日～10月15日	765m²
2	橋詰遺跡	筑紫野市大字隈字橋詰	集落	弥生・古墳	昭和57年９月１日～12月25日	2,540m²
3	平原遺跡	筑紫野市大字隈字平原	集落・墓地	弥生～中世	昭和57年10月８日～12月22日	550m²
4	橋詰遺跡	筑紫野市大字隈字橋詰	集落	弥生・古墳	昭和57年12月22日～昭和58年１月25日	618m²
5	平原遺跡	筑紫野市大字隈字平原	集落・祭祀	弥生・古墳	昭和57年10月13日～12月24日	2,900m²
5	平原遺跡	筑紫野市大字隈字平原	墓地	弥生・墓地	昭和57年12月３日～昭和58年８月27日	
5	平原古墳群	筑紫野市大字隈字平原池の上	古墳群	古墳	昭和57年10月26日～昭和58年１月26日	
5	池の上遺跡	筑紫野市大字隈字池の上	墓地	弥生	昭和57年12月18日～昭和58年９月18日	

２．調査組織

昭和56年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野　隆
	教育次長	守屋　尚
	管理部長	森　英俊
	文化課長	藤井　功
	同課長補佐	蓮尾謙吉
庶務	参事補佐兼係長	内山孝之
	主任主事	古賀秀幸
発掘調査	調査第２係長	栗原和彦
	技術主査	柳田康雄
	主任技師	橋口達也

主任技師	浜田信也
同	中間研志
同	小池哲史

なお，調査においては隈地区の区長である田中源二氏には，作業員の手配などでお世話になった。

昭和57年度の発掘調査構成

総括	教育長	友野　隆
	教育次長	森　英俊
	管理部長	安倍　徹
	文化課長	藤井　功
	同課長補佐	中村一世
	調査第1係長	宮小路賀宏
庶務	参事補佐兼係長	内山孝之
	主任主事	古賀秀幸
発掘調査	技術主査	柳田康雄
	主任技師	木下　修
	同	馬田弘稔
	同	池辺元明
	技師	伊崎俊秋

なお，発掘調査にあたっては，日曜・祭日を利用して春日市教育委員会の丸山康晴・平田定幸，筑紫野市教育委員会の草場啓一，福岡県文化財保護指導委員の赤川正秀各氏の多大の援助があった。

昭和58年度の発掘調査構成

総括	教育長	友野　隆
	教育次長	安倍　徹
	管理部長	伊藤博之
	文化課長	藤井　功
	同課長補佐	中村一世
庶務	庶務係長	松尾　満
	主任主事	竹内洋征
発掘調査	調査第2係長	栗原和彦
	技術主査	柳田康雄
	主任技師	馬田弘稔

技　　師　　伊崎俊秋

なお，発掘調査にあたっては，休日にもかかわらず世界学習館の木下尚子，福岡県文化財保護指導委員の赤川正秀，鹿児島大学学生の中園聡や平田春美各氏から多大の援助を受けた。

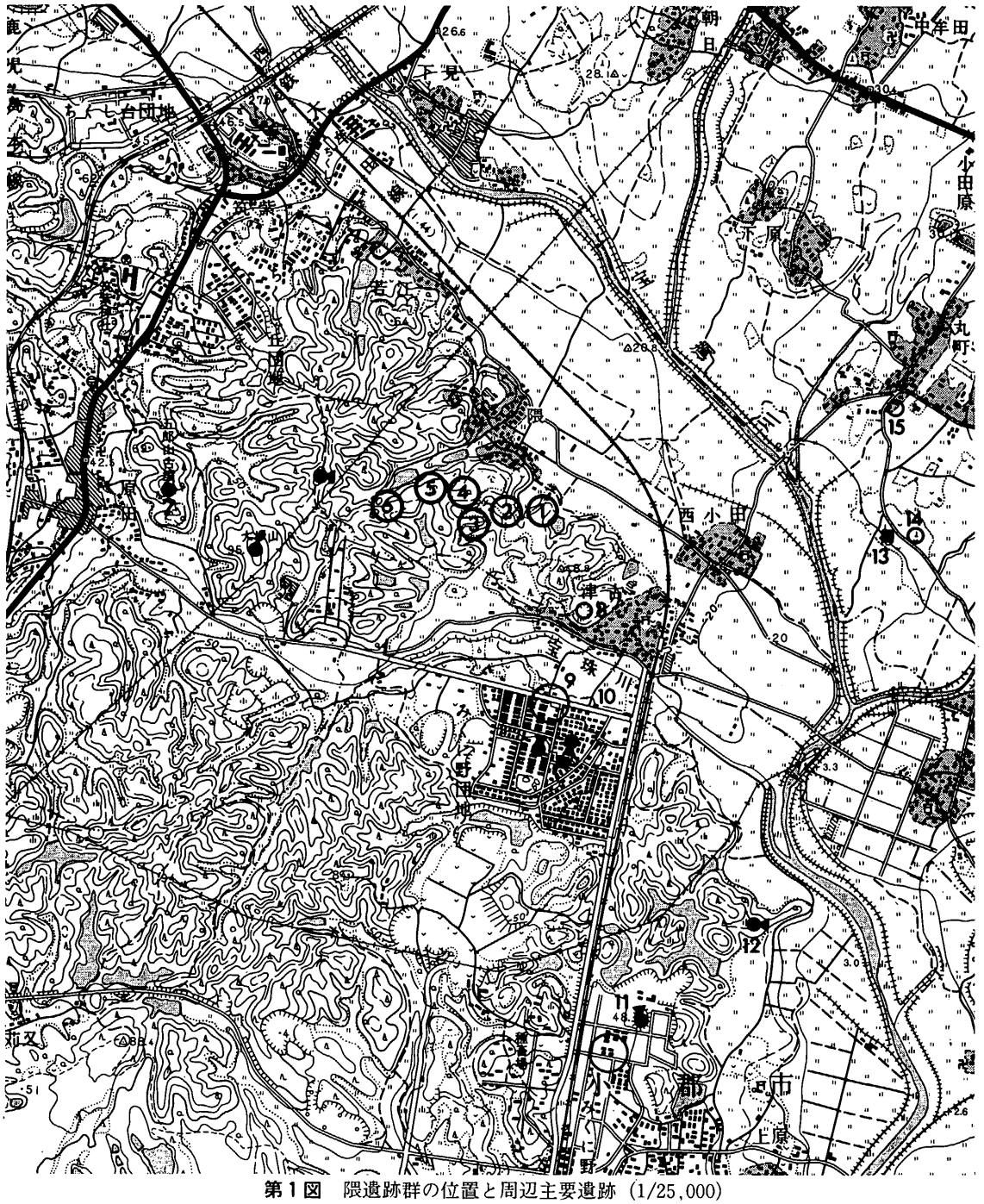
Ⅱ　位置と環境

筑紫野市大字隈に所在する通称隈遺跡群は，鹿児島本線と西鉄大牟田線に挟まれた広大な低丘陵地帯で，これまでの遺跡分布調査によって大遺跡群が存在する可能性が指摘されていながら，学術的な発掘調査が実施されていないことから，その実態は明らかにされていなかった。

周辺の弥生時代遺跡としては，小郡市の津古遺跡と津古内畑遺跡が発掘調査され，津古遺跡では弥生前期から後期の集落が，津古内畑遺跡では前期から中期初頭の貯蔵穴多数を含む集落と墓地が明らかにされた。このように貯蔵穴多数を含む前期から中期初頭の集落は，小郡市三沢遺跡や横隈山遺跡を中心として，付近一帯の低丘陵地帯全域に見られ，弥生前期から中期の大集落が存在する。この傾向は今回の調査によって，隈遺跡群でも証明されたことになるが，弥生時代遺跡は低丘陵群の東側半分に集中している。これは小郡市側も同様で，宝満川を望む低丘陵頂部から東斜面や小さな谷に面した緩斜面に集落や墓地が営まれている。貯蔵穴を多数含む前期の集落には，津古内畑や横隈山遺跡のように環濠をめぐらすものがあるが，環濠内外に同時期の遺構が同時共存することから，環濠を一つの集落とする考えは，あまりにも一面的な見方となる。

弥生の墓地は，その存在が確認されたところは多いが，発掘調査されたのは少ない。甕棺墓は，前期に属するものが僅かに存在するようだが，中期初頭になると小丘陵単位でも見られるようになる。墓地の規模は，津古内畑遺跡のように成人埋葬は主に木棺墓にされるなど，中期初頭頃は成人用甕棺は未発達であるが，中期前半になると成人用甕棺葬が主体となり，木棺墓が姿を消してくる。小郡市の北牟田とハサコの宮遺跡はこの過程を知りうる遺跡で，隈遺跡群の天神遺跡甕棺墓は調査範囲では中期前半にかぎられている。これ以後の弥生墓地は，今回報告する平原（第５地点中央地区）と池の上（第５地点西区）遺跡の中期中頃から後期前半のものが唯一明らかとなった。

古墳としては，丘陵西側に面するところに６世紀後半の装飾古墳である五郎山古墳が存在することは有名であるが，付近の古墳群の実態は不明であった。津古古墳群は，前方後円墳２基と方墳１基が４世紀代のものとして知られており，５世紀代のものとして横隈山古墳や三国のハナ古墳がこれに続くと思われるが，この付近の古墳は６世紀代のものも含まれる可能性がある。五郎山古墳を中心とした丘陵西半の古墳群は，６世紀代の横穴式石室を有するが，今回報告の平原古墳群周辺には帆立貝式前方後円墳を含む，５世紀代の古墳群も見られる。（柳田）



第1図　隈遺跡群の位置と周辺主要遺跡（1/25,000）

1．天神遺跡（第1地点）　2．橋詰遺跡（第2地点）　3．平原遺跡（第3地点）　4．橋詰遺跡（第4地点）
5．平原遺跡（第5地点東地区）　6．池の上遺跡・平原古墳群（第5地点西地区）　7．五郎山古墳
8．津古内畑遺跡　9．津古遺跡　10．津古古墳群　11．横隈山遺跡・横隈山古墳　12．三国のハナ古墳
13．塚本・沼尻方形周溝墓群　14．東小田峰遺跡　15．中原前遺跡

Ⅲ　各地点遺跡群の調査

1．天神遺跡（第1地点）

(1)．はじめに

平野に面した舌状台地上に営まれた遺跡で，両側に小さな谷を持つ。試掘の結果は，貯蔵穴と一部甕棺墓があるということであったが，本調査の結果は台地尾根線に，1ｍ前後削平された貯蔵穴18回，台地北西側に竪穴住居跡9軒，台地南斜面に甕棺墓19基，土壙墓8基と，さらに住居跡群と墓地の間には，舌状台地を横に切断するように幅6ｍの大溝が検出された。

検出された遺構を見ると，貯蔵穴は深さ1ｍ以下となり，台地の中心に近い1号住居跡や大溝は極端に浅くなっていることから，台地が現状のように平坦なのは，上部が1ｍ前後削平されているものと考えなければならない。したがって，台地中心部に住居跡が見られないのも，削平によって消滅したものである。表土には，弥生土器のほかに，古式須恵器や土師器，さらに青磁片など中世の遺物も見られるところから，弥生時代前期末以後断続的に中世まで集落や墓地が営まれてきたものと思われる。

(2)　貯蔵穴

天神遺跡は，舌状台地で北東－南西に細長く伸びているが，貯蔵穴群はその尾根線上とその南東側に営まれている。この点尾根の北西側に残っている住居跡群と対照的であるが，先に述べたように尾根線上は削平されているために，住居跡と貯蔵穴は尾根線上では重複した可能性がある。しかし，貯蔵穴が北西側にはなく，住居跡も南東斜面に営まれていないのは確実で，貯蔵穴は弥生前期末から中期初頭，住居跡はその後に営まれたものである。

貯蔵穴は，大溝と重複しているが，大溝は貯蔵穴の埋没後，あるいは，貯蔵穴を埋戻して掘られたものである。すなわち，16・17号貯蔵穴は地山のブロック状粘土で埋没し，ほとんど黒色土や遺物を含まないのに対し，他の貯蔵穴は黒色土を多く含み，8号のごときはそのほとんどが炭化物と焼土で埋没していた。貯蔵穴にはほとんど遺物を含んでいないが，8・9号貯蔵穴の土器を見るかぎりでは，前期末（8号）から中期初頭のものである。

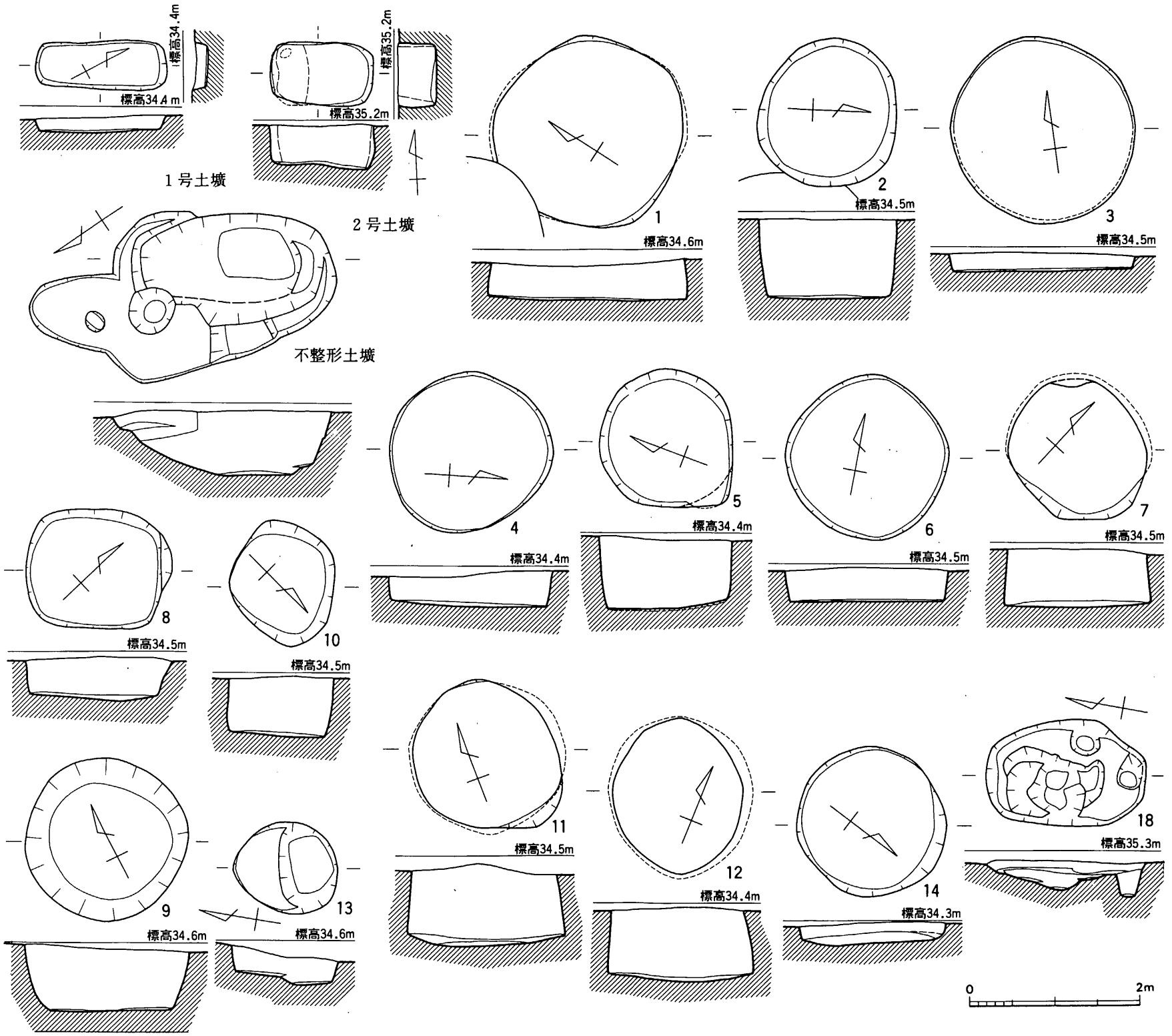
貯蔵穴は，台地先端の未調査地区にもあると思われるが，密集度は少ない。貯蔵穴の平面形は，円形と長方形（7・8・18号）があり，円形が大きいが，時期差はない。なお，18号は，床面が平坦でないことから他の貯蔵と違うが，浅いながらも多量の炭化米が含まれていた。



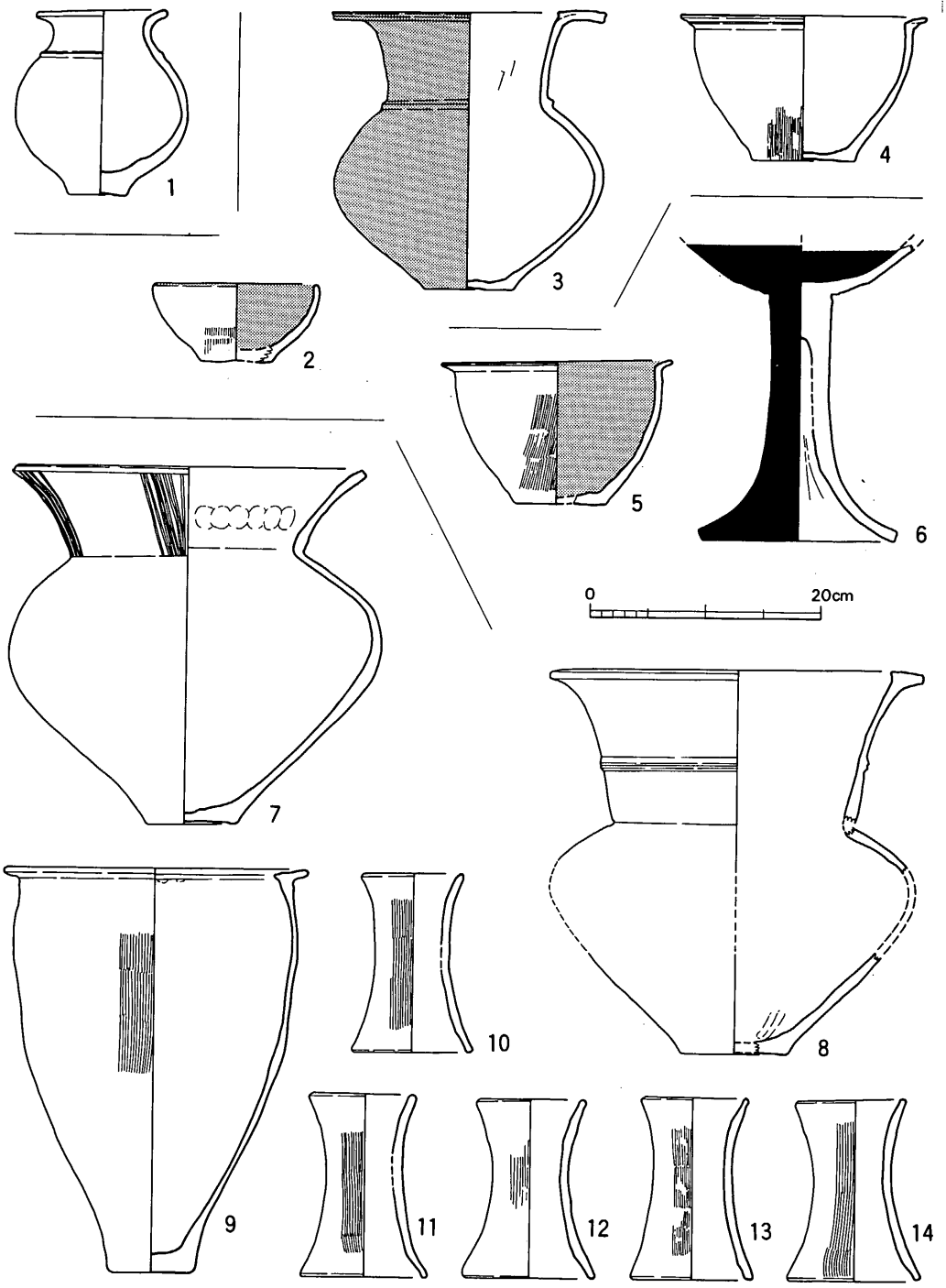
第2図　調査遺跡と付近の地形図 (1/4,000)



第 3 図　天神遺跡（第 1 地点）遺構配置図（1/200）



第4図　1・2号土壙墓、不整形土壙、1～14号・18号貯蔵穴実測図（1/60）



第5図　貯蔵穴・住居跡・土壙出土土器実測図（1/6）

第2表　天神遺跡貯蔵穴・住居跡・土壙出土土器一覧表（第5図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量 ①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	壺	9貯	①11.3 ②16.1	①金雲母と砂粒含む②明茶色③口縁ヨコナデ ④口頸部ヨコナデ、他は不明。外面黒塗りか	
2	鉢	3住	①14.3 ② 6.7	①細砂を含む②茶灰色③ヨコナデ、黒塗りか ④ハケ目後ヨコナデ	
3	壺	3住 P2	①23.9 ②24.1	①細砂を多く含む②暗黄茶色③口頸部磨滅頸部板圧痕、胴ナデ④口縁ヨコナデ、胴ナデ、黒塗りか	
4	鉢	3住 P3	①21.2 ②12.7	①細・粗砂含む②茶灰色③口縁ヨコナデ、下半ナデ、黒塗りか④下半にハケ目	
5	鉢	7住 床面	①20.0 ②12.3	①細砂多く含む②にぶ橙色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④口縁ヨコナデ、胴ハケ目の後ナデ	
6	高杯	7住 覆土	②現26.0	①細・粗砂含む②明茶色③杯丹塗、脚しぼり ④丹塗磨研、磨滅	
7	広口壺	不整形 土壙	①29.9 ②31.3	①細・粗砂、金雲母・角閃石含む②明茶色③口頸ヨコミガキ④頸部暗文、ミガキ、胴タテミガキ	
8	広口壺 （鋤先口縁）	不整形 土壙	①26.9 ②約33.6	①細砂・金雲母・角閃石含む②明茶色③ナデ ④口頸部・肩ヨコナデ	
9	甕	不整形 土壙	①26.3 ②35.3	①細・粗砂・金雲母・角閃石含む②黄茶・暗茶 ③ナデ④ハケ目の後ナデ	
10	器台	不整形 土壙	① 8.9 ②15.6	①砂粒・金雲母含む②にぶ橙色③ナデ④ハケ目	
11	器台	不整形 土壙	① 9.4 ②16.0	①砂粒含む②にぶ橙③口・裾ヨコナデ、胴ナデ ④ハケ目	
12	器台	不整形 土壙	① 9.4 ②15.6	①細砂・金雲母・赤褐色粒含む②明茶色③口・裾ヨコナデ、胴ナデ、④ハケ目	
13	器台	不整形 土壙	① 9.3 ②15.9	①砂粒含む②明茶色③ナデ④ハケ目	
14	器台	不整形 土壙	① 9.6 ②15.7	①細砂・金雲母・赤褐色粒含む②茶色③ナデ ④ハケ目	

(3) 住居跡

天神遺跡で検出された9軒の竪穴式住居は，弥生のもの6軒，古墳のもの3軒である。1号住居跡は，このうち最も古いもので中期前半で円形に近い隅丸方形をし，3・6～9号は中期中頃から中期末の方形住居跡である。

古墳時代住居跡のうち2号は，検出された住居跡の中では最大のもので，一辺7.5mの方形をしている。この住居跡には張床があり，床面から出土した須恵器の蓋杯は5世紀後半のものである。4・5号住居跡からは，須恵器の細片が出土したが，未整理である。

住居跡は，台地先端側や，さらに下段にも階段状に営まれていると思われるが，用地外でもあり調査できなかった。住居跡の立地から見て，その前面の谷間が水田等の生産遺構や集落の存在が考えられる。

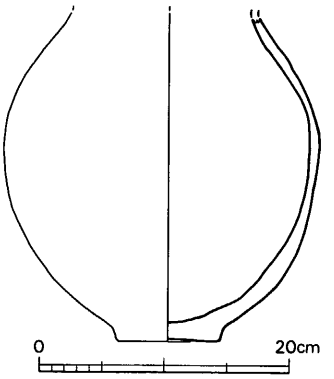
住居跡とその南西側の墓地との関連は，時期的に1号住居跡が共存していたと思われるが，出土品の整理が進めば，3・6～9号住居跡の中に同時期のものがあると思われる。

とくに，住居跡と墓地の関連を考える場合に，天神遺跡ではその間にある大構の役割が重要

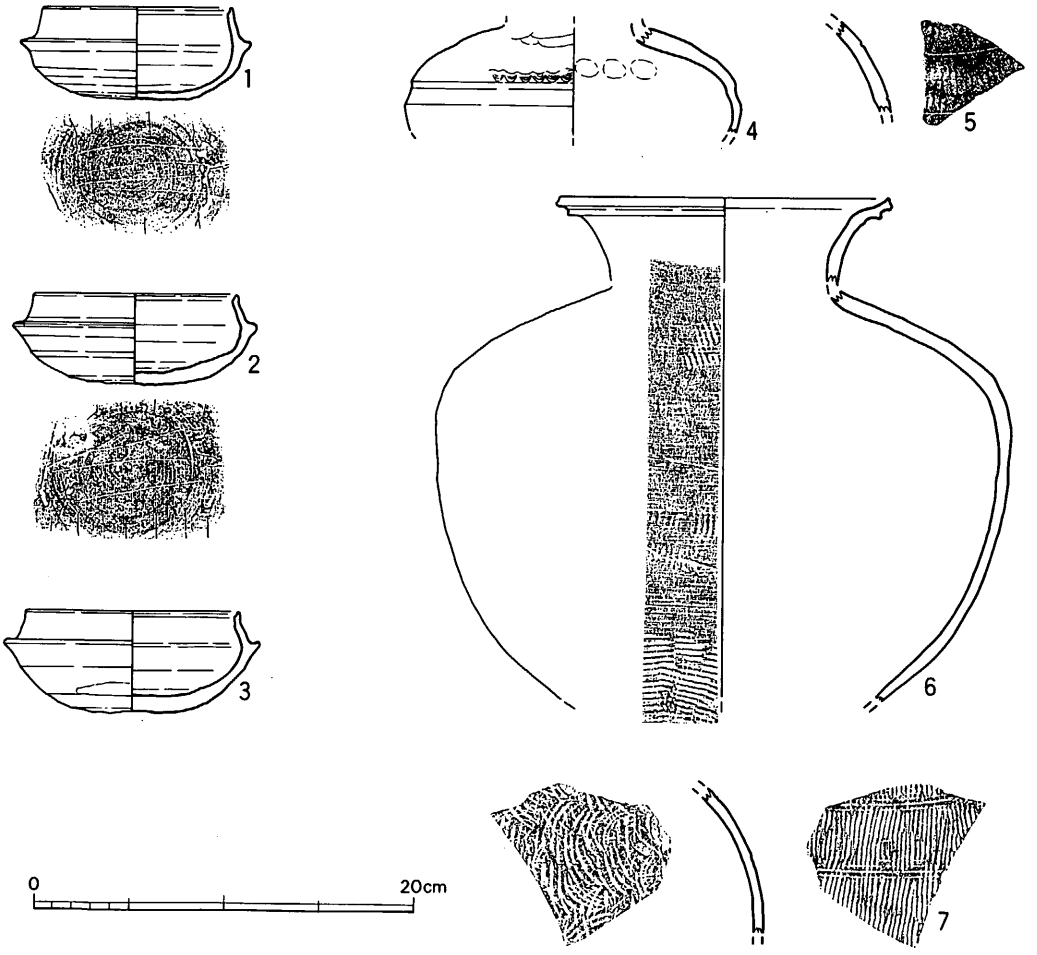
になってくる。出土する土器で見ると，住居跡・大構・墓地は共存する期間があり，その期間が3者の営まれ始める中期前半である。しかし，墓地のみが調査区域では，それ以後の時期がない。

住居跡の新旧関係は次のとおり。

3号 → 2号　　7号 → 4号 → 9号 → 6号
　　　　　　　　　8号 ↗　（古→新）



第6図　大溝西南土壙出土土器
実測図（1/6）



第7図　2号住居跡・小溝出土須恵器実測図（1/4）

第3表　大溝南西土壙出土土器一覧表（第6図）

（単位cm）

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特　徴　①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
1	壺	土壙	胴径25.3	①細・粗砂・金雲母含む②にぶ橙色③不明④不明	

第4表　2号住居跡・小溝出土須恵器一覧表（第7図）

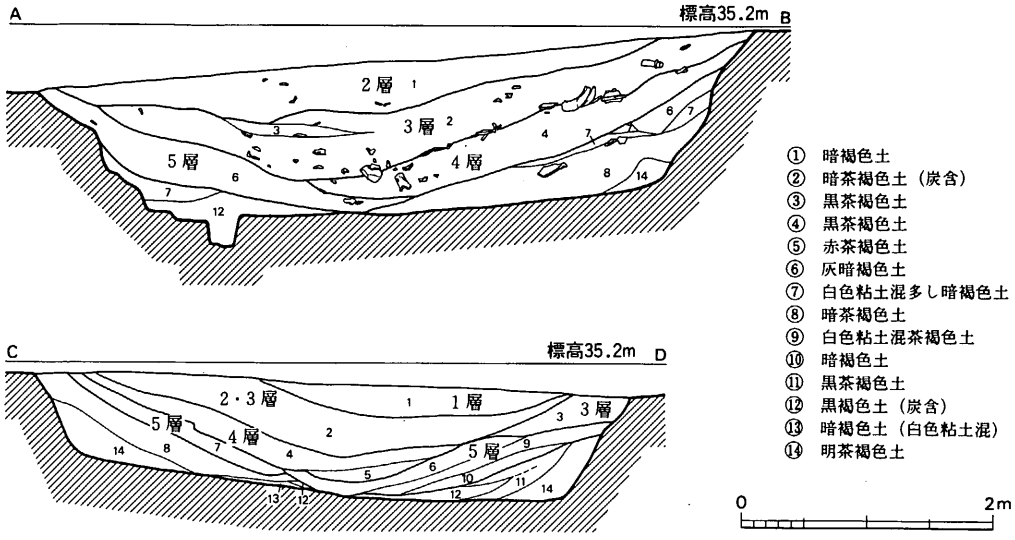
（単位cm）

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特　徴　①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
1	蓋　杯（身）	2住床面	①10.0 ② 4.8	①細砂若干含む②暗灰色③ヨコナデ ④上半ヨコナデ、底回転ヘラケズリ	ヘラ記号
2	蓋　杯（身）	2住床面	①10.6 ② 4.8	①砂粒若干含む②緑味灰色③ヨコナデ ④上半ヨコナデ、底回転ヘラケズリ	ヘラ記号
3	蓋　杯（身）	2住床面	①11.0 ② 5.2	①砂粒若干含む②明茶灰色③ヨコナデ ④上ヨコナデ、中ヘラケズリ、底回転ヘラケズリ	
4	壺（甕）	小溝	胴径17.5	①微砂少量含む②灰色、下半灰黒色③ヨコナデ指圧痕④肩静止ケズリ、カキ目、波状文、ヨコナデ	堅牢
5	甕	小溝		①細砂少量含む②灰褐色、内部淡赤褐色③ナデ④粗い平行タタキ後ナデ、沈線	もろい
6	甕	小溝	①18.0	①砂粒若干含む②緑味灰色③口頸内外面ヨコナデ、胴ヨコ方向ナデ④タタキ後ナデ、部分的ヨコナデ	
7	甕	小溝		①細砂若干含む②内外面灰色・灰黒色、内部淡赤褐色③同心円④平行タタキ後、2～3条の沈線	堅牢

(4) 大　溝

大溝は，舌状台地の基部を横断するように掘られているが，台地上面が削平されているために，台地の中央部では消滅し，南東側斜面のその痕跡がわずかに残る。大溝は全長47mを調査したが，現状での最大幅が約6mあるところから，削平されなければ幅7m前後の断面逆台形をしたものであったろう。

大溝は，中央部が高くて両側に傾斜することや底面が平坦であるところから，水を溜めたり，流したりするものではないことは明らかであるが，空濠として両平面的空間を遮断する目的だけではなさそうである。大溝は，中央調査区の底面から弥生前期から中期初頭の土器片も出土するが，大溝掘削の際に放棄されていた貯蔵穴を埋め戻している可能性があるところから，貯蔵穴以後で，住居跡や甕棺墓と同時期の中期前半に掘削されたと見られる。また，大溝底面にあるピット中には，各1個ではあるが完形の器台が3個出土したり，埋土中層では南西側からのみまとまった土器が投入されている。この土器群は，甕棺墓の時期より多少後の中期中頃から後半におよぶものであるが，住居跡側からの流入が少量の細片であるのに比較すると，重要な相違点であろう。しかも，土器群には筒形土器や丹塗土器が多いことも，居住地区で使用する土器とは違い，墓地の祭祀に使用された土器群と考えた方が自然である。（柳田）

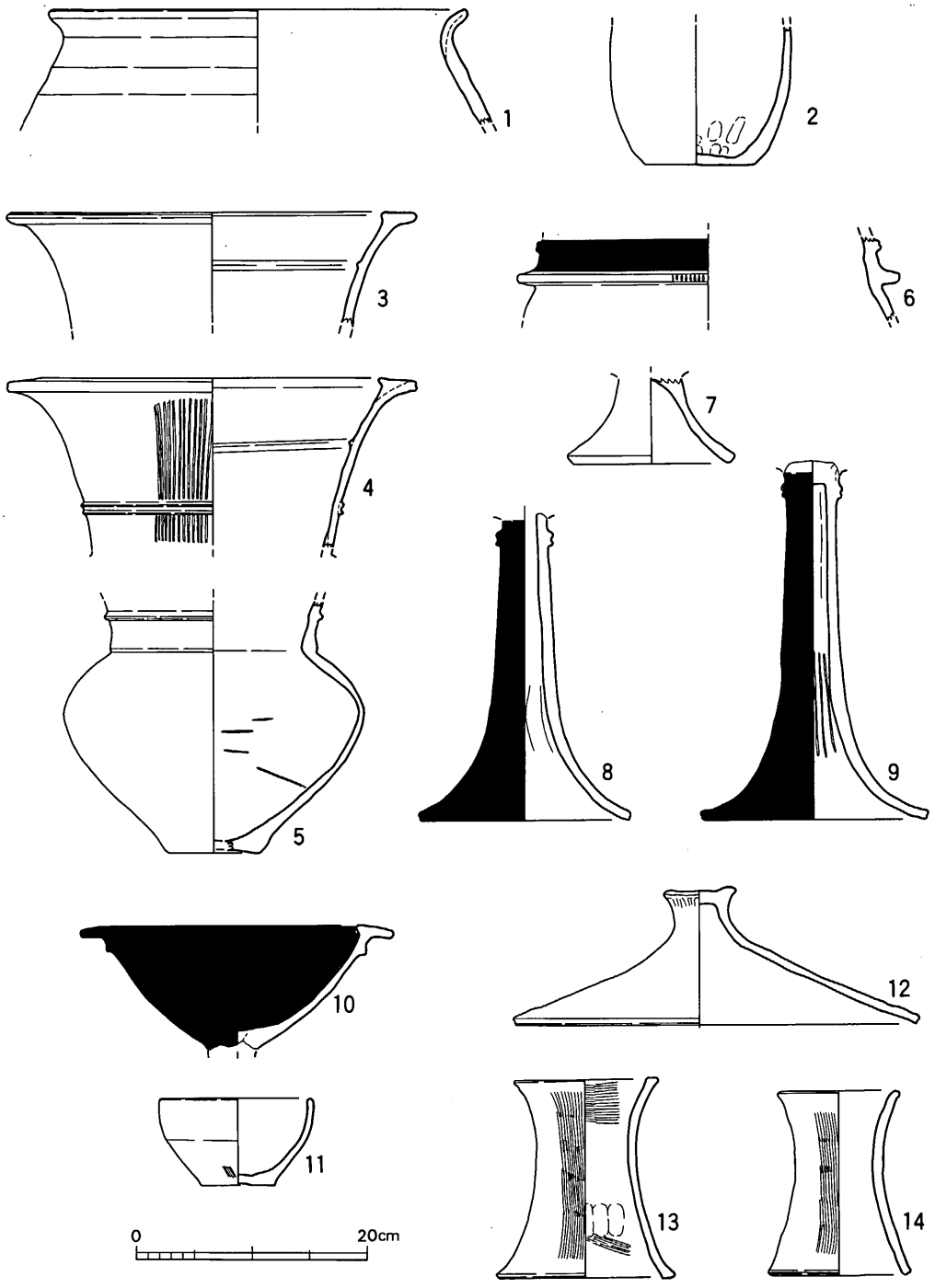


第8図　大溝土層断面実測図（1/60）

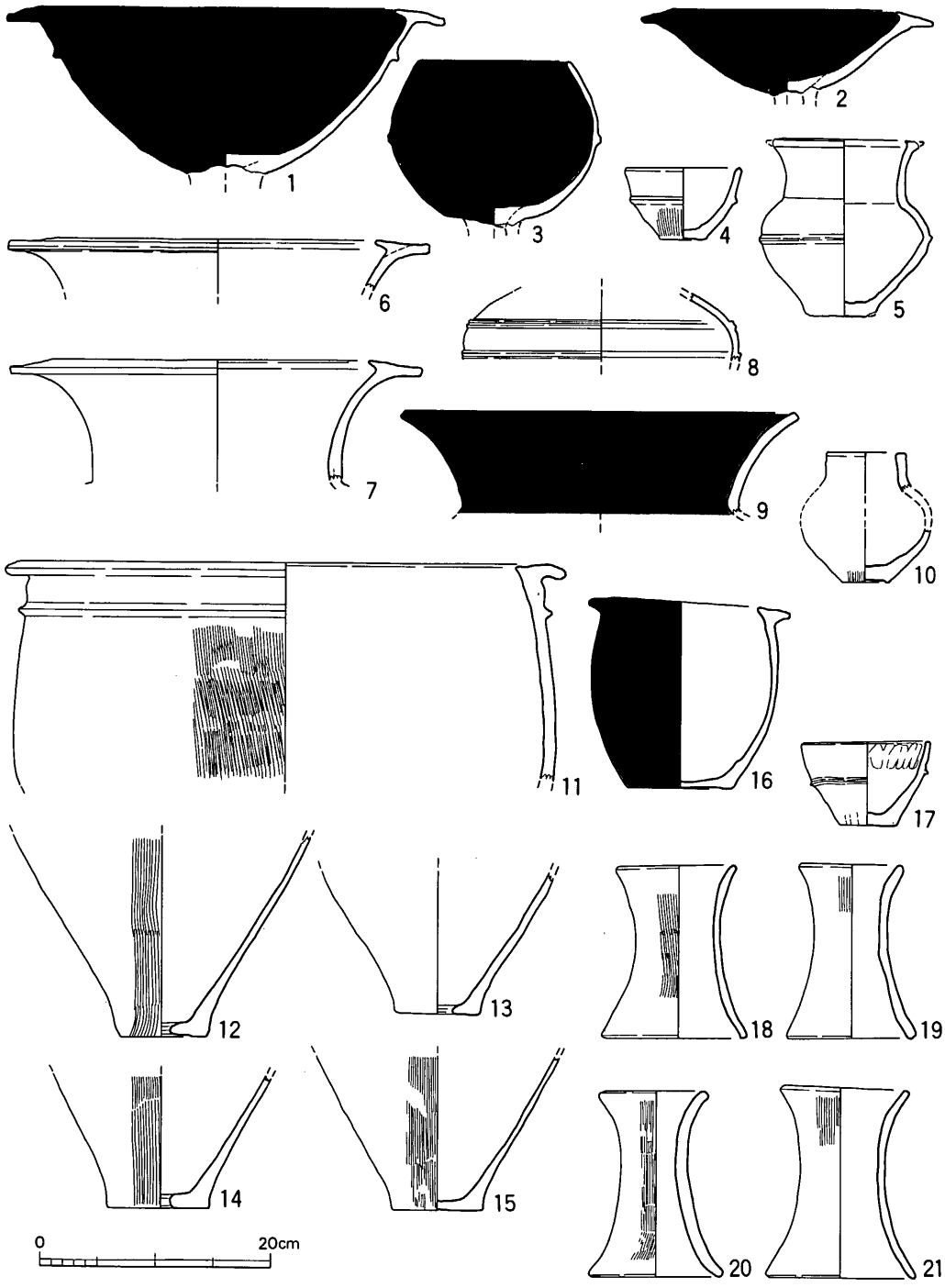
第5表　大溝中央区出土土器一覧表（第9図）

（単位cm）

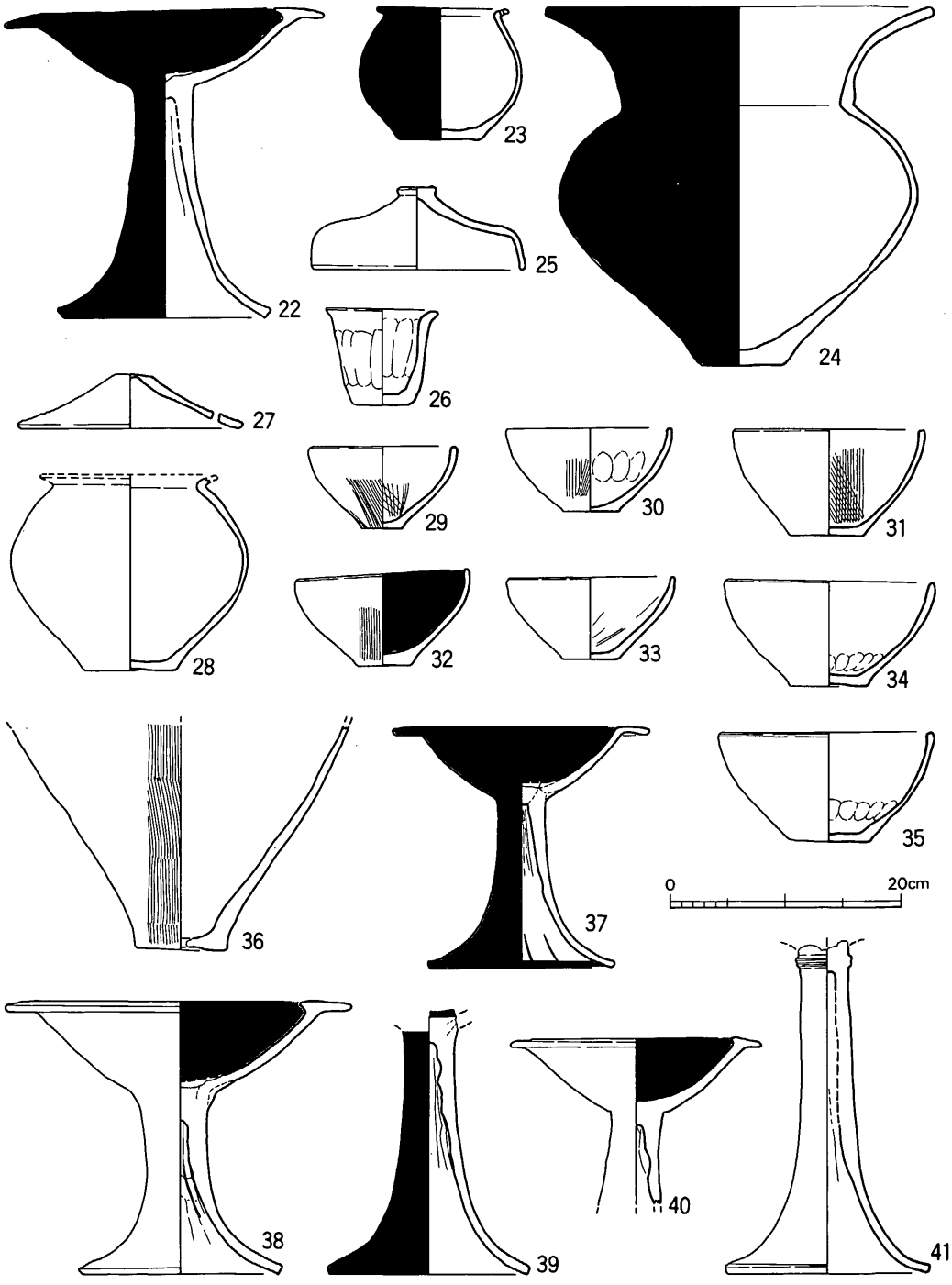
遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	壺	4層	①35.8	①砂粒若干含む②赤味黄・明茶色③口縁ミガキ状ヨコナデ④ヨコナデ	
2	小甕	4層	胴径15.7	①砂粒含む②にぶ赤味橙色③ナデ、ヨコナデ、④不明、ナデか	
3	広口壺（鋤先口縁）	3層	①約35.6	①粗砂多く含む②明茶色③口縁内外ヨコナデ、下半ナデ④下半ナデ	
4	広口壺（鋤先口縁）	3層	①35.4	①砂粒含む②にぶ赤味橙色③ヨコナデ、ナデ④ヨコナデ、暗文	
5	広口壺（鋤先口縁）	3層	胴径26.0	①細・粗砂・角閃石含む②にぶ橙色③横方向ナデ、胴板ナデ痕④横方向ナデ、胴ナデか	
6	壺（複合形）	3層	径33.1	①細砂・金雲母・角閃石含む②暗茶色③不明④キザミ、ヨコナデ、丹塗	
7	脚台	3層	裾径14.5	①砂粒多く含む②暗黄色③不明④不明	
8	高杯	3層	現高26.7 裾径18.3	①砂粒若干・赤褐色粒含む②明茶・にぶ橙色③しぼり、ヨコナデ④丹塗磨研	
9	高杯	3層	現高31.0 裾径19.5	①砂粒・角閃石含む②赤味黄色③しぼり、ヨコナデ④暗文状タテのヘラミガキ	
10	高杯	2層	①27.1 現高10.7	①細砂・金雲母を多く含む②にぶ橙色③口縁内外面ヨコナデ、横方向ヘラミガキ④ミガキ、全面丹塗磨研	
11	鉢	2層	①13.3 ② 7.1	①細砂・金雲母・角閃石含む②にぶ橙・暗黄茶色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④胴ハケ後ナデ	
12	蓋	2層	①35.0 ②11.7	①砂粒・金雲母・角閃石・赤褐色粒含む②にぶ橙色③ナデ、ヨコナデ④不明	
13	器台	2層	①12.5 ②15.1	①細砂多く、金雲母少し含む②明茶・にぶ橙色③ヨコナデ、ハケ目、ヨコナデ④ヨコナデ、ハケ目	
14	器台	2層	①10.5 ②16.2	①砂粒多く、金雲母若干含む②明茶色③ヨコナデ、ナデ④ヨコナデ、ハケ目	



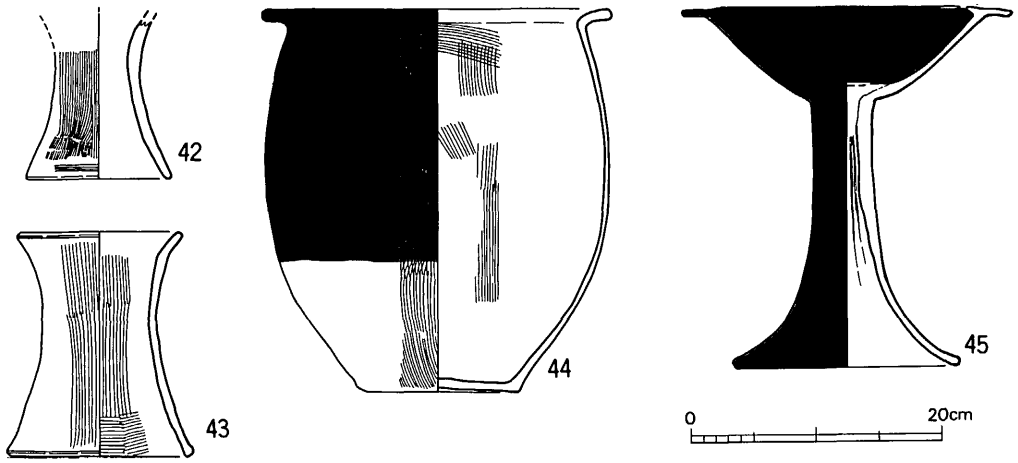
第9図　大溝中央区出土土器実測図（1/6）



第10図　大溝西区出土土器実測図①（1/6）



第11図　大溝西区出土土器実測図②（1/6）



第12図　大溝西区出土土器実測図③（1/6）

第6表　大溝西区出土土器一覧表（第10～12図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	高杯	下層（下部）	①38.0 現高14.2	①砂粒少②うす橙色③丹塗磨研④口縁上面丹塗後暗文、体部丹塗磨研	
2	高杯	下層（下部）	①25.5 現高7.5	①細砂多く含む②うす橙・明茶色③丹塗磨研④丹塗磨研、全体に磨滅が著しい	
3	高杯	下層（下部）	①13.2 現高14.3	①細砂多く含む②にぶ橙・明茶色③丹塗④丹塗、全体に磨滅が著しい	
4	小鉢	下層（下部）	①10.3 ② 6.1	①砂粒若干含む②暗黄茶・黄茶色③上半ヨコナデ、下半ナデ④上半ヨコナデ、下半ハケ目、底ナデ	
5	壺	中層（下部）	①12.7 ②15.4	①砂粒多く含む②うす茶色③口頸部ヨコナデ、胴部ナデ④磨滅し不明	
6	広口壺（鋤先口縁）	中層（下部）	①36.5	①粗砂多く含む②にぶ橙・黄味白色③ヨコナデ④ヨコナデ	
7	広口壺（鋤先口縁）	中層（下部）	①35.9	①粗砂粒多く含む②暗黄色③口縁内外ヨコナデ④全体に磨滅が著しい	
8	壺	中層（下部）	胴径24.4	①砂粒若干含む②明茶・にぶ橙色③ナデ④ヨコナデ、横方向ナデ	
9	広口壺	中層（下部）	①34.6	①砂粒・角閃石若干含む②にぶ橙・丹色③丹塗④丹塗、全体に磨滅が著しい	
10	直口壺	中層（下部）	① 7.0	①砂粒若干含む②暗黄茶・茶灰色③ヘラナデ、ナデ④ハケ目後ヘラミガキ	
11	甕	中層（下部）	①48.7	①砂粒多く含む②明茶色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④口縁・凸帯ヨコナデ、胴ハケ目	煤付着
12	甕	中層（下部）	底径7.5	①粗砂多く含む②にぶ橙・暗茶色③ナデ④胴ハケ目、底ナデ、焼成後底部穿孔	
13	甕	中層（下部）	底径7.3	①砂粒多く含む②赤味橙・明茶色③ナデ④ハケ目、磨滅、焼成後底部穿孔	
14	甕	下層（下部）	底径7.4	①砂粒若干含む②明黄橙・にぶ黄橙色③胴タテ方向ナデ④ハケ目、焼成後穿孔	

遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
15	甕	下層（下部）	底径7.9	①微砂多く、粗砂少く含む②にぶ橙・茶色③不明④胴ハケ目、底ナデ	
16	小甕	中層（下部）	①17.5 ②16.2	①砂粒多く含む②赤味橙色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④丹塗タテミガキ、底ナデ	
17	小鉢	下層（下部）	①11.2 ② 7.4	①砂粒含む②暗黄茶色③口縁指圧痕後ヨコナデ、下半ナデ④上半ヨコナデ、下半ハケ目後タテナデ、底ナデ	
18	器台	中層（下部）	①10.4 ②15.0	①砂粒・金雲母若干含む②にぶ橙色③ナデ④口・裾ヨコナデ、胴ハケ目	
19	器台	中層（下部）	① 9.0 ②15.1	①粗砂・金雲母多く含む②明茶色③板圧痕④ハケ目、磨滅が著しい	
20	器台	中層（下部）	①11.5 ②16.1	①砂粒多く含む②明茶色③板圧痕ナデ④ハケ目	
21	器台	中層（下部）	①11.3 ②16.5	①砂粒多く含む②にぶ橙③板圧痕ナデ④ハケ目、磨滅が著しい	
22	高杯	中層（下部）	①27.8 ②26.7	①砂粒・赤褐色粒・角閃石若干含む②明茶色③杯ヨコナデ、ナデ、脚シボリ、ナデ④丹塗、磨滅	
23	無頸壺（蓋付）	中層（西端）	①11.5 ②11.4	①細砂多く、金雲母・角閃石少く含む②にぶ橙・丹赤色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④ハケ目後丹塗、底ナデ	孔は1個1対
24	広口壺	中層	①33.7 ②31.2	①細砂・赤褐色粒・角閃石多く含む②黄味灰・明茶丹赤色③ヨコナデ、ナデ④頸部暗文ミガキ、胴上半ヨコミガキ	
25	蓋	中層（西端）	①18.2 ② 7.2	①細砂多、金雲母・赤褐色粒少く含む②黄味橙・明茶色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④ヨコナデ、ナデ	
26	小鉢	中層	① 9.6 ② 8.4	①細・粗砂・金雲母含む②明茶・うす橙色③指圧痕ナデ④ナデ	
27	蓋（無頸壺蓋）	中層	①19.2 ② 4.7	①細・粗砂・赤褐色粒・角閃石含む②にぶ橙色③ ④全体に磨滅著しい	孔は2個1対
28	無頸壺（蓋付）	中層	①14.2 ②16.7	①砂粒・赤褐色粒多く含む②明茶色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④ナデ、磨滅	孔は不明
29	鉢	中層	①12.7 ② 7.2	①細・粗砂・金雲母・角閃石含む②にぶ橙色③口縁ヨコナデ、粗ハケ目④ハケ目、底ナデ	
30	鉢	中層	①14.6 ② 7.3	①細・粗砂・赤褐色粒含む②にぶ橙色③口縁ヨコナデ、胴指圧痕、ナデ④ハケ目、底ナデ	
31	鉢	中層	①16.6 ② 9.3	①赤褐色粒・角閃石含む②うす橙・にぶ橙色③口縁ヨコナデ、胴ハケ目④磨滅	
32	鉢	中層	①15.0 ② 8.0	①金雲母・赤褐色粒含む②にぶ橙・丹赤色③口縁ヨコナデ、胴指圧痕ナデ丹塗④ハケ目、底ナデ	
33	鉢	中層	①14.2 ② 7.1	①細砂多く、金雲母若干含む②にぶ橙色③口縁ヨコナデ、胴板ナデ痕④上半ナデ、下部板ナデ、底ナデ	
34	鉢	中層	①18.1 ② 9.1	①赤褐色粒・金雲母・角閃石若干含む②にぶ橙色③下部に指圧痕④磨滅	
35	鉢	中層	①18.6 ② 9.5	①細砂多く、角閃石・金雲母若干②にぶ橙色③口縁ヨコナデ、下部に指圧痕④磨滅	
36	甕	中層	底径8.0	①細・粗砂多く含む②明茶色③磨滅で不明④ハケ目、底ナデ、焼成後底部穿孔	
37	高杯	中層	①22.2 ②20.9	①砂粒多く含む②うす橙色③杯丹塗ヨコミガキ、脚シボリ、指圧痕、ヘラナデ④丹塗、杯ヨコ、脚タテミガキ	
38	高杯	中層	①29.9 ②23.6	①砂粒多く含む②黄味赤色③杯丹塗磨滅脚シボリ、ナデ④磨滅、丹塗磨研か	
39	高杯	中層	裾径17.5 現高22.3	①砂粒・角閃石含む②明茶色③杯丹塗磨研、脚シボリ、ナデ④丹塗、磨滅	

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特 徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
40	高　杯	中層	①21.9 現高14.5	①細・粗砂・金雲母・角閃石含む②赤味橙・明茶色③杯丹塗ヨコミガキ、脚シボリ④磨滅	
41	高　杯	中層	裾径17.7 現高29.1	①細・粗砂・角閃石含む②暗黄色③シボリ、ナデ、④丹塗、磨滅	
42	器　台	中層	底径11.6 現高12.6	①砂粒含む②にぶ橙色③ナデ④ハケ目	
43	器　台	上層	①13.3 ②17.9	①細・粗砂・赤褐色粒含む②明茶・うす橙色③ハケ目④ハケ目	
44	甕	中層 (上部)	①27.6 ②30.7	①砂粒多く含む②茶灰・黄味白・明茶色③ハケ目後ナデ④口縁ヨコナデ、胴ハケ目	
45	高　杯	上層	①26.2 ②28.6	①細砂多く含む②明茶色③杯丹塗磨研、脚シボリ後ナデ、ヨコナデ④丹塗、脚タテミガキ	

②土製品（第13図1～10）

投　弾（1～9）　いずれもラグビーボール状を呈し，石製投弾に対し，投弾状土製品と称される。断面はほぼ円形に近い。長さ3.3cm～5cm，幅・厚さ2.1cm～2.8cm，重量は1の11gから9の36gの幅がある。

紡錘車（10）　大溝西側の下層より出土した。径3.35cmを測り，孔部付近が最も厚くなる。黒褐色を呈し，砂粒多い。

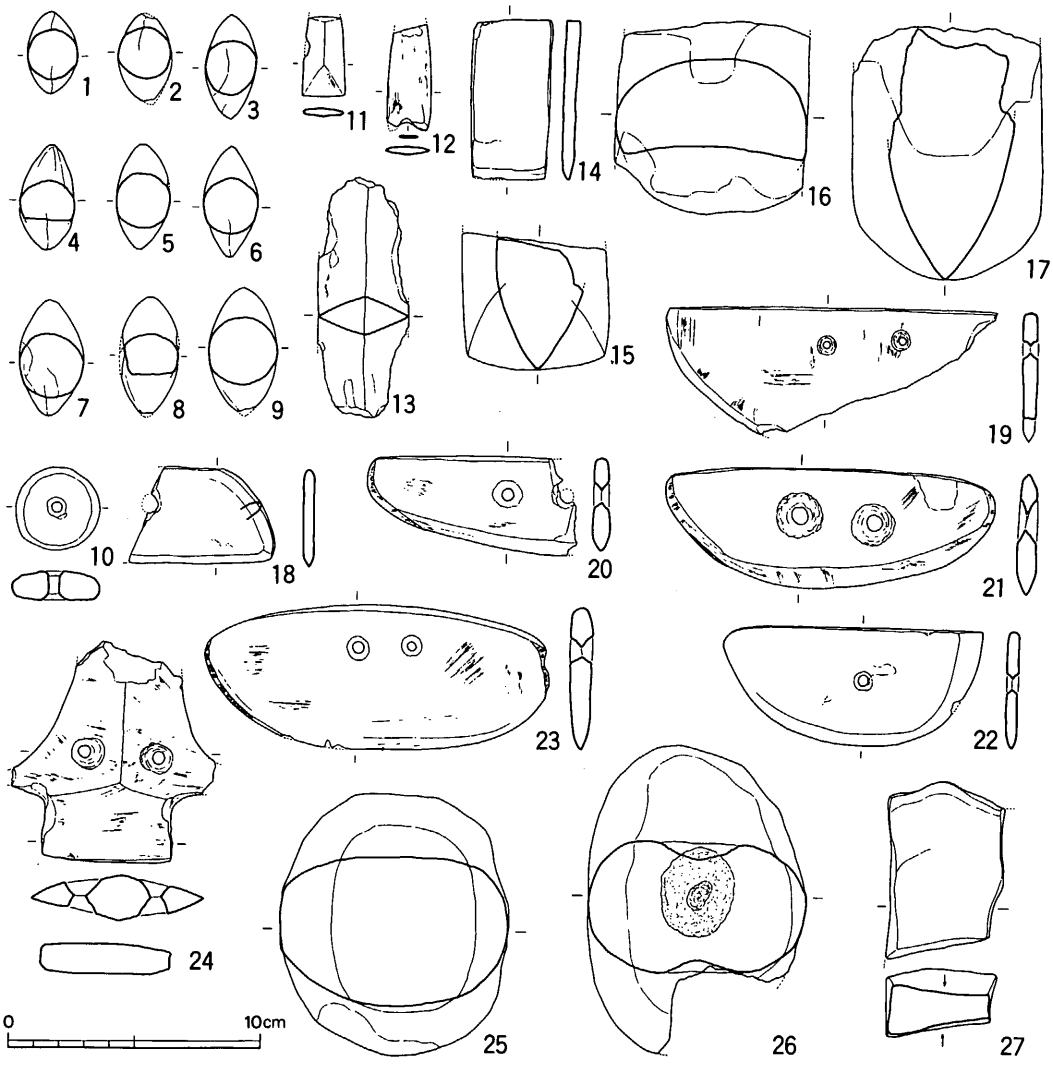
第7表　出土土製品一覧表（第13図）

（単位cm）

番号	器　種	遺　構	長	幅	厚	重	備　考
1	投　弾	大溝、上層	3.3	2.05	2.0	11	灰黒色
2	投　弾	土壙2、床面		2.1	2.1		淡赤褐色
3	投　弾	大溝、中層	4.1	2.2	2.1	16	灰褐色
4	投　弾	土壙2、床面	4.2	2.2			
5	投　弾	大溝、上層	4.2	2.1	2.2	17	灰黒色
6	投　弾	大溝、上層	4.4	2.25	2.25	16.5	灰黒色
7	投　弾	住居、3	4.6	2.6	2.6	23.5	黒茶褐色
8	投　弾	住居、6					黒茶褐色
9	投　弾	大溝、底面		2.8	2.8	36	
10	紡錘車	大溝、下層	径 3.35	口径 0.35	1.15	14.5	黒褐色

③石　器（第13図11～27，第14図1～6）

三稜尖頭器（1）　断面が三角形状を呈す尖頭器の基部破片。各々の稜部より剝離を施している。安山岩製で，厚さ1.6cm。大溝3層出土。



第13図　天神遺跡出土土製品・石器実測図（1/3）

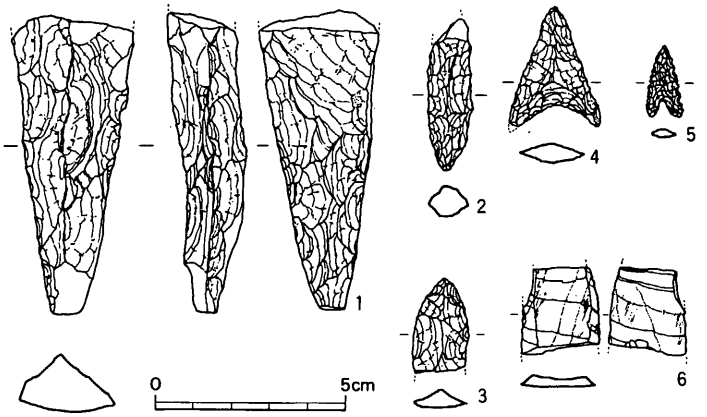
尖頭器（２・３）　２は細身だが，８㎜と厚味のあるもので尖頭器として扱った。鋭りぎみの基部は磨滅している。調整はやや荒く行なわれる。３は裏面に主要剝離面を残し，横長剝片を素材としている。両者とも大溝の中層出土で安山岩製。

打製石鏃（４・５）　両者とも凹基無茎式である。４は６号住居跡出土の大型品。長3.2cm，最大幅2.4cm，厚0.45cm，重2.1ｇを測る。ハリ質安山岩製。５は小型の鋸歯鏃。長1.9cm，幅0.95cm，厚0.2cm，重0.2ｇ。黒曜石製で大溝２層出土。

剝　片（６）　黒曜石製の幅広な縦長剝片。平行する２本の稜線が走る。６号住居跡出土。

磨製石鏃（11・12）

11は平基式で，基部は若干丸味を有す。中央部に稜線が走る。基部幅1.75cm，厚0.35cmを測る。砂岩製で，大溝下層出土。12は凹基無茎式で量的に極めて少ない。抉りは脚端に対して3mmと浅い。基部付近には調整時の削り稜が残る。断面は3.5mmの凸レンズ状を呈す。雲母片岩製で，大溝の上層出土。



第14図　天神遺跡出土石器実測図（1/2）

石　剣（13）　中央部の破片で，厚さ1.5cmと部厚い断面は菱形に近い。粘板岩質で，大溝2層出土。

石　斧（14～17）　14は扁形片刃石斧の完形品。長6.4cm，幅3.2cm，厚0.55cmを測る。15は蛤刃石斧で，刃部幅5.4cm。16・17は太形蛤刃石斧で，17は胴部破片。両者とも玄武岩製。14～16は大溝上層出土。17は1号貯蔵穴出土。

石庖丁（18～23）　18が直線刃で他は外弯刃である。孔は22がほぼ中央部に1つを有すタイプである。19は前期末に多い大形の三角形を呈すものである。21は長13.1cm，幅4.7cm，厚0.8cm，重66g。22は長10.3cm，幅4.7cm，厚0.5cm，重49g。23は長13.7cm，幅5.75cm，厚0.95cm，重105gを測る。18が7号住居出土で，外は大溝上層（19・20），中層（21・22）下層（23）出土。石材は18・19・22が砂岩，20・23は輝緑凝灰岩，21は頁岩製。

石　戈（24）　基部破片で，両関部も欠損する。基部は外弯し，幅5.2cm，厚1.25cm。刃部は良く研ぎ出され鋭い。大溝2層出土で頁岩製。

磨　石（25）　長10.5cm，幅9cm，厚6cm，重870gを測る。大溝2層出土で玄武岩質。

凹　石（26）　両面に凹部を有し，裏面はその凹部底が長さ5cmほどの溝状になる。幅8.6cm，厚5.3cmで花崗岩質。2号土壙の上面出土。

砥　石（27）　板状に近い砥石で表裏2面の研砥面を有す。粒子の非常に細かい砂岩を用いる。1号貯蔵穴出土。　（木下）

(5) 甕棺墓と土壙墓

南東から北西に伸びてきた低丘陵の先端縁辺部の標高36m強の所に，甕棺墓群と土壙墓群が営まれている。今回の調査区内では甕棺墓19基・土壙墓5基を検出した。これらは丘陵縁辺に沿って，およそ2列ないし3列並行の配列をなしている。祭祀遺構は調査区内には見られなかった。切合い関係のあるものについては次のとおりである（古→新）。

K18 → K6
K18 → K7
D4 → K7
D4 → K7

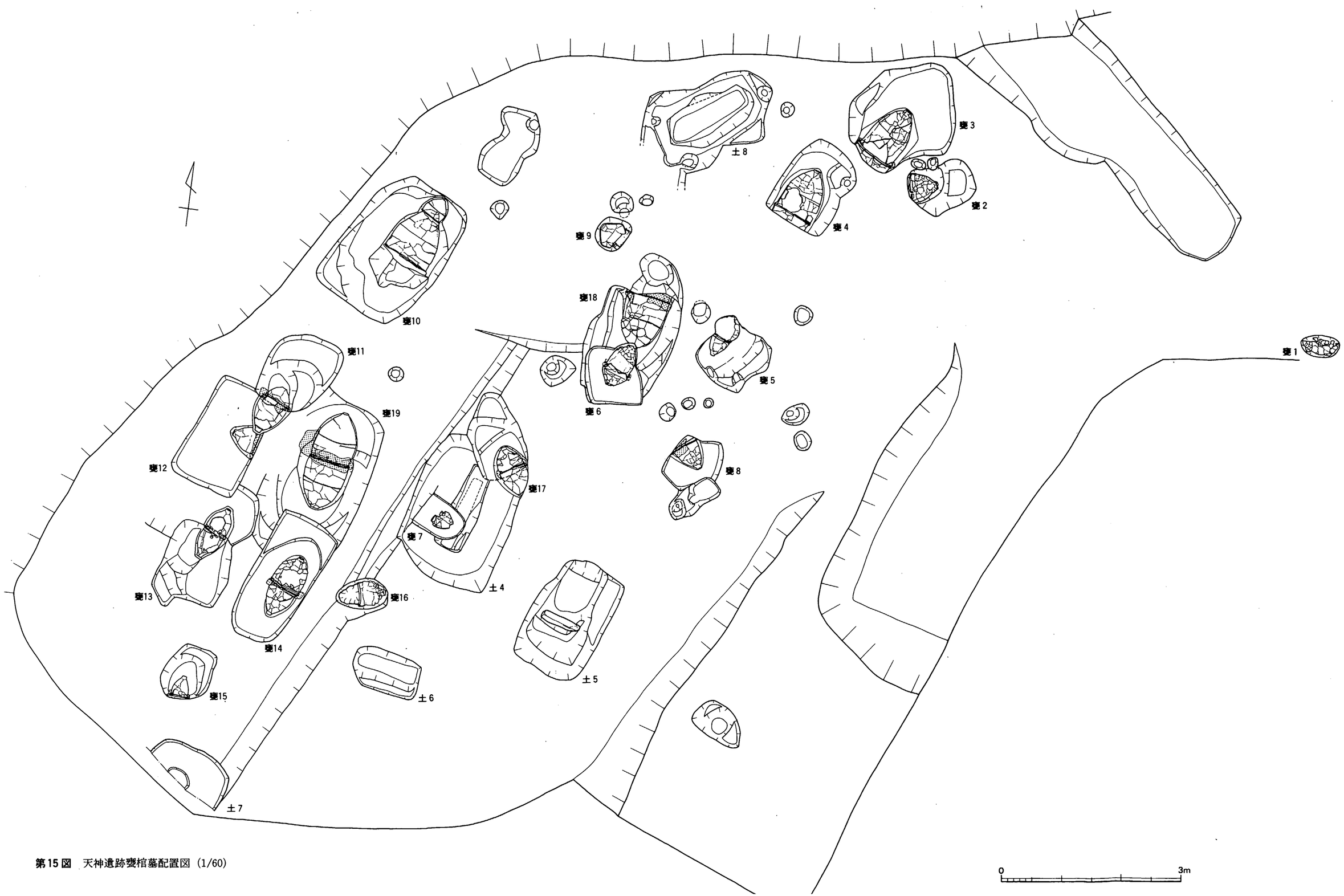
K12 → K11
K12 → K19
K19 → K14

墓壙から弥生土器片を出土するものはあるが，棺本体からの出土遺物は見られない。第19図の管玉はこの甕棺墓群内からの表採品で，現存長1.45cm，幅0.85m，重さ1.6gを測る。

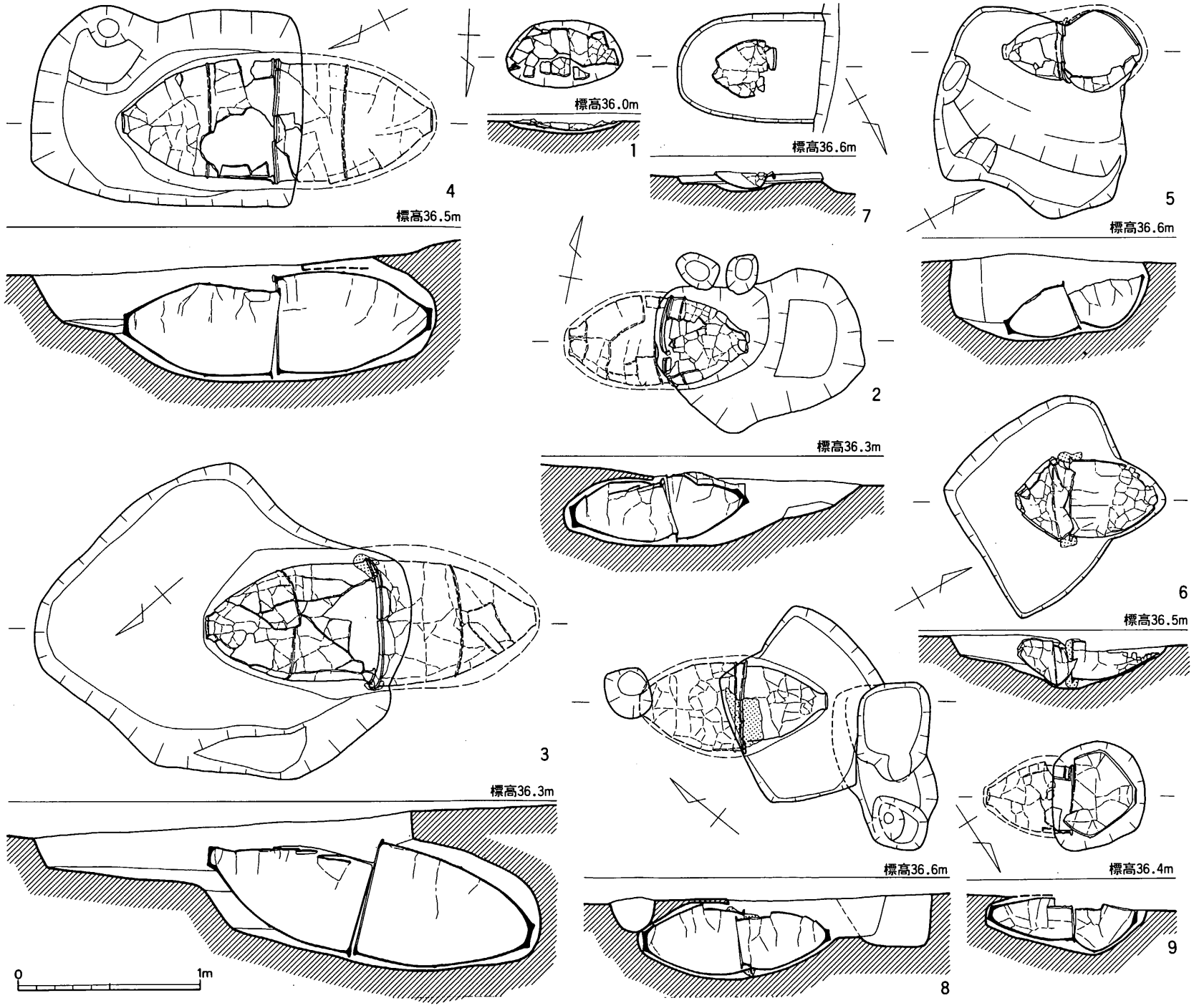
各遺構については簡略ながらも第8表を参照されたい。

第8表　天神遺跡甕棺墓一覧表

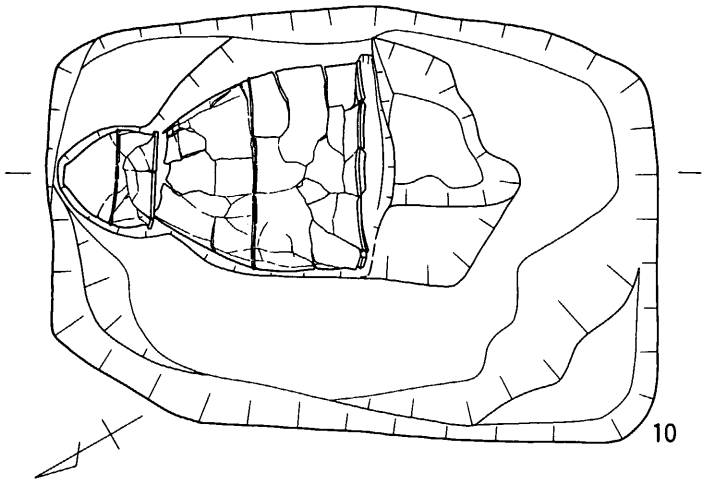
No.		合せ	上+下 (内法:cm)	埋置傾斜	主軸方位	粘土目張り	遺存度	墓壙出土遺物	備考	上下	突帯	雲母片	黒色粒子	黒塗り	その他	断面図（1/6）
1	小人		58+	ほぼ水平	S−87°−W	×	不良		削平が著しい 第16図		胴部一条					
2	小人	接口	91	−7°	S−78.5°−W	×	ふつう	弥生土器約15片	第16図	上	口縁下一条	○	○	○		
										下	口縁下一条					
3	成人	接口	191	−14.5°	S−41°−W	○	ふつう	弥生土器約40片	第16図	上	胴部一条	○	○	○		
										下	胴部一条	○		○	第19図	

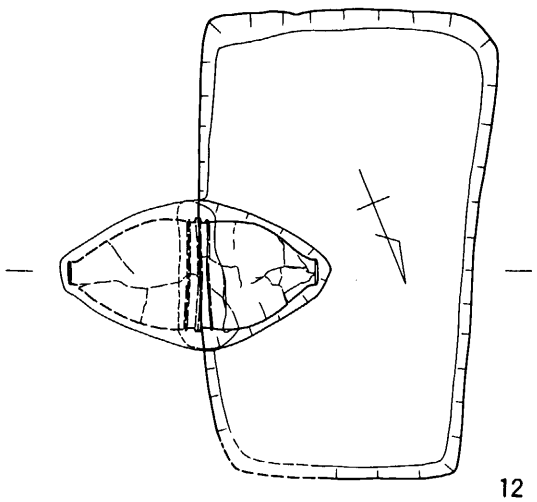


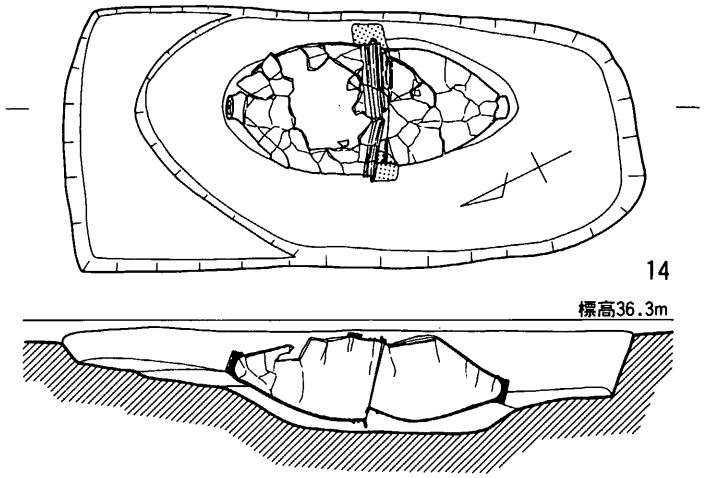
第15図　天神遺跡甕棺墓配置図（1/60）

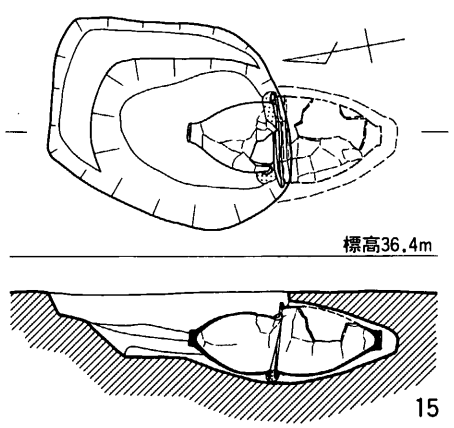


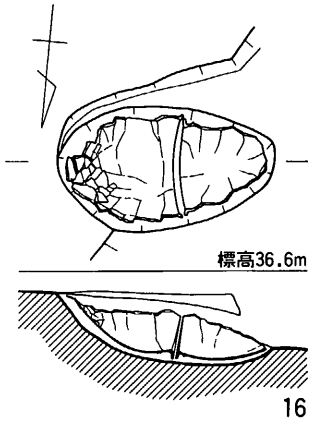
第16図　1～9号甕棺墓実測図（1/30）

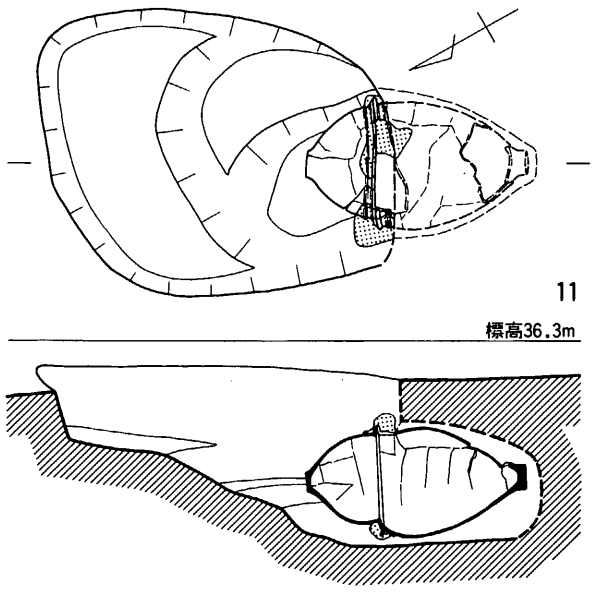


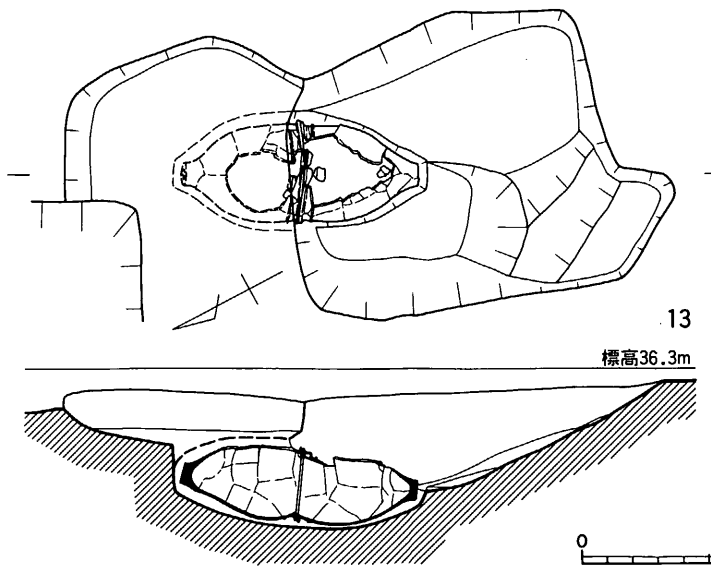


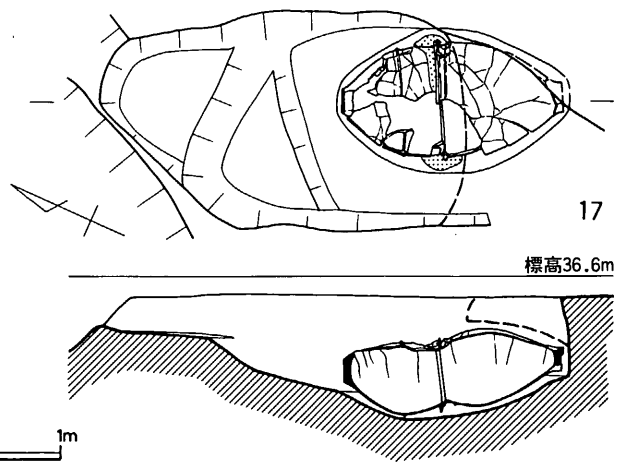




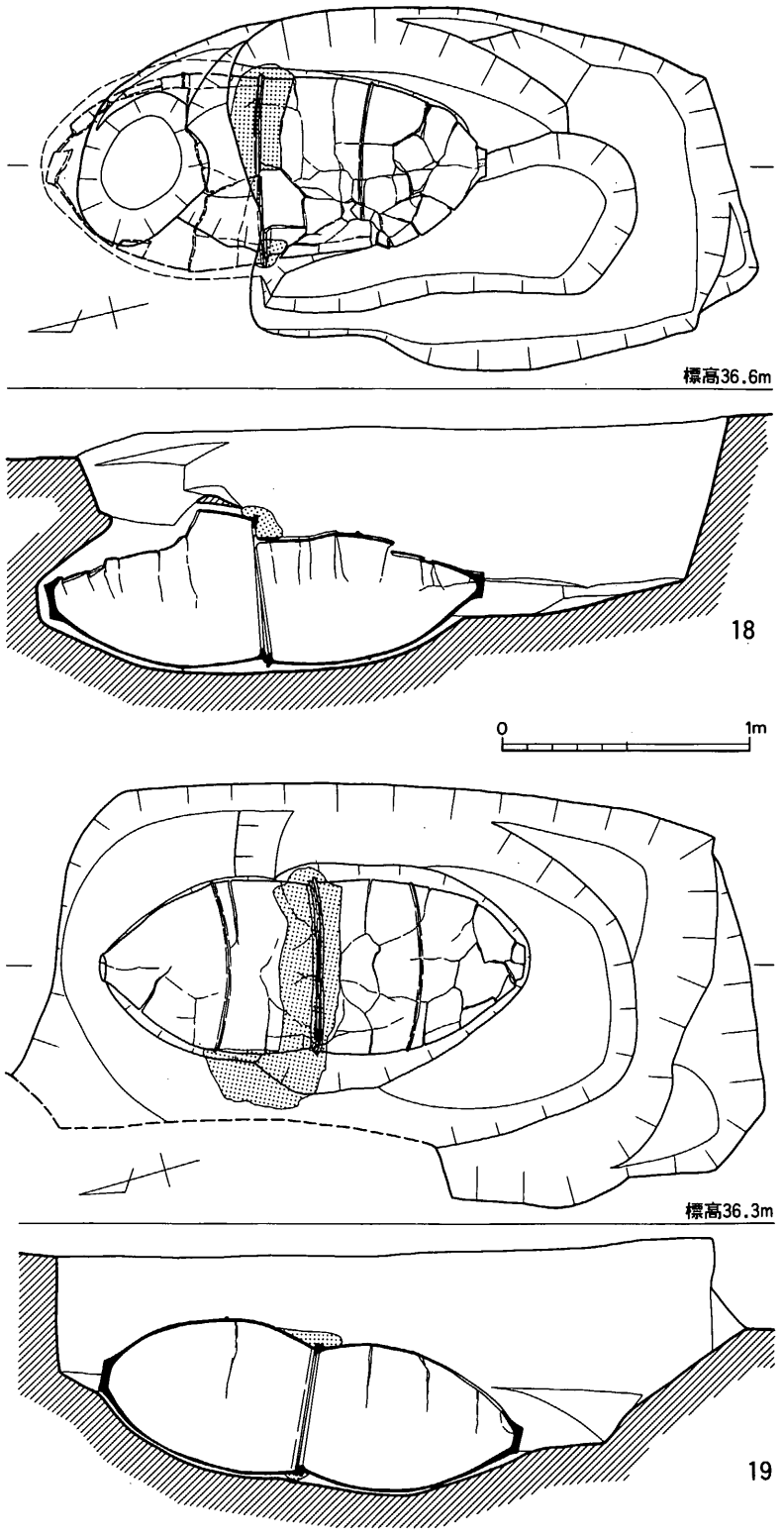






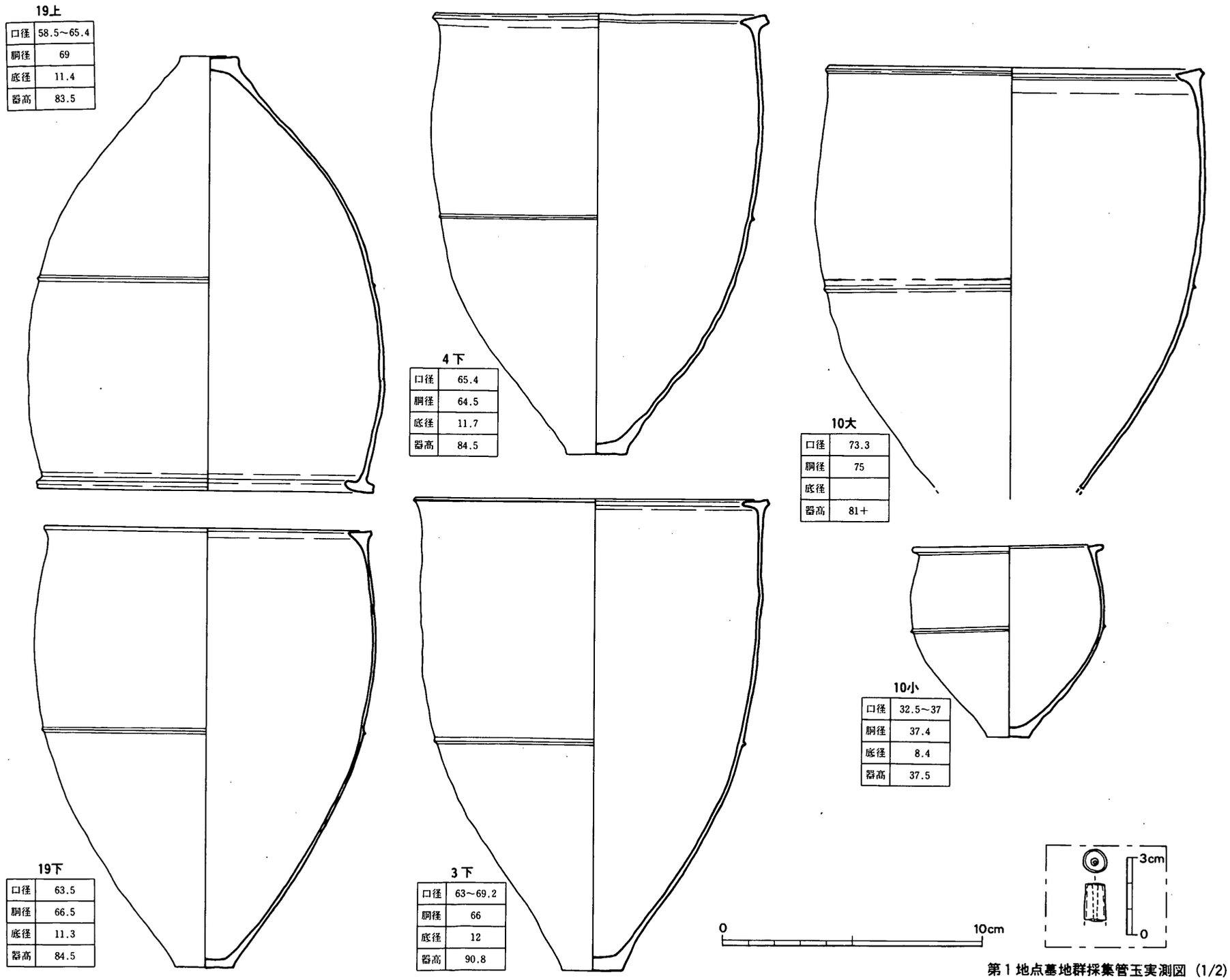


第17図　10～17号甕棺墓実測図（1/30）



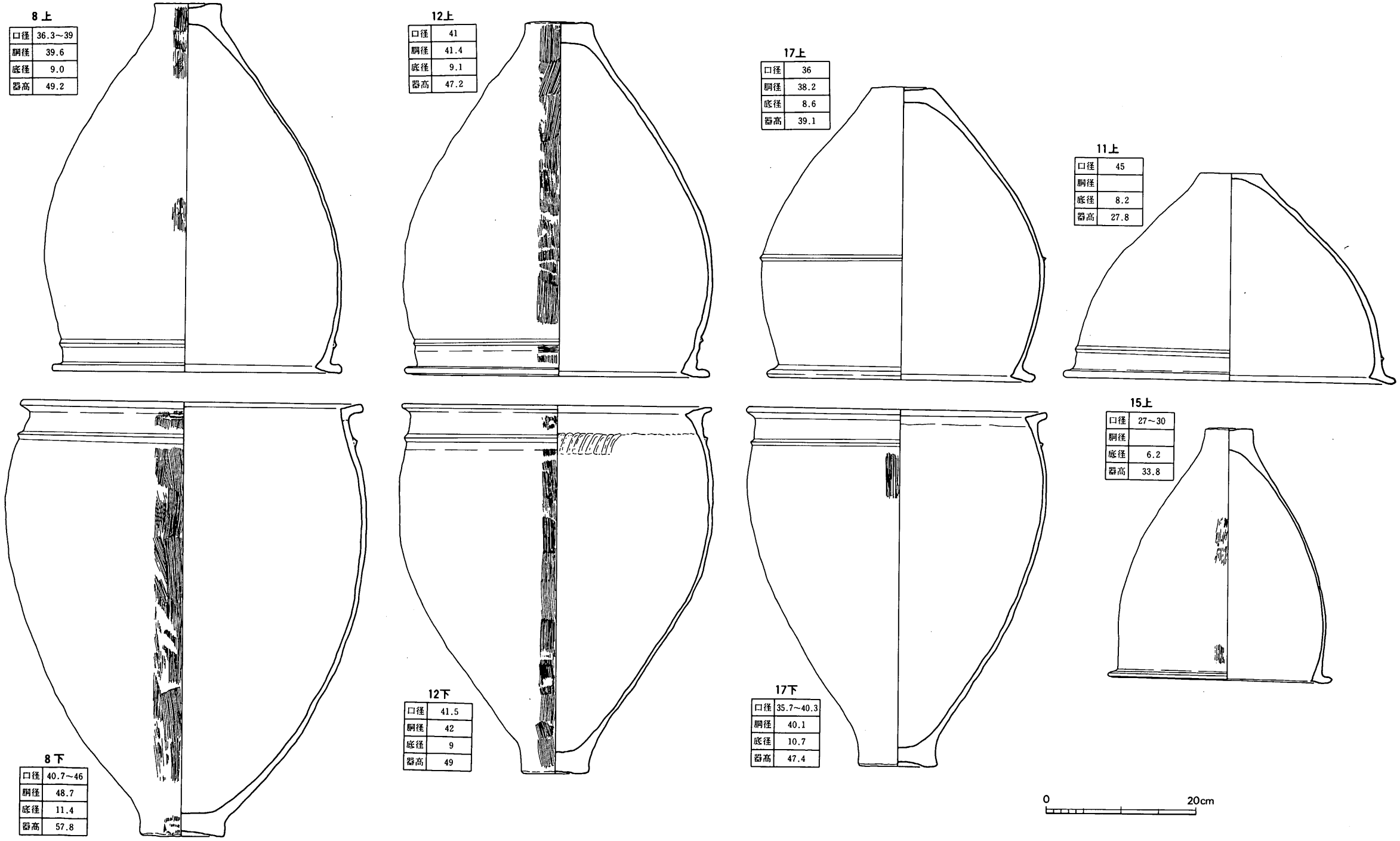
第18図　18・19号甕棺実測図（1/30）

No.		合せ	上＋下 (内法:cm)	埋置傾斜	主軸方位	粘土目張り	遺存度	墓壙出土遺物	備　考	上下	突帯	雲母片	黒色粒子	黒塗り	その他	断面図（1/6）
4	成人	接口	165	＋1°	S－27.5°－W	×	ふつう	弥生土器約30片	第16図	上	胴部一条	○	○	○		
										下	胴部一条	○		○	第19図	
5	小人	覆口	77	＋22°	N－28°－E	×	不良	弥生土器6片	第16図	上	口縁下一条	○	○			
										下	頸部一条	○	○		壺の口縁打欠き	
6	小人	呑口	76＋	約＋2°	N－29°－E	○	不良		K-18より新しい 第16図	上	胴部一条（M字）	○	○		壺の口縁打欠き	
										下	口縁下一条		○			
7	小人		34＋	ほぼ水平	S－62°－E	×	不良		D-4より新しい 第16図						壺か	
8	小人	呑口	98	－2.5°	N－40°－W	○	ふつう		第16図	上	口縁下一条	○		○	第20図	
										下	口縁下一条	○		○	粘土紐の幅3cm 第20図	
9	小人	呑口	79	＋1°	S－57.5°－E	×	不良		第16図	上	胴部一条	○	○	○		
										下	口縁下一条	○				
10	成人	二連	118	ほぼ水平	N－30°－E	×	良好	弥生土器13片	第17図	大	胴部一条			○	底部打欠き 第19図	
										小	胴部一条	○		○	スリップがけか 第19図	



第1地点墓地群採集管玉実測図（1/2）

第19図　3・4・10・19号甕棺実測図（1/10）



第20図　8・11・12・15・17号甕棺実測図（1/6）

No.		合せ	上＋下 (内法:cm)	埋置傾斜	主軸方位	粘土目張り	遺存度	墓壙出土遺物	備　考	上下	突帯	雲母片	黒色粒子	黒塗り	その他	断面図（1/6）
11	小人	接口	82	＋1.5°	S－30°－W	○	良好	弥生土器4片	K-12より新しい K-19より新しい 第17図	上	口縁下一条	○	○	○	鉢 第20図	
										下	口縁下二条			○		
12	小人	接口	92	－2.5°	S－68°－E	○	良好	弥生土器16片	K-11より古い 第17図	上	口縁下一条				第20図	
										下	口縁下一条	○			粘土紐の幅3cm 第20図	
13	小人	接口	87	＋4°	N－28.5°－E	×	ふつう		上下ともつくりが同じ 第17図	上	口縁下一条				日常器の転用か	
										下	口縁下一条				日常器の転用か	
14	小人	接口	106	＋6°	N－26.5°－E	○	ふつう		K-19より新しい 第17図	上	口縁下一条	○	○	○		
										下	口縁下二条	○	○	○		
15	小人	呑口	71	－0.5°	S－10°－W	○	良好		第17図	上	なし	○			日常器の転用か 第20図	
										下	口縁下一条	○	○	○		
16	小人	接口	82＋	＋15.5°	N－84.5°E	×	不良		削平が著しい 第17図	上	口縁下二条	○	○			
										下	口縁下一条	○	○			

No.		合せ	上＋下 (内法:cm)	埋置傾斜	主軸方位	粘土目張り	遺存度	墓壙出土遺物	備　考	上下	突帯	雲母片	黒色粒子	黒塗り	その他	断面図（1/6）
17	小人	接口	81	＋3°	S－23.5°－E	○	ふつう		D-4より新しい 第17図	上	胴部一条			○	第20図	
										下	口縁下一条				第20図	
18	成人	接口	168	－2°	N－13.5°－E	○	不良	弥生土器4片	K-6より古い 第18図	上	胴部一条	○	○	○		
										下	胴部一条	○	○	○		
19	成人	接口	163	＋9°	N－15.5°－E	○	良好	弥生土器22片	K-11より古い K-14より古い 人骨が一部遺存す 第18図	上	胴部一条	○		○	第19図	
										下	胴部一条	○		○	第19図	

①甕棺墓（第16～18図）

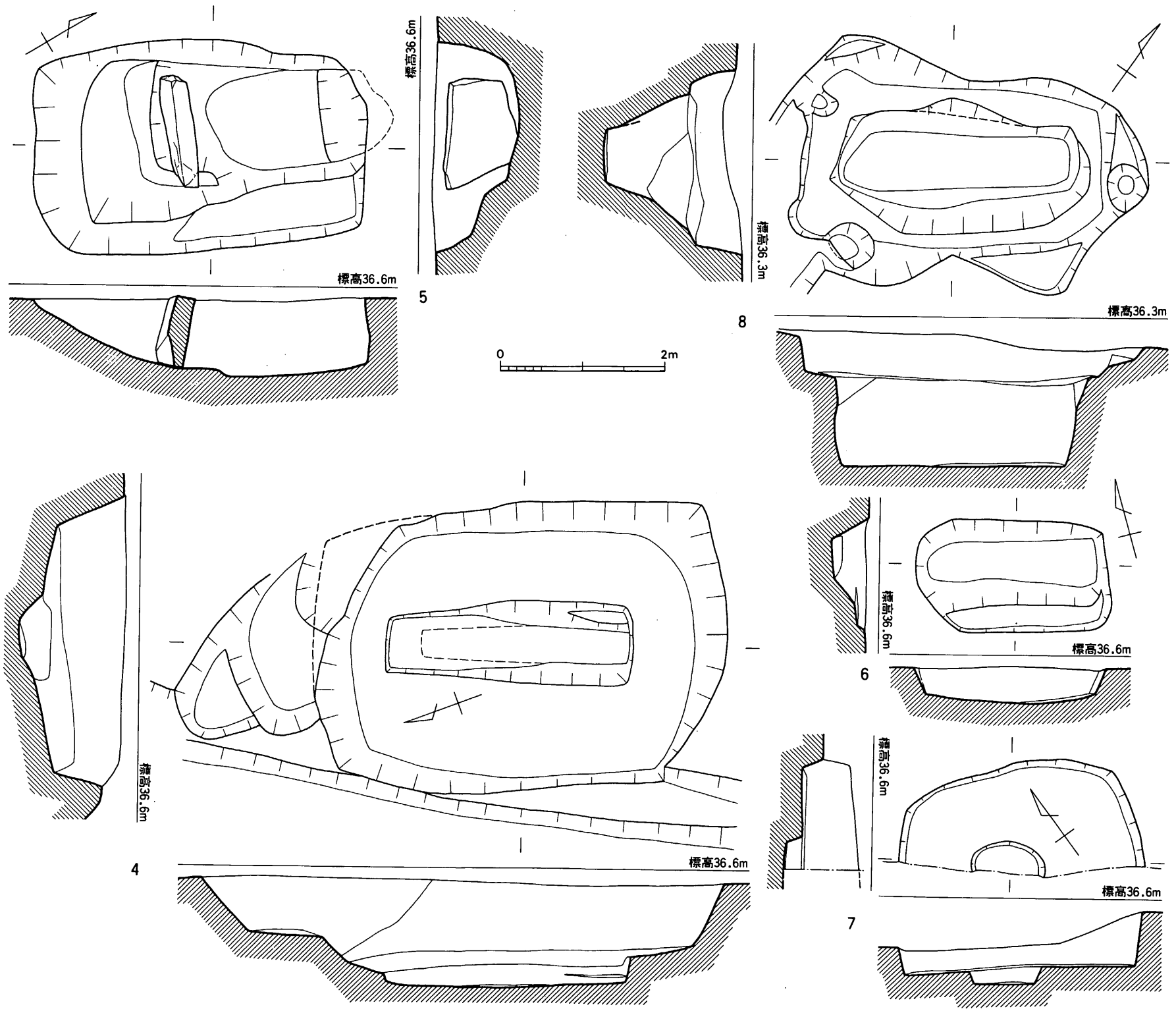
19基の内訳は成人棺５基，小人棺14基である。

甕棺総数36個体の観察で気づいた点に，・雲母片および角閃石らしき黒色粒子を含むものが多い。・黒塗り棺が半数以上を占める。特に成人用の大形棺は全て黒塗りである。・積上げた粘土紐の幅が３cmくらいとわかる例がある。・突帯は１例（K－６上）を除いて全て断面三角形であり，見かけ二条のものもつくりは一条である。等々が挙げられる。

時期的には弥生中期前半の古い頃の所産であり，時期幅があるとしてもごく僅かである。

②土壙墓（第21図）

５基ともに同一時期であるか否か不明であるが，D－４がK－７・17より古いことから，甕棺墓群よりも若干古い頃の所産と考える。（伊崎）



第21図　4～8号土壙墓実測図（1/60）

第9表　天神遺跡土壙墓一覧表

（単位：cm）

No.		推定頭位	1段目			2段目			深さ	主軸方位	出土遺物	備考
			長辺	頭位幅	足位幅	長辺	頭位幅	足位幅				
D1												
D2												
D3												
D4	2段	南	252	170	140	151	48	34	64	S－21°－W	弥生前期土器片約10	K－7・17より古い
D5	2段	南	202	121	110	113	56	52	51	S－31°－W	弥生中期土器片約70	南側に立石 甕棺用の墓壙か
D6	(2段)	東	116	66	69	(102)	(29)	(24)	21	S－75.5°－E		
D7	2段	(南)			135			44	45	S－36°－W	弥生中期土器片3	
D8	2段	南西	209	(100)	(100)	153	55	40	82	S－56°－W		

(6) 小　結

天神遺跡の調査では，集落と墓地の関連が一部明らかになったといえるが，遺跡全体から見ると極く一部分の調査でしかない。調査区内では，弥生前期末の貯蔵穴に始まり，中期前半の集落と墓地，さらには集落と墓地を隔離し，祭祀的機能を備えた大溝の存在は，この時期に集落の一形態が成立していることがわかる。

甕棺墓は，その群集墓の北東端の一部を調査したにすぎないが，中期前半から中頃特有の併列埋葬の形態をとり，さらに南西側に伸びることは明らかである。この延長線上約40m程のところでも甕棺墓が確認されている。調査した甕棺は中期前半にかぎられていたが，大溝内の祭祀土器群は中期前半から始まり，中期中頃に最盛期を迎え，一部後期初頭を混えている。

この甕棺墓と土壙墓群には，直接には祭祀土器群ないし，祭祀遺構が伴わないことは述べたが，ただ一例のみではあるが3号甕棺墓から丹塗筒形土器の脚部細片が出土している。大溝には多量の筒形土器片が出土しているので，これらの整理から墓地との関連がつかめればおもしろくなる。本報告書に掲載した土器は，大溝内の多量の土器群のほんの一部であり，大半は未整理のままである。

住居跡には，中期後半のものもあるところから，墓地にも同時期のものが存在すると思われ，大溝西端（実際は北西端であるが，現場での遺物取上げは西端・西側・中央・東側の区分で行った）にはこの時期のものが多い。大溝西端は斜面であるために，大溝上層は2次堆積のものがあるらしく，中期中頃から後期初頭までの遺物が混在する。

大溝からは，土器のほかに石器も多く出土するが，これらの大半も住居側からの流入ではなく墓地側からの投入であるようだ。最も多い石器は石庖丁で，完形品が多い。　（柳田）

2．橋詰遺跡（第2地点）

(1) はじめに

橋詰遺跡の調査地区は，天神遺跡の西側にあって小さな谷で隔てられているが，丘陵の南東側は天神遺跡と続いており，天神遺跡と同一集落といってよい。

橋詰遺跡では，丘陵頂部から西側斜面に遺構が集中するが，丘陵頂部には極端に浅くなった貯蔵穴群しか残っていない。天神遺跡と同様に丘陵頂部は1m以上の削平をうけ，住居跡等の比較的浅い遺構は消滅したものと思われる。

橋詰遺跡では，弥生前期末～中期初頭の貯蔵穴に始まり，弥生中期の住居跡，後期の土壙墓，5～6世紀の住居跡・掘立柱建物・溝，中世の溝が断続的に営まれている。弥生時代の遺構は丘陵頂部の貯蔵穴があるために，調査区全体に遺構が見られるが，他の遺構は西側斜面に集中している。西側斜面では，さらに西側ほど地山は露出しておらず，弥生時代遺構の未検出部分がある。これは西側斜面では，地山上部の堆積土中から掘り込んだ遺構が多いために，2～3層に分けて掘り下げたのであるが，3層目でも地山に達しない部分があり，貯蔵穴・住居跡があるようだ。丘陵頂部では，耕作土を除去すると地山が露出して貯蔵穴が検出できるが，斜面にかかると古墳時代以後の遺構と地山に達している弥生時代遺構しか検出できない。したがって，斜面の弥生時代遺構の処理が完了して後の調査となり，全体の実測及び写真撮影は2度以上になった。なお，さらに下層の遺構の調査は，工事でこれ以上削平されないことと，費用不足の理由で断念せざるを得なかった。（柳田）

(2) 貯蔵穴

34基検出された。その大部分は台地上でも高い箇所に位置し，住居跡が西側のやや低い部分に並行するのと異なった占地の有り方を示す。

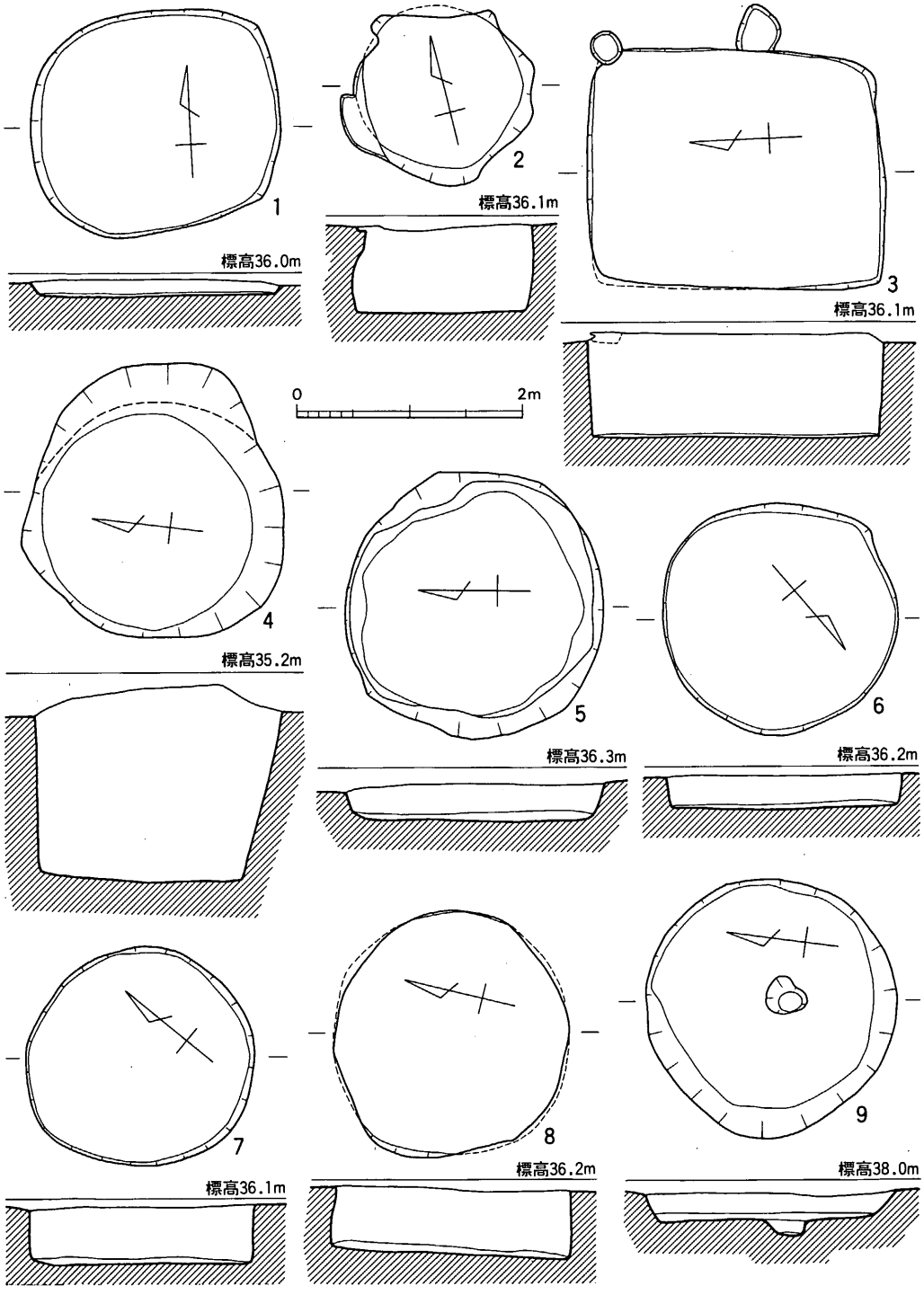
貯蔵穴は，底面形態によって大まかに2つに分けられる。1つは円形ないしそれに近いプランを呈するもので2，4～22，26～28，31・32・34号がそれに当たる。他は長方形プランを呈するもので，1・3・23～25・29・30・33号の8基である。

円形プランを呈す貯蔵穴群が東側高所に立地するのに対し，長方形プランのものは西側の低い部分に多い特徴が見られる。時期的には，円形プランのものが弥生時代前期末～中期初頭頃であり，長方形プランの3・30号は中期末～後期初頭の時期が与えられる。

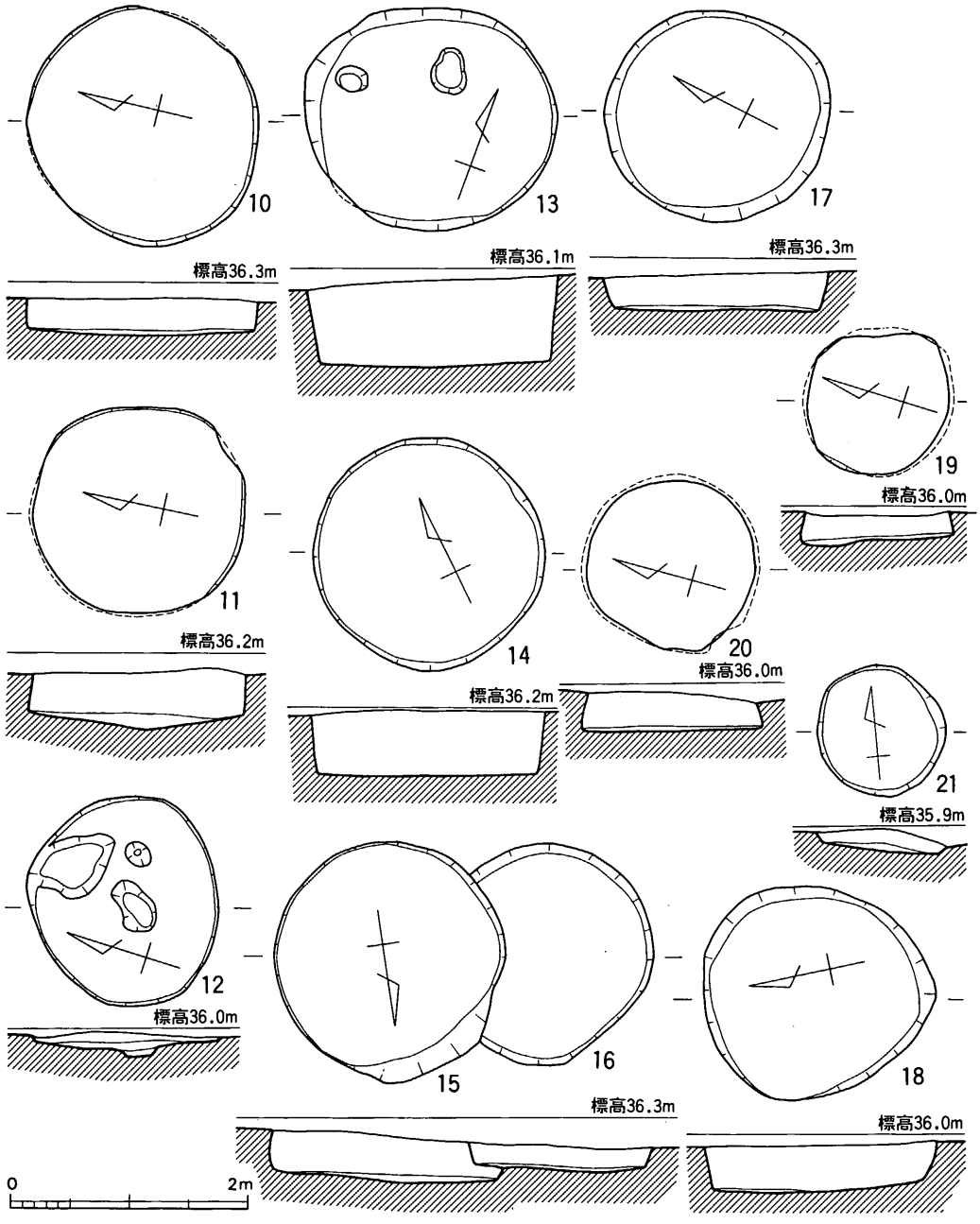
出土遺物は土器・石器とも量的にはそれほど多いものではない。特に打製石器の量は貧弱で近接する津古内畑遺跡の貯蔵穴群と対照的である。なお，貯蔵穴の計測値は表10のとおりである。（木下）



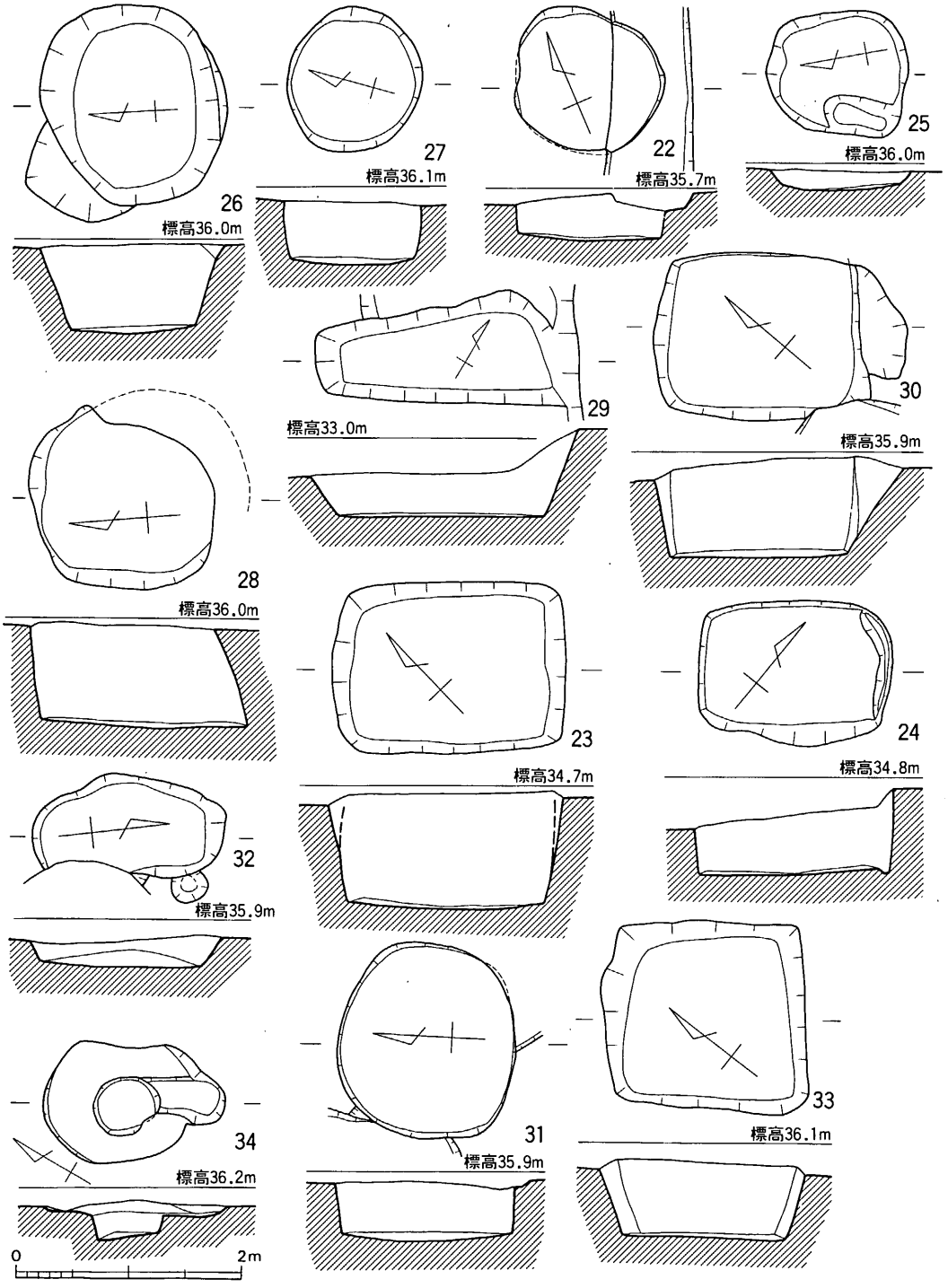
第 22 図　橋詰遺跡（第 2 地点）遺構配置図（11/200）



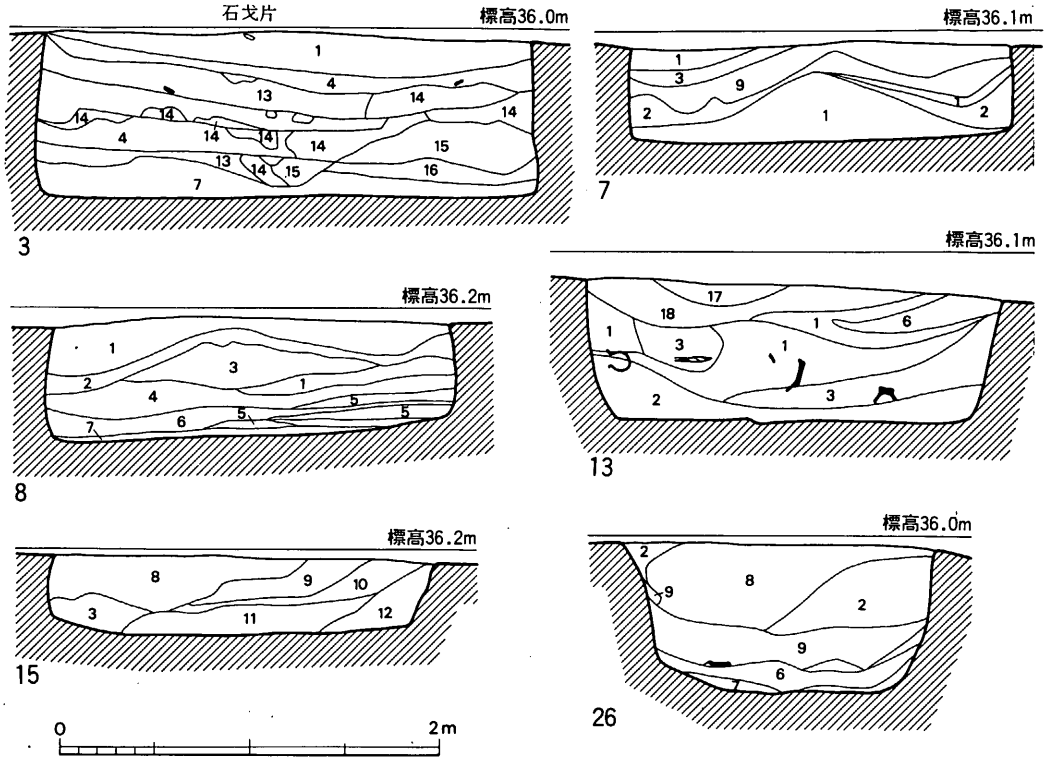
第23図　1～9号貯蔵穴実測図（1/60）



第24図　10～21号貯蔵穴実測図（1/60）



第25図　22～34号貯蔵穴実測図（1/60）



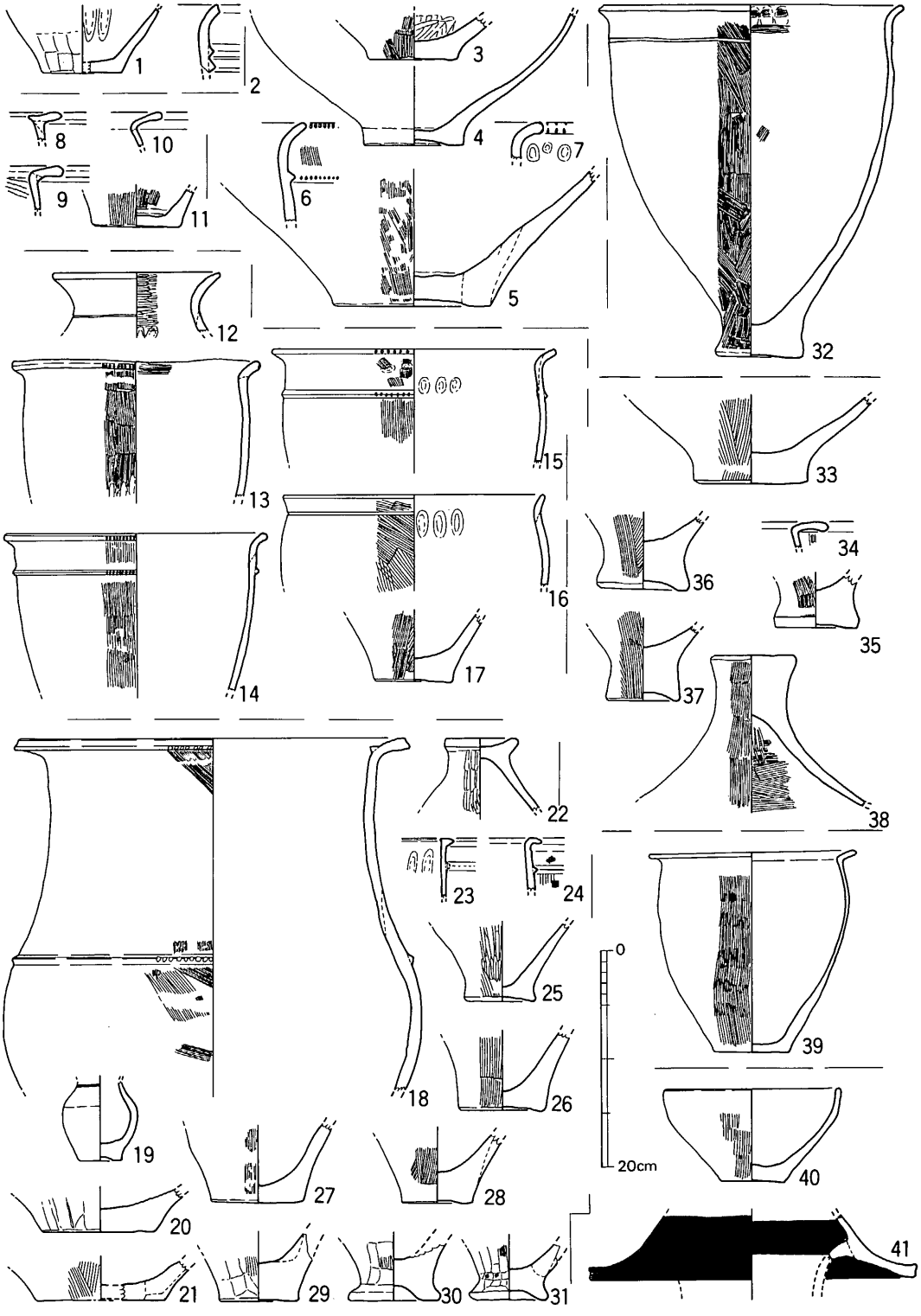
第26図　3・7・8・13・15・26号貯蔵穴土層断面実測図（1/40）

1．黒褐色粘質土(炭化物混入) 2．黒褐色土混入褐色粘土ブロック 3．褐色粘土混入黒褐色土 4．灰白色粘土混入黒褐色土 5．褐色砂質土 6．灰褐色粘土 7．灰白色粘土 8．褐色粘質土 9．黄褐色土混入褐色土10．黒色土混入赤褐色11．赤褐色灰質土12．黄褐色灰質土(やわらかい)13．灰白色粘土混入褐色土14．褐色土混入灰白色ブロック15．褐色土粒混入灰白色粘土16．白色粘土混入灰白色粘土

第10表　橋詰遺跡貯蔵穴一覧表

No.	平面プラン	底面規模(cm) 東西×南北(長軸×短軸)	深さ (cm)	主軸方位	土器・土製品	石器	備考
1	隅丸長方形	208×187	17	N−87°−W			
2	円形	150×145	78				一部袋状
3	長方形	253×213	92	N−87°−W	土弾1	UF1、石剣基部1、石鏃1	僅かに袋状となる部分あり
4	円形	250×210	174				
5	円形	193×195	34		土製円盤3	叩石1、スクレイパー1	
6	円形	204×200	30				
7	円形	186×190	52				

No.	平面プラン	底面規模(cm) 東西×南北(長軸×短軸)	深さ (cm)	主軸方位	土器・土製品	石　　器	備　　考
8	円　形	210×215	58			石剣基部1	袋状
9	円　形	195×196	27				床面中央にピット
10	円　形	195×187	31				一部分袋状
11	円　形	178×182	52			砥石1、UF1	袋状(一部)
12	円　形	155×174	13				床面にピット3個
13	円　形	170×195	78		土製円盤2	砥石1	床面にピット2個 僅かに袋状となる部分あり
14	円　形	185×182	54				
15	円　形	180×187	44				16号を切る
16	円　形	172×161	20				
17	円　形	165×165	34				
18	円　形	175×165	42				
19	円　形	124×128	27				袋状
20	円　形	150×144	34				袋状
21	円　形	102×94	21				
22	偏円形	130×118	42		土製円盤2、土弾1	叩石1、砥石3、石斧1、 石剣1、core1、磨石	一部袋状
23	長方形	171×130	110	N−39°−W			
24	長方形	152×105	77	N−54°−E			短辺の1つに溝あり
25	隅丸方形	104×95	19	N−10°−E			床面にピット1
26	楕円形	146×110	80	N−87°−W		扁平磨製石鏃1	
27	円　形	107×110	59			砥石1、紡錘車1	
28	円　形	185×157	94			打製石鏃1	袋状
29	長方形	177×70+	78	N−50°−E		石庖丁1	住20に切られる
30	長方形	157×85	90	N−49°−E			僅かに袋状となる部分あり
31	偏円形	152×165	53		土製円盤1	石庖丁1	僅かに袋状となる部分あり
32	隅丸長方形	144×78	30	N−7°−E			31貯に切られる
33	方　形	145×140	69	N−36°−W			
34	不整円形	150×105	10	N−31°−W			



第27図　貯蔵穴出土土器実測図（1/6）

第11表　貯蔵穴出土土器一覧表（第27図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	甕	1号	底径7.3	①砂粒多し②黄褐色③なで④ケズリに近いなで	
2	甕	1号		①粗い・砂粒多し②黄褐色③不明④横なで	
3	壺	2号	底径8.2	①粗い②茶褐色③なでつけ④刷毛目の上をなで	
4	壺	2号	底径9.2	①砂粒きわめて多し、金雲母・黒色粒子含む②黄～橙褐色③④不明	
5	壺	2号	底径14.5	①砂粒多し②茶褐色③なで④刷毛目の上をなで	化粧土をかける
6	甕	2号		①粗②外面黄褐色、内面黒褐色③なで④刷毛目となで	
7	甕	2号		①粗、砂粒きわめて多し②茶褐色③なで④なで	
8	甕	3号		①砂粒多し、金雲母片含む②黄褐色③④横なで	
9	甕	3号		①砂粒多し、金雲母片含む②黄褐色③④横なで	
10	甕	3号		①雲母片・角閃石含む②黄褐色③粗い刷毛目と横なで④横なで	
11	甕	3号	底径8.3	①金雲母片含む、砂粒多し②橙褐色③④刷毛目	
12	壺	4号	①15.7	①大きめの砂粒含む②橙褐色③横方向ミガキ④ミガキ	
13	甕	4号	①13.7	①砂粒多し、金雲母片・角閃石含む②外面茶褐色、内面黄褐色③なで、④刷毛目となで	
14	甕	4号	①24.4	①砂粒多し、金雲母含む②黒褐色～黄褐色③なで④刷毛目の上を若干なで	刷毛目10～12本/2cm
15	甕	4号	①26.2	①砂粒多し②茶褐色③なで④刷毛目、一部なで	
16	甕	4号	①24.4	①砂粒多し②外面黒褐色、内面黄褐色③なで④粗い刷毛目	
17	甕	4号		①砂粒多し②外面橙褐色、内面黄褐色③なで④刷毛目	
18	壺	13号	①36.4	①砂粒多し、金雲母片含む②黄褐色③なで④刷毛目となで	
19	壺	13号	底径3.9	①小砂粒多し②橙褐色③④なで	頸部に丹あり
20	壺	13号	底径10.4	①砂粒多し②黄褐色③不明④なで	
21	壺	13号	底径12	①粗砂多し②黄褐色③なで④刷毛目	
22	蓋	13号	つまみ径6.3	①砂粒多し、角閃石含む②黄褐色③なで④刷毛目の上をヘラミガキ	
23	甕	13号		①砂粒多し②茶褐色③なで④なで	
24	甕	13号		①良、金雲母片含む②茶褐色③なで④刷毛目となで	
25	甕	13号	底径6.7	①砂粒少なし②茶褐色③なで④ヘラミガキと刷毛目	

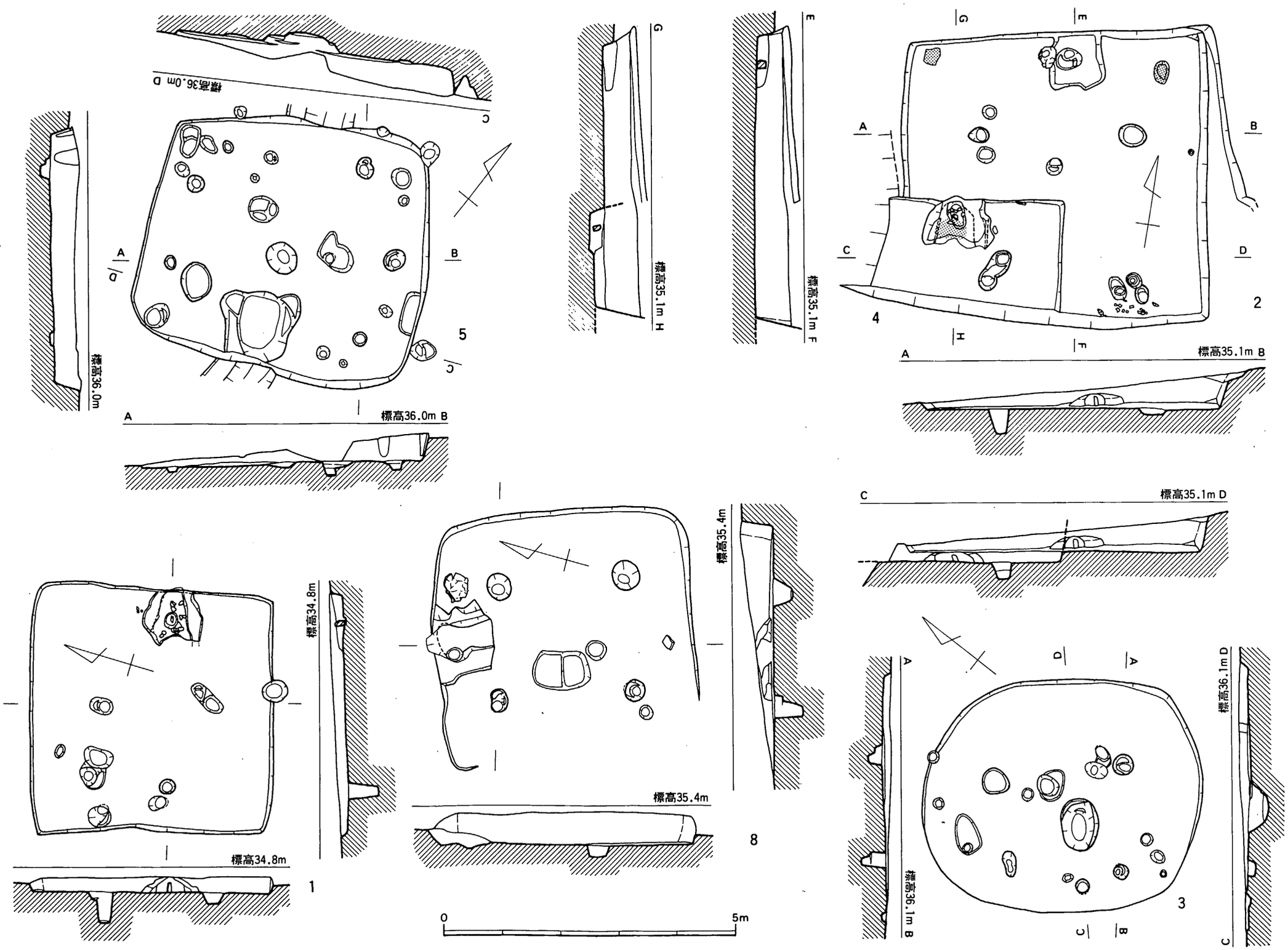
遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特 徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
26	甕	13号	底径8.2	①砂粒あまり多くない②外面黒褐色(煤付着)、内面黄灰褐色③なで④刷毛目	刷毛目6本/1cm
27	甕	13号	底径8.4	①砂粒多し、金雲母片含む②外面茶褐色、内面黒褐色(煤付着)③なで④刷毛目	刷毛目11本/1cm
28	甕	13号	底径6.6	①砂粒多し②淡褐色③なで④刷毛目の上をなで	
29	甕	13号	底径7.4	①砂粒多し、金雲母片含む②淡褐色③なで④刷毛目の上をなで	
30	甕	13号	底径8.5	①砂粒多し、金雲母片含む②茶褐色③ミガキに近いなで④刷毛目の上をなで	
31	甕	13号	底径7.3	①砂粒多し②橙褐色③なで④刷毛目の上をなで	
32	甕	21号	①27.3 ②32.4	①細砂多し、黒色粒を含む②茶褐色③刷毛目の上をなで④刷毛目	
33	壺	22号	底径10.6	①砂粒多し、金雲母片含む②赤褐色③なで④刷毛目のあとなで	刷毛目5本/1cm
34	甕	22号		①砂粒あまり多くない、金雲母片含む②橙褐色③なで④刷毛目の上をなで	
35	甕	22号	底径7.5	①砂粒多し②淡黄褐色③なで④刷毛目の上を所々なで	底部にワラ様の圧痕あり
36	甕	22号	底径8.6	①砂粒多し②黄褐色③なで④刷毛目	
37	甕	22号	底径7.0	①砂粒きわめて多し②黄褐色③なで④刷毛目	
38	蓋	22号	つまみ径7.9	①砂粒多し②紫茶褐色③ミガキと刷毛目④刷毛目の上を若干のなで	
39	甕	26号	①18.9 ②18.5	①砂粒多し、金雲母・角閃石含む②黄褐色③なで④刷毛目	
40	鉢	30号	①16.0 ② 8.6	①砂粒多し、金雲母・角閃石を含む②黄褐色③なで④刷毛目	
41	筒形器台	30号	つば径30	①良、微砂粒含む、金雲母片含む②赤～茶褐色③なで④なでと横なで	

(3) 住居跡

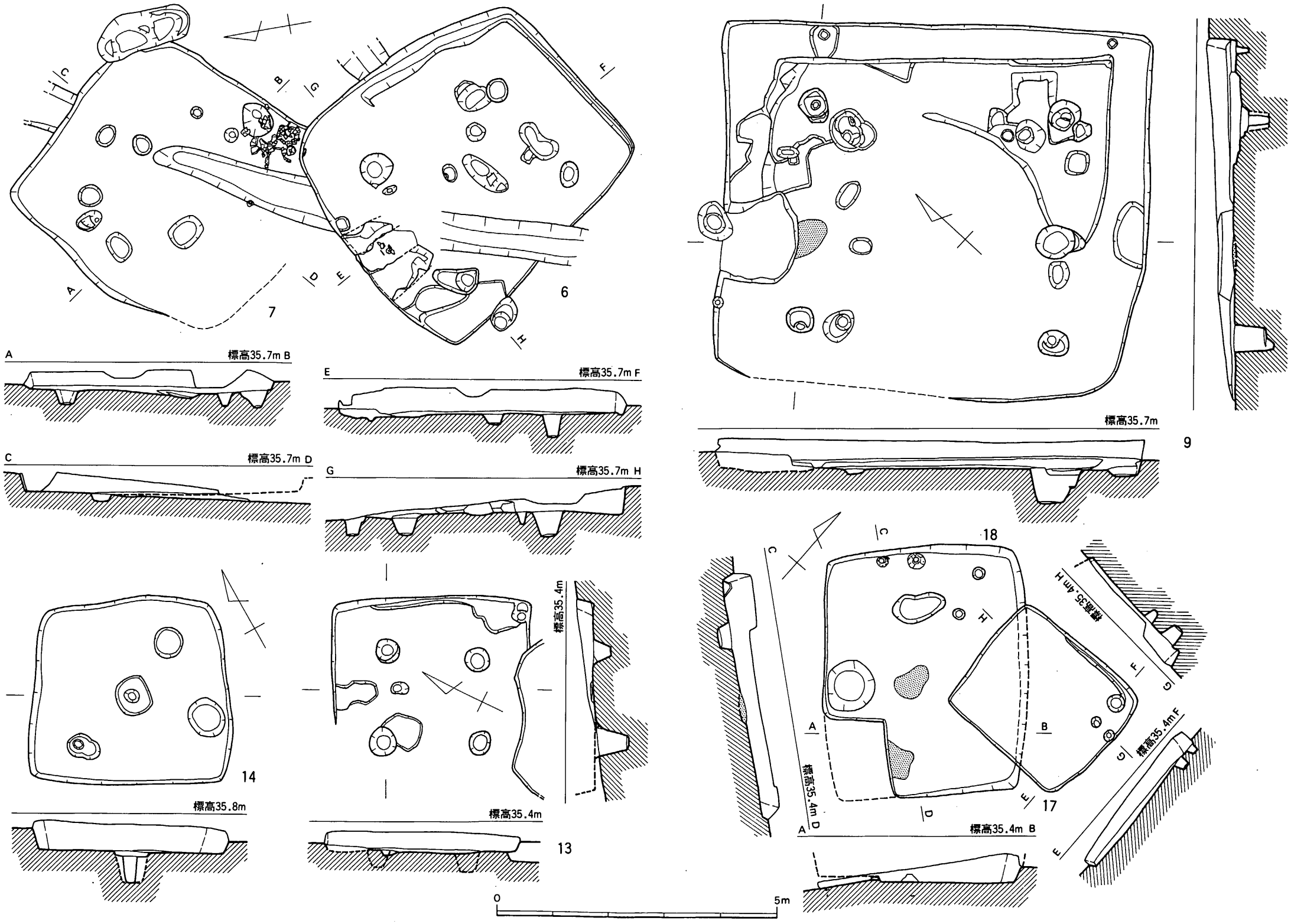
①住居跡の概要

橋詰遺跡の住居跡は，弥生時代11軒，古墳時代９軒の合計20軒であるが，重複したり未検出のものを加えると弥生時代のものはかなりの数になるものと思われる。

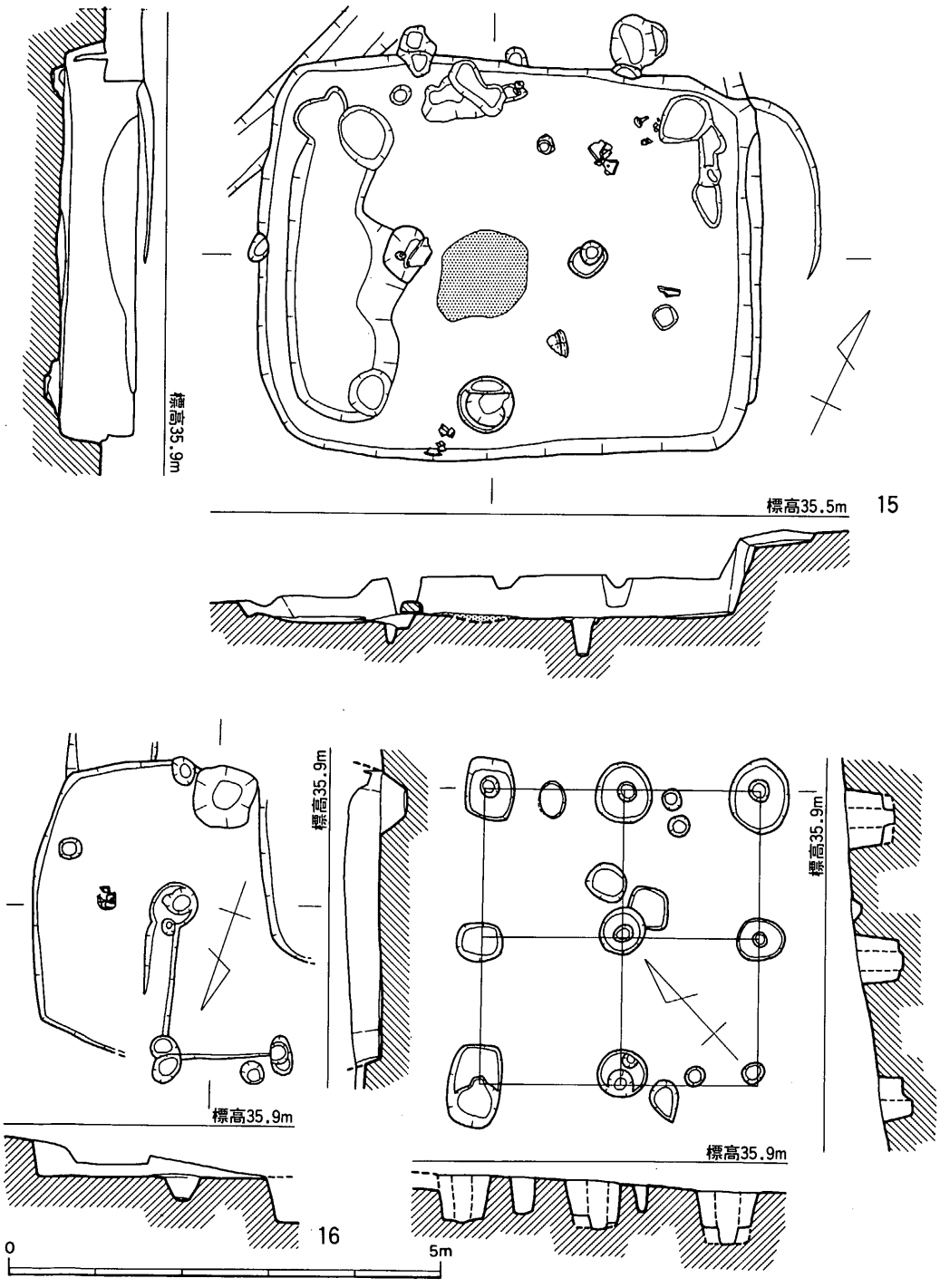
弥生の住居跡は，隅丸方形に近い楕円形の３号が中期前半で最も古く，１軒のみ検出れているが非常に浅くなっているところから，丘陵頂部にも存在したろうし，斜面で未検出のものもあるであろう。次に中期中頃の住居跡には，５・７・14・～16・19号があり，この時期以後が方形住居跡となっている。次の中期後半は少なく，18号などがある。この18号住居跡には，ベッド状遺構もあり，土器が床面に安置されたまま出土している。次の後期初頭も少なく，17号の小形のものがある。以上の住居跡の時期は，出土品が未整理であるところから，多少の変動も考えられるが，大差はなかろう。



第28図　1～5・8号住居跡実測図（1/80）



第29図　6・7・9・10・13・17・18号住居跡実測図（1/80）



第30図　15・16号住居跡、掘立柱建物実測図（1/80）

第12表　住　居　跡　一　覧　表

No.	平面形	規模(長径×短径)(m)	炉・カマド	主柱穴数	土壙位置	時　期	出　土　品
1	方　形	4.2×4.15	東にカマド	(4)	—	5世紀後半	須恵器・土師器 手捏土器
2	方　形	(5.0+)×5.2	北にカマド	4	—	5世紀後半	須恵器・土師器 子持勾玉・臼玉・土製勾玉
3	楕円形	4.8×(4.0+)	(中央)	4	中央(楕円)	弥生中期前	土器片 石のみ、石鏃
4	方　形	(3.0+)×(1.8+)	北にカマド	(4)	—	6世紀後半	須恵器、土師器 砥石
5	隅丸長方形	4.9×4.55	—	(2)	南に不整形	弥生中期中	土器片
6	方　形	5.1×(4.3+)	北にカマド	4	—	6世紀後半	須恵器・土師器
7	長方形	(4.5+)×4.35	—	—	南に不整形	弥生中期中	壺・甕・鉢
8	方　形	4.5×(4.0+)	北にカマド	4	—	6世紀後半	須恵器・土師器
9	方　形	7.6×6.5	北にカマド	4	南(不整形)	5世紀後半	須恵器・土師器 手捏土器・臼玉
10	方　形	3.8×(3.0+)	東にカマド	(4)	—	6世紀末	須恵器・土師器片
11	方　形	(5.0+)×(1.5+)	—	—	—	弥　生	土器片
12	方　形	4.3×(1.2+)	—	—	—	弥　生	土器片
13	方　形	3.6×(3.5)	北にカマド	4	不明	6世紀	須恵器・土師器片
14	方　形	3.6×3.3	—	—	—	弥生中期中	土器片
15	隅丸長方形	5.87×4.67	中央に炉	2	南(円形)	弥生中期中	壺・甕・大甕・高杯・蓋
16	隅丸長方形	(3.0+)×3.45	—	—	南(方形)	弥生中期中	甕・蓋
17	長方形	2.8×2.4	—	—	—	弥生後期初	土器片
18	隅丸長方形	4.4×3.6	中央に炉	(2)	西(円形)	弥生中期後	蓋付壺・鉢・甕
19	隅丸方形	3.5×(2.0+)	—	—	—	弥生中期中	土器片
20	方　形	4.8×(2.8+)	—	(4)	—	(6世紀)	須恵器

古墳時代の住居跡は，9軒のうち8軒までがカマドが検出されている。古墳の住居跡には，5世紀代（1・2・9号）と6世紀代のものがあり，1号と10号のカマド付設の位置が違っている。他の住居跡は北側に付設されるのに対し，1・10号は東側に付設している。この2軒の住居跡は，1号が5世紀後半，10号が6世紀末頃であるから時期も違っていることになり，時期差には関連ないようだ。　（柳田）

② カマド

1号住居跡のカマド（第31図）

主軸N—48.5°—Eを測る東向きのカマドで，東壁外に煙道張り出しが検出された。検出時は，袖上半部と天井部の崩壊土が袖下半部・カマド内灰層を覆っており，平面プランは明瞭でなかった。発掘に際しては，（A—B）～（M—N）の7ヶ所で10cm間隔で横断面を作成し，発掘・実測終了後に平面図を完成させた。第31図には4横断図のみを示し，各部位の説明は縦断図に付した名称を使用する。

前庭部は，灰を掻き出すことで，住居床面が凹む例が多いが，張り床8層が住居床検出時に既に若干下げられているために図示し得ない。

焚口室は，薪・藁等の焚入れ口で，天井部は既に崩壊・流失する。北袖西端が確認され，支脚中心～焚口西面（先端・前面）間50cm・同焚口南面（燃焼室と焚口室境）間24cmを測る。

燃焼室（焚燃部・支脚部・炎焼部）は，カマド基盤（住居張床）の8層で検出された支脚掘り方の小ピットの上位で，径約25×30cmの大ピットが検出され，埋土は住居埋土の5層で，底は灰残滓2層に及んでいた。小ピットは，8層が熱変焼土化した8—4′層を切って掘られ，支脚は底から浮き不安な状態である。燃焼部北袖近くでは2個のミニチュア土器が住居張り床面から8cmの高さまで堆積したカマド崩壊土上面で出土した。これらのことから，この大ピットは燃焼室天井部に設けられた支脚上位の天窓部痕ではなく，天井部崩壊（炎口室天井部崩壊も含む）後に，新たに掘られたものと言える。以上のことは，カマド使用時中にも祭祀が行なわれ，それは住居遺棄時にも行なわれ（張床に接し，焚口北袖外と煙道南方でもミニチュアが出土した），天井部が崩壊し10cmほど住居が埋没してからも行なわれたことを示している。つまり，最後の祭祀（天窓部を掘り，支脚を抜痕し再度2層で埋めて立脚させる）＝カマド破棄祭祀でもって，一連のカマド祭祀が終了したものとすることができよう。

なお，炎焼部とは支脚後部のことで，この部分の床面や袖内壁面は支脚前部に比べて熱変焼土化が著しく少ないことが他の例で多いことから焚燃部と区別呼称したものである。各部合計の燃焼室奥行は48cm・支脚部燃焼室幅は31cmを測る。

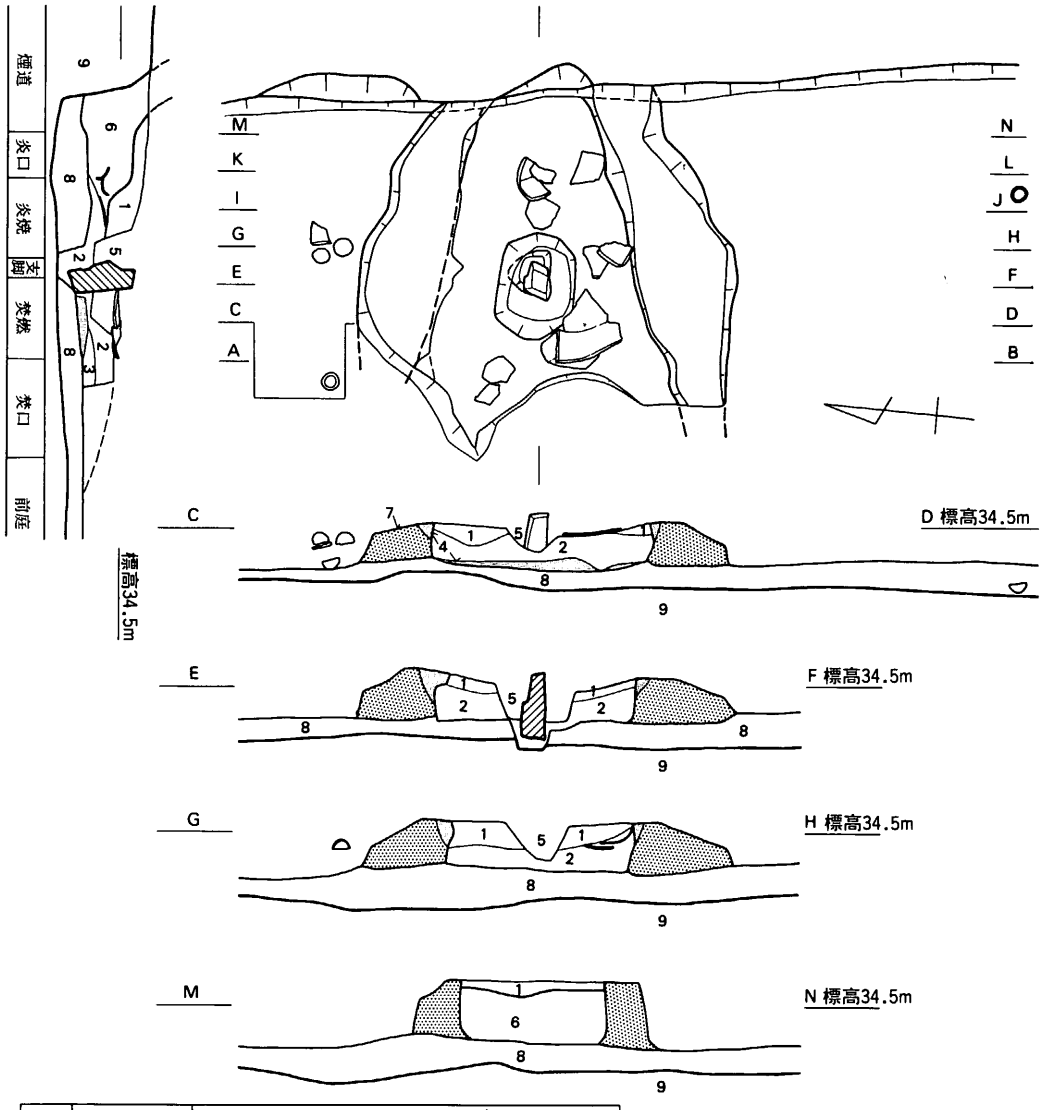
焚口室は，縦断図に示すように，天井は煙道部天井と共に6層流入堆積後に落下しているが，天井内壁はほぼ水平であった旧状がよく観察される。

煙道は，煙道奥壁は住居東壁に一致し80°を測るが，煙道基盤床の8層上面から12cm上位では約37度の緩傾斜となる。

最後に，その他の計測値を支脚中心から各住居壁床面まで示せば，奥壁（東壁）間45cm・北壁間231cm・南壁間170cm・西壁間360cmで，現存カマド長（奥壁上面～焚口前面）98cmを測る。

6号住居跡のカマド（第33図）

主軸N-18.5°-Wを測る北向きのカマドで，北壁外にも煙道張り出しの一部が検出され，燃



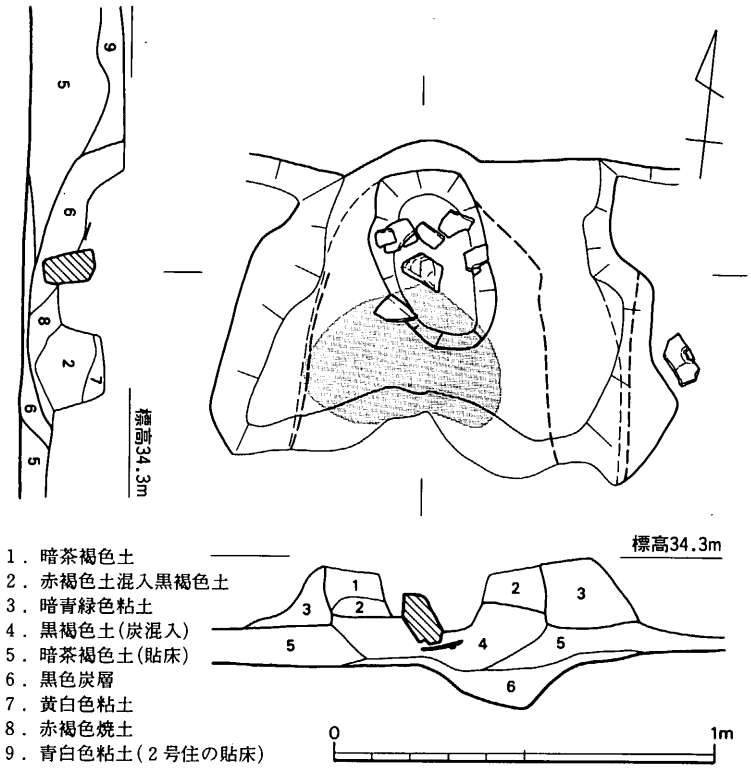
番号	状　態	特　　長
1	天井落下土	乳灰色粘土（焼土粒・炭を含む）
2	灰残滓混土	茶褐色粘質土（焼土粒・炭粒を含む）
3	灰残滓混土	茶褐色粘質土（焼土粒を含む）
4	壁・床焼土化	赤褐色焼土（堅い）
5	住居埋土	茶褐色土
6	カマド埋土	茶褐色土（炭粒を含む）
7	袖	乳灰色粘土
8	張床	茶褐色土（暗褐色粘質土・ブロックを含む）
9	地山	灰白色粘質土

第31図　1号住居跡
カマド実測図（1/20）

焼室の位置からは甑片が出土した。発掘は1号住居跡カマド例同様に(A-B)～(M-N)の7ヶ所で横断面図を作成したが，33図では4ヶ所のみを示し，構築の仕方を主に説明する。

カマド基盤は，カマド構築部および前庭部は一段と深く掘り，5層で基盤整備を行なっている。

各部の掘り方床面は縦断面図に示すように，前庭部～焚口室中間までは浅く緩傾斜に，次に焚燃部まではやや深く平担に，支脚部～炎口室は一段と深くそれぞれを掘る。煙道部も既に33.5°の傾斜で掘り，これは整備面56層上面（煙道床面）傾斜に一致するが，この部分の1a層下面の角度もほぼ等しいことから，1a層は炎口室天井・煙道壁がそのまま落下したことをよく表示していよう。これに対し，前庭～炎焼部整備床面は5a層でほぼ平担に整備され，炎焼室整備床面斜角は15.5°を測る。

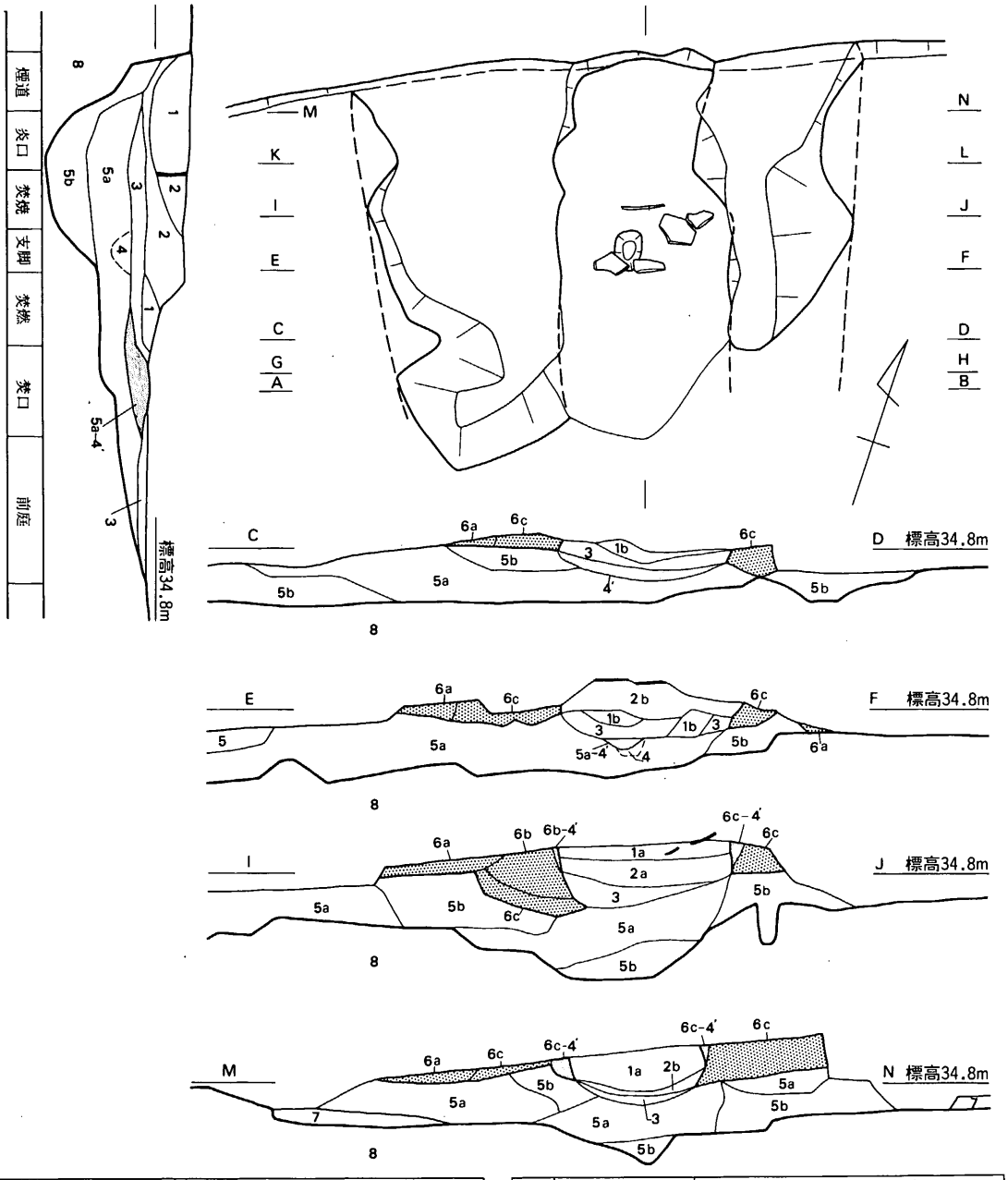


第32図　4号住居跡カマド実測図（1/20）

また，各部の袖の基盤整備は横断面図に示すように，前述の掘り方の肩部に5層を盛土して袖基盤としている。この基盤上に6c層で袖を構築するが，I-J断面に示すように6a・6b層で2回の修復が確認された。

各部位の規模，支脚抜痕は径8×12cm大で，埋土は焼土のみが検出された。位置は断面北軸線より北に中心が4cm片寄るが，あくまでも抜痕であり，支脚上面は上軸上に位置したものと考えられる。以下の計測置は支脚中心の位置を主軸上にあるものとして示す。焚口室床幅49cm・燃焼室床最大幅50cm・燃焼室壁現存最大幅51cm・煙道壁肩～焚口室前面110cm。支脚中心～奥壁床間55cm・同南壁床間451cm・同東壁床間252cm・同西壁床間201cm。

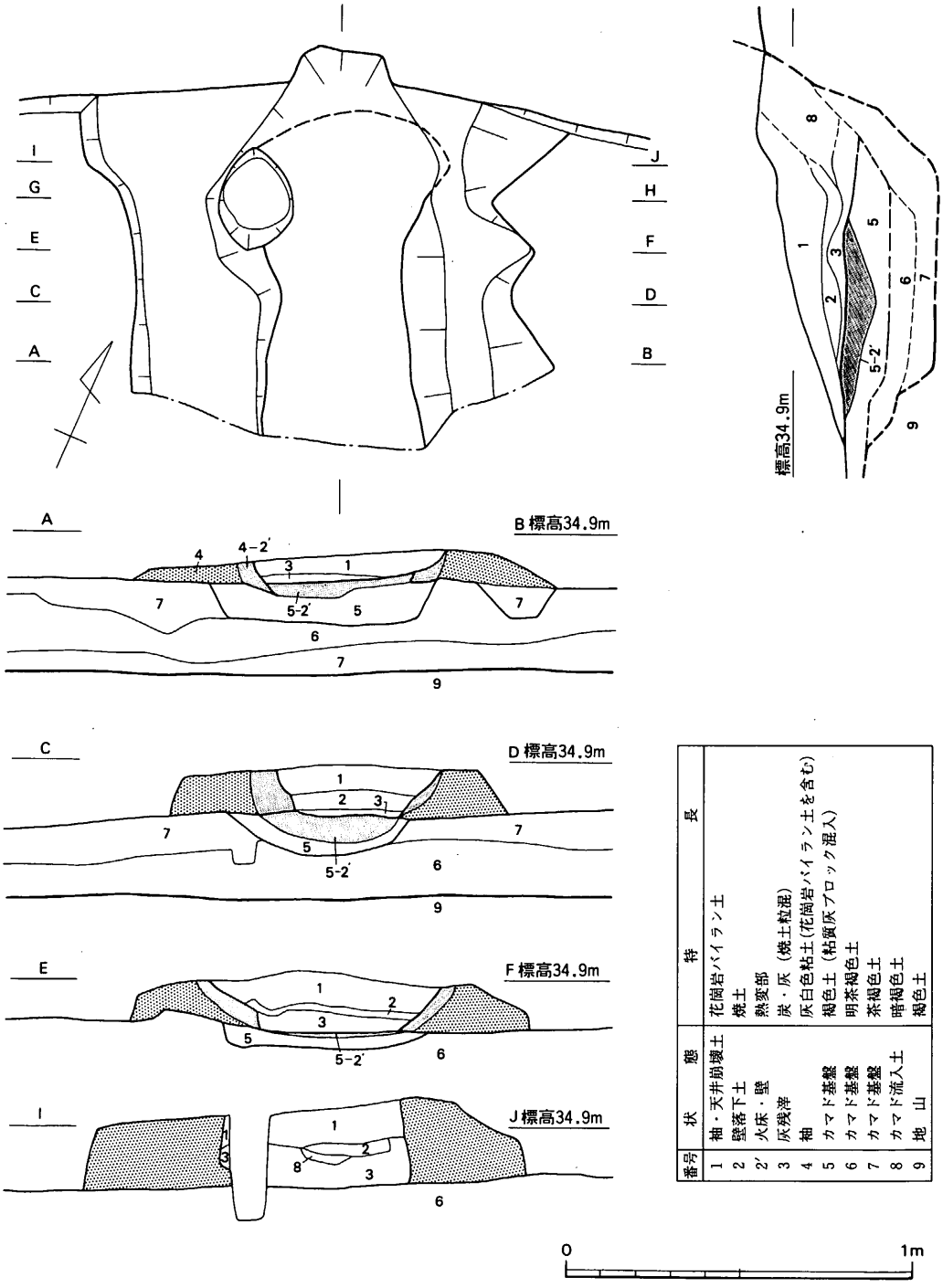
なお，支脚は灰2層を掻き分けて抜去し，燃焼室焼土で埋めもどされた可能性が強く，支脚



番号	状態	特長
1a	天井・壁落・下土	暗褐色粘質土(黄褐色パイラン土・炭を含む)
1b	天井・壁落・下土	暗褐色粘質土(〃)
2a	天井・壁落下流入土	〃 (焼土・炭・灰を含む)
2b	〃	〃 (焼土ブロックを含む)
3	灰残滓	暗褐色灰層 (焼土粒・パイラン土を含む)
4	焼土	赤褐色焼土 (固い)
4′	壁・床	〃

番号	状態	特長
5a	カマド基盤	暗茶色粘質土(炭粒・焼土粒を含む)
5b	〃	暗褐色粘質土
6a	袖(新)	灰色粘土
6b	袖(中)	〃 (暗褐色土・焼土粒を含む)
6c	袖(古)	〃 (黄褐色パイラン土を含む)
7	張床	暗褐色粘質土(黄灰色粘土地山ブロックを含む)
8	地山	黄灰色粘土

第33図 6号住居跡カマド実測図 (1/20)



番号	状態	特長
1	袖・天井崩壊土	花崗岩バイラン土
2	壁落下土	焼土
2′	火床・壁	熱変部
3	灰残滓	炭・灰（焼土粒混）
4	袖	灰白色粘土(花崗岩バイラン土を含む)
5	カマド基盤	褐色土（粘質灰ブロック混入）
6	カマド基盤	明茶褐色土
7	カマド基盤	茶褐色土
8	カマド流入土	暗褐色土
9	地山	褐色土

第34図　8号住居跡カマド実測図（1/20）

抜去を伴うカマド破棄祭祀行為と考えられる。

8号住居跡のカマド（第34図）

主軸N-24°-Wを測る北向きのカマドで，北壁外に煙道張り出し部が検出されている。

横断面は（A-B）～（I～J）の5ヶ所で試みられているが，(A-B)·(C-D)断面図以外は地山まで掘られておらず，5層下面・6～9層の図示がない。縦断面図には，6号住居跡カマド発掘例（以下6住例と略）を考慮して，破線で推定図示した。以下，各部の説明をする。

燃焼室は，薪・藁等の燃材が，支脚の存在によって，一部が支脚両側部まで差し入れられ，大半はその前面で焚かれる。このことは，支脚前面の焚燃部床・袖壁・天井壁部が支脚部のそれよりも著しい熱変焼土化が認められるカマド通例から明らかである。このことから，C-D・E-F断面の熱変焼土化部5ⓐ層および天井壁落下焼土2層を比較すると，後者がともに厚い。このことから，支脚部はこの両断面間といえる。

なお，支脚抜痕は両断面間にあって見逃されたか，あるいは6住例のように意識的に除去後の抜痕が焼土で埋めもどされたものを検出し得なかったものと考えられる。

これらのことから，縦断図に示された3層南端までが焚燃部・5-②層北端部までが炎焼部といえる。

炎口室・焚口室は，床面が平坦な部分のI-J断面よりやや北までが焚口室といえ，3層南端から1層南端までが焚口室と考えられる。

煙道は，I-J断面図に8層の一部が示されていることから，8層は縦断面推定図のように煙道崩落前に流入堆積したものと考えられる。

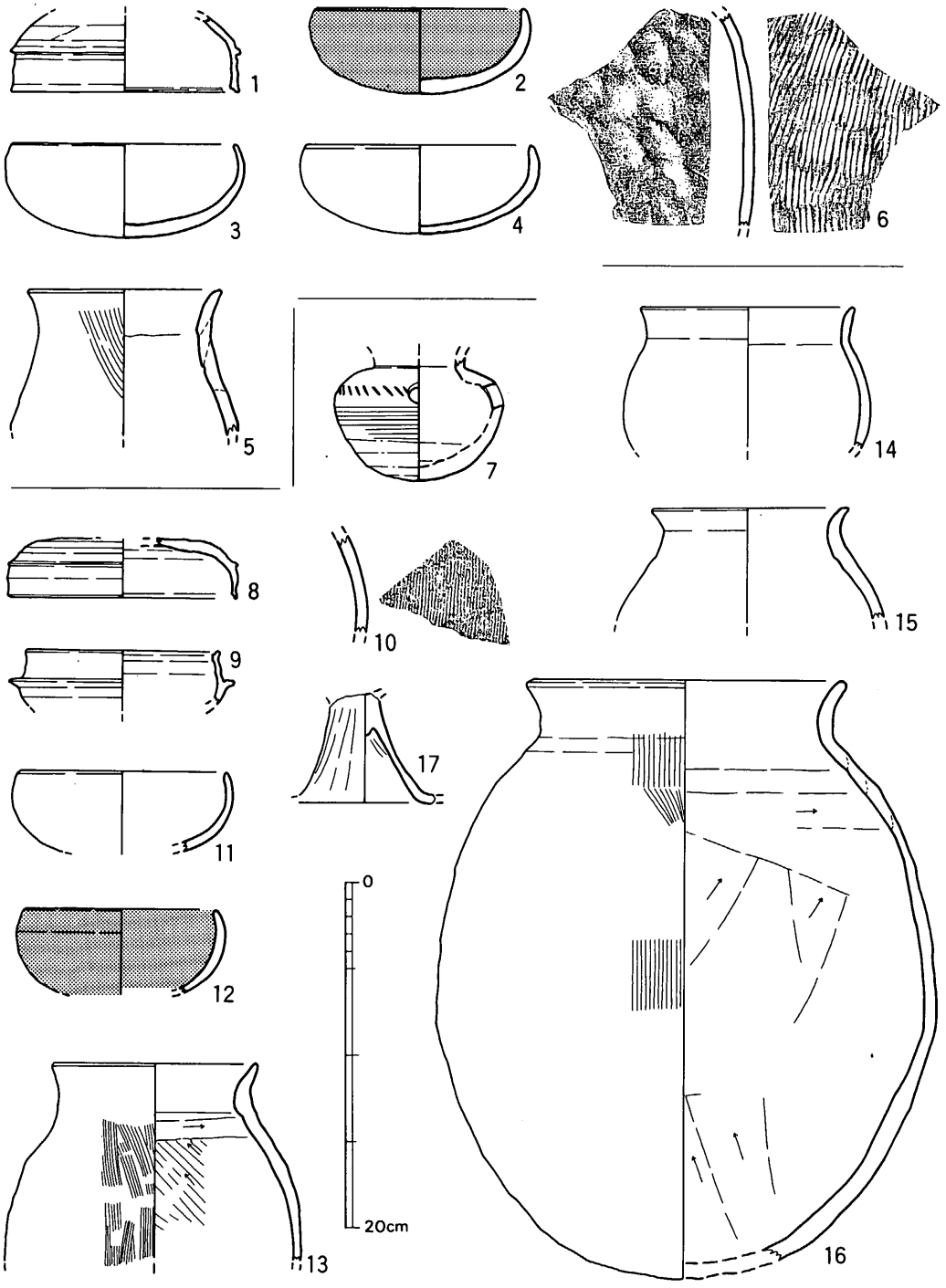
各部位の規模は，前述のように支脚の位置を考えて支脚中心からの各計測値の大略は，奥壁床間45cm・南壁床間389cm・東壁床間191cm・西壁床面215cm。（馬田）

③土　器

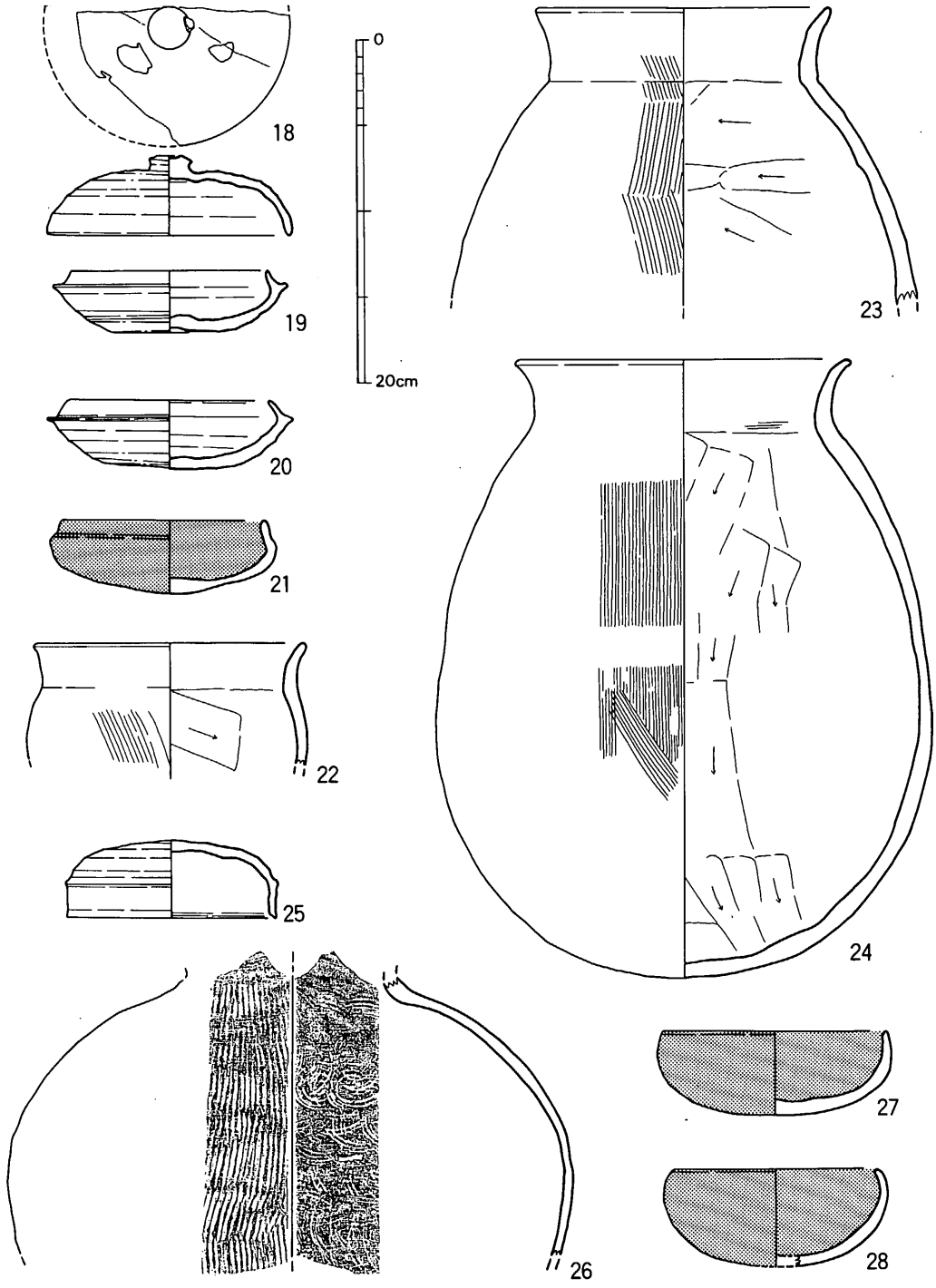
第13表　住居跡出土古墳時代土器一覧表（第35・36図）

（単位cm）

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特　徴　①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
1	蓋杯(蓋)（須恵）	1住（覆土）	①13.0 ② 4.5+	①黒色粒多く含む②灰色③ヨコナデ④ヨコナデ、天井回転ヘラケズリ	堅牢
2	杯（土師）	1住（カマド内）	①12.2 ② 5.0	①微砂多く含む②明茶色③口縁ヨコナデ、下半ヘラミガキ④口縁ヘラミガキ、下半ケズリ後ヘラミガキ	内外黒塗り
3	杯（土師）	1住（床面）	①12.9 ② 5.3	①微砂わずか含む②明茶色③口縁ヨコナデ、下半ヘラミガキ④口縁ヨコヘラミガキ、下半ケズリ後ヘラヨコミガキ	
4	杯（土師）	1住（カマド内）	①13.0 ② 5.2	①微砂若干含む②明茶色③口縁ヨコナデ、下半ナデ④口縁ヘラミガキ、下半ケズリ後ヨコヘラミガキ	
5	甕（土師）	1住（床面）	①11.1 ② 7.4+	①細砂多く、金雲母少し含む②にぶ橙・にぶ黄橙色③口縁内外ヨコナデ、胴ケズリ④胴ハケ目	



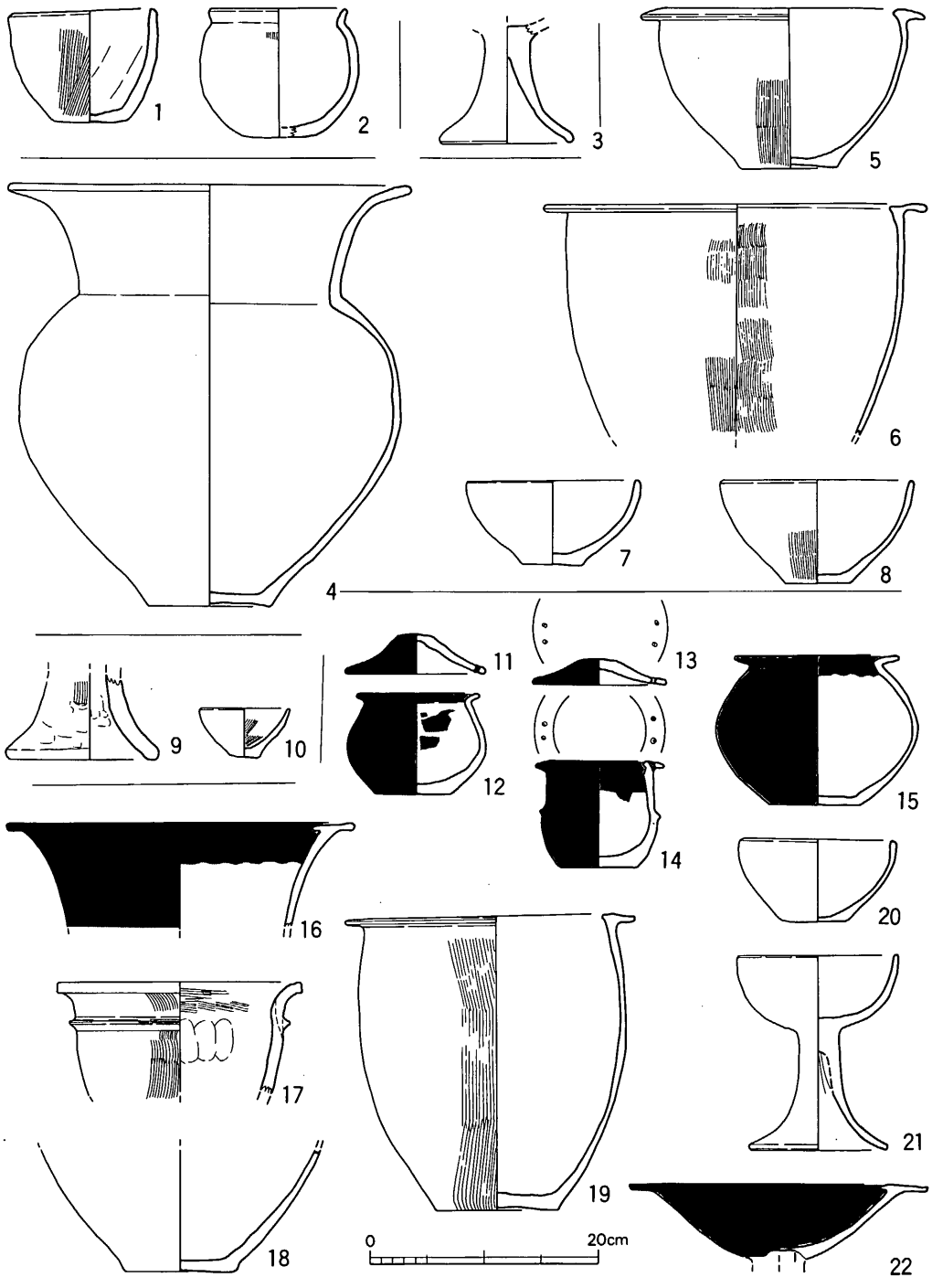
第35図　古墳時代住居跡出土土器実測図①（1/4）



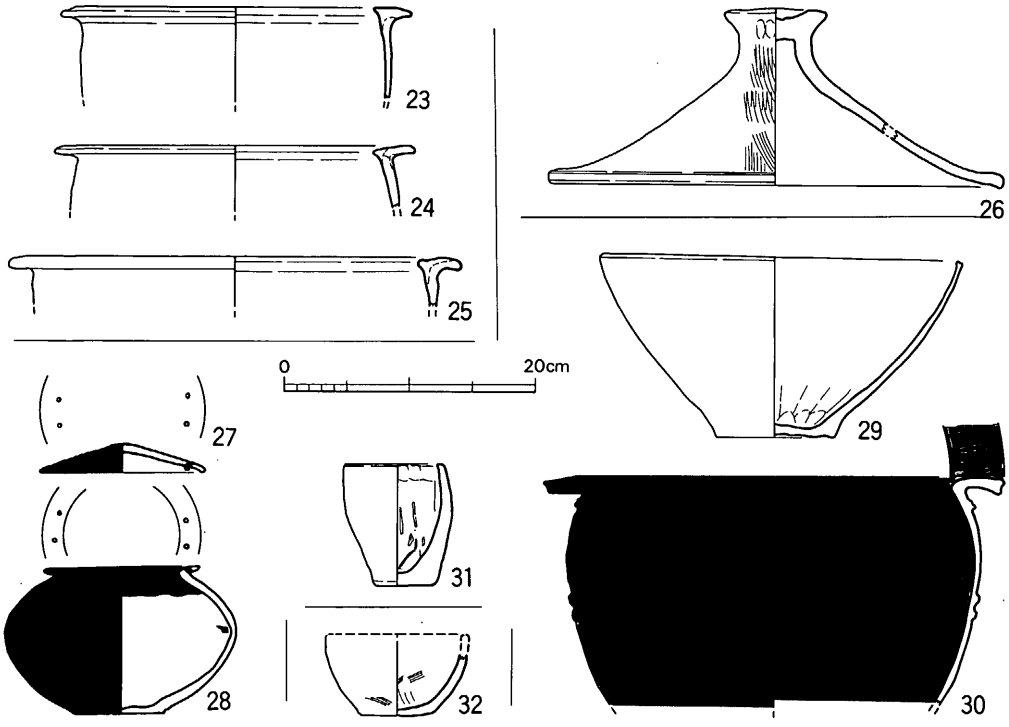
第36図　古墳時代住居跡出土土器実測図②（1/4）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
6	甕（須恵）	1住（カマド近）	—	①大粒黒色粒少し含む②内外面灰黒色、内部灰褐色③アテ具痕消す④タテの平行タタキ	
7	甕（須恵）	2住（床面）	胴径9.7 ② 7.0+	①砂粒含む②暗灰青色③ヨコナデ④上半ヨコナデ、刺突文、下半回転ヘラケズリ	
8	蓋杯(蓋)（須恵）	2住（覆土）	①13.2 ② 3.5	①微砂・黒色粒多く含む②緑味灰色③口縁内外ヨコナデ、上半ナデ④天井回転ヘラケズリ	堅牢
9	蓋杯(身)（須恵）	2住（覆土）	①11.1 ② 3.3+	①黒色粒多く含む②灰味黄緑色③ヨコナデ④ヨコナデ	堅牢
10	小甕（須恵）	2住（床面）		①粗砂含む②灰・灰黒色③ヨコ方向ナデ④細い平行タタキ	
11	杯（土師）	2住（床面）	①11.8 ② 4.7+	①微砂若干含む②明茶色③口縁端ヨコナデ、下半ヨコミガキ④口縁ヨコナデ、下半ミガキ	
12	杯（土師）	2住（覆土）	①11.1 ② 4.8+	①微砂わずか含む②明茶・にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ、下半ナデ④下半ケズリ後ミガキ	内外黒塗り
13	甕（土師）	2住（ピット）	①11.8 ②11.5+	①細砂若干含む②にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ胴ケズリ④胴ハケ目	
14	小甕（土師）	2住（床面）	①12.3 ② 8.3+	①赤褐色粒含む②明茶色③口縁ヨコミガキ、胴斜ミガキ、④全体ヨコミガキ	
15	小甕（土師）	2住（床面）	①11.4 ② 6.3+	①粗砂多く含む②茶色③口縁内外ヨコナデ、胴ナデ④胴ナデ	
16	甕（土師）	2住（カマド西）	①18.5 ②34.7	①細・粗砂多く含む②明茶・にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ、胴ケズリ④胴ハケ目後ナデ	
17	高杯（土師）	2住（覆土）	裾径8.0+ ② 6.4+	①砂粒なく赤褐色・粒若干含む②にぶ橙色③裾ヨコナデ、脚ヨコケズリ④裾ヨコナデ、タテケズリ	
18	蓋（須恵）	6住（床面）	①14.2 ② 4.6	①砂粒多く含む②緑味灰色③口縁内外ヨコナデ天井横方向ナデ④天井回転ヘラケズリ、摘ヨコナデ	
19	蓋杯(身)（須恵）	6住（床面）	①11.5 ② 3.4	①砂粒多く、黒色粒含む②茶灰色・明灰色③上半ヨコナデ、下半ナデ④上半ヨコナデ、底回転ヘラケズリ	
20	蓋杯(身)（須恵）	8住（上層）	①11.6 ② 4.0	①砂粒多く含む②明青灰・茶灰色③口縁ヨコナデ、下半雑なナデ④上半ヨコナデ、下半回転ヘラケズリ	
21	杯身（土師）	8住（床面）	①11.5 ② 4.3	①細砂・金雲母若干含む②にぶ橙③上半ヨコナデ、底ナデ④口縁ヨコナデ、胴・底ミガキ	全体黒塗
22	小甕（土師）	8住（床面）	①15.9 ② 6.8+	①細砂多く、角閃石若干含む②明茶色③口縁内外ヨコナデ、胴ケズリ④胴ハケ目	
23	甕（土師）	8住	①17.2 ②17.0+	①粗砂多く含む②明茶・灰茶色③口縁内外ヨコナデ、胴ケズリ④胴ハケ目	
24	甕（土師）	8住（カマド東床面）	①19.5 ②35.9	①細・粗砂多く含む②にぶ橙・明茶色③口縁内外ヨコナデ、胴ケズリ④ハケ目後下半ナデ	
25	蓋杯(蓋)（須恵）	9住（覆土）	①12.1 ② 4.5	①細砂・黒色粒若干含む②灰茶色③下半ヨコナデ天井ナデ④下半ヨコナデ、天井回転ヘラケズリ	やや軟質
26	甕（須恵）	9住（カマド東床面）	胴径32.8	①微砂若干含む②灰・灰黒色③細い同心円痕、半分ナデ消し④タテ平行タタキ後ヨコの部分ナデ消し	軟質
27	杯（土師）	9住（下層）	①13.0 ② 4.9	①細砂若干含む②明茶色③ヘラヨコミガキ④ヘラヨコミガキ	全体黒塗
28	杯（土師）	9住（下層）	①11.8 ② 5.7	①砂粒含まず精良②明茶・にぶ橙色③ヘラミガキ④口縁ミガキ、下半ケズリ後ヘラミガキ	全体黒塗

橋詰遺跡の住居跡出土の土器は，貯蔵穴に比較すると出土量も多く，現段階では水洗さえされていないものが多いため，とくに破片資料しかない住居跡は1点の図も掲載していない。貯蔵穴の中には，住居跡と対応する時期のものもかなりあるところから，弥生中期集落の中での



第37図　弥生時代住居跡出土土器実測図①（1/6）



第38図　弥生時代住居跡その他出土土器実測図②（1/6）

第14表　住居跡出土弥生式土器一覧表（第37・38図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	鉢	大形竪穴（上層）	①13.1 ② 9.7	①細砂多く、粗砂・金雲母若干含む②茶・灰味黄茶色③口縁内外ヨコナデ、胴板圧痕ナデ④胴粗ハケ目、底ヨコナデ	
2	小甕	大形竪穴（中層）	①12.2 ②11.2	①砂粒多く含む②にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ胴横方向ナデ④胴ハケ目後横方向ミガキ	
3	高杯	5住（覆土）	裾径11.6 ②10.4＋	①砂粒多く含む②明茶・黄味白色③脚端ヨコナデ、柱状部板ナデ④磨滅	
4	広口壺	7住（土壙内）	①35.4 ②36.5	①微・細砂多く、赤褐色粒も含む②にぶ橙・暗黄茶色③④全体に磨滅が著しく不明	
5	鉢	7住（土壙内）	①24.9 ②14.0	①微細砂多く、角閃石若干含む②黄味赤・黄茶色③磨滅④下半ハケ目	
6	甕	7住（土壙内）	①33.1 ②20.4＋	①微細砂多く角閃石・金雲母含む②灰味黄茶・にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ、胴ハケ目④胴ハケ目	
7	鉢	7住（床面）	①15.4 ② 7.2	①細砂多く角閃石も含む②にぶ橙色③④全体に磨滅が著しく不明	
8	鉢	7住（土壙内）	①11.9 ② 9.0	①微細多く金雲母も含む②にぶ橙・黄味白色③ナデか④下半ハケ目	
9	支脚	8住	裾径12.3 ② 7.5＋	①粗砂多く金雲母若干含む②にぶ橙色③ナデ④一部に粗いハケ目、他はナデ、全体に雑	混入品
10	小鉢	9住（下層）	① 8.0 ② 4.3	①細砂多く、、金雲母若干含む②にぶ橙色③ハケ目④磨滅	混入品

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
11	蓋	15住（床面）	①12.3 ② 3.4	①細砂多く金雲母若干含む②明茶・丹赤色③ナデ④口縁内外ヨコナデ、上部タテのヘラミガキ、丹塗	孔2個1対
12	無頸壺	15住（下層）	①10.7 ② 8.8	①細砂多く含む②黄味赤・丹赤色③ナデ④磨滅、ミガキか	孔は不明
13	蓋	15住（下層）	①11.6 ② 2.3	①細砂・金雲母・角閃石・赤褐色粒若干含む②黄味赤・にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ④タテ方向ミガキ、丹塗	孔2個1対
14	小甕	15住（下層）	①11.3 ② 9.3	①細砂・角閃石若干含む②黄味赤・にぶ橙色③上半ヨコミガキ、下半ナデ④胴丹塗ヨコミガキ、底ナデ	孔2個1対
15	無頸壺	15住（床面）	①14.3 ②13.1	①細砂多く金雲母・赤褐色粒若干含む②にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ④丹塗、磨滅	孔なし
16	広口壺（鋤先口縁）	15住（下層）	①30.2 ② 6.1＋	①赤褐色粒若干含む②にぶ橙・丹赤色③口縁内外ヨコナデ④磨滅	
17	甕	15住（張床）	①21.4 ② 9.8＋	①粗砂多く角閃石・金雲母も含む ②にぶ橙・茶色 ③口縁ヨコハケ、胴指圧痕ナデ ④口縁・凸帯ヨコナデ、胴ハケ目	混入品
18	壺	15住（床面）	底径10.0 ②10.5＋	①細砂多く含む②明茶・にぶ橙色③磨滅④磨滅	
19	甕	15住（下層）	①25.3 ②25.5	①細砂多く金雲母・赤褐色粒若干含む②黄味白・にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ、胴ナデ④胴ハケ目	
20	鉢	15住（床面）	①13.6 ② 7.2	①細砂若干含む②明黄橙色③口縁内外ヨコナデ胴ナデ④ナデ	
21	高杯	15住（床面）	①13.9 ②17.0	①細砂多く角閃石若干含む②明茶色③杯内外磨滅、脚シボリ④タテミガキ	丹塗の可能性あり
22	高杯	15住（床面）	①26.1 ② 6.5＋	①微細砂多く金雲母・角閃石若干含む②にぶ橙・明茶・丹赤色③口縁内外ヨコナデ④杯内外ナデ	
23	甕	15住（下層）	①28.0 ②7.2＋	①微・粗砂多く金雲母・角閃石若干含む②にぶ橙色③口縁内外ヨコナデ④胴内外ナデ	
24	甕	15住（床面）	①28.6 ②5.0＋	①微細砂多く金雲母若干含む②うす橙色③口縁内外ヨコナデ④胴内外ナデ	
25	甕	15住（床面）	①36.0 ②4.0＋	①微細砂多く金雲母若干含む②にぶ橙色③④口内外ヨコナデ	
26	蓋	16住（床面）	①36.4 ②14.1	①細砂多く角閃石・金雲母若干含む②うす橙・にぶ黄橙色③口縁内外ヨコナデ、胴ナデ④ハケ目、摘ナデ	
27	蓋	18住（床面）	①13.0 ② 2.3	①細砂多含む②うす橙・うす茶色③磨滅④丹塗磨研	孔2個1対 28とセット
28	無頸壺	18住（床面）	①12.2 ②11.7	①細砂多く角閃石若干含む②黄味灰・うす橙色③磨滅④丹塗磨研	孔2個1対 27とセット
29	鉢	18住（床面）	①28.9 ②14.4	①細砂多く赤褐色粒若干含む②うす橙・明茶色③口縁内外ヨコナデ、底指圧痕④磨滅	
30	甕	18住（床面）	①36.5 ②18.3＋	①微砂多くも精良②黄味白・丹赤色③口縁内外ヨコナデ、暗文、胴ナデ④胴丹塗ヨコミガキ	
31	小鉢	18住	① 7.9 ② 9.8	①細砂若干含む②明茶色③ヘラナデ、ヘラ痕④胴ヨコミガキ、底ナデ	
32	壺	1号土壙墓	胴径11.3 ②6.4＋	①細砂多く含む②にぶ橙色③粗いハケ後ナデ④粗いハケ後ナデ、底ナデ	副葬品

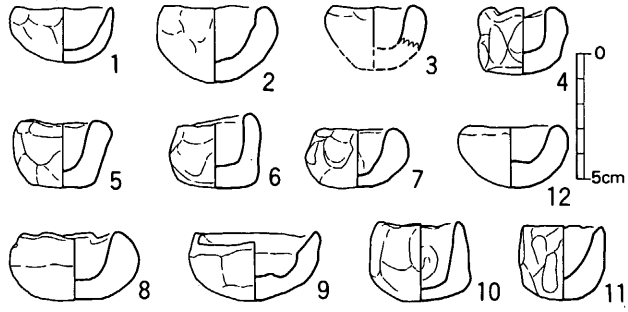
貯蔵穴の残存問題も含めて，出土品の整理が進めば好資料となる。したがって，今回は主要住居跡のうち整理の終った土器の図を掲載したが，中には古墳時代住居跡内の弥生土器も掲載したものがある。しかし，主要住居跡の時期決定に必要な資料は掲載したつもりである。

弥生式土器で特徴的なことは，，住居跡内に丹塗磨研土器の占める比率が多いことである。

また，丹塗磨研土器の多いことに比例するのであろうが，筒形土器片の多さも，１つの特徴である。この特徴は，天神遺跡大溝や池の上遺跡甕棺墓祭祀に筒形土器が多いことも関連してくるであろう。

手捏土器

第39図に図示した手捏土器は，橋詰遺跡住居跡出土品の全部ではないが，主に古墳時代住居跡から出土している。１～３は１号住居跡，４～11は９号住居跡，12は15号住居跡からの出土である。12のみ弥生中期中頃のもので，他は５世紀後半の住居跡から出土している。とくに１号住居跡では，４個の手捏土器がカマド周辺から出土しており，カマド特有の祭祀用土器である。

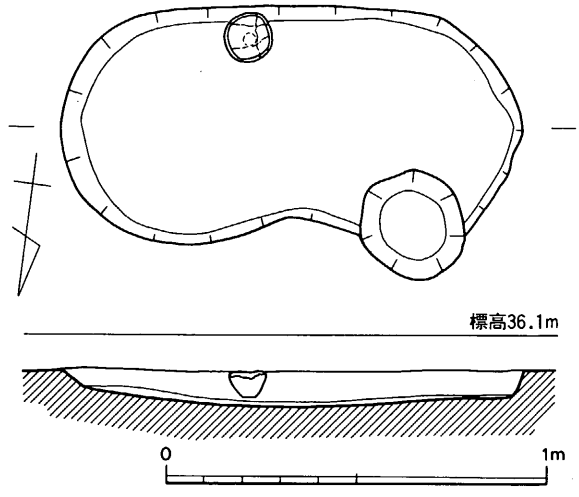


第39図　住居跡出土手捏土器実測図（1/3）

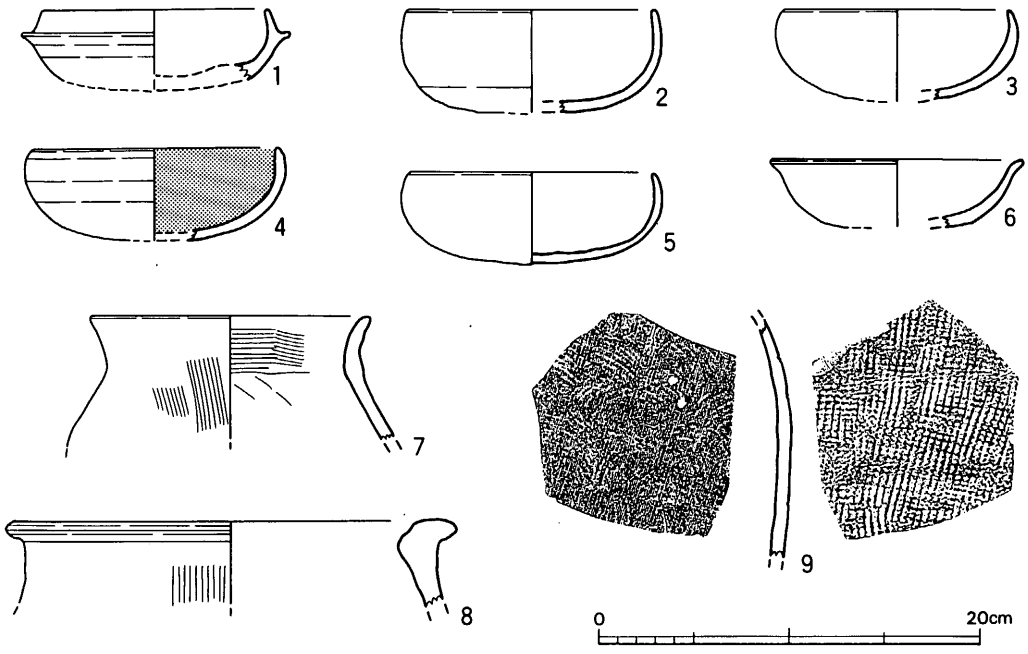
(4)　その他の遺構と遺物

１号土壙墓　橋詰遺跡調査区の南半で発見されたもので，平面形態から土壙とした３基の中では唯一土壙墓らしいのが，この１号土壙である。他の２基は，１号の割合近くに存在するところから，土壙の番号を付したが，貯蔵穴の小形のものであろう。

１号土壙墓は，ほぼ東西に主軸を向けた長楕円形をし，長軸120cm，幅62cmの小形のものである。土壙の深さは，上部を著しく削平されているために，最大10cmとなっている。土壙内の南側壁に密着して１個の小形壺が安置されているが，これも上半分を削られている。この壺は埋葬時に供献されたもので完形品であったろうが，壺周辺の埋土中にはガラス小玉590個以上が散乱していた。ガラス小玉は，壺内からは１個も出土しないし，床面にあるものも少なく，埋土中に大半が含まれていたことから，土壙中央付近の棺蓋上か死体上に副葬されていたことになる。　（柳田）



第40図　１号土壙墓実測図（1/20）

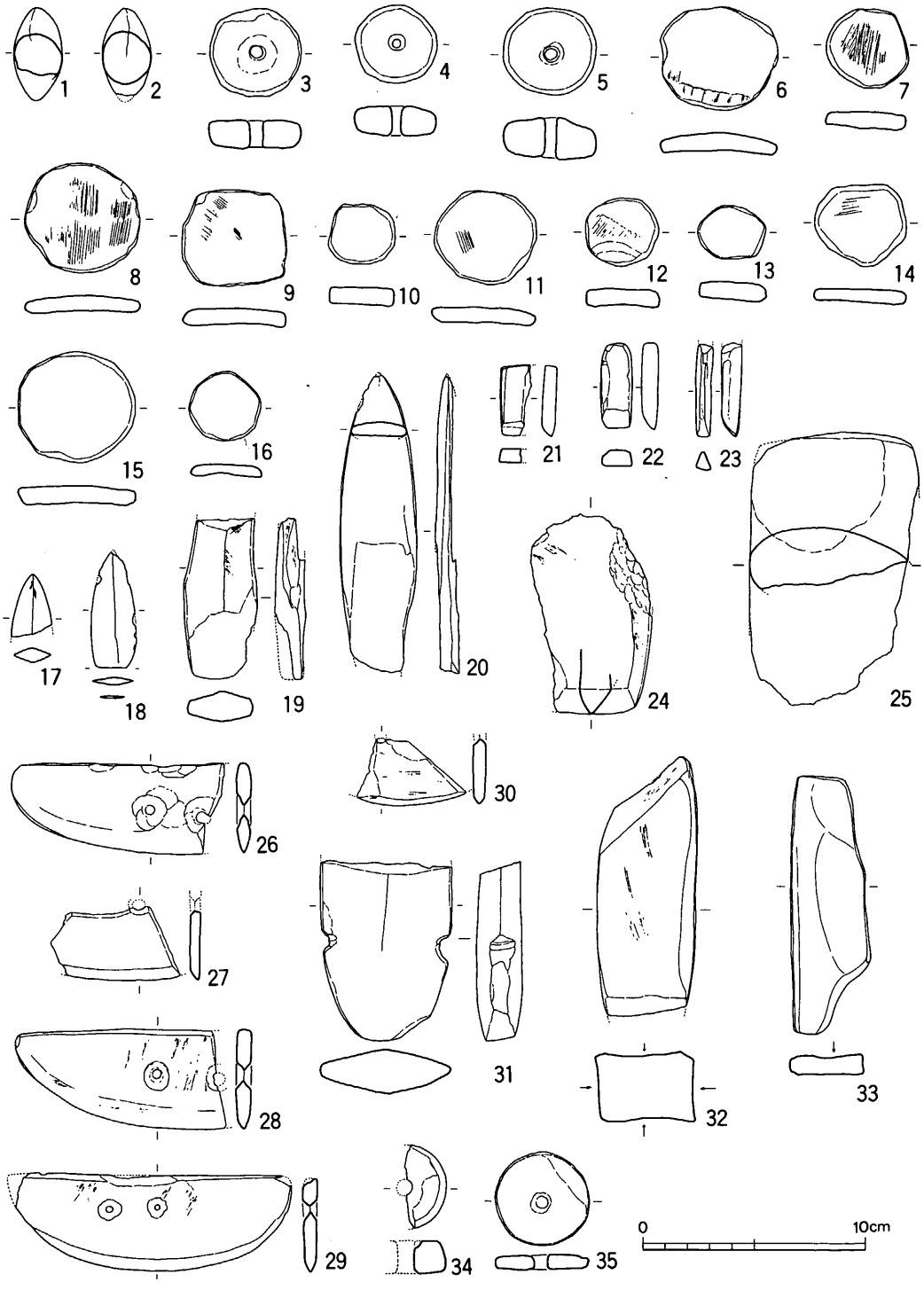


第41図　L字溝出土土器実測図（1/4）

第15表　L字溝出土土器一覧表（第41図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	杯身（須恵）	L溝	①11.8 ② 3.8+	①微砂若干含む②淡褐・灰青色③口縁内外ヨコナデ④下半回転ヘラケズリ	もろい
2	杯（土師）	L溝	①13.2 ② 5.5	①赤褐色粒・黒色粒若干含む②明茶色③ヨコミガキ④ヨコミガキ	
3	杯（土師）	L溝	①12.0 ② 4.9	①細砂若干赤褐色粒多く含む②にぶ橙色③磨滅④ヨコミガキか	
4	杯（土師）	L溝	①13.0 ② 4.9	①細砂多く金雲母若干含む②明茶色③口縁内外ヨコナデ、黒塗り④下半ケズリ後ミガキか	全面黒塗りか
5	杯（土師）	L溝	①13.2 ② 4.9	①黒色粒・赤褐色粒多く含む②明茶色③④磨滅	
6	高杯（土師）	L溝	①13.2 ② 3.6+	①細砂若干赤褐色粒・黒色粒多く含む②明茶色③口縁内外ヨコナデ、下半ミガキ④下半ミガキか	
7	甕（土師）	L溝	①14.6 ② 6.5+	①細砂多く含む②にぶ橙・にぶ赤味橙色③口縁ヨコハケ、胴ケズリ④口縁ヨコナデ、胴ハケ目	
8	甑（土師）	L溝	①23.0 ② 4.6+	①細砂多く角閃石・金雲母若干含む②にぶ黄橙色③口縁内外ヨコナデ、胴ナデ④胴ハケ目	
9	甕（須恵）	L溝		①微砂若干含む②灰茶色③同心円文を半分ナデ消す④格子タタキに2条単位の沈線	もろい

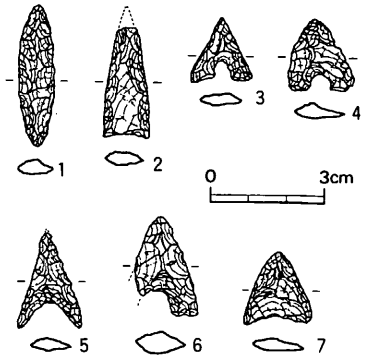


第42図　橋詰遺跡出土土製品・石器実測図（1/3）

④土製品（第42図１～16）

投　弾（１・２）　１は３号貯蔵穴出土で長4.1cm，幅2.1cm，灰褐色を呈す。２は22号貯蔵穴出土で一端を損する。幅2.1cm，厚2.3cmで淡黄褐色を呈す。両者とも砂粒を多く含む。

紡錘車（３～５）　３は１号住居跡出土。径４cm，厚1.3cm，重23.5ｇを測る。黒灰色を呈す。４は３号住居跡出土で，他に比べてやや小型。径3.6cm，厚1.35cm，重18.5ｇ。黄褐色を呈す。５は18号住居跡出土。径4.2cm，厚1.8cmと孔付近で盛りあがる。重34ｇで，黄白色を呈す。



第43図　橋詰遺跡出土石器実測図（1/2）

円　盤（６～16）　破損した土器片の端部を磨り，円形ないし，不整円形，方形に近く整えたもので，一辺が３～５cmと様々である。７・８・12のように器表に刷毛目を残すものもある。

⑤石　器（第42図17～35，第43図１～７）

打製石鏃（１～７）　１は凸基式で柳葉形を呈す完形品。県内では少数しか出土しない。横長剝片を素材とし，裏面には主要剝離面が大きく残る。長3.75cm，幅0.95cm，厚0.45cm，重1.5ｇ。３号貯蔵穴出土で安山岩製。なお，第１地点出土の尖頭器（第14図２）と類似するが，他方は厚み大きさとも当石鏃を圧倒しているので小型の尖頭器と判断した。２～７は凹基無茎式である。２は平基に近い二等辺三角形鏃で，中央部に大きく剝離面を残す。11号住居跡出土。３は３号住居跡出土で，長1.7cm，重0.5ｇ。４は寸づまりの横長剝片を用い，打瘤は裏面基部側にある。長1.9cm，重0.9ｇ。５は14号住居跡出土で先端を欠く。重0.6ｇ。６は15号住居跡下層出土で６mmと部厚い。７は浅い抉りを有し正三角形に近いもので，28号貯蔵穴の下層出土。長1.9cm，重0.7ｇ。石材は２・３・５・７が安山岩，４が黒曜石，６がチャート製。

磨製石鏃（17・18）　17は先端部の破片で，厚さ７mmに近い。18号住居跡出土。18は26号貯蔵穴出土のほぼ完形品。平基で，最大幅を基部から1.5cmほど上部に有し，２cmを測る。全長5.2cm強で，厚0.4cm。中央部の鏑は基部まで達していない。軟質の砂岩製。

石　剣（19・20）　19は８号貯蔵穴上層出土の基部破片。厚1.4cmで硬砂岩製。20は切先部の表皮片。鏑はほとんど見られない。22号貯蔵穴出土で砂岩製。

石　斧（21～25）　21は15号住居跡床面出土の扁平片刃石斧片。長3.2cm。22は幅が狭いが弥生中期前半以降に多い扁平片刃石斧の完形品。長3.85cm，幅1.4cm，厚0.5cm，重７ｇ。23は小型の柱状片刃石斧で，かなり使用減りしている。背に２本の稜が走る。刃部は鋭い。22・23は泥岩質頁岩製。24は蛤刃石斧で，９号住居跡床面出土。片刃に近い鋭い刃部を有す。体部に

は整形時の敲打痕を残す。頁岩製。25は太形蛤刃石斧の頭部片で玄武岩製。22号貯蔵穴出土。

石庖丁（26～30）　いずれも半月形外弯刃形だが，27のみは片刃である。26は1号住，27は14号住下層，28は19号住下層，29は29号貯蔵穴，30は31号貯蔵穴出土。石材は26・27が砂岩，他はあずき色の輝緑凝灰岩製。

石　戈（31）　幅広な基部破片で，端部より4㎝ほど上部に両側より抉りを入れる。鎬は身中央を抉部まで走る。刃部は，この部分ではまだ鈍い。身幅5.9㎝，厚2㎝。近年，この種の石器で，抉りを1ヶ所入れるものが10例ほど知られ，下條信行氏は石矛説をとっている。

砥　石（32・33）　32は18号住居跡床面出土で，5つの研砥面を有す。泥岩質頁岩製。33は板状の砥石で1面のみ使用。13号貯蔵穴出土。

紡錘車（34・35）　34は8号住居跡出土で滑石製。35は27号貯蔵穴出土の完形品。径4.2㎝，厚0.7㎝，孔径5.5㎜，重16.5ｇを測る。絹雲母片岩製。　（木下）

(4) 小　結

橋詰遺跡は，調査地区に数倍する同一平坦面を南東側に有するところから，調査地区のみで集落に関する評価はできないが，丘陵頂部から西側斜面に展開する集落は，大きな平野に面するものではなく，小谷間を水田等に利用した小集落の例としては好資料となる。集落と墓地の関連においても，天神遺跡の墓地群が南側では同一平坦面で重なることから，今後の調査と整理の重要な課題となる。

調査区内の遺構を全体的に見ると，この丘陵を弥生人が利用し始めたのは，天神地区と同じ前期末からで，袋状貯蔵穴を丘陵頂部に設けることであった。この時期の住居跡は，いまのところは検出されていないが，丘陵頂部に多く存在した可能性が残っているのは，天神地区と同様に中期後半からで，これも状況からすると丘陵頂部に多く存在した可能性が強い。これ以後弥生時代では，後期初頭の住居跡まで継続して営まれるが，それ以後弥生後期の遺物もまったく見られなくなる。ただ，1号土壙墓と9号住居跡南側の性格不明の大形竪穴の上層から中層に弥生後期中頃から後半の土器が若干含まれている。

調査された遺構の中では，貯蔵穴と住居跡が共存するのは中期末から後期初頭の時期のみで，この時期の貯蔵穴は長方形である。貯蔵穴は，前期末～中期初頭が円形，中期末～後期初頭が長方形と容易に識別できるが，中期以後の袋状貯蔵穴は異例といえる。

古墳時代の住居跡は，西斜面に規則的に配置されているが，平面形が正方形に近く，カマドの方向性もあって，こうなるのが当然であるかもしれない。住居跡では，カマド祭祀に加え，住居の放棄に対する祭祀もあり，埋土中から子持勾玉・臼玉・土製勾玉が出土した2号住居跡もある。9号住居跡では住居全体に手捏土器と臼玉が散乱していた。6世紀後半のL字形溝では，有孔円盤・臼玉も出土している。　（柳田）

3．平原遺跡
(第３地点)

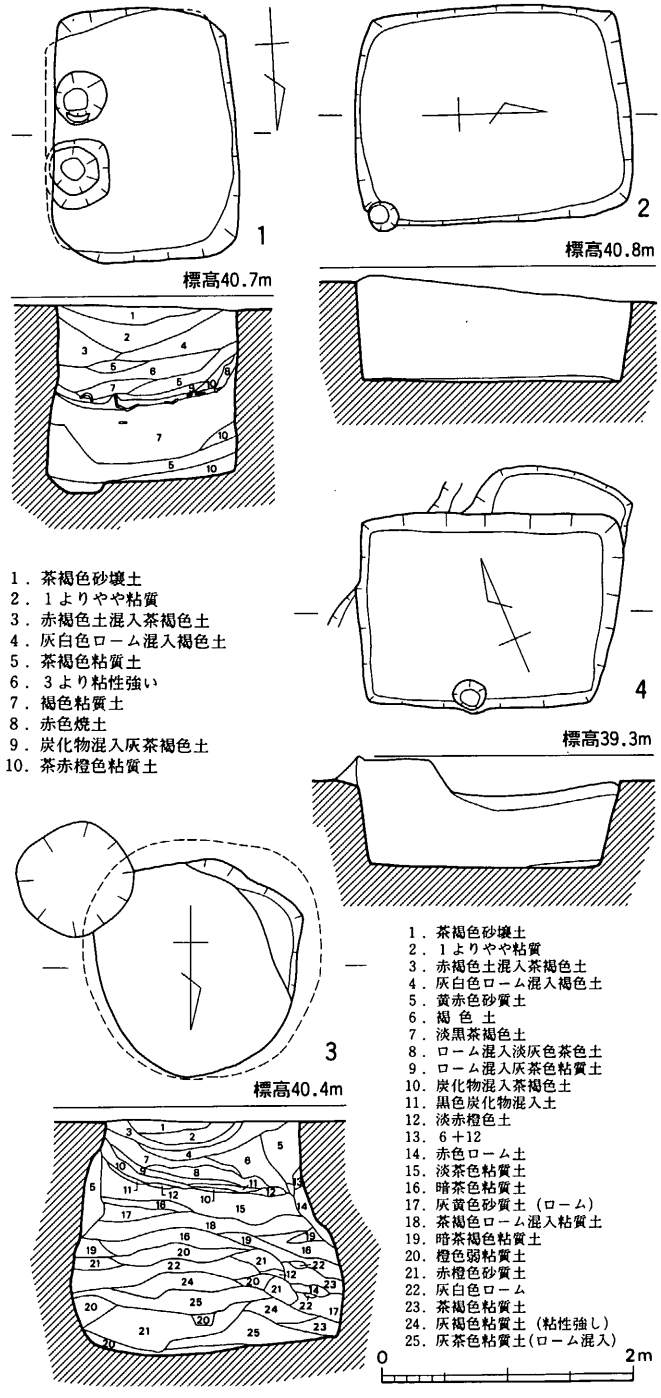
(1) はじめに

平原遺跡は，天神・橋詰遺跡より高い丘陵上にあり，同じ位いの平面で関連する遺跡とは違っている。ところが橋詰遺跡とは，狭い谷を隔てるだけであるから，無関係とはいえない。平原遺跡の調査区は狭いながら，橋詰遺跡と同時期の貯蔵穴と住居跡が存在する。すなわち，この台地が最初に利用されるのが，弥生前期末の円形貯蔵穴である。この調査区は，路線が台地端をかすめるために，遺構の保存の悪さが心配であったが，予想に反して貯蔵穴など深く残り，袋状貯蔵穴の調査は危険なほどであった。貯蔵穴は，中期末～後期初頭の長方形のものもあり，炭化米も多量に出土した。

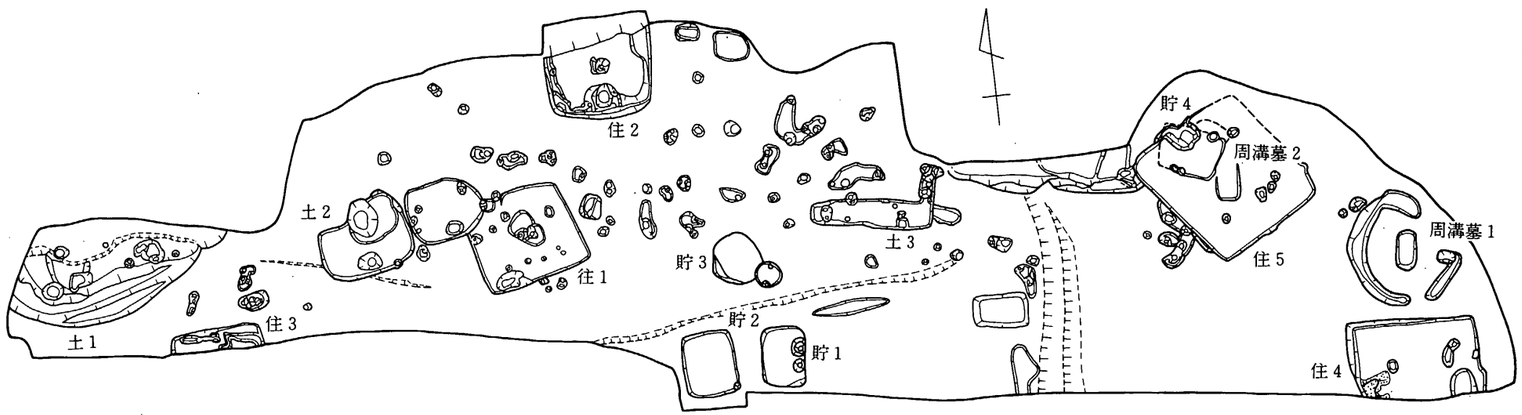
住居跡は，弥生中期と古墳時代のものがあるが，６世紀後半のものがない。

弥生の遺構で性格不明なものが多く，土壙としたものには中にピットを多く持つものなどがある。とくに調査区西端の半円形（土壙１）など不明である。

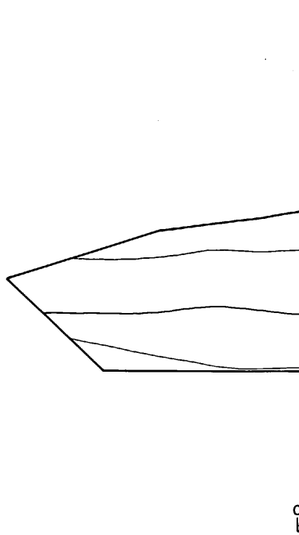
（柳田）

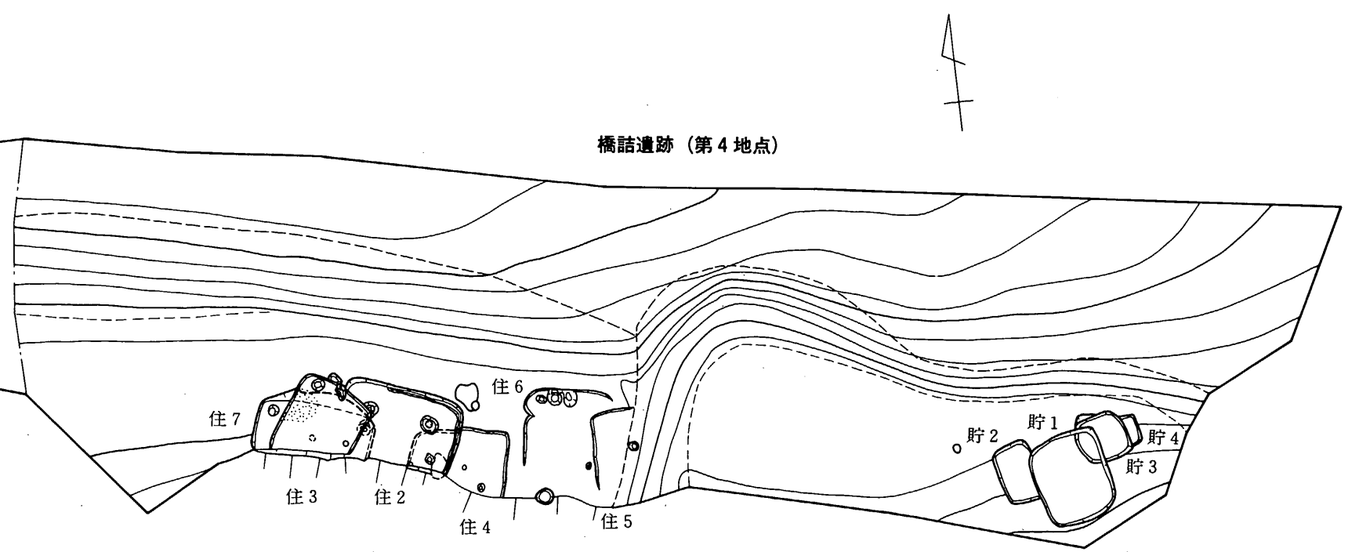


第44図　１～４号貯蔵穴実測図（1/60）



平原遺跡（第3地点）





橋詰遺跡（第4地点）

第45図　平原・橋詰遺跡（第3・4地点）遺構配置図（1/200）

(2) 貯蔵穴

調査区内に4基を検出した。計測値は第16表を参照のこと。土器は，1・4号のもののみ図示する。その説明は第17表を参照されたい。

1号貯蔵穴　断面は僅かに袋状を呈する。床面東側にピットが2個あり，北側のものからは土器が出土している(第46図30～34)。床面から60cmほどの所に炭化米を含む層がレンズ状に堆積している。土器は完形品はないが割に多く出土した。

2号貯蔵穴　1号の西隣りに存した。土器が若干出土したのみである。

3号貯蔵穴　これのみ円形プランであり，土器若干を出土している。

4号貯蔵穴　5号住居跡の床面下部に存した。床面より20cmほどの厚さに炭化した稲穂・米が検出された。土器はこの炭化米層より上位で出土している。　(伊崎)

第16表　平原遺跡貯蔵穴一覧表(第44図)

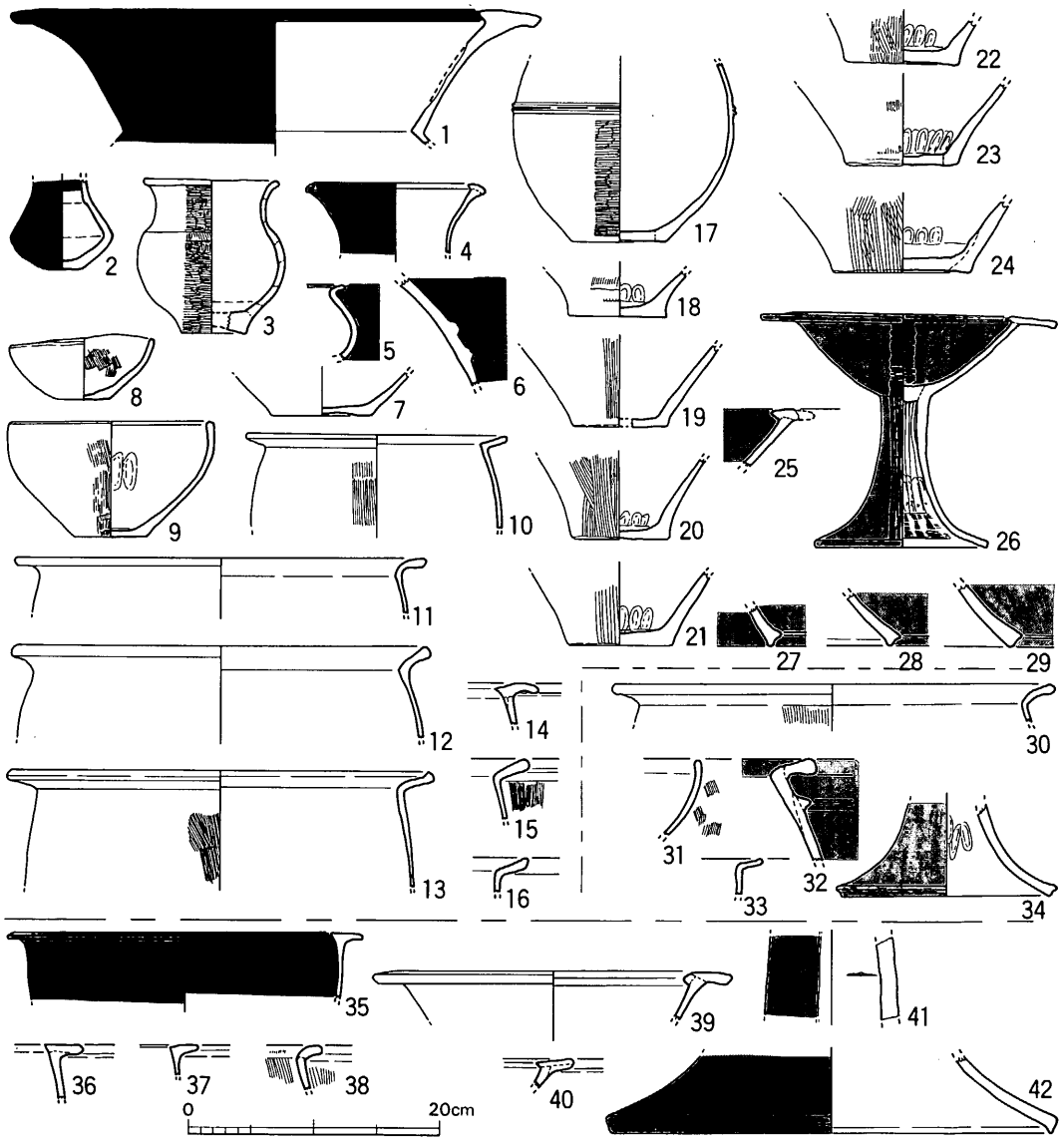
No.	平面プラン	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物				備考
				土器	土製品	石器	その他	
1	長方形	203×150	140	壺・鉢・甕・高杯 筒形器台・ミニチュア	土盤2	フレイク4	炭化米	床面にピット2個 炭化物層あり
2	長方形	220×172	83	壺・甕				
3	円形	162×170	185	壺・甕	紡錘車	打製石鏃 錐・フレイク		断面袋状をなす
4	長方形	210×140	86	壺・甕・高杯 筒形器台	土弾	石庖丁	炭化米	5号住居跡より古い、炭化米多量

第17表　貯蔵穴出土土器一覧表(第46図)

(単位cm)

遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	壺	1号	①42.0	①砂粒きわめて多し②赤褐色③④ヘラミガキ	丹塗磨研 中層一括
2	壺	1号	底径3.0	①砂粒多いがわりと良好、金雲母片・黒色粒子含む②赤褐色③なで④ミガキ	丹塗磨研、下層
3	壺	1号	①10.8 ②12.4	①砂粒多し②茶褐色③なで④刷毛目の上をミガキ	
4	壺	1号	①14.5	①砂粒多し②外面赤色、内面黄褐色③なで④ミガキ	丹塗磨研、下層
5	無頸壺	1号		①精良②外面赤褐色・内面黄褐色③なで④ミガキ	丹塗磨研、下層
6	壺	1号		①砂粒多し、金雲母片含む②外面赤褐色、内面淡褐色③なで④なでとミガキ	丹塗磨研 中層一括
7	壺	1号	底径8.0	①砂粒多し、金雲母片含む②黒茶褐色③④不明	中層一括

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径 ②器高	特 徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
8	鉢	1号	①11.7 ② 5.2	①粗い②黄褐色③刷毛目となで④ミガキらしい	丹塗磨研らしい、中層
9	鉢	1号	①16.2 ② 9.3	①砂粒多し、金雲母片・黒色粒子を含む②茶褐色③なで④刷毛目の上をミガキ	中層一括
10	甕	1号	①21.0	①砂粒多し、金雲母片含む②淡褐色③なで④刷毛目の上をなで	下層



第46図　貯蔵穴出土土器実測図（1/6）

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特 徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　　考
11	甕	1号	①32.8	①わりと良②黄白色③④不明	下層
12	甕	1号	①33.3	①砂粒多し②黄白色③なで④不明	下層
13	甕	1号	①34.0	①砂粒多し②黄褐色③なで④刷毛目	跳上げ口線 下層
14	甕	1号		①砂粒多し、金雲母片含む②黄灰色③④なで	下層
15	甕	1号		①砂粒多し、金雲母片含む②外面黒褐色、内面黄白色③なで④刷毛目	下層
16	甕	1号		①砂粒多し、金雲母片・角閃石含む②黄～黒褐色③④なで	下層
17	甕	1号	底径7.3	①微砂粒多し、金雲母片含む②外面茶～黄褐色、内面黒～黄褐色③なで④ヘラミガキ	
18	甕	1号	底径7.9	①砂粒多し②淡褐色③なで④刷毛目の上をなで	下層
19	甕	1号	底径7.6	①砂粒多し、金雲母片含む②黒茶褐色③なで④刷毛目	中層一括
20	甕	1号	底径8.0	①砂粒多し、金雲母片含む②淡褐色③なで④刷毛目	下層
21	甕	1号	底径8.5	①砂粒多し、金雲母片含む②淡茶褐色③なで④刷毛目の上をなで	下層
22	甕	1号	底径8.2	①砂粒多し、金雲母片・黒色粒子含む②黄褐色③なで④刷毛目の上を若干のなで	底部に籾痕らしきものあり、下層
23	甕	1号	底径9.0	①砂粒多し②黄褐色③なで④刷毛目の上をなで	下層
24	甕	1号	底径10.8	①砂粒多し②黄褐色③なで④刷毛目	下層
25	高　　杯	1号		①砂粒多し、金雲母片含む②赤褐色③ミガキ④不明	丹塗磨研 下層
26	高　　杯	1号	①23.4 ②18.9	①精良、金雲母片含む②赤褐色③坏部ミガキ、脚部なでと刷毛目としぼり④ミガキ	丹塗磨研 中層一括
27	筒形器台	1号		①ふつう②赤色③④ミガキ	丹塗磨研 下層
28	筒形器台	1号		①微砂粒多し、金雲母片含む②赤橙色③なで④ミガキ	丹塗磨研 下層
29	筒形器台	1号		①精良②外面赤色、内面黄褐色③不明④ミガキ	丹塗磨研 下層
30	甕	1号	①35.2	①砂粒多し、金雲母片含む②黄褐色③なで④刷毛目の上をなで	北ピット内
31	鉢	1号		①砂粒多し、金雲母片・角閃石含む②黄白色③なで④刷毛目の上をなで	北ピット内
32	甕	1号		①精良②赤褐色③なで④ミガキ	丹塗磨研 北ピット内
33	甕	1号		①砂粒多し、金雲母片含む②黄褐色③なで④不明	北ピット内
34	高　　杯	1号	脚裾径17.5	①砂粒多し、金雲母片含む②黄褐色③なで④ミガキ	丹塗磨研 北ピット内
35	甕	4号	①28.6	①良質、金雲母片を含む②赤褐色③④ミガキか	丹塗磨研らしい
36	甕	4号		①砂粒多し②黄褐色③④なで	黒塗りの痕跡

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
37	甕	4号		①砂粒多し②黄白色③④なで	
38	甕	4号		①砂粒多し、金雲母片含む②黒灰色③④刷毛目のあとなで	
39	高杯	4号	①28.9	①砂粒多量、金雲母片含む②橙褐色③④不明	
40	高杯	4号		①砂粒多し②黄白色③④なで	
41	筒形器台	4号	最大径10.7	①精良②赤～橙褐色	外面丹塗り透しが4方に入る
42	筒形器台	4号	裾径34.8	①きわめて精良②外面赤～黄褐色、内面黄褐色③不明④ミガキ	外面丹塗り

(3) 住居跡

平原遺跡の住居跡では，確実なものは5軒であるが，土壙としたものの中にも住居跡の可能性があるものが含まれている。

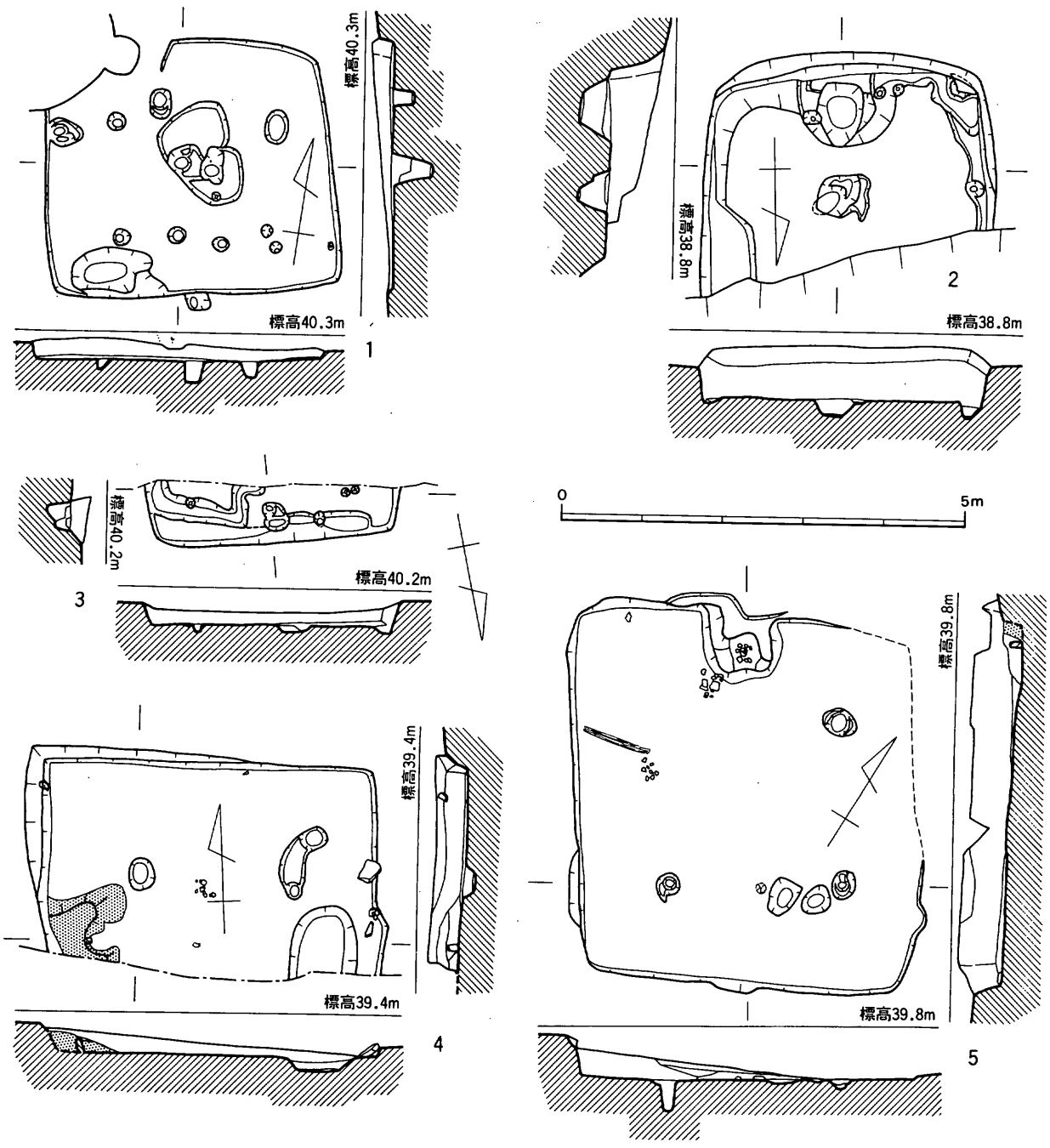
住居跡は，弥生中期後半の1号，中期末～後期初頭の2・3号，5世紀後半の4・5号の時期のものがある。この調査区の住居跡は，完掘できたものが少なく，住居跡の形態の不明なものが多いが，弥生中期末～後期初頭のものは2号から推側すると，隅丸方形の2本柱で，南側端に土壙を持ち，5世紀後半の5号は方形の4本柱で，北側にカマドを持つ。

弥生の住居跡では，2・3号が長方形貯蔵穴の1・2・4号と同時期で，共存していたと思われる。しかし，これらの住居跡は，橋詰遺跡と同様に小型である点が，貯蔵穴がこの時期に共存する事実も含めて特異である。

古墳期の住居跡は，須恵器片が少ない点，時期の確定に不安もあるが，同時期にカマド方向が違うのも事実である。5号住居跡では，やはりカマド付近で手捏土器が3個出土し，土師器杯も床面に伏せてあった。この住居跡は，床面に炭化材もあり，焼失したらしい。　（柳田）

第18表　住　居　跡　一　覧　表

No.	平面形	規模(直径×短径m)	炉・カマド	主柱穴数	土壙位置	時期	出土品
1	方形	3.55×3.15	炉中央	4	南西壁	弥生中期後	土器片
2	隅丸長方形	(3.1+)×3.5	—	(2)	南壁	弥生後期初	土器片
3	隅丸長方形	(0.8+)×3.15	—	—	—	中期末～後初	土器片
4	方形	4.2×(2.6+)	カマド西壁	(4)	東壁	5世紀後半	須恵器・土師器片
5	方形	4.65×4.25	カマド北壁	4	—	5世紀後半	須恵器片・土師杯・手捏



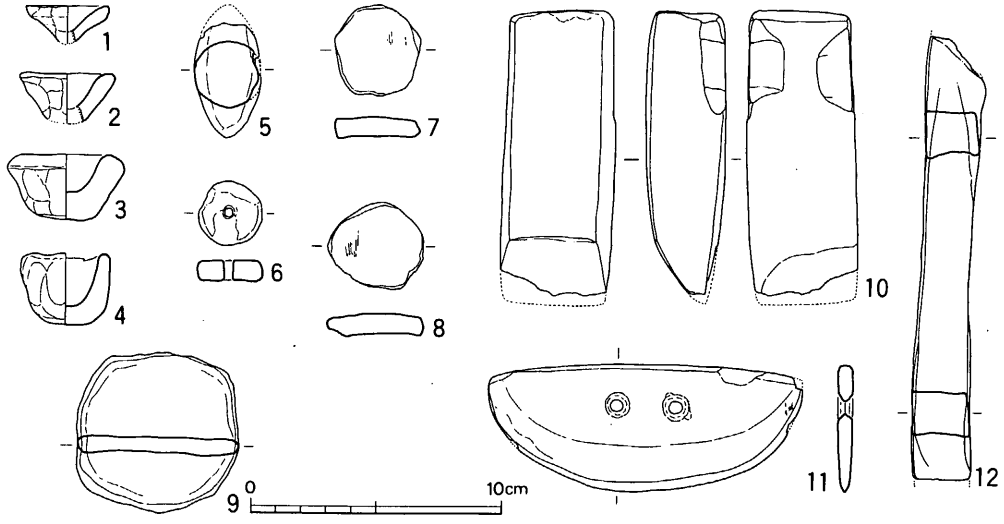
第47図　1～5号住居跡実測図（1/80）

手捏土器（第48図１～４）

１号貯蔵穴より一括して出土した。いずれも手づくねのミニチュア土器で，１は口径3.3cm，器高1.5cm。３は口径4.6cm，器高2.6cm。１～３の色調は黒灰色，４は明るい茶褐色を呈す。胎土には細砂を多く含む。

土製品（第48図５～８）

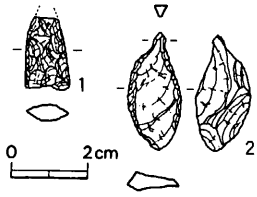
５は投弾で４号貯蔵穴出土。厚2.6cm。６は径2.6cm，厚0.8cm，重5.5ｇと小振の紡錘車。黄褐色を呈す。３号貯蔵穴出土。７・８は円盤で甕形土器の胴部破片を再利用している。７は茶褐色を呈し，11.5ｇ。８は橙褐色を呈し，12ｇ。両者とも１号貯蔵穴出土。



第48図　平原遺跡出土土器・土製品・石器実測図（1/3）

石　器（第48図９～11，第49図１・２）

１は抉りのほとんど無い石鏃で，先端部を欠く。最大幅1.1cm，厚0.4cm。１号住居跡出土で黒曜石製。２はドリルで横長剝片を素材とする。剝片の周縁部のみに調整を加える。長2.65cm，最大幅1.4cm，重1.8ｇ。３号貯蔵穴出土で安山岩製。10は抉入石斧で，刃部を欠損する。ほぼ均一な幅を有す。頭部にほど近い抉部は浅く施されている。頭部幅4.1cm，厚3.2cm。２号住居跡出土。11は半月形外弯刃の石庖丁で４号貯蔵穴出土。長さ12.55cm，幅2.05cm，厚み0.6cmを測る。輝緑凝灰岩製。12は角棒状の砥石で，４研砥面を有す。２号住居跡出土で，泥岩製。



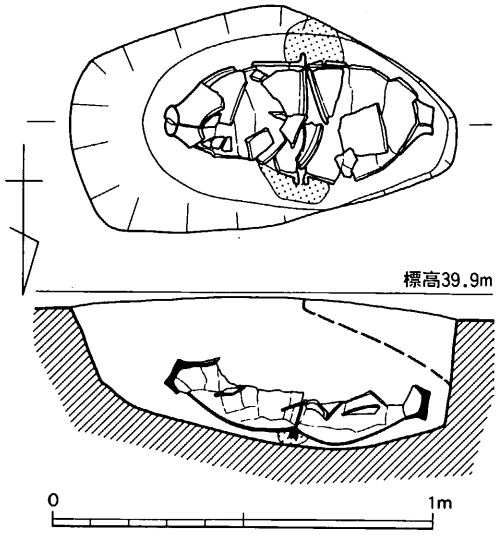
（木下）

第49図　平原遺跡出土石器実測図（1/2）

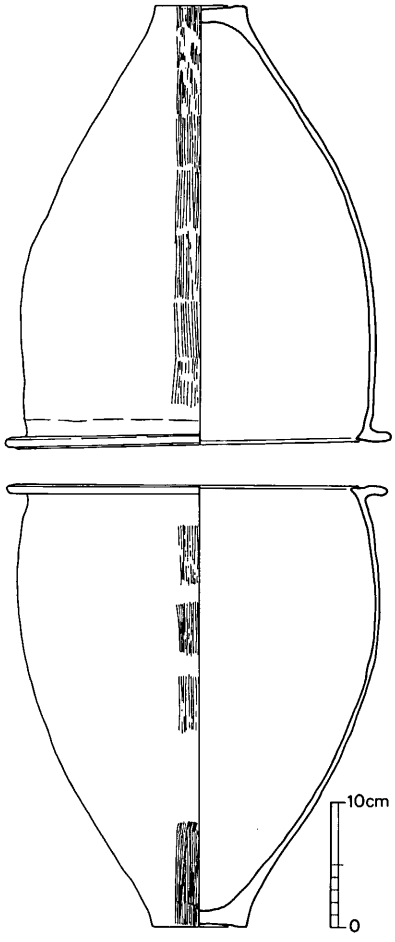
(4) 甕棺墓

1基のみの検出である。墓壙は本来は隅円の方形に近いものであったろう。合口形式で総長68cmを測る小人用のものである。合せ目は黄灰色粘土で目張りする。7°の傾斜で下甕が低く，主軸方位S—89.5°—Wo

甕棺は上下ともに成形・調整・法量がほとんど同じであり，同一人による製作として誤りないものと考える。黒塗りの痕跡がみられる。



第50図 甕棺墓実測図 (1/20)



	口径	底径	器高
上	30.6	7.4	35.5
下	30.3	7.7	35.4

第51図 甕棺実測図 (1/6)

(5) 円形周溝墓

調査区の東端に近い所で2基を検出した。2号については削平が著しく周溝は確認できなかったが，本来は有していたものとしてよい。標高39mの前後の所に存する。

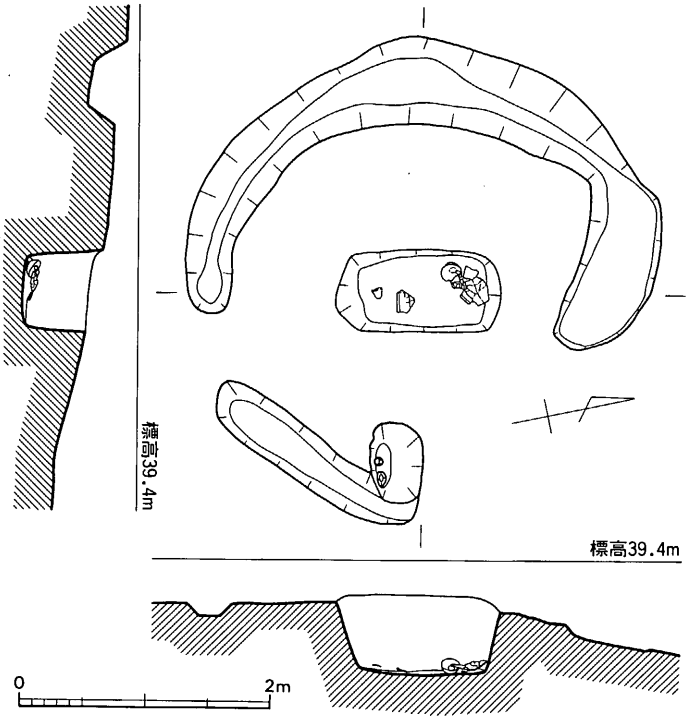
① 1号周溝墓 (図版48，第52・54図)

円形というより隅角の円くなった方形の周溝と称した方が妥当かもしれない。南側と北東側は溝が途切れるが，北東部分については削平によるものとされるものの，南側は陸橋部として元来掘られていないものである。南北3.28m，東西3.9mを測る。溝

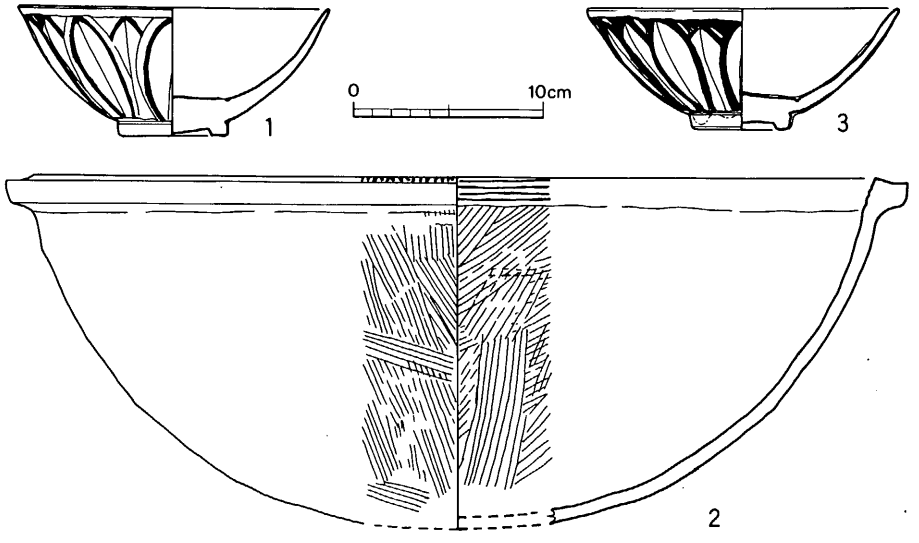
の深さは最も残りのよい部分で30cm弱しかない。同溝からの出土遺物はない。

主体部は主軸をN—11.5°—Eにとる土壙墓である。長軸130cm，短軸66cm，深さ64cmを測る。木棺を埋置した痕跡は認められなかった。

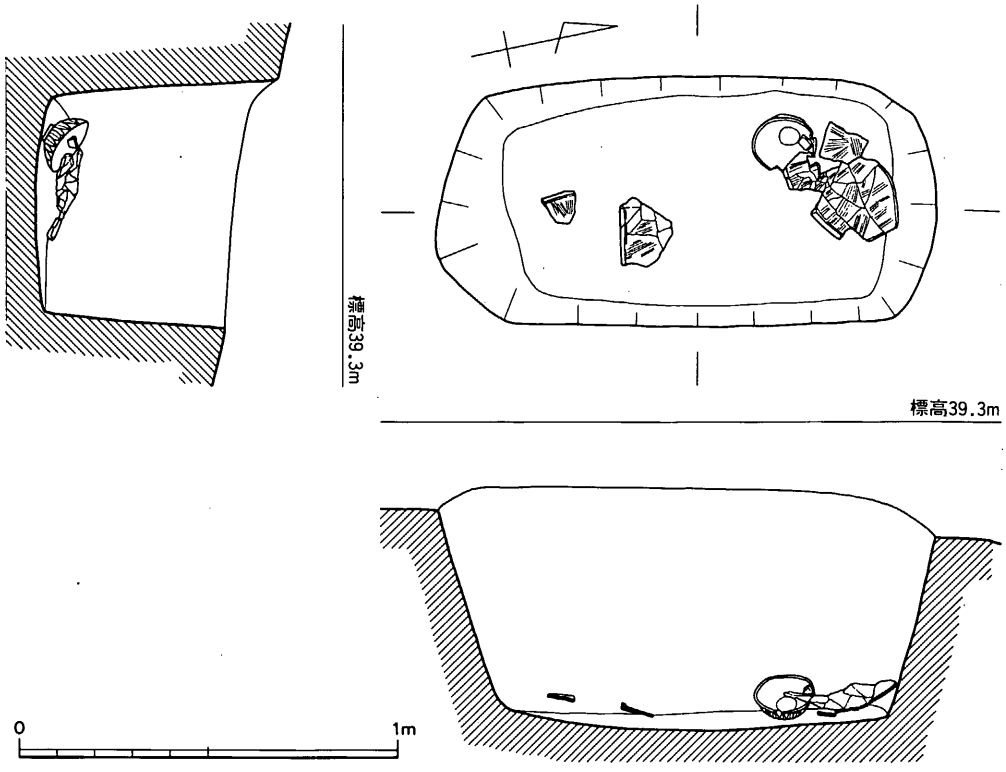
主体部分内からほぼ完形の青磁1個と破砕された土鍋1個体分が出土した。青磁は東に傾きながらも正立の状態を留めるが，土鍋は青磁の近辺とそれから離れて出土している。青磁は本来副葬されていたものと考えられ



第52図　1号円形周溝墓実測図（1/60）



第53図　1・2号円形周溝墓出土土器実測図（1/4）

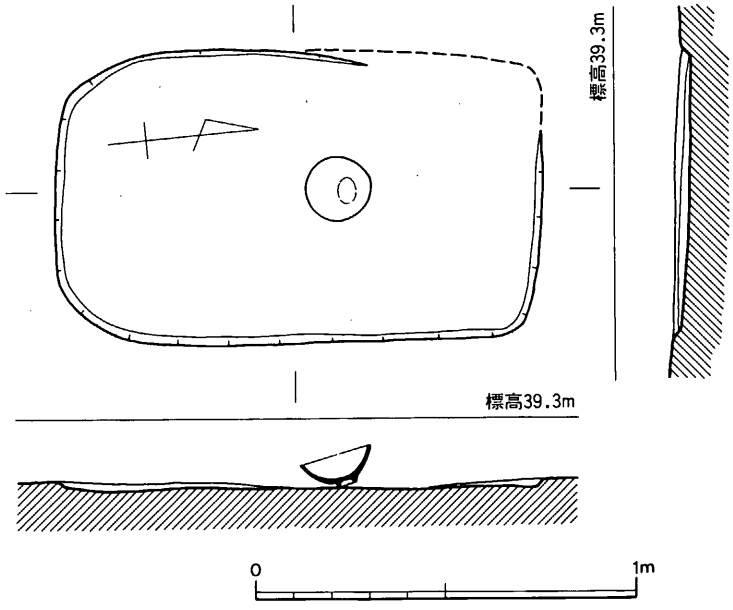


第54図　1号円形周溝墓主体部実測図（1/20）

るが，土鍋は青磁の上に乗っている磁片もあるので，あるいは土壙の蓋の上に置かれていたものが落ち込んだとも考えられる。出土した青磁からみてほぼ13世紀後半の年代を付与できる。

出土遺物（第53図）

青　磁（1）　鎬蓮弁のある龍泉窯系のものでほぼ完形に近い。焼成が不十分で釉調がよくなく黄緑色～緑白色を呈し，



第55図　2号円形周溝墓主体部実測図（1/20）

細かい貫入を見る。口径16.4cm，高台径5.7cm，器高6.9cm。

土　鍋（２）　約半分が残存する。瓦質に近いが焼成はあまりよくない。茶褐色を呈し，外面には煤が付着している。内外とも粗い刷毛目調整を見る。口縁上面にはワラ様の圧痕がある。復原で口径47.5cm，器高18.6cm。

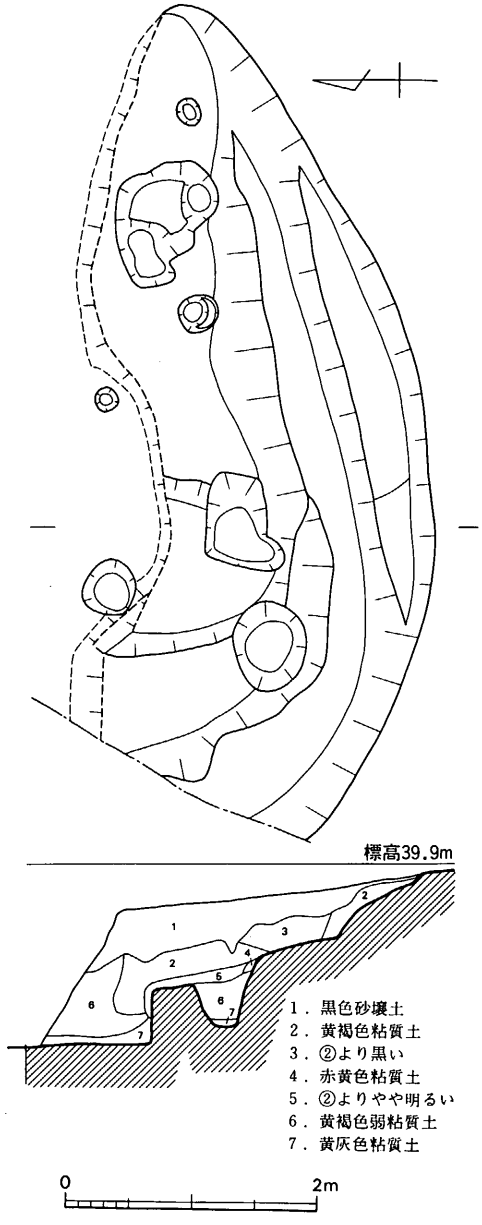
② ２号周溝墓（第55図）

周溝はいま見られないが，１号との位置関係からしても本来存したものと考えられる。４号貯蔵穴･５号住居跡の上に営まれている。周溝規模は１号と同様の４ｍの前後を想定できよう。

主体部は長軸125cm，短軸78cmで，Ｎ―５°―Ｅに主軸をとる。中央より若干北寄りの床面から完形の青磁が出土している。出土遺物からみて１号と同じ13世紀後半の所産。

出土遺物（第53図）

青　磁（３）　鎬蓮弁の龍泉窯系の製品である。釉は灰色がかった緑色を呈する。高台部分は釉を見ず，内面に円形の焼台痕を認める。口径16.4cm，高台径5.2cm，器高6.4cm。　（伊崎）



第56図　円形竪穴実測図（1/60）

(6)　その他の遺構

平原遺跡では，土壙・ピット・小溝状のものなど性格不明なものが多いが，中でも西端で検出された半円形竪穴は興味ある。台地端であったところから北側が崩壊したもので復原すると円形になると思われるが，階段状の壁面と床面の大きなピットが特徴となっている。出土する遺物は，破片ではあるが土器片が多く，丹塗土器も含まれる中期後半のものである。

そのほかに，１号住居跡西側に住居跡状の浅い土壙が２基存在するが，これらも弥生中期に属するが性格不明であり，遺物も少ない。１号住居跡の東側の小さな土壙からは，丹塗筒形土器の大きな破片が出土している。　（柳田）

4．橋詰遺跡（第4地点）

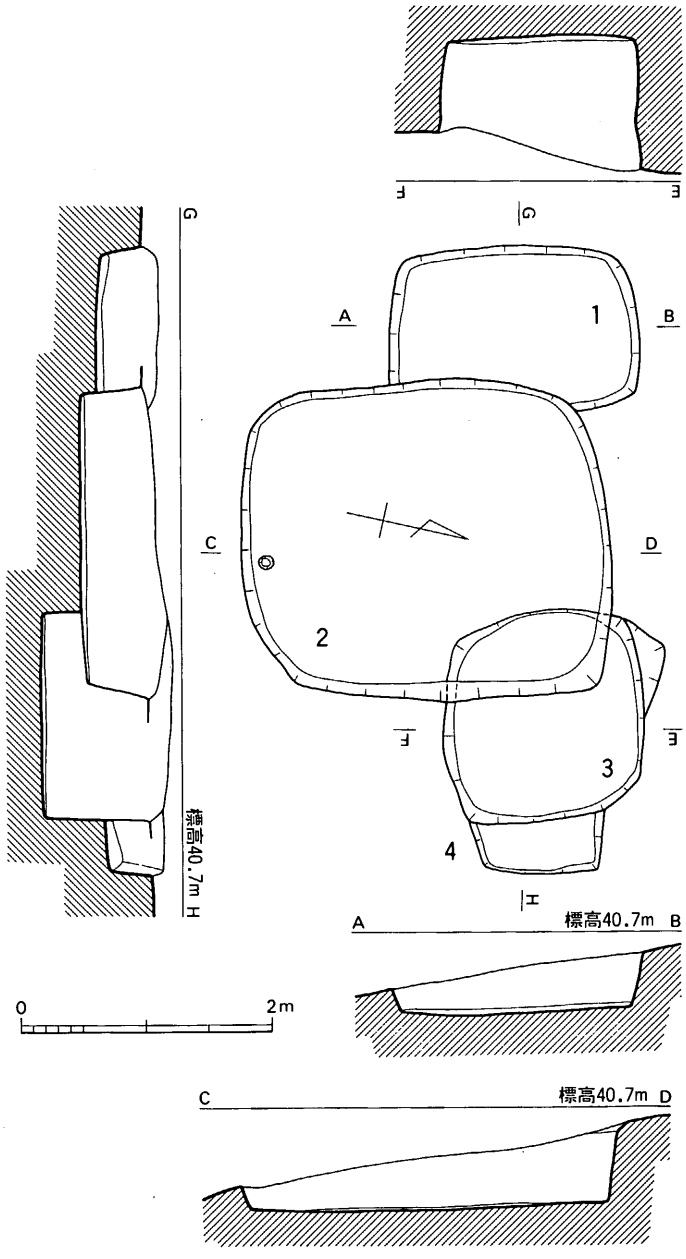
(1) はじめに

この橋詰遺跡とは，第2地点の橋詰遺跡と同一小字名であり，同一丘陵に属するところから同一遺跡名としたが，第2地点が標高約36mであるのに対し，第4地点は丘陵斜面の標高約44.5mの位置にあり，約8.5mの高低差がある。

また，この第4地点は，第3，第5地点の平原遺跡とも丘陵続きであることから，遺跡名については今後の全面調査の結果によって検討されるべきものであるが，本報告は地名を尊重する立場から数字やアルファベット記号を避けた。

第4地点の橋詰遺跡は，調査区の北東に標高48mの広い面積を持つ平担面があり，遺跡の主体はそちらにあるものと思われる。しかも，調査地点は，橋詰遺跡の主要地と第5地点の平原遺跡を連結する鞍部にあたる南斜面である。

（柳田）



第57図　橋詰遺跡1～4号貯蔵穴実測図（1/60）

(2) 貯蔵穴（第57図）

調査区東端部において4基を検出した。互いに重複しており，先後関係は下記のとおりである。断面が袋状を呈するものはない。全て弥生中期の所産であり，土器の量は多くない。土器については割愛した。

（古）→（新）

2号 → 1号

4号 → 3号 ↗

1号貯蔵穴　最も新しいもので規模も他を圧して大きい。長軸295cm，短軸255cmの隅円長方形プランを呈し，深さ65cmである。土器が若干出土し，その中に，ミニチュアの鉢1点を含む。

2号貯蔵穴　1号の西隣にある。長軸200cm，短軸130cmの長方形プランで，深さは50cm。土器が若干と石斧片1が出土している。

3号貯蔵穴　1号の東隣にあり，一辺160cm前後の隅円方形プランを呈する。これが最も深くて105cmを測る。土器が若干出土し，筒形器台片を含む。

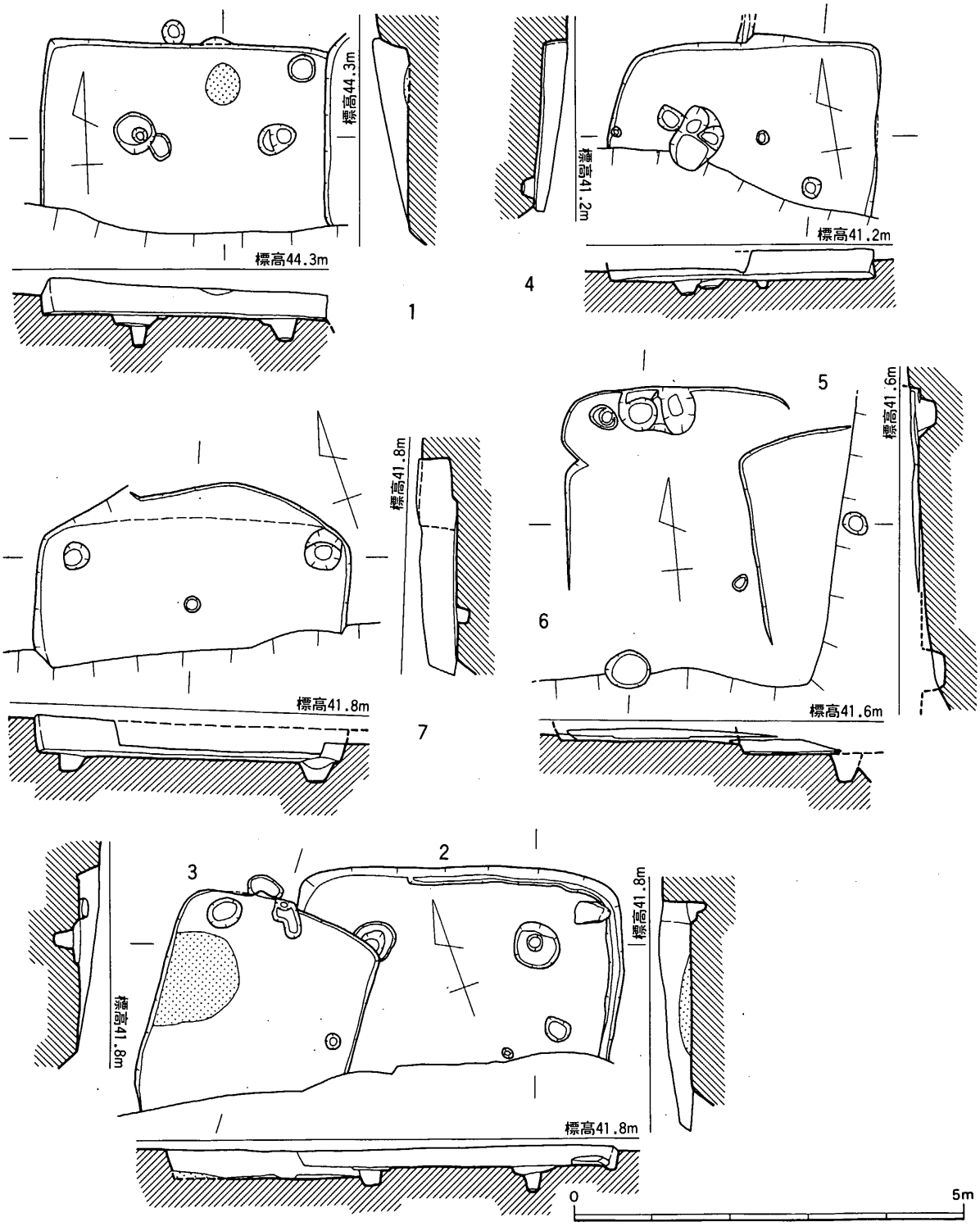
4号貯蔵穴　3号に切られてごく僅かしか残存しない。東西に長軸をもつ長方形プランであろう。土器片と土弾1点が出土した。（伊崎）

(3) 住居跡

住居跡は，弥生中期3軒，5世紀後半2軒，6世紀後半2軒の合計7軒を検出した。

第19表　橋詰遺跡住居跡一覧表

No.	平面形	規模(長径×短径)m	炉・カマド	主柱穴数	土壙位置	時期	出土品
1	方形	(3.7+)×(2.4+)	カマド北	2(4)	—	5世紀後半	須恵器・土師器片
2	隅丸方形	4.1 ×(2.5+)	—	2(4)	—	5世紀後半	須恵器・土師器片
3	隅丸方形	(2.9+)× 2.6	カマド西	—	—	6世紀後半	須恵器・土師器片
4	隅丸方形	3.4 ×(2.2+)	—	(2)	西半	弥生中期	弥生土器片
5	方形	(2.5+)×(1.5+)	—	1(4)	—	6世紀後半	須恵器・土師器片
6	隅丸方形	(2.9+)×(2.5+)	—	—	北壁	弥生中期	弥生土器片
7	隅丸方形	4.0 ×(1.8+)	—	1(2)	—	弥生中期	弥生土器片



第58図　1～7号住居跡実測図（1/80）

住居跡は，立地が斜面であるところから，現状では段々畑となっているが，当時も立地から推測すると，斜面をある程度「造成」して段状平坦面に住居を営んだのではなかろうか。

住居跡の新旧関係は次のとおり。　（柳田）

7号 → 3号 → 2号　　6号 → 5号
4号 ↗　　（古→新）

遺　物

土　器（第59図１）

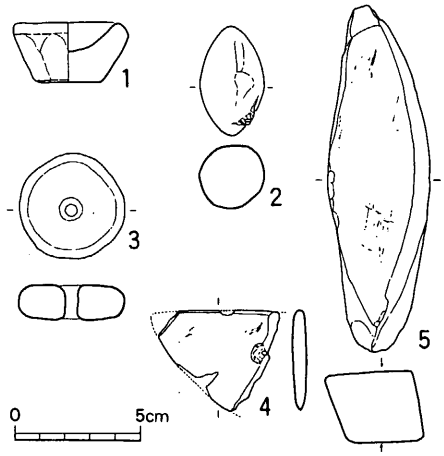
１号貯蔵穴出土の手づくねミニチュア土器である。口径4.8cm，器高2.4cmで，部厚な器壁に仕上げる。黒～黄掲色を呈し，砂粒・金雲母を含む。

土製品（第59図２・３）

２は投弾で完形品。器面は良くナデ仕上げされている。胎土に黒曜石のチップを嚙む。長4.4cm，幅2.6cm，重23.5ｇ，色調は黒茶色を呈す。４号貯蔵穴土。３は紡錘車で，周縁はやや不整である。径4.3cm，厚1.4cm，重22.5ｇを測る。色調は黄褐色で，胎土に砂粒多い。５号住居跡覆土出土。

石　器（第59図４・５）

４は半月形外弯刃の石庖丁片で，厚0.55cm。２号住居跡覆土出土で，輝緑凝灰岩製。５は研砥面２を有す砥石で，やはり２号住居跡で床面より出土。粘板岩製。　（木下）

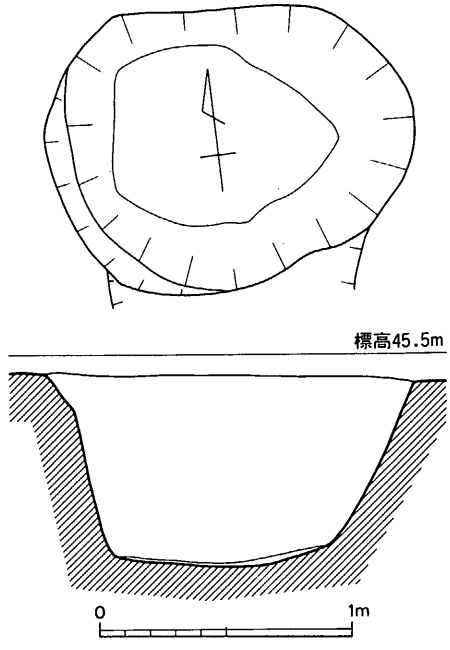


第59図　橋詰遺跡出土土器・土製品・石器実測図（1/3）

(4) 土　壙

土壙としたのは，１号住居跡周辺に小ピットを伴った楕円形や方形の小型の竪穴で，古代・中世の土師器片が出土する。

１号は，長径1.5×1.05ｍの楕円形で，深さ75cmの大きさ。若干の土師皿片とともに緑釉陶器細片が出土している。器形は不明。　（柳田）



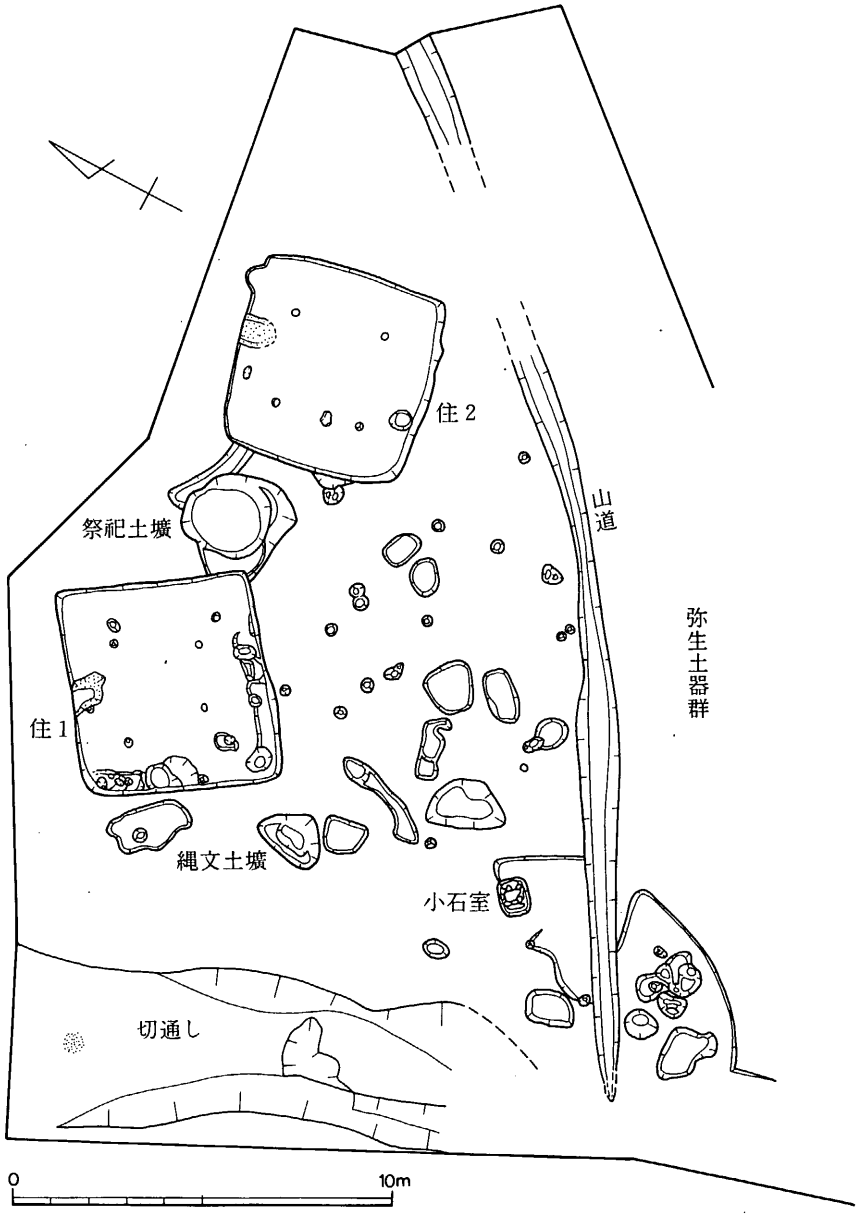
第60図　１号土壙実測図（1/30）

5．平原遺跡（第5地点東地区）

(1) はじめに

第5地点は、古墳群と試掘によって住居跡1軒が確認されていた。第5地点とは、古墳群のある地点と住居跡を含めて区分されていたが，本調査の結果住居跡のある地点と古墳群の間には小さな谷があり、遺構の性格も違うところから調査時には第5地点東地区として区分した。

この地区では、現在の山道の南側表土直下に多量の弥生中期後半の土器群が検出されたが、出土状態は2次的な堆積の可能性が強く、土器片も磨滅している。地区の西側は、切通し状の谷になっている。

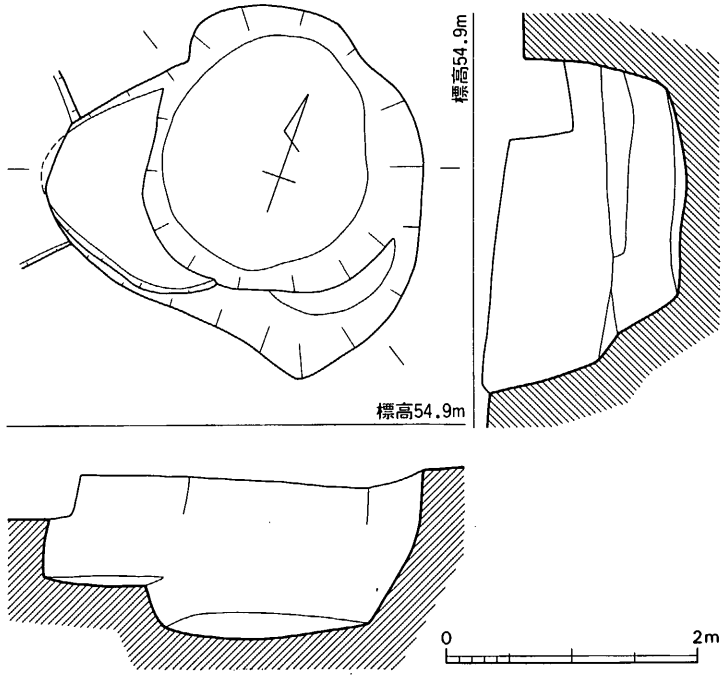


第61図　平原遺跡（第5地点東地区）遺構配置図（1/200）

(2) 祭祀土壙

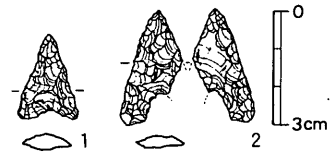
（第62図）

1号と2号住居跡の間で、弥生中期中頃の土器群を出す不整形の竪穴が検出された。竪穴は袋状貯蔵穴が3個重複したような形態を示すが，実際に貯蔵穴を利用した土器破棄場であるかもしれない。最も深い床面は，1.9×1.65mの楕円形をし，現状で深さ1.5mあり，壁面も袋状に弯曲する。とくに西側の段の壁面は袋状が著しい。



第62図　祭祀土壙実測図（1/60）

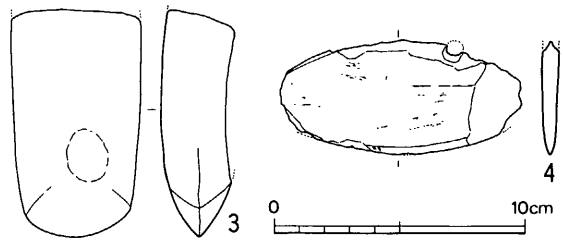
土器の出土状態は，上層に一括して投入されているが，土器には丹塗の筒形土器・広口壺・複合土器・高杯や甕・大型甕・支脚がある。中層にも筒形土器片など少量見られる。大型甕の口縁のみを含むことから考えても，付近に甕棺墓があり，その祭祀用土器を破棄したのではなかろうか。（柳田）



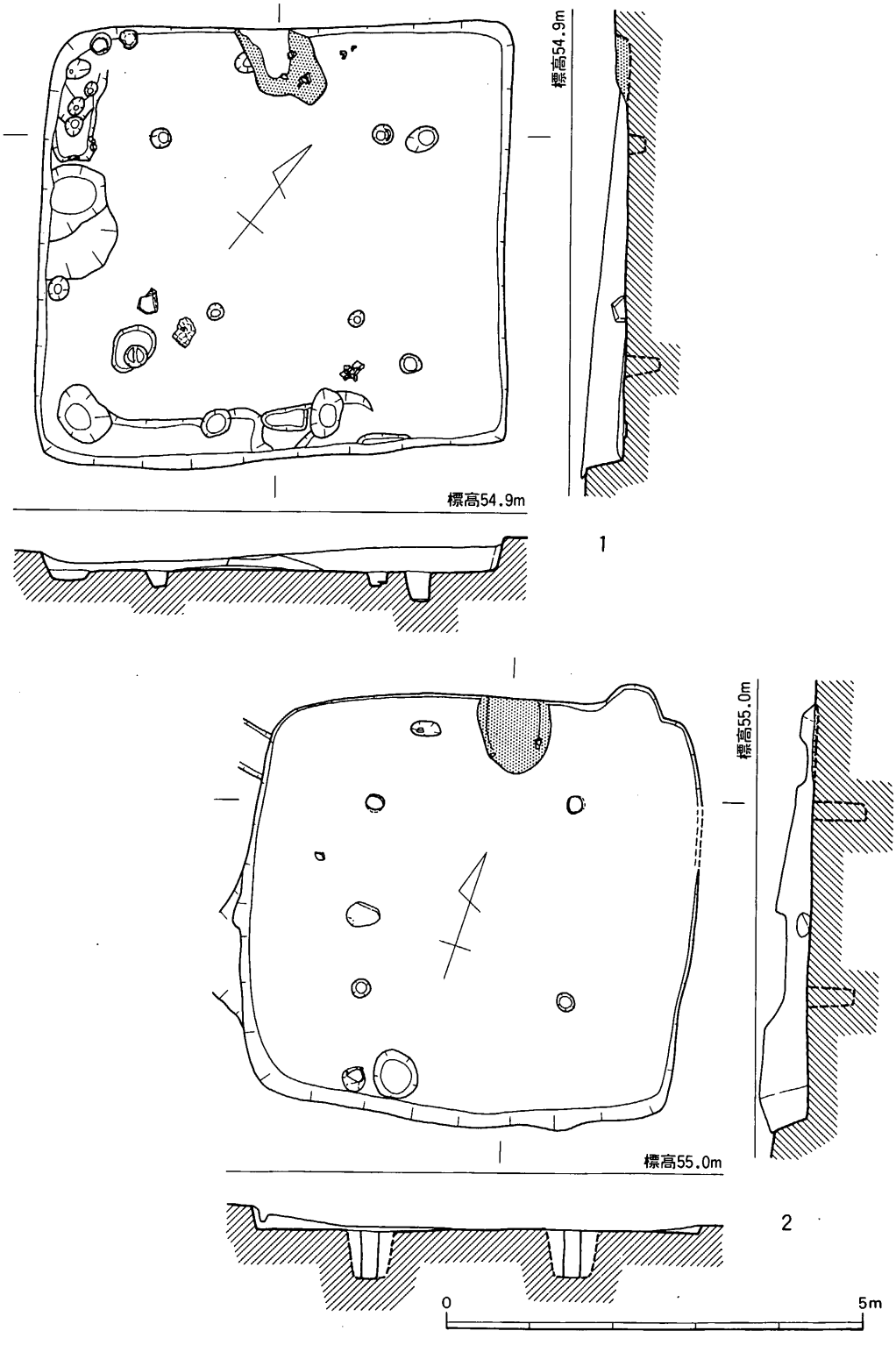
第63図　平原遺跡出土石器実測図①（1/2）

石　器（第63図1・2，第64図3・4）

1・2は凹基無茎式の石鏃である。1は抉りの浅いもので，長2.25cm，厚0.4cm，重0.8gを測る黒曜石製。祭祀土壙出土。2は縦長剝片を素材とした大型の鏃で，長さ3cm，厚0.3cm。整地層出土で黒曜石製。3は蛤刃石斧の刃部破片。祭祀土壙上部出土で玄武岩製か。4は石庖丁の破片で，孔の位置から判断するとかなりの大型品であろう。1号住居跡覆土出土で，あずき色の輝緑凝灰岩製。（木下）



第64図　平原遺跡出土石器実測図②（1/3）



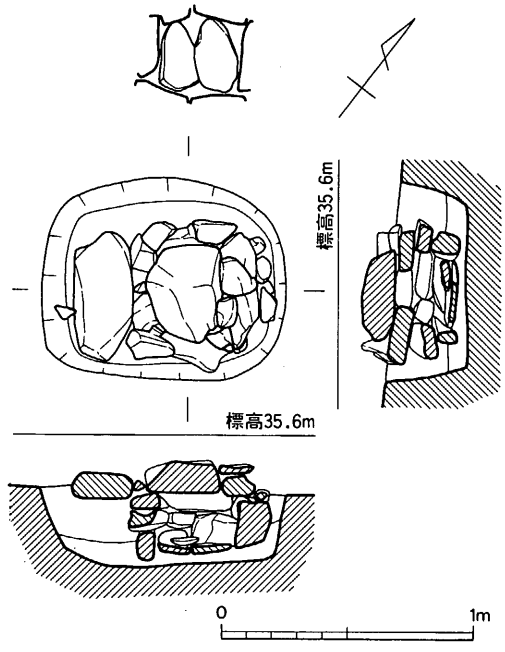
第65図　1・2号住居跡実測図（1/80）

(3) 住居跡

住居跡２軒は，６世紀中頃のもので，４本柱で北側にカマドを持っている。両方共にカマドは，わずかに焼土が残っているだけであるが，床面は張床が完全に残り，主柱の大きさも直径20cmの大きさであることが判明した。１号は5.5×5.2m，２号は5.4×5.1mの大きさの方形である。

(4) その他の遺構

祭祀土壙と住居跡のほかに，縄文土器細片を出した土壙と小石室や浅い土壙状のものがある。いずれも時期不明であるが，小石室のみデータを記しておく。小石室は，98×80cmの隅丸長方形土壙内にある。内法32×31cm，高さ21cmのものである。（柳田）



第66図　小石室実測図（1/30）

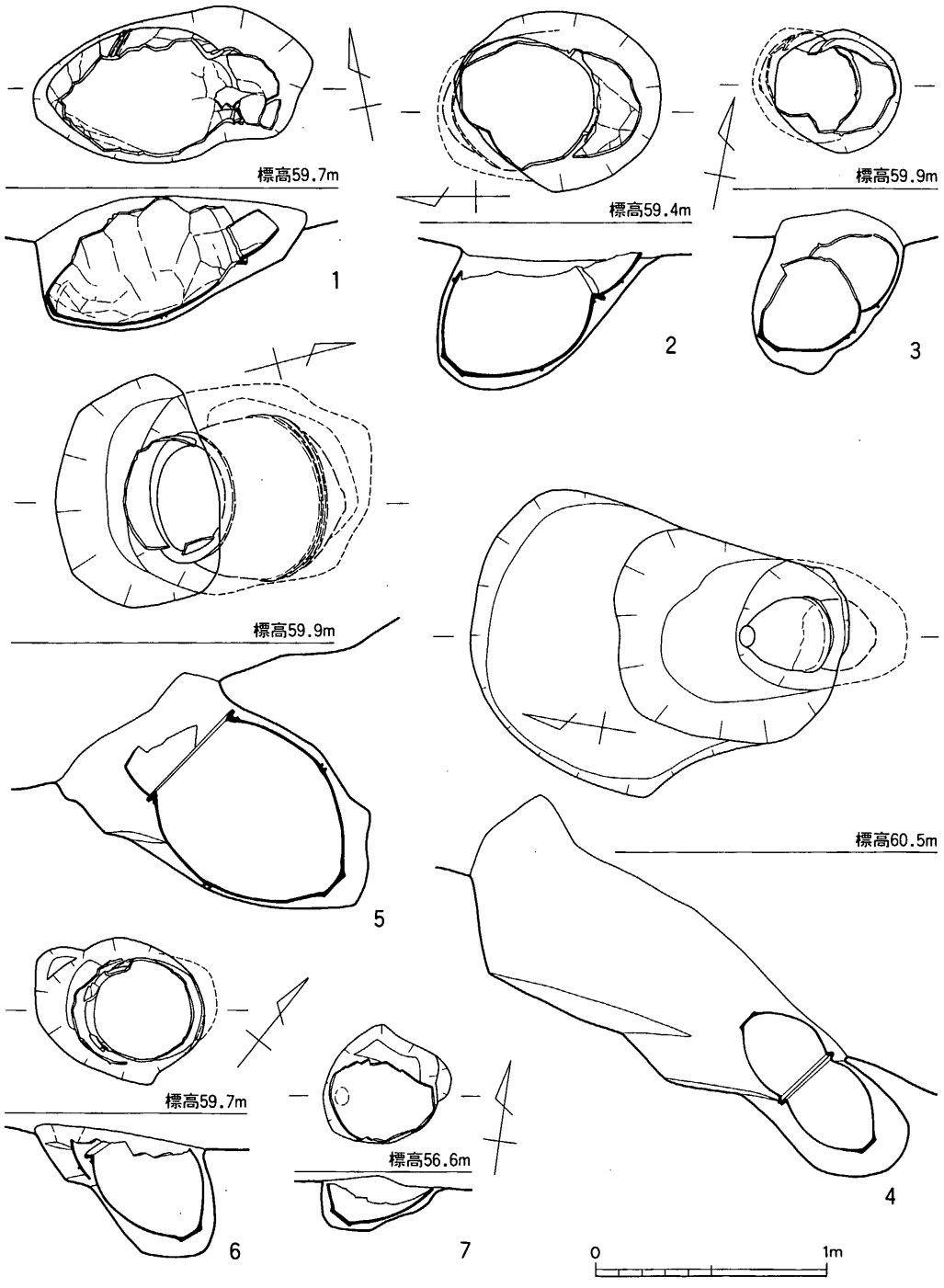
6．平原遺跡（第５地点中央地区）

(1) はじめに

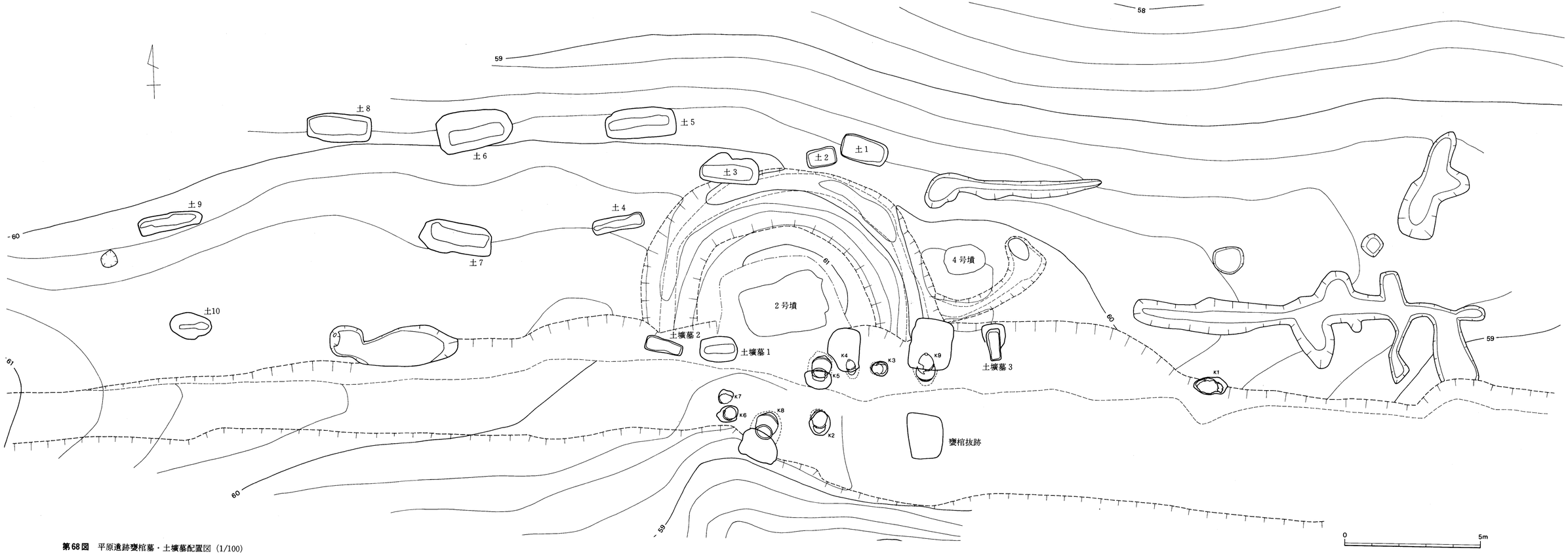
第５地点の弥生時代の遺構は，東地区と西地区とは別に，２号墳付近のみに甕棺墓と土壙墓群が存在する。この墓地群は，西地区の池の上遺跡とした弥生墓地群とも小字名や地形上からも区別されるところから，２号墳付近に存在する７世紀後半代の土壙墓群と共に池の上弥生墓地から区分した。しかし，この項では弥生墓地のみを扱い，７世紀の土壙墓群は平原古墳群の最後に付加する。

また，１号墳と２号墳の間には，３・４号墳があると同時に，その３・４号墳の間にも溝状の遺構がある。この溝状遺構内やその付近には弥生後期土器細片が小量散布するが，遺構の性格や確実な時期を決定できるものはない。同時に，古墳以後の土壙墓群の時期と思われる須恵器や土師器片も散布している。

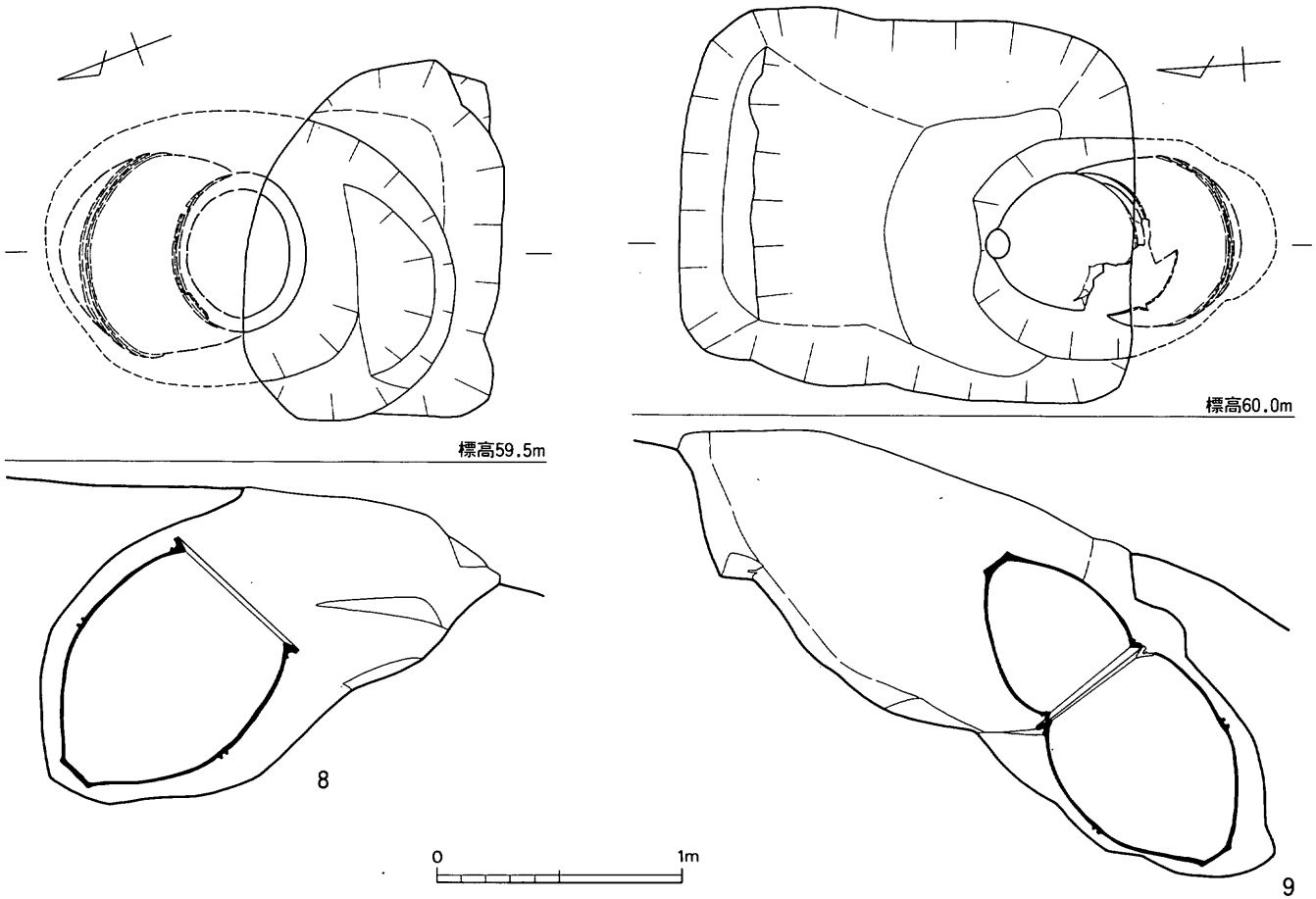
弥生墓地は，甕棺墓９基，土壙墓３基が検出されたが，昭和48年頃発見された甕棺抜き跡を含めると，合計13基の小規模な弥生墓地群となる。



第67図　1～7号甕棺墓実測図（1/30）



第68図　平原遺跡甕棺墓・土壙墓配置図（1/100）

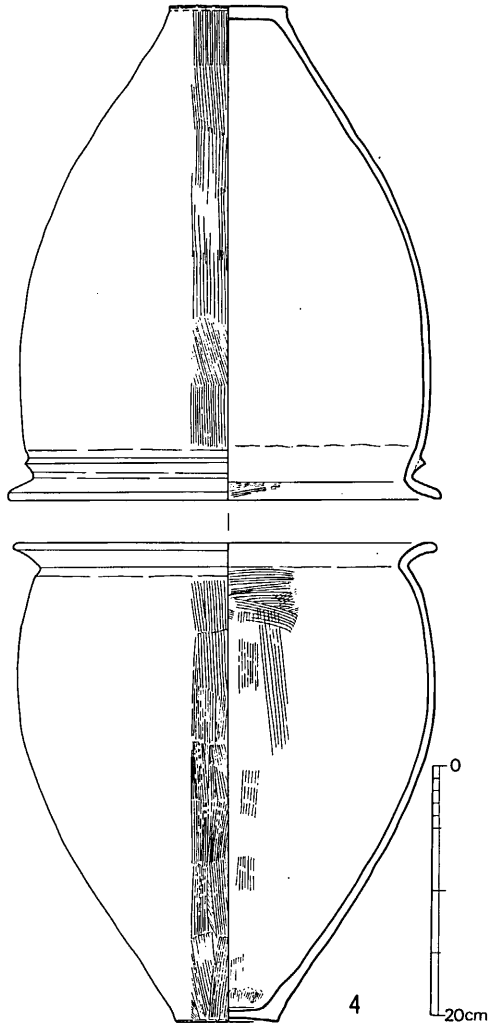


第69図　8・9号甕棺墓実測図（1/30）

(2) 甕棺墓

甕棺墓と土壙墓の配置を見ると，東西方向に2列に平行して並んでいることがわかる。1号甕棺墓のみ群から隔れているが，1号は他の甕棺と時期も違うところから，1群とは別に考えることもできる。ただ，1号甕棺と3号土壙墓の間に小型棺があったものとすれば，削平されて消滅しているであろう。このように，2列平行して営まれる墓地構成は，中期前半から中頃に始まる甕棺墓には多く見られるのであるが，中期後半以後の甕棺墓では稀な例といえる。

甕棺墓の時期は，第20表のように中期末～後期初頭5基，後期前半2基，後期中頃1基，不明2基である。また，大型3基，中型2基，小形4基，不明1基と分類できるが，中型は成人も埋葬可能であるから，小児用は4基となる。しかし，とくに南側の列に小児用が存在した場合には，削平されたであろうし，現に南側列は北側より3基少ない。現存する甕棺のうち，8号棺のみ確実な成人用単棺で，棺内にはまだ空間が残っていた。（柳田）

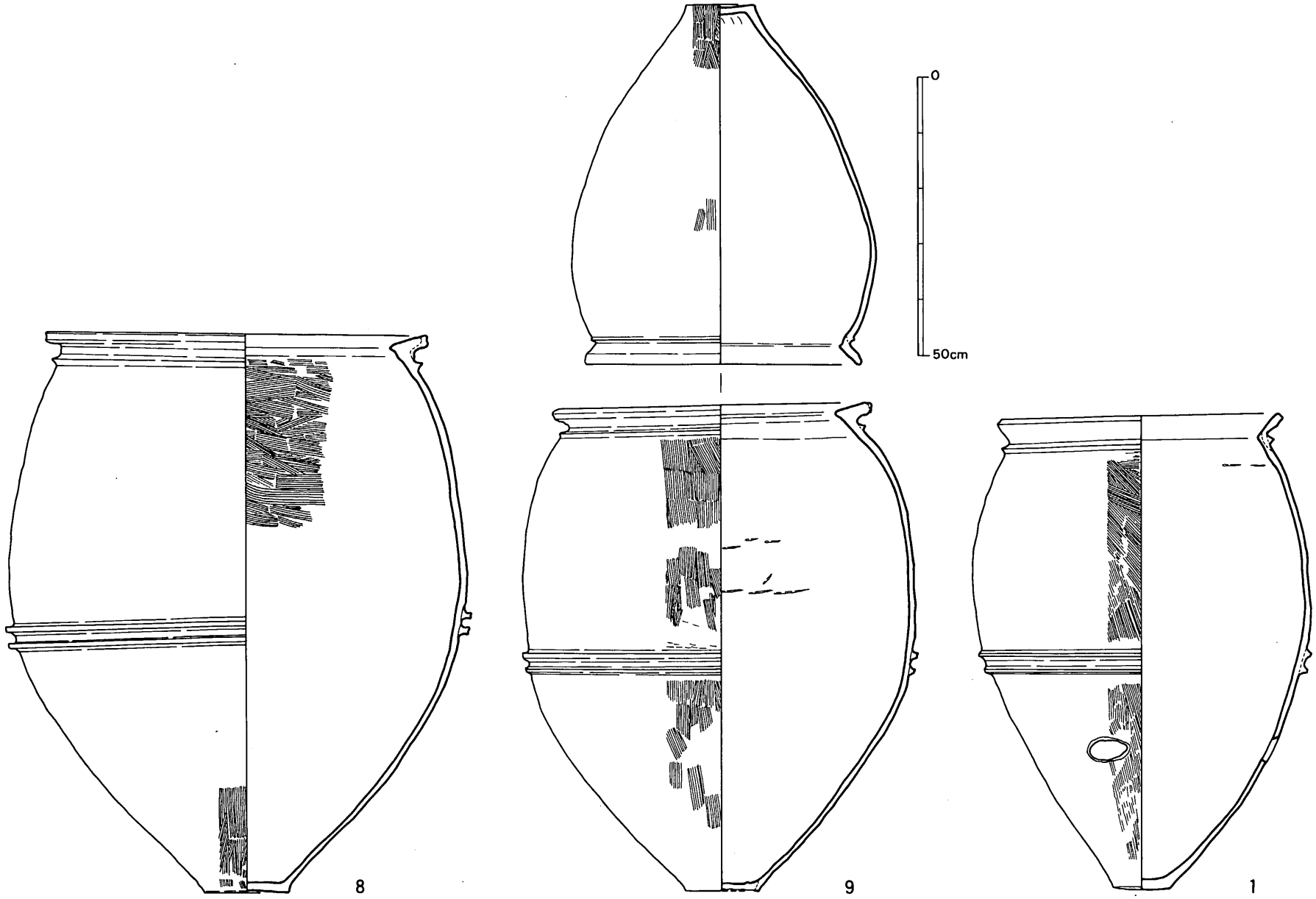


第70図　甕棺実測図①（1/6）

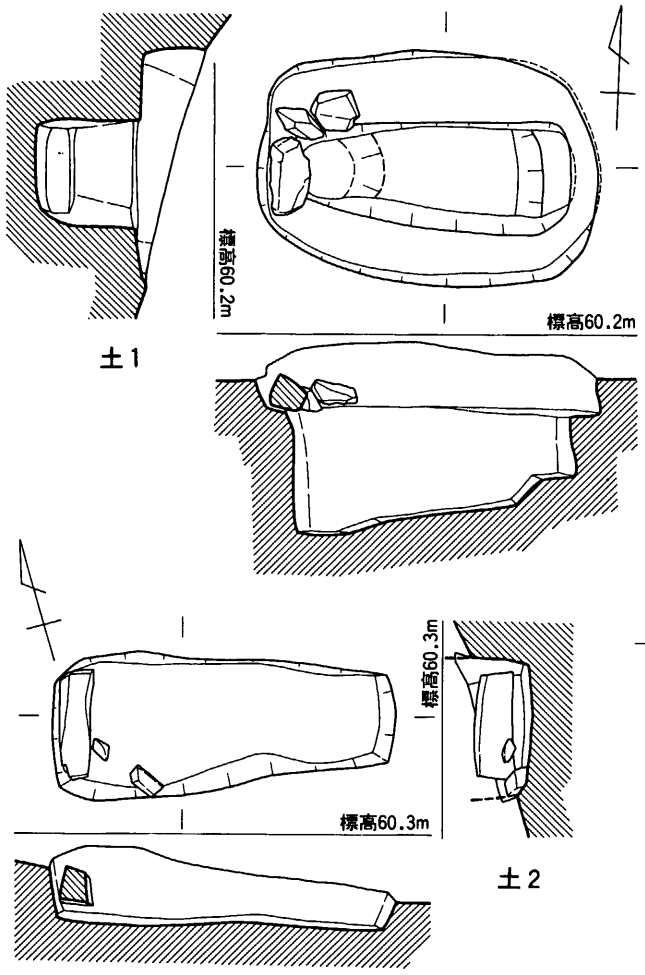
1号甕棺墓（第67図）

中央区甕棺墓群の東端にある。この1基のみが他と離れて存し，また埋置方向も異なっている。半分以上が削平されていて上甕はごく一部が残るのみだが，上甕の口縁を打ち欠いて呑口形式の合せ形態をとる。主軸方位N—78°—W。

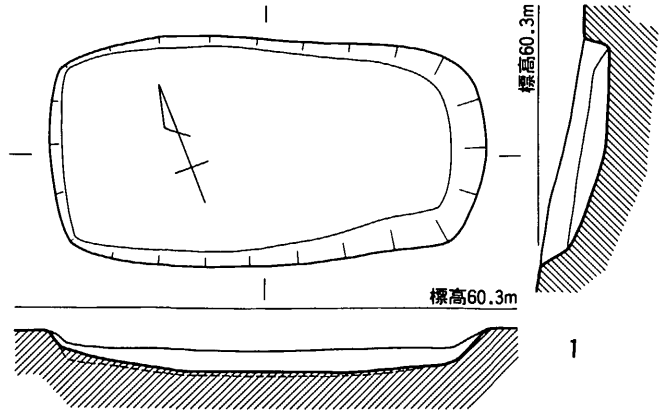
下　甕（第71図）口径51.2cm，胴最大径60cm，底径10cm，器高84.8cmを測るもので，全体に少々いびつな形状をなす。底部は丸みがかっているが，まだ平底に近い。胴部突帯は断面コの字形のものが二条一連で貼りつけてある。口頸部は4.4cmの立ち上りでくの字状となる。頸部に付された三角突帯はきわめてシャープなつくりである。内面はなで，外面は全面に縦および横方向の刷毛目を施し，一部その上をなでる。胎土はあまり精良ならず，焼成ややあまい。黒茶褐色を呈す。（伊崎）



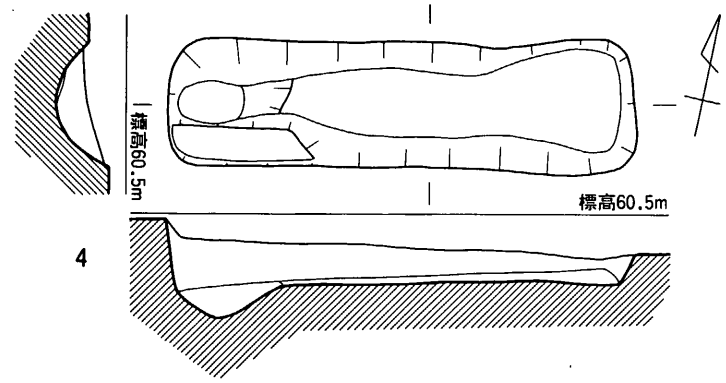
第71図　甕棺実測図②（1/10）



土1

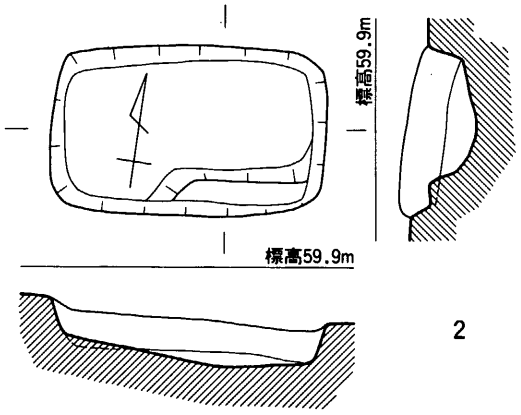


1

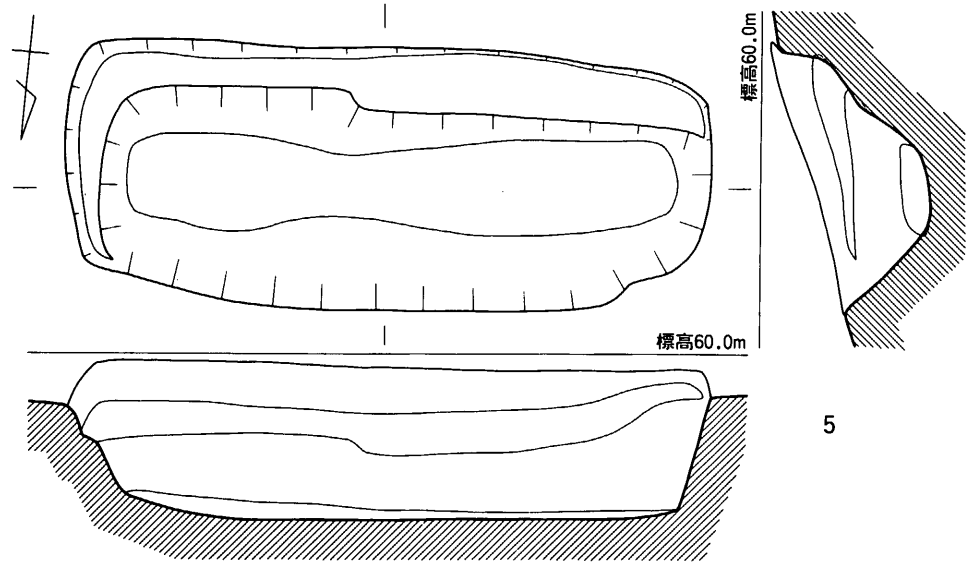


4

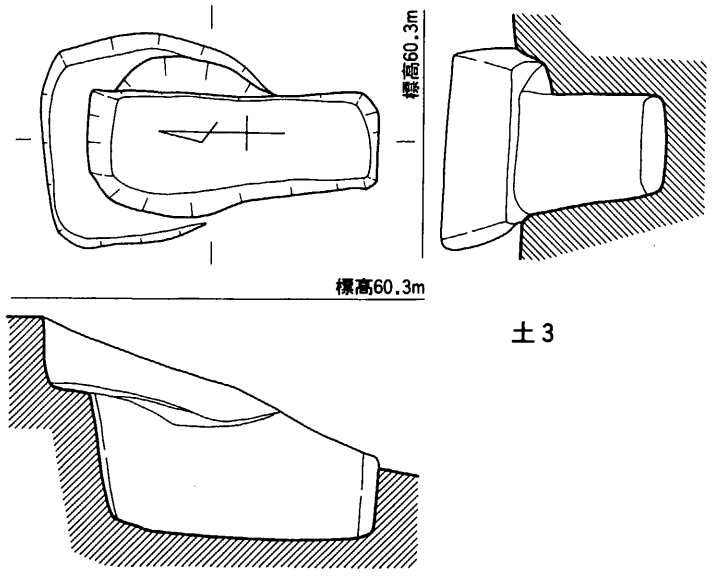
土2



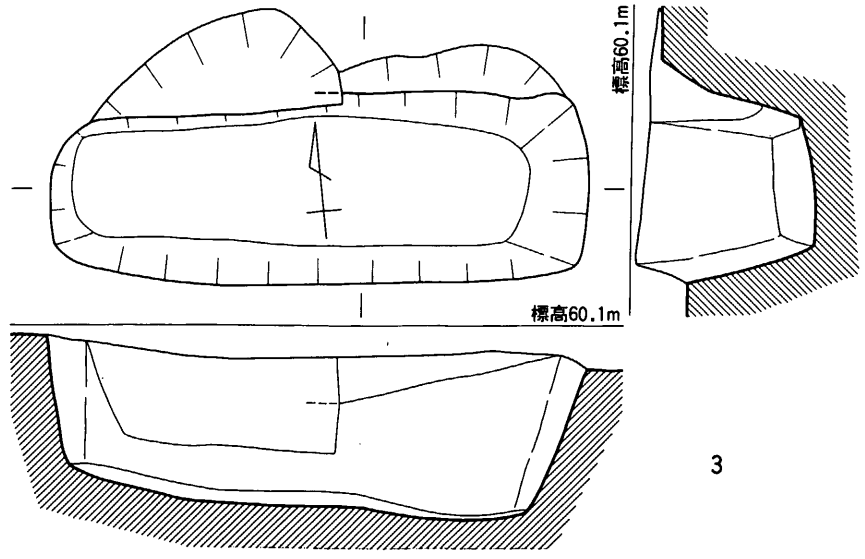
2



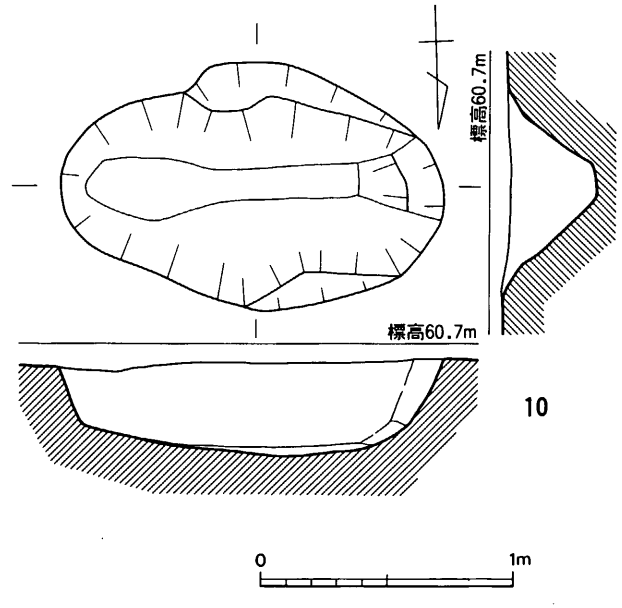
5



土3



3



10

0 1m

第72図　1～3号・1～5・10号土壙墓実測図（1/30）

第20表　平原遺跡甕棺墓一覧表

No.	型	墓壙形状	墓壙の大きさ	合口形式	器種	全長(内法)	埋葬傾斜	埋葬方位	黒塗	土器の特徴	時期	備考
1	中型	不明	—	接口	甕＋甕	103＋	25.5°	S－78°－E	×	下甕：口縁く字形、口縁下に三角凸帯、胴コ字凸帯2条	後期中	上甕打欠
2	中型	不明	—	接口	甕＋甕	91＋	43°	S－0°－N		下甕：口縁く字形、口縁下三角凸帯、胴台形凸帯1条	後期前	上甕打欠
3	小型	不明	—	覆口	甕＋甕	68＋	41°	N－79°－W		上甕：胴台形凸帯1条 下甕：胴張、胴コ字凸帯2条	後期前	上甕打欠
4	小型	不整形	160×120	接口	甕＋甕	74	46°	N－10°－W		上下甕：口縁く字形、凸帯なし	後期初	頭蓋・歯の一部
5	大型	不整形	70×100 (＋)	接口	甕＋甕	101＋	42°	S－15°－W		下甕：口縁逆L字三角凸帯 胴コ字凸帯2条	中期末	上甕打欠
6	小型	不整形	—	覆口	甕＋甕	63＋	54.5°	S-52.5°-W		上甕：胴台形凸帯1条 下甕：く字形口縁下三角凸帯	後期初	上甕打欠
7	小型	不明	—	—	甕	34＋	51°	S-82.5°-E		下甕：胴に凸帯なし	—	
8	大型	不整形	104×145 (＋)	単	甕	99	43°	S－69°-W	○	口縁逆L字形、口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2条	中期末	
9	大型	長方形	185×155	接口	甕＋甕	147	53°	N-4.5°-E	○	上甕：内湾口縁下三角凸帯 下甕：逆L字口縁下三角凸帯	中期末	上甕中型

(3) 土壙墓

土壙墓は，北側列のみに3基存在する。土壙墓の主軸は，1・2号が列と平行方向で，3号が2段掘式であるところから，2号も同様であろう。2段目の棺の形態は，一方が広く造られているが，こちらに1号は作り付の枕，2号は石枕らしきものがあることから，頭位方向は容易に判明する。頭位方向は，3基とも違っていることから，甕棺と同様に列と平行するが，直角方向に向けるのが習慣らしい。この墓地群の2列間の空間が墓道と思われるが，同時に南側にも土壙墓が存在したであろうことは，北側列土壙墓（2・3号）床面より南側地山が低く削平していることからも明らかである。土壙墓は，3基共に屈葬の成人埋葬用で，とくに1号のような足部掘込式のものは後期前半から中頃のものである。これは甕棺の時期とも付合する。

（柳田）

第21表　弥生時代土壙墓一覧表

No.	型	推定頭位	1段目 長辺	1段目 最大幅	1段目 最小幅	2段目 長辺	2段目 頭位幅	2段目 足位幅	検出面からの深さ	主軸方位	備考
1	成人	東	196	95	65	113	45	24	77	N-88.5°-E	造付枕、足部掘込、木蓋押え石
2	成人	西				138	57	35	30	N－74°－W	石枕？
3	成人	北	135＋	84	—	115	43	38	89	N－1°－W	

7．池の上遺跡（第5地点西地区）

(1) はじめに

池の上遺跡は，第5地点の西側3分の1の地区の小字名が「池の上」となること（2号墳と5号墳の中間に小字名の境界線がある）や，現状では連続した尾根に見えるが，旧地形は平原墓地群と池の上墓地群の間に鞍部があることから別名の遺跡として区分した。

この遺跡も平原遺跡と同様に，古墳の下に弥生甕棺墓が存在することは予期せぬことであったため，大きく調査計画を変更するとになった。甕棺墓の調査は，5・6号墳の調査後に行なったが，重複が多いこと，保存がよいため標石が残り，しかも深いことが関連して，長期間の調査となった。

調査は，古墳と重複する地域は古墳の盛土除去から，古墳と重複しない東側地区は尾根線から南北に拡張していった。表土剝ぎの結果，尾根線と北側斜面は遺構の保存がよく，南側斜面はかなり削られていることが判明した。尾根の南側には現在山道があるが，この山道は戦後も材木運搬に使用していたという。5号墳と7号墳の間を切通しにしたのはさほど古くないらしいが，材木運搬の道路造りのため，甕棺地帯の南側斜面を相当削って，その土砂で平原地区と池の上地区の間の鞍部を埋めたのではなかろうか。この時，2号墳南半の墳丘や尾根南側全体が削平され，東地区と中央地区の間の谷も埋められたのであろう。

墓地群は，全体に尾根線とその南側に分布する傾向があるので，後世の削平でかなりの数が消滅したものと考えなければならない。祭祀用丹塗土器群の散布を見ると，尾根線から北側斜面のみに限られているのは，なにも祭祀は北側のみで行なわれたのではないだろう。（柳田）

(2) 甕棺墓

1号甕棺墓（第74図1）

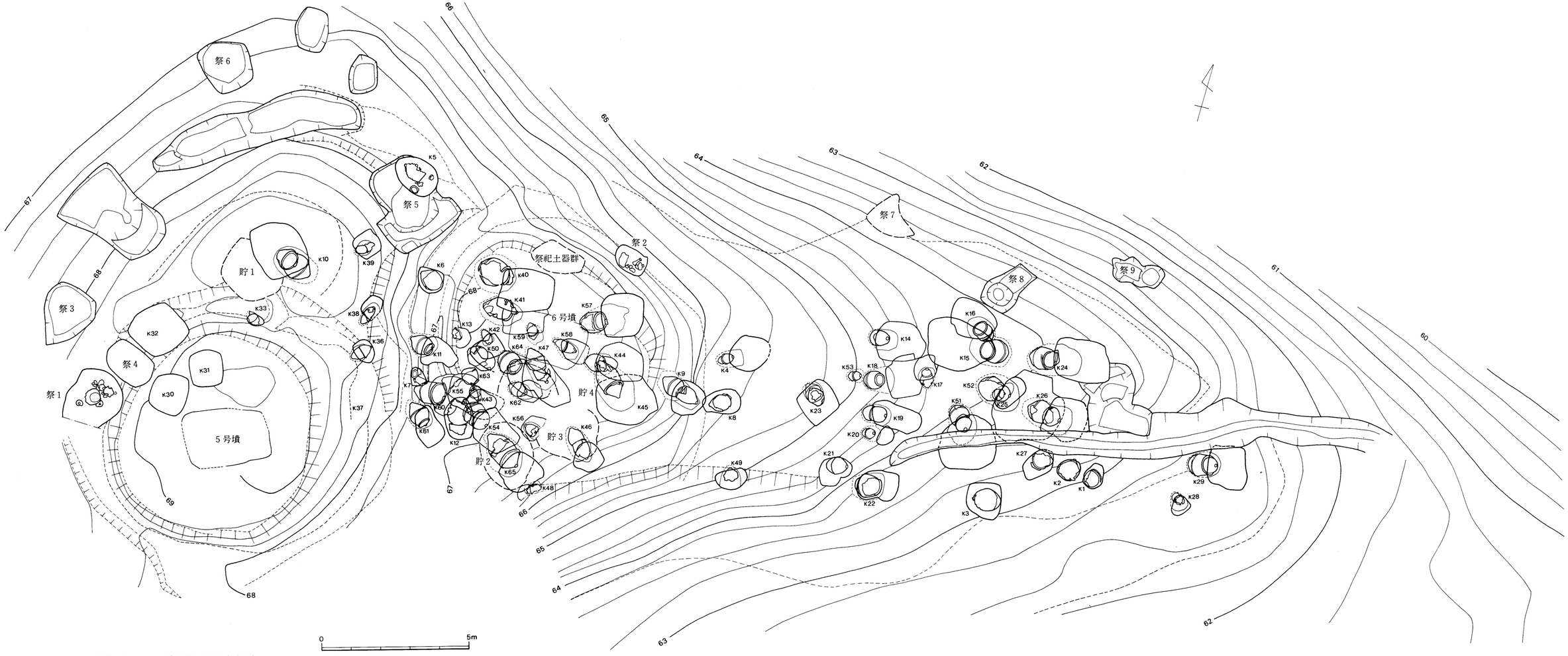
成人用である。遺存状態はよくない。埋置傾斜は65°を測り，直立に近い感じを受ける。上下とも口縁打欠きで覆口形態をとり，現存長63cm。主軸方位S—41°—W。

2号甕棺墓（第74図2）

削平著しく単棺なのか合せ形態であったのか不明。主軸をN—11°—Eにとり，37°の傾斜で埋置する。墓壙は花崗岩の岩盤を穿って掘削されている。成人用。

3号甕棺墓（第74図3）

成人用であるが単棺か合せ形式か不明。墓壙はK—1と同様に標高の低い方に下甕を埋置するよう穿たれている。54°の傾斜を持ち，主軸方位N—80°—E。

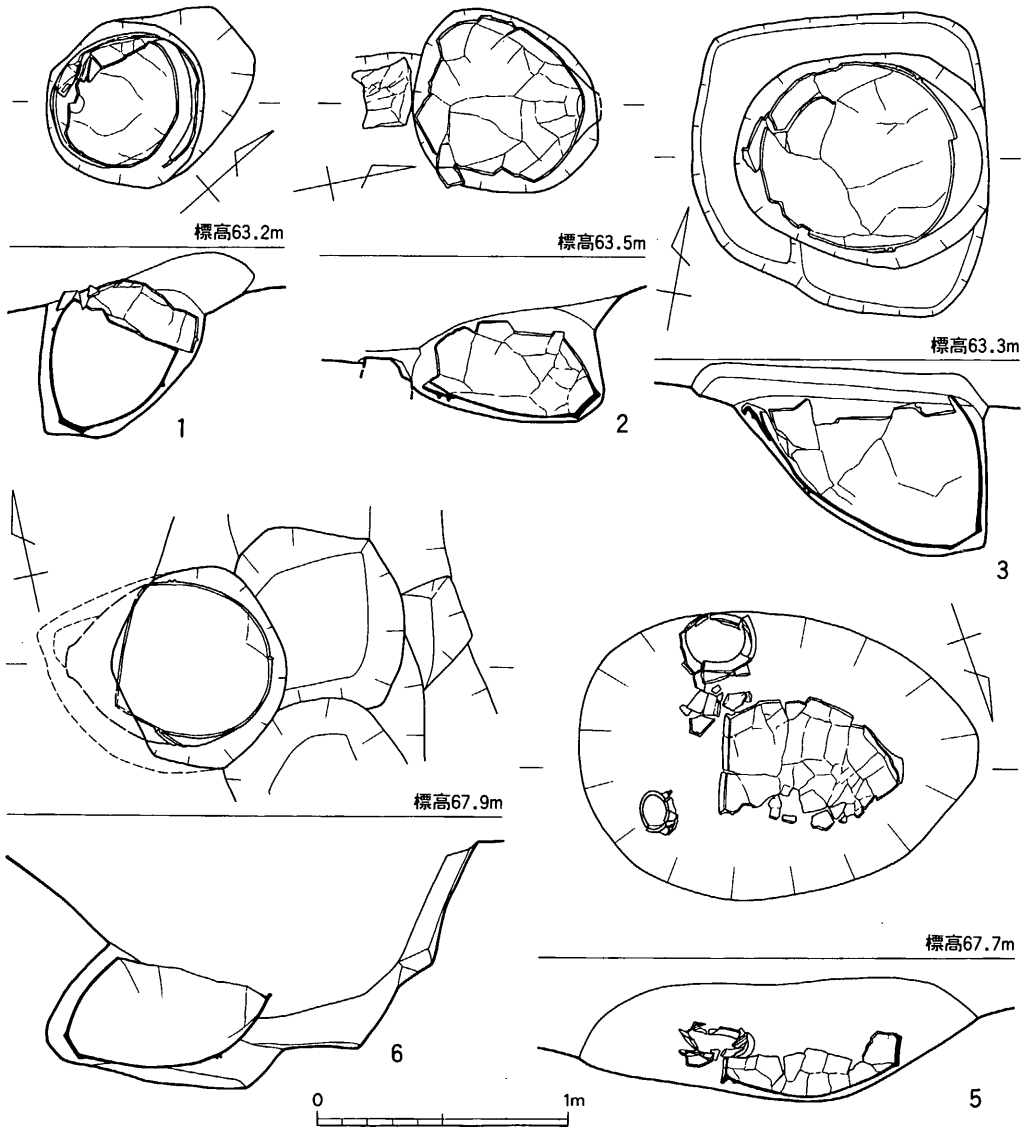


第 73 図　池の上遺跡甕棺墓配置図（1/100）

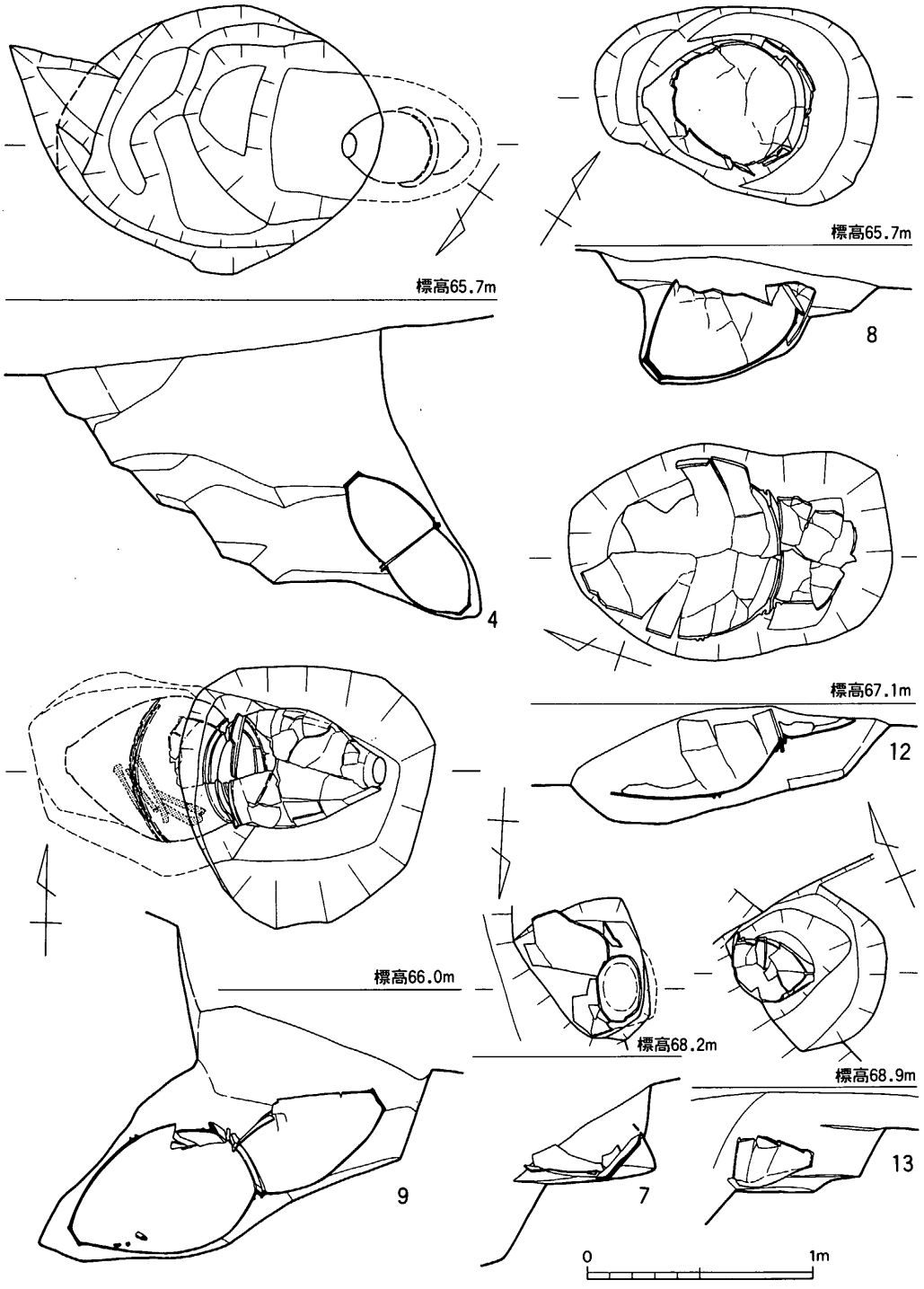
4号甕棺墓（第75図4）

遺存状態の完好な小人用甕棺墓である。墓壙は楕円形プランを呈し，地表から4つの階段状の段を設けて，接口にした甕を50°の傾斜で埋置している。上下棺の内法総長は75cm。主軸方位S—54.5°—W。

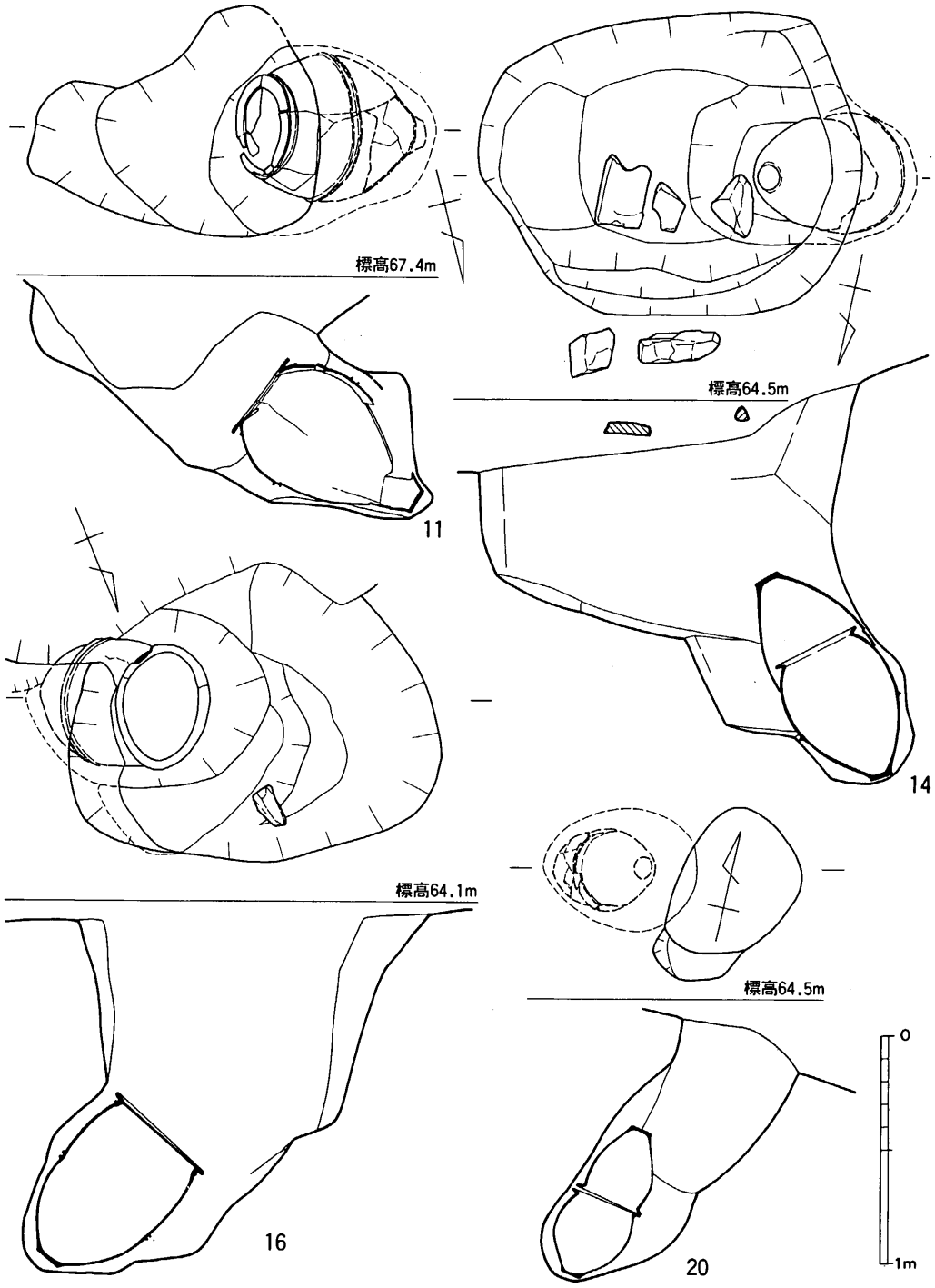
上　甕（第　図）　口径34.6cm，胴部径32.2cm，底径9.3cm，器高39cmを測る甕で，口縁下に1条の突帯を付す。内面は刷毛目を丁寧になで消し，口縁内面は横刷毛目のあと横なで，外



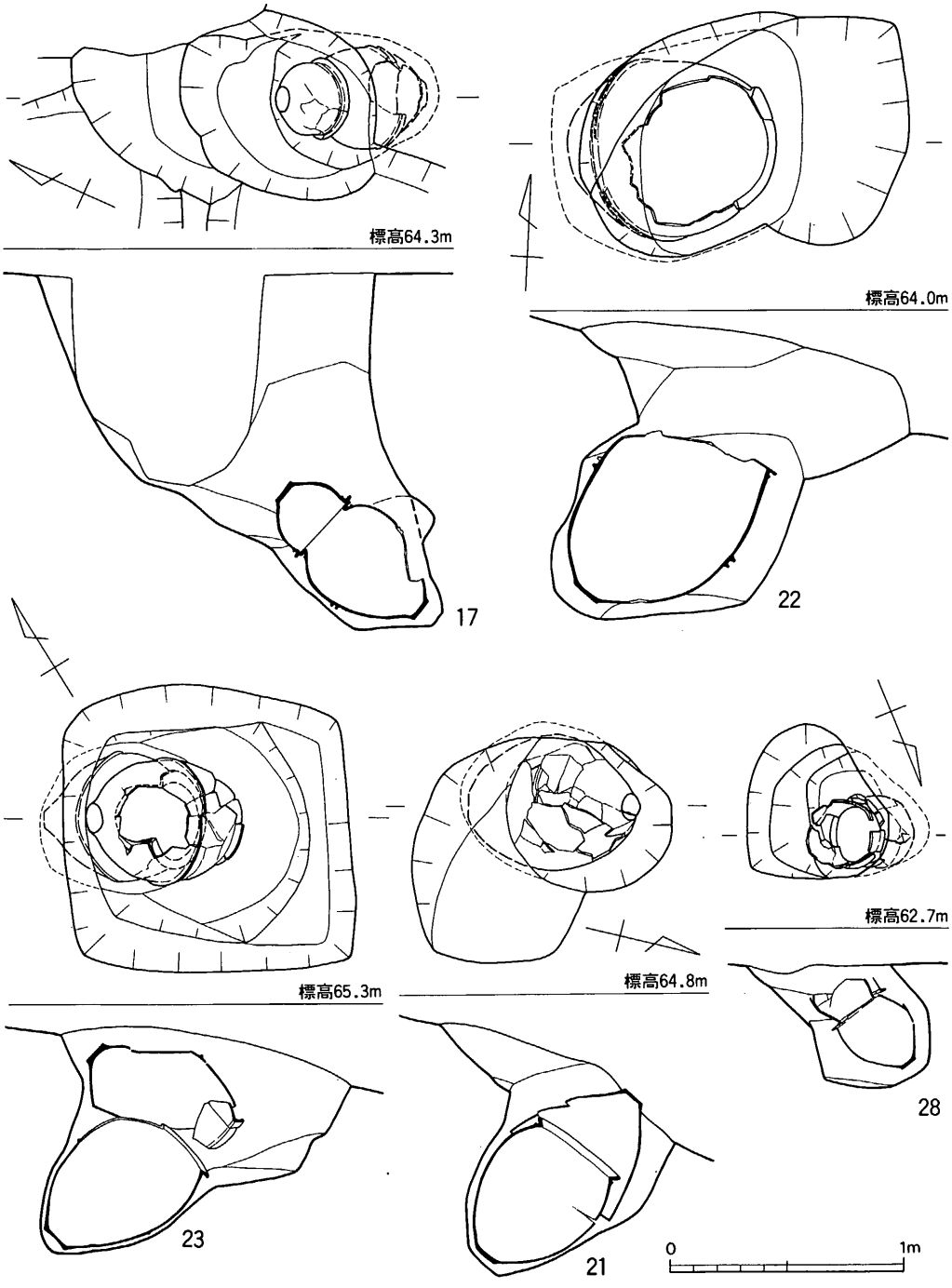
第74図　1～3・5・6号甕棺墓実測図（1/30）



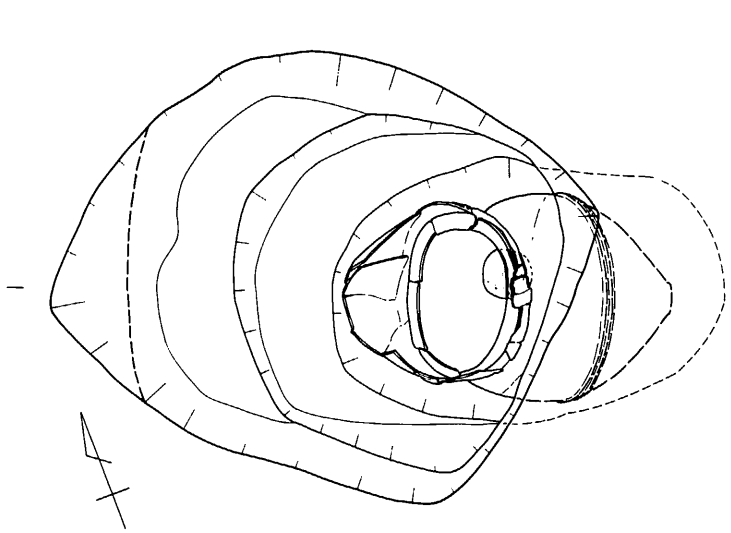
第75図　4・7～9・12・13号甕棺墓実測図（1/30）

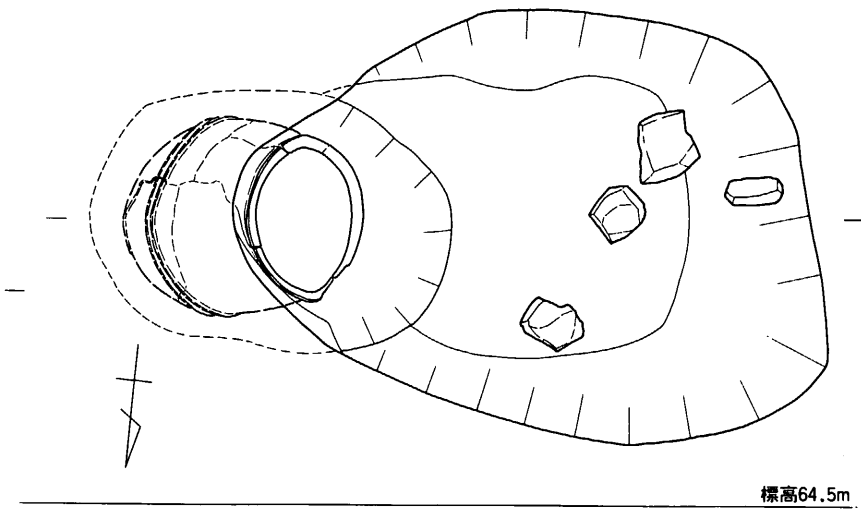


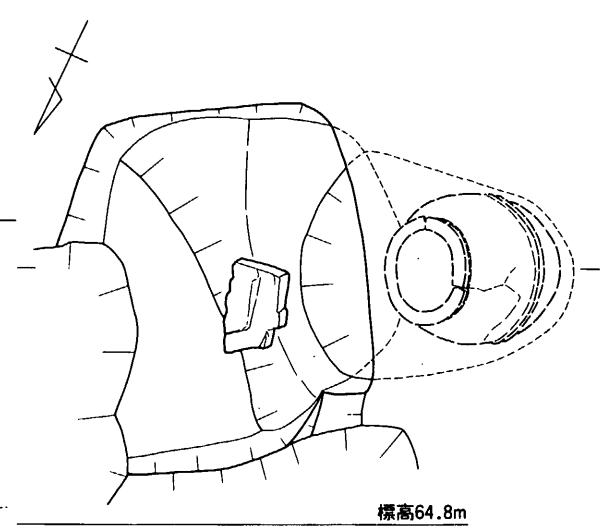
第76図　11・14・16・20号甕棺墓実測図（1/30）



第77図　17・21～23・28号甕棺墓実測図（1/30）

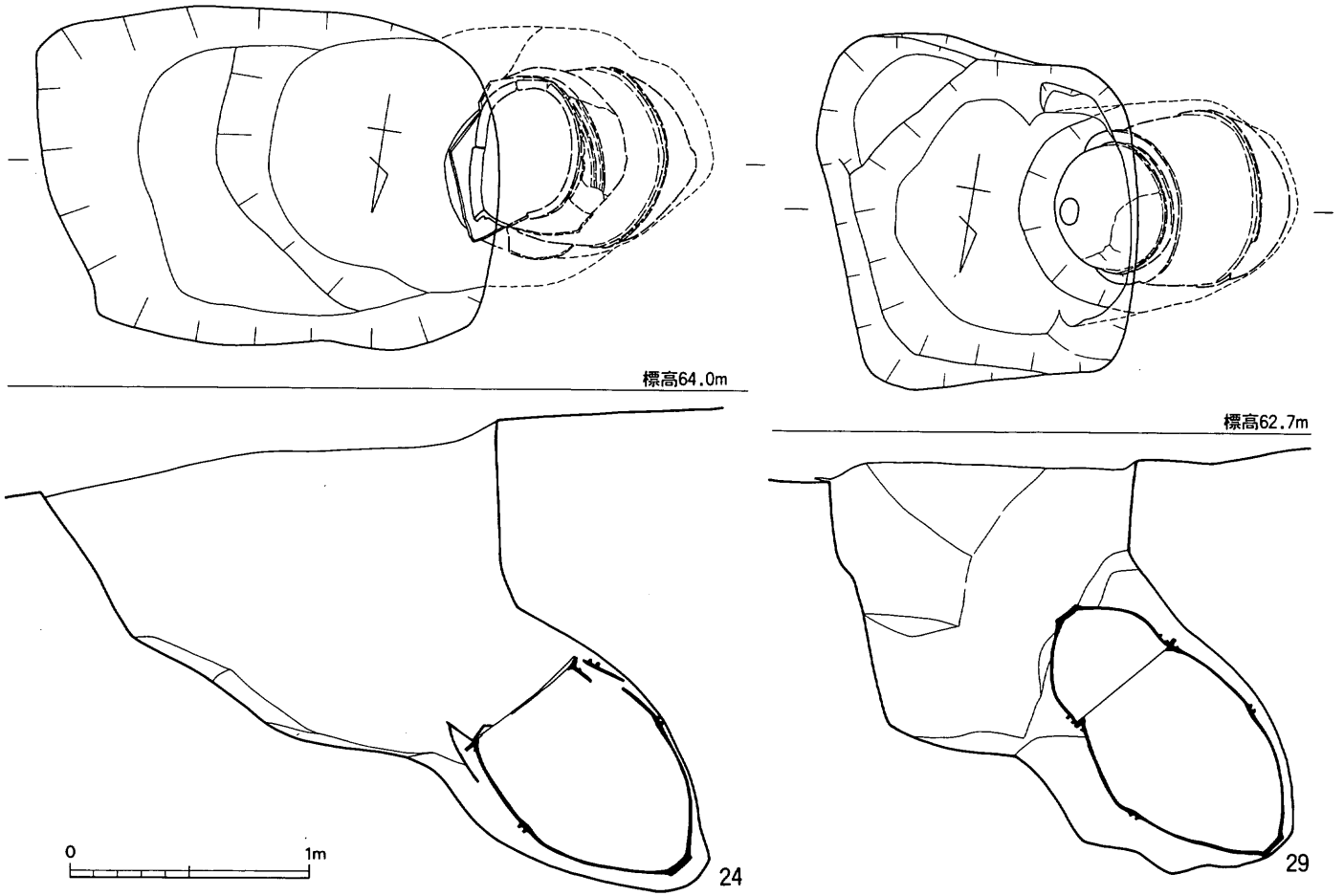




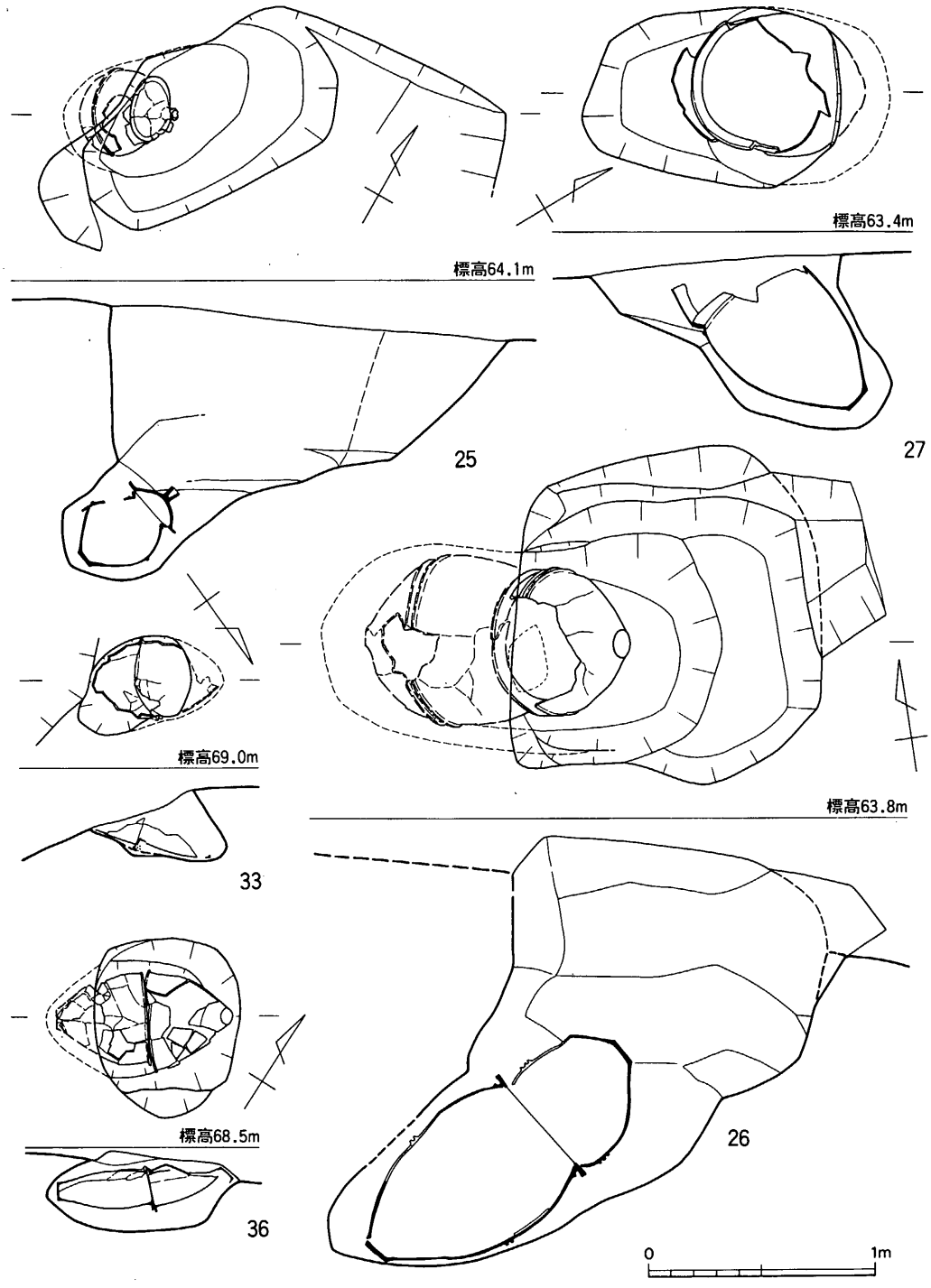




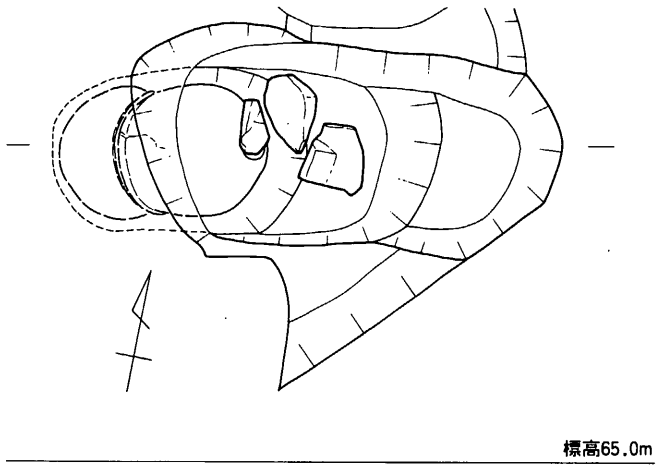
第78図　10・15・18号甕棺墓実測図（1/30）

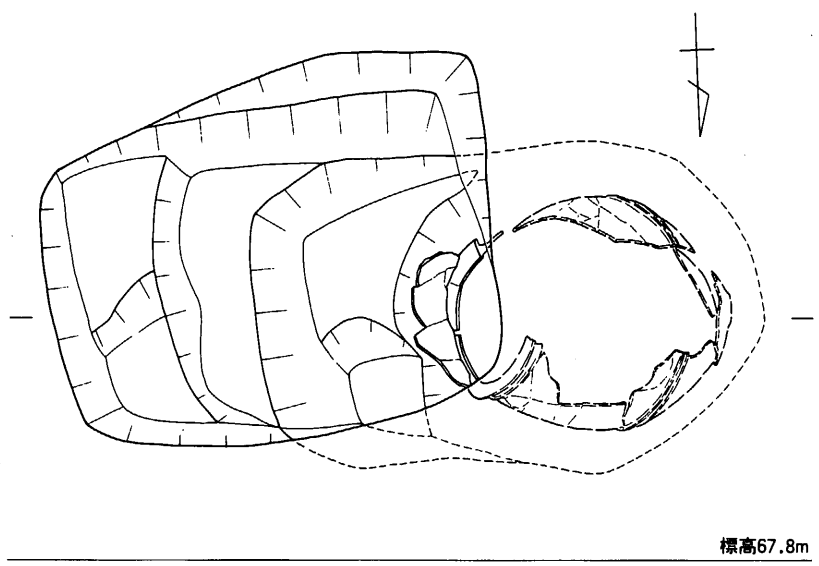


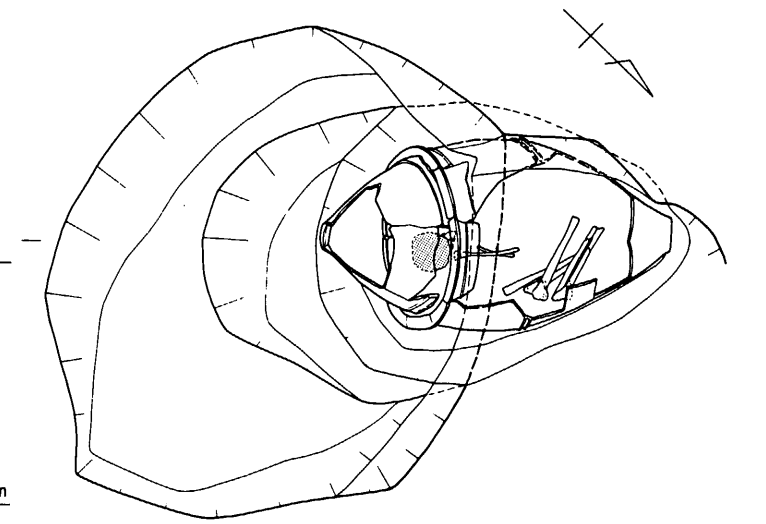
第79図　24・29号甕棺墓実測図（1/30）

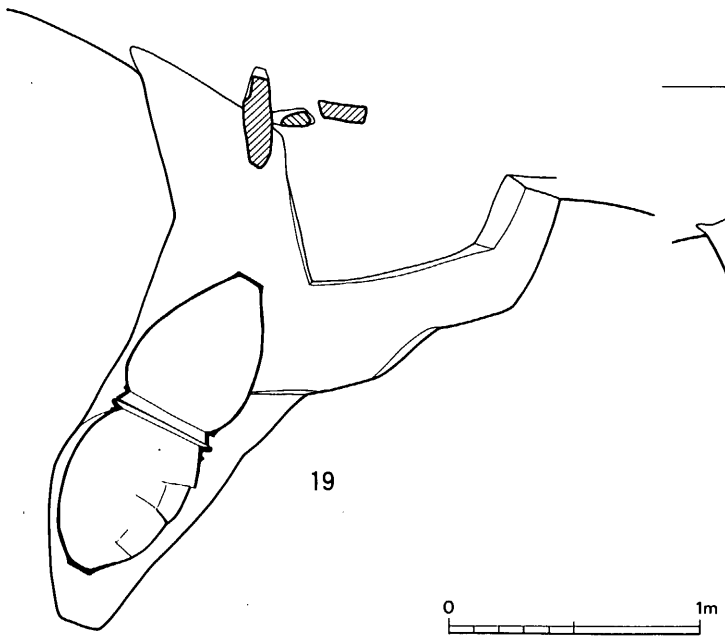


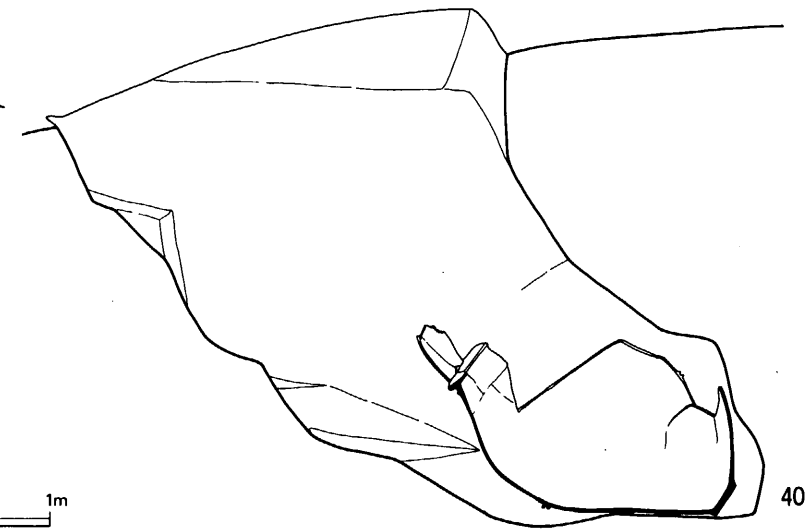
第80図　25～27・33・36号甕棺墓実測図（1/30）

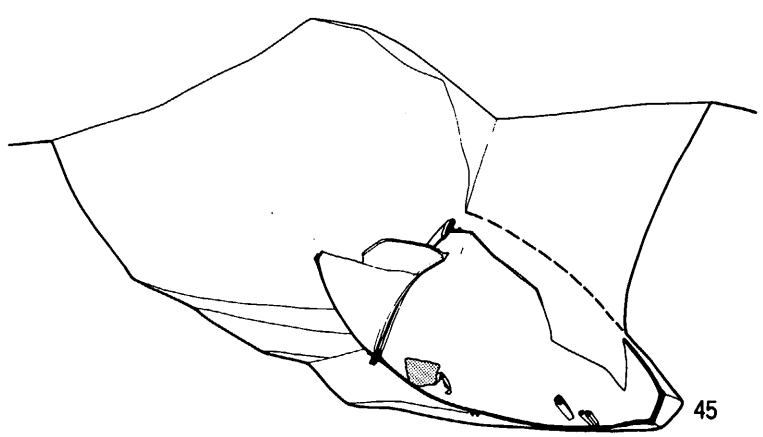




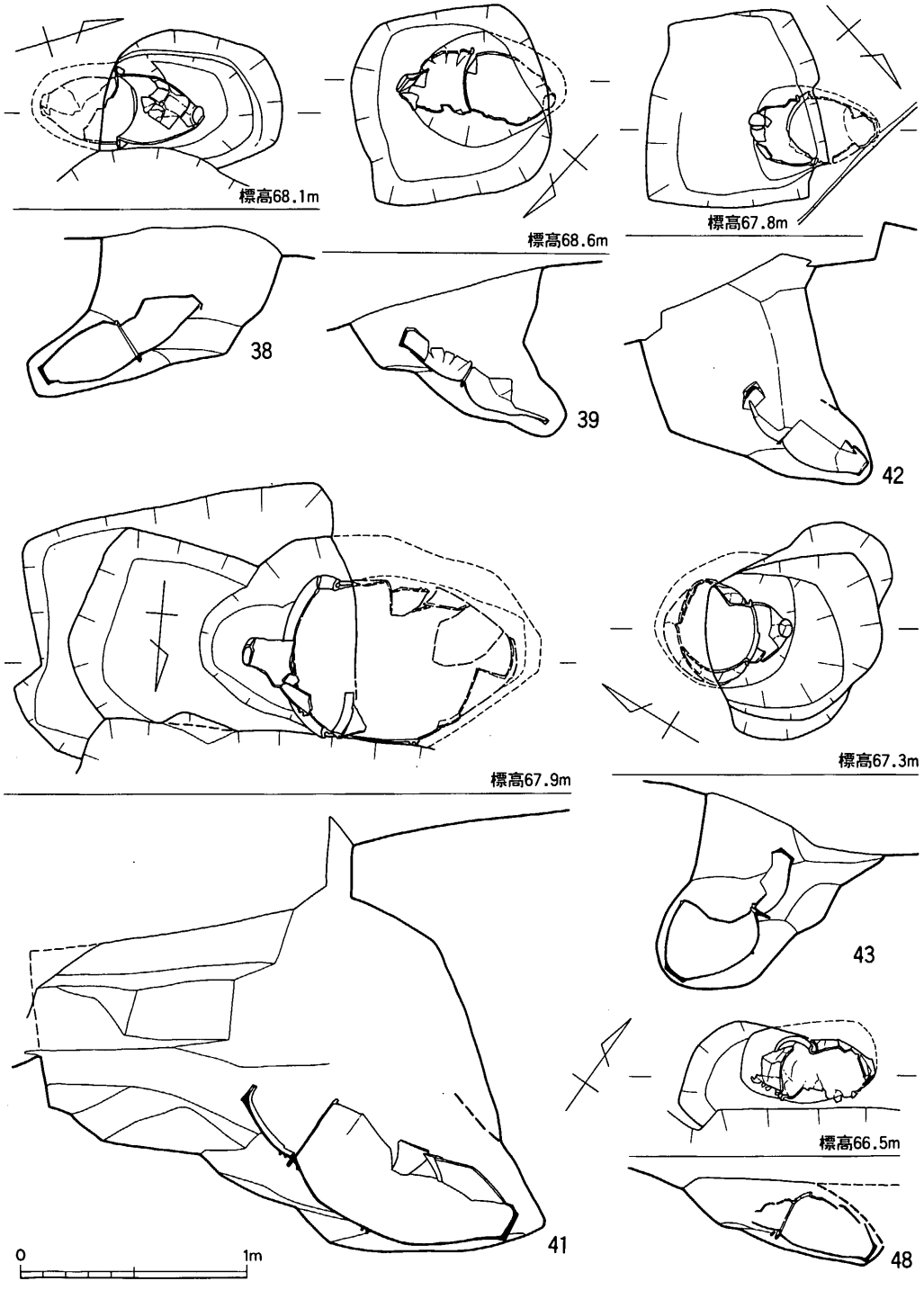




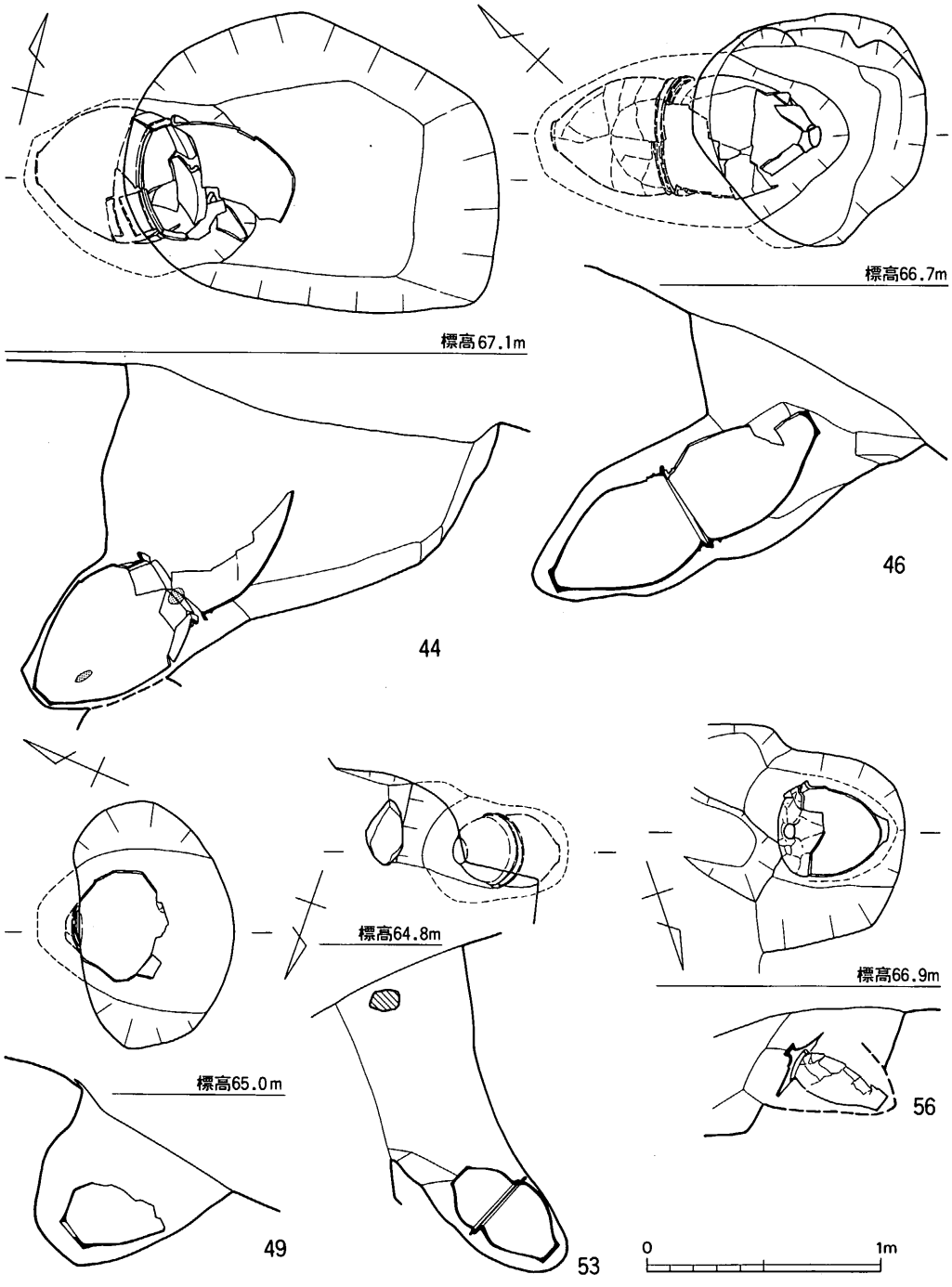




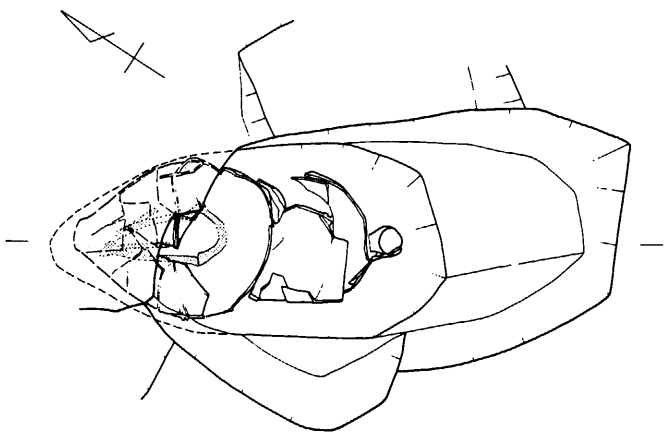
第81図　19・40・45号甕棺墓実測図（1/30）

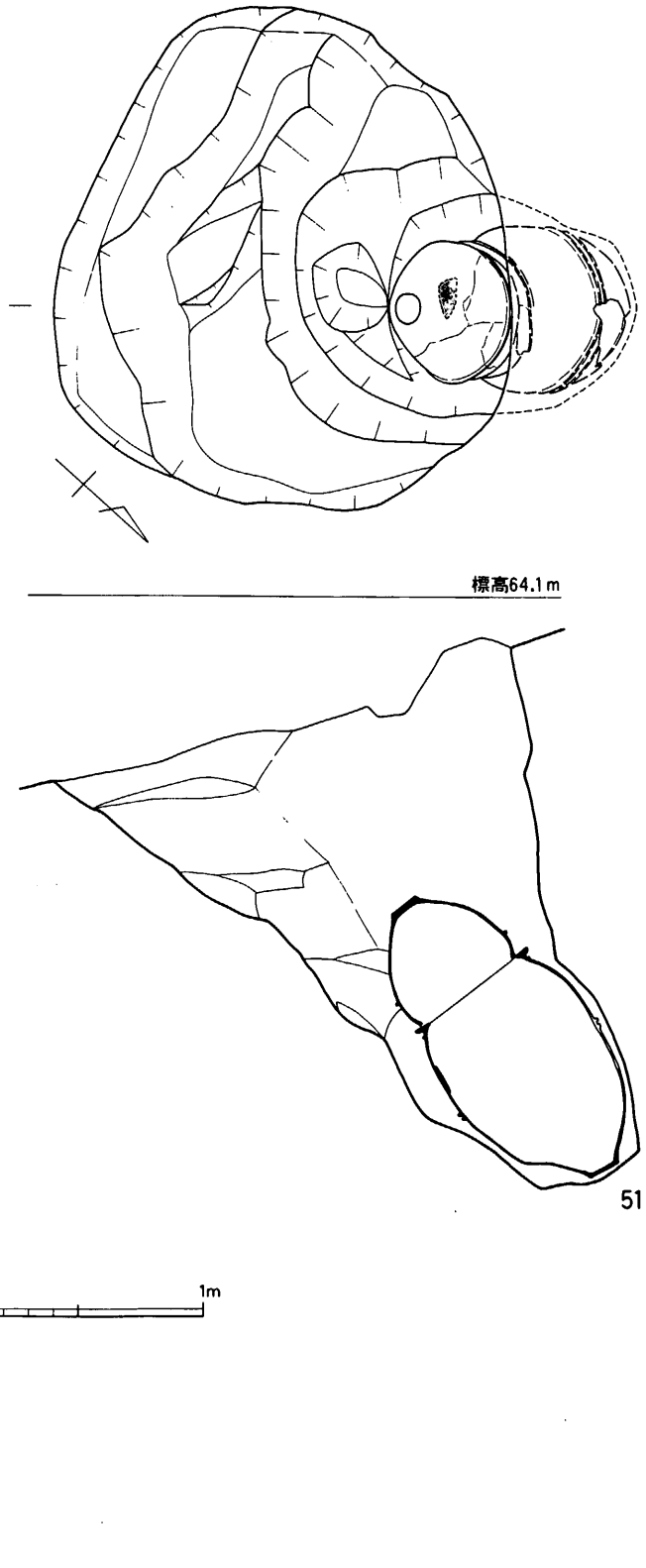


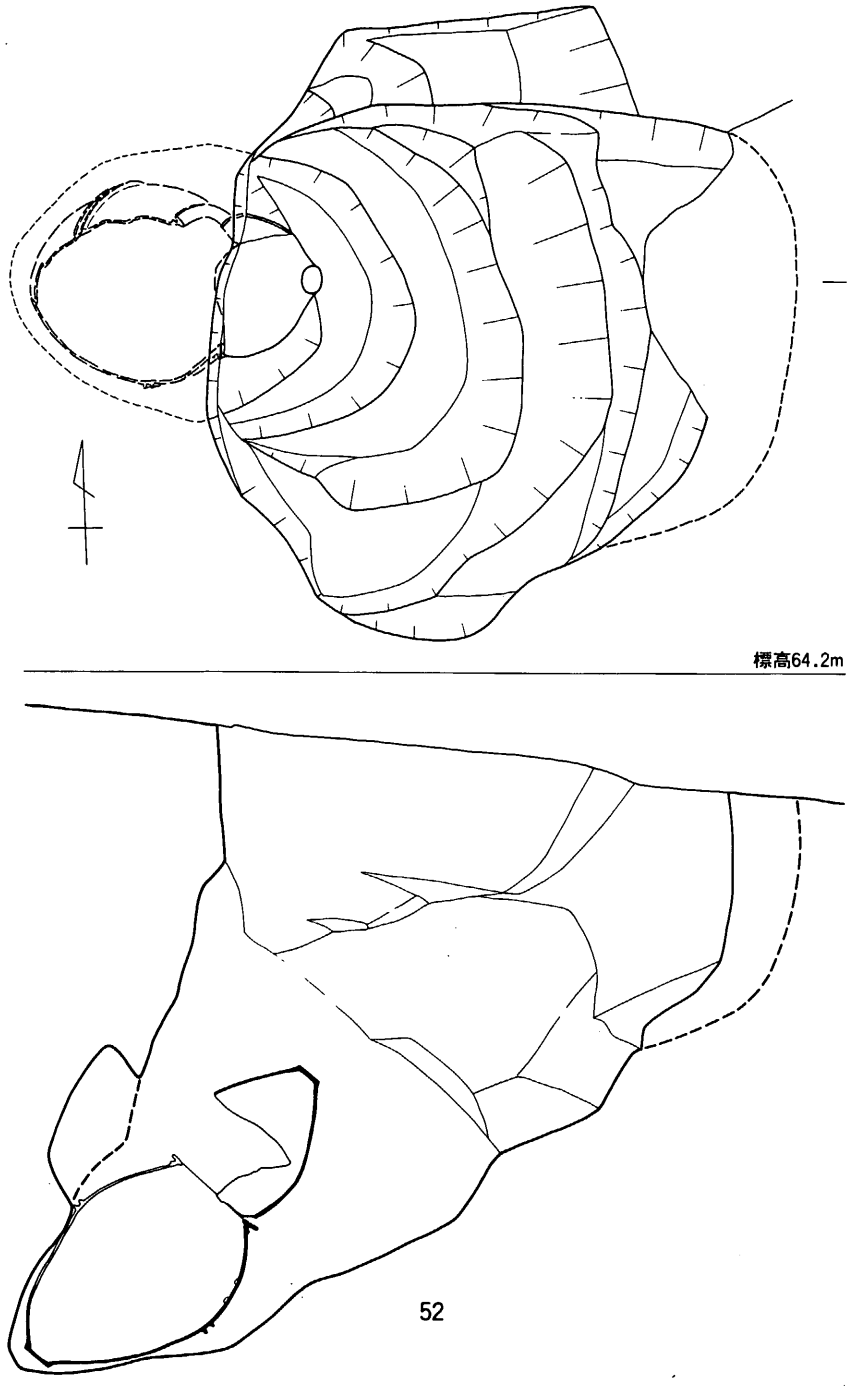
第82図　38・39・41・43～48号甕棺墓実測図（1/30）

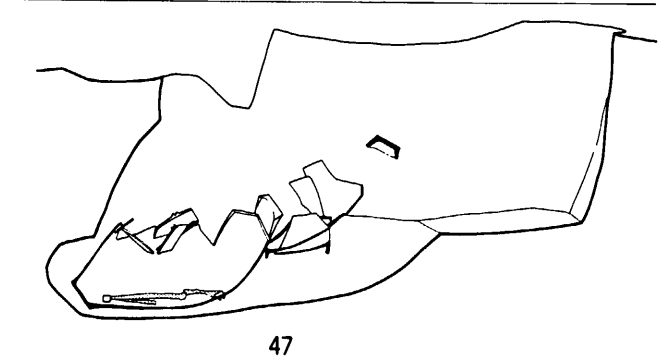


第83図　44・46・49・53・56号甕棺墓実測図（1/30）









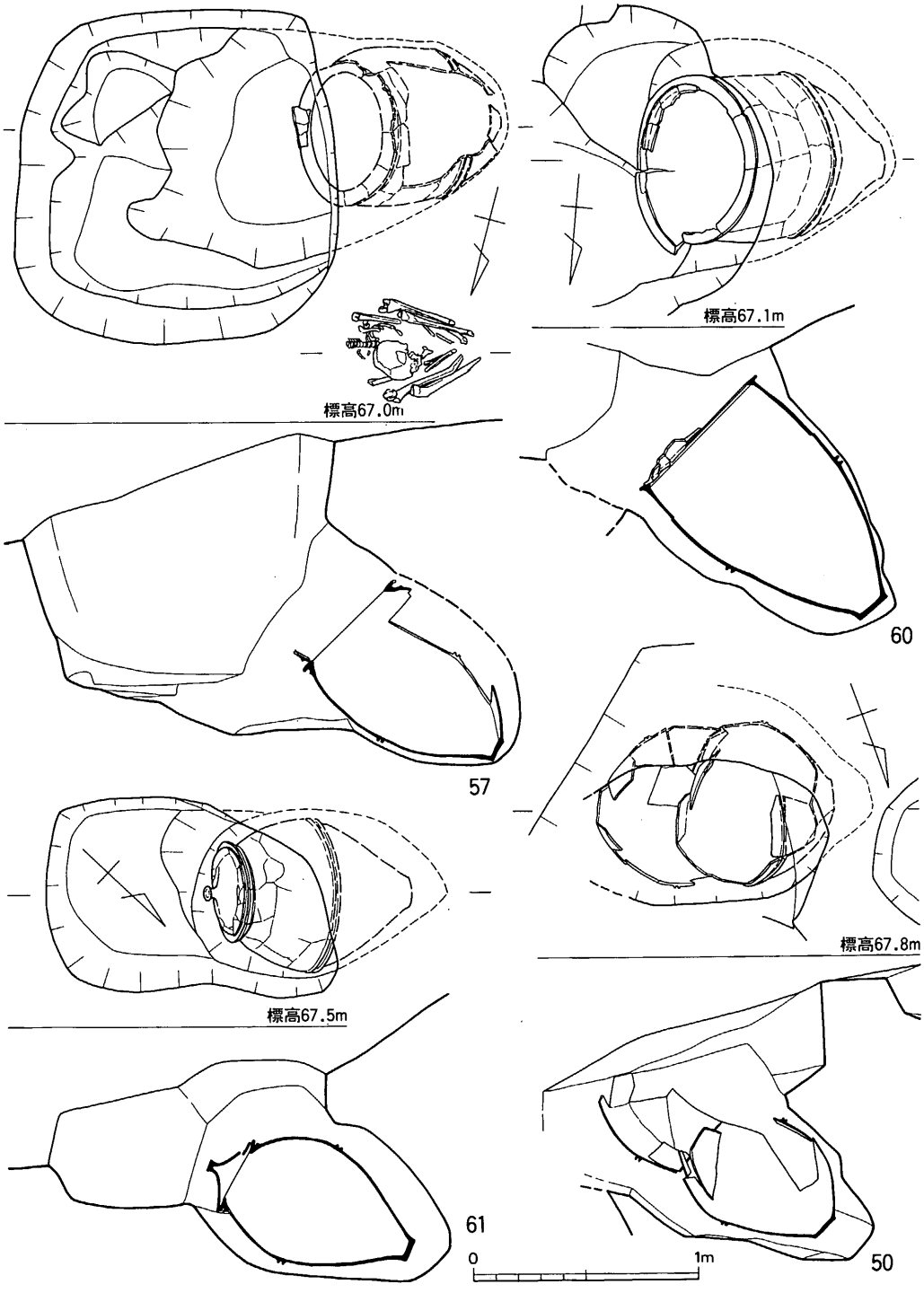
47

51

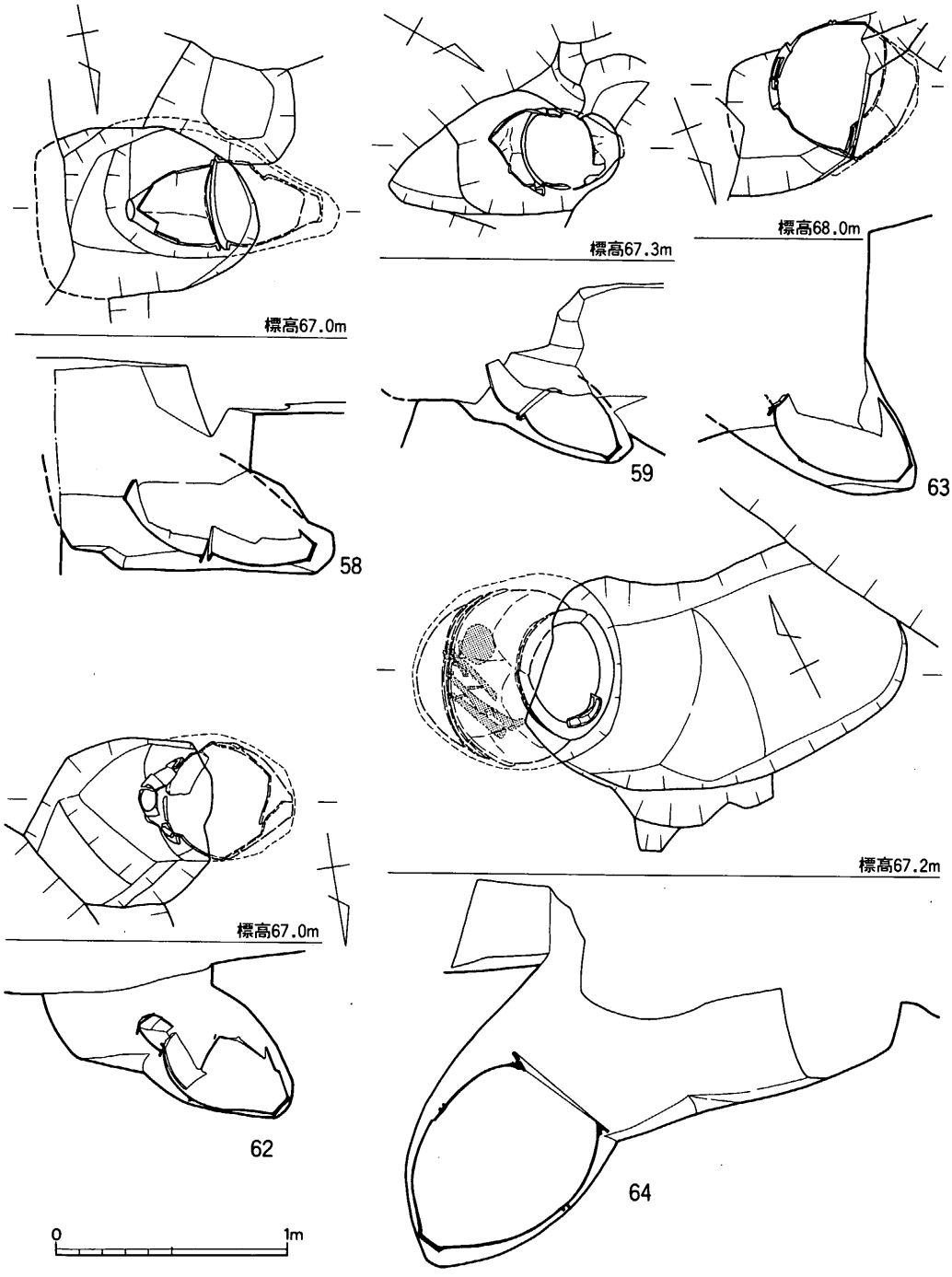
52

0 1m

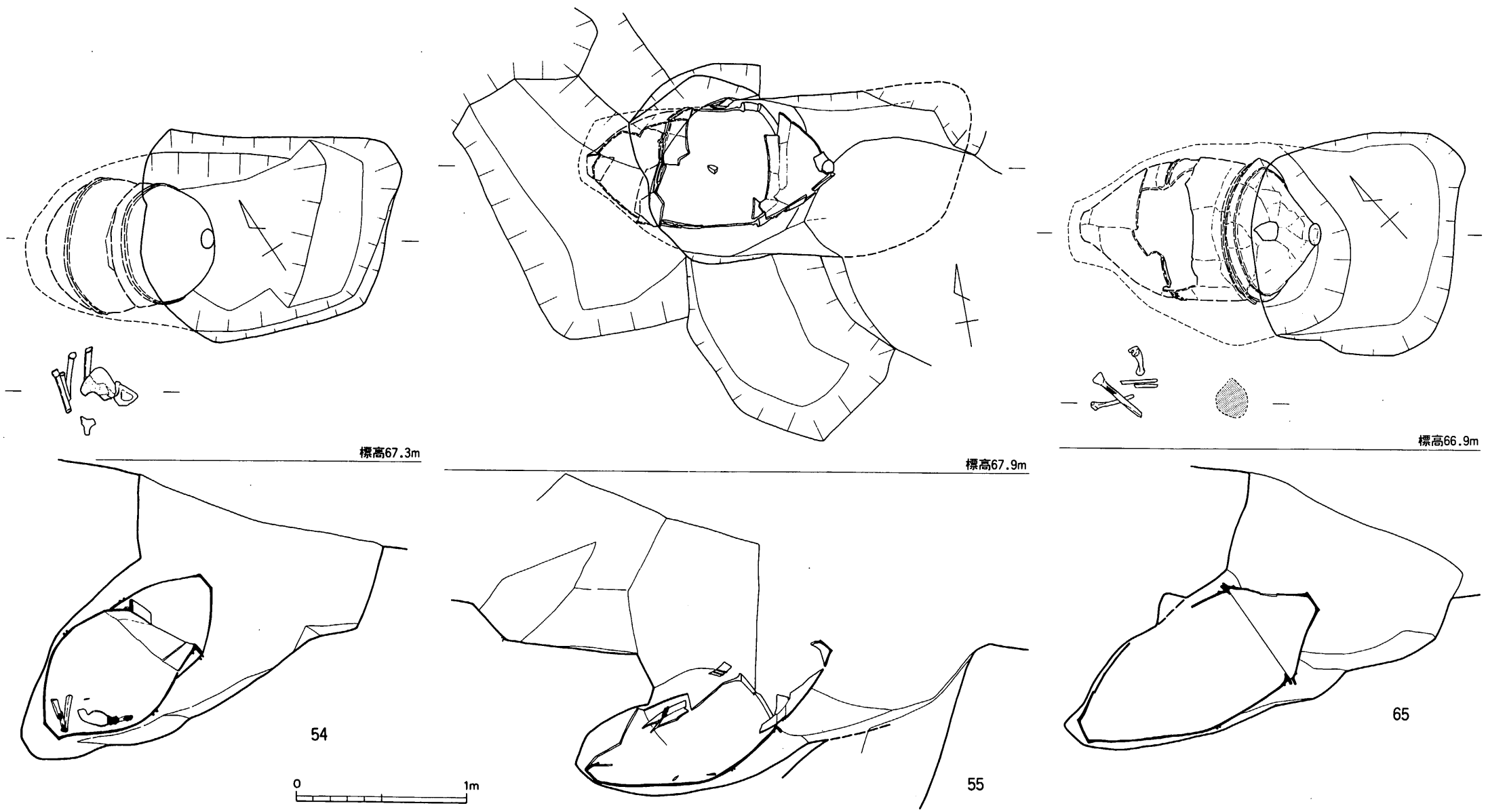
第84図　47・51・52号甕棺墓実測図（1/30）



第85図　50・57・60・61号甕棺墓実測図（1/30）



第86図　58・59・62・63・64号甕棺墓実測図（1/30）



第87図　54・55・65号甕棺墓実測図（1/30）

面は縦刷毛目の上をなでている。焼成良好，黄褐色を呈す。

下　甕（第　図）　口径33.7cm，胴部径33.3cm底径8.2cm，器高38cmで，突帯は見ない。内面は刷毛目の上をなで，外面は刷毛目の上に化粧土をかけているらしい。刷毛目原体は2.5cm程の幅らしく，1cm内に5～6本を見る。焼成良好，黄褐色を呈す。

5号甕棺墓（第74図5）

上部がかなり削平されていて遺存状態はよろしくない。単棺らしいが明確でない。主軸方位はN—71°—W。墓壙内の甕棺口縁付近と底部の下位に，甕棺とは別個の甕と壺の破片が5個体分ほど存した。

8号甕棺墓（第75図8）

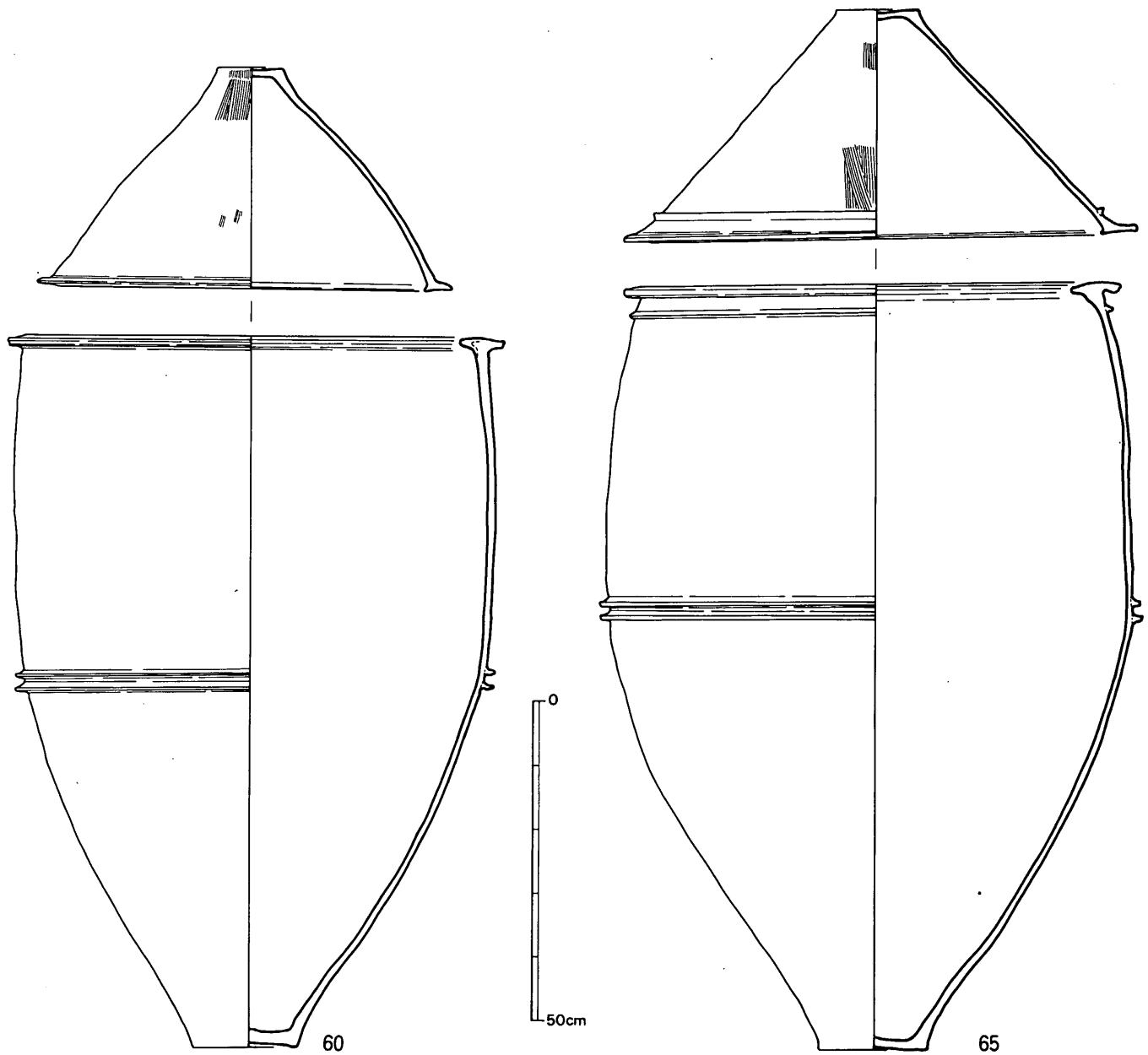
成人用で主軸方位S—57.5°—W。埋置傾斜39°。上甕は口縁打ち欠きで覆口の形態をとる。

（伊崎）

第22表　池の上遺跡甕棺墓一覧表

No.	棺大きさ	墓壙形状	墓壙の大きさ	合口形式	器種	全長(内法)	埋葬傾斜	埋葬方位	時期	土器の特徴	備　考
1	中型	—	—	覆口	甕＋甕	58＋	65°	N41°E	後期前	上甕：胴台形凸帯1本 下甕：胴台形凸帯1本	上下甕上半打欠き
2	大型	—	—	—	甕	63＋	37°	S11°W	中期後	下甕：胴コ字凸帯2本	上甕不明
3	大型	方　形	118×120	—	甕	98＋	54°	S80°W	中期末	下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕不明
4	小型	楕円形	145×120	接口	甕＋甕	75	50°	N54.5°E	中期末	上甕：逆L字口縁下三角凸帯 下甕：逆L字口縁下凸帯なし	第　図4
5	中型	楕円形	160×115	単棺	甕	68	7.5°	S71°E	中期末	内湾口縁下三角凸帯	墓壙内に土器片多数
6	中型	—	—	—	甕	75＋	27°	S78°E	中期後	下甕：口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	6号墳周溝で破壊
7	中型	—	—	(接口)	蓋＋甕	30＋	約42°	N87°E	中期後	上甕：蓋形か 下甕：タル形丹塗	6号墳周溝で破壊
8	中型	楕　円	127×86	覆口	蓋＋甕	75＋	39°	N57.5°E	中期末	下甕：内湾口縁下三角凸帯	上甕上半打欠き
9	中型	不整形	115×112	接口	甕＋甕	147	24°	N89.5°E	中期末	上甕：内湾口縁下三角凸帯、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	人骨
10	大型	隅丸方形	182×167	覆口	甕＋甕	158＋	40°	N69°W	中期末	上甕：胴コ字凸帯2本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕上半打欠き、内部に赤色顔料
11	中型	(楕円形)	130×102	接口	蓋＋甕	82＋	34°	S75.5°E	中期後	上甕：蓋形、下甕：T字口縁下台形凸帯胴張胴台形凸帯2本	6号墳周溝で破壊、人骨
12	大型	—	—	接口	甕＋甕	116＋	約19°	S19°E	中期後	上甕：T字口縁下三角凸帯、下甕：T字口縁下三角凸帯、胴張、胴台形凸帯2本	6号墳周溝で破壊、人骨、60号より新
13	小型	不整形	70×75	接口	甕＋甕	33＋	水平	S36°E	中期末	上甕：逆L字口縁下口唇状凸帯、胴口唇状凸帯1本、丹塗磨研	
14	中型	隅丸長方形	168×132	覆口	甕＋甕	97	60°	N77°E	後期前	上甕：胴凸帯なし、下甕：く字口縁下凸帯なし、胴台形凸帯1本	上甕口縁打欠き、人骨、標石あり、17・18号より新
15	大型	不整形	233×172	単棺	甕	103	49°	S84.5°W	後期初	く字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	標石あり、16・17号より新
16	大型	楕円形	164×133	単棺	甕	73	48°	N37.5°W	中期後	逆L字口縁下三角凸帯、胴台形凸帯2本	標石あり、15号より古い

No.	棺大きさ	墓壙形状	墓壙の大きさ	合口形式	器種	全長(内法)	埋葬傾斜	埋葬方位	時期	土器の特徴	備考
17	小型	楕円形	130×86	接口	鉢+甕	75	41°	N24°W	中期末	上甕：逆L字口縁下三角凸帯、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴台形凸帯2本	14・15・18号より古い
18	中型	隅丸長方形	123×142	接口	甕+甕	112	51°	N65.5°E	後期初	上甕：く字口縁下凸帯なし、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯	14号より古く、17号より新しい、標石、人骨あり
19	中型	隅丸長方形	170×62	接口	甕+甕	132	60°	N79°E	中期末	上下甕：内湾口縁下三角凸帯	18・20号より古く、人骨、標石あり
20	小型	不整形	50×68	接口	甕+甕	69	26°	N77°E	後期初	上下甕：く字口縁下凸帯なし	
21	中型	楕円形	72×65	覆口	甕+甕	91	48.5°	N14°W	中期末	上甕：胴凸帯なし 下甕：内湾口縁下三角凸帯	上甕上半打欠き
22	大型	不整形	141×97	—	甕	87	47°	N87.5°E	中期末	下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	下甕に穿孔あり
23	中型	方形	123×124	(覆口)	甕+甕	96	40°	S59°W	後期前	上甕：く字口縁下凸帯なし、胴台形凸帯1本 下甕：く字口縁下凸帯なし、胴台形凸帯1本	上甕方向逆 下甕に穿孔あり
24	大型	隅丸長方形	190×142	覆口	甕+甕	110+	46°	N81°E	中期末	上甕：胴コ字凸帯、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕口縁打欠き 人骨に赤色顔料付着
25	小型	長楕円形	142×65	接口	高杯+甕	42	67°	N60°E	後期初	上甕：鋤先口縁、丹塗磨研 下甕：く字口縁下三角凸帯、胴台形凸帯	52号より新しい
26	大型	隅丸方形	137×150	接口	甕+甕	138	37.5°	S82°E	中期末	上甕：胴コ字凸帯3本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	52号より新しい、上甕上半打欠き屈葬人骨、赤色顔料
27	中型	長楕円形	114×80	覆口	甕+甕	95+	43°	S31°W	中期末	上甕：胴凸帯なし 下甕：内湾口縁下三角凸帯、胴凸帯なし	上甕上半打欠き
28	小型	不整形	61×66	接口	甕+甕	50+	49°	S68°E	後期初	上下甕：く字口縁下凸帯なし	
29	大型	隅丸方形	132×148	接口	甕+甕	127	47.5°	N81°E	中期末	上甕：胴コ字凸帯2本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕上半打欠き 屈葬完全人骨
30	中型	隅丸長方形									未掘
31	小型	隅丸長方形									未掘
32	大型	隅丸長方形									未掘
33	小型	不整形	50×40	接口	甕+甕	55+	19.5°	S55°E	中期中	上下甕：逆L字口縁下凸帯なし	粘土目張りらしきものあり
34	小型	不整形									未掘
35	小型	不整形									未掘
36	小型	隅丸方形	64×80	接口	甕+甕	73	7°	N56°E	中期中	上甕：逆L字口縁下凸帯なし 下甕：T字口縁下凸帯なし	
37	小型										未掘
38	小型	隅丸長方形	80×60	接口	甕+甕	74	約28°	N17°E	中期末	上下甕：逆L字口縁下凸帯なし	
39	小型	隅丸方形	86×84	接口	甕+甕	72+	29°	N49°E	後期初	上甕：く字口縁、胴三角凸帯1本 下甕：胴凸帯なし	上甕口縁打欠き
40	大型	隅丸長方形	180×149	接口	甕+甕	140+	37°	S88°E	中期末	下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕上半打欠き、41号より新人骨
41	大型	隅丸長方形	152×123	接口	甕+甕	128	28°	N85°E	中期後	上甕：胴コ字凸帯2本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕上半打欠き 40号より古
42	小型	台形	82×88	接口	甕+甕	61	35°	S48°E	中期後	上下甕：逆L字口縁下凸帯なし	50号より新

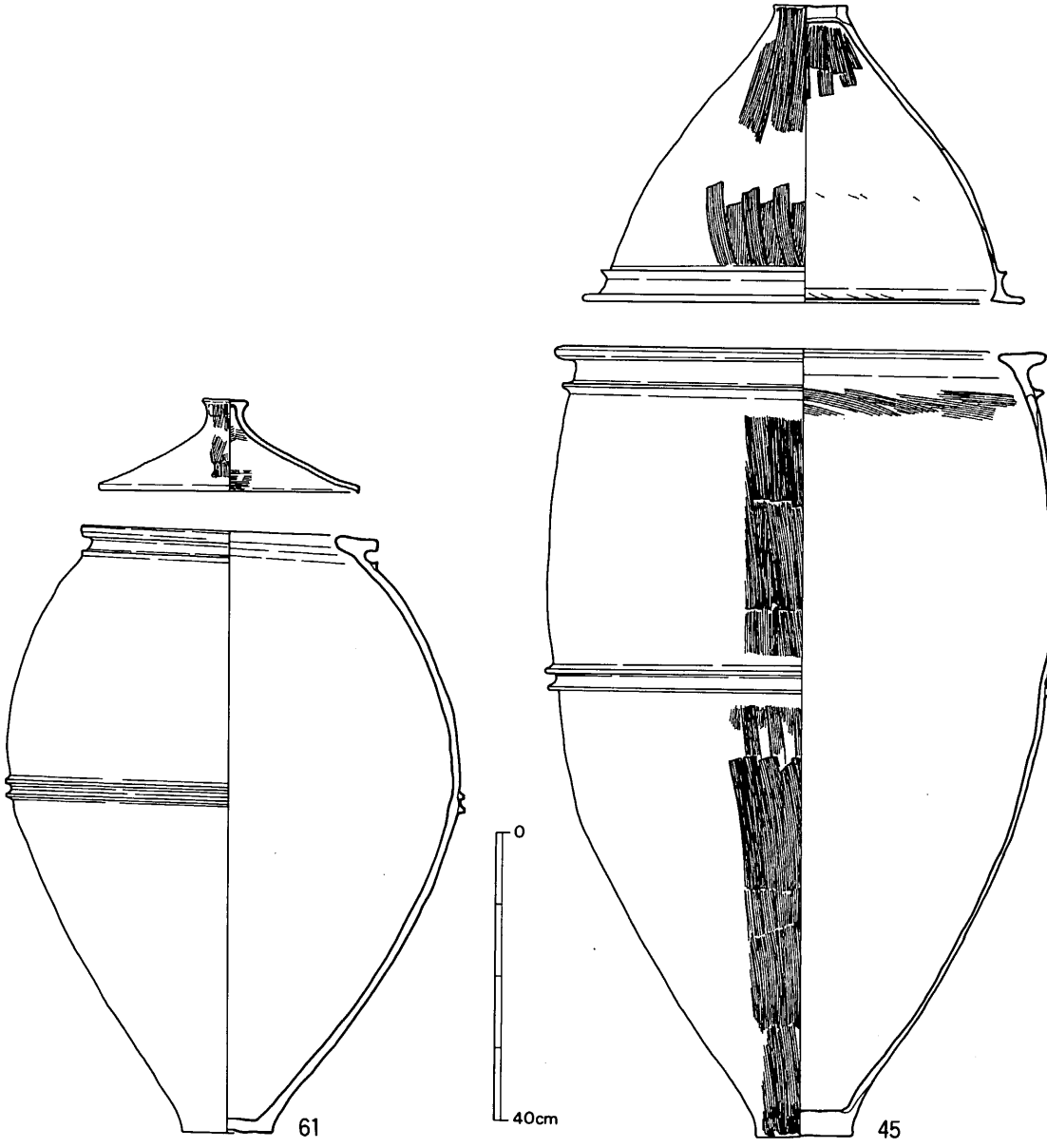


第88図　甕棺実測図①（1/10）

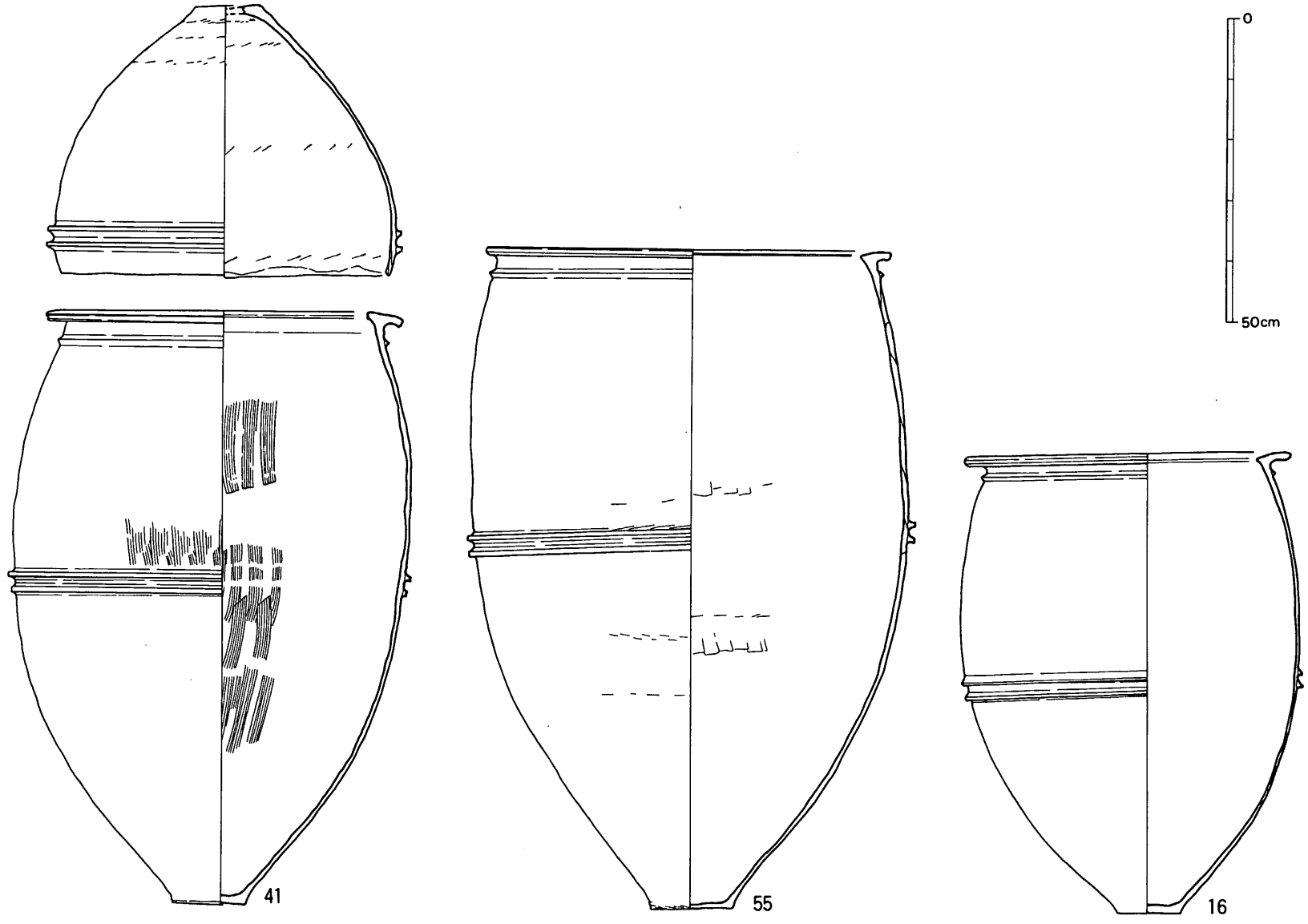
No.	棺大きさ	墓壙形状	墓壙の大きさ	合口形式	器種	全長(内法)	埋葬傾斜	埋葬方位	時期	土器の特徴	備考
43	小型	隅丸方形	85×94	接口	甕＋甕	71	48.5°	S31°W	後期前	上甕：く字口縁下凸帯なし 下甕：く字口縁、胴台形凸帯1本	55・63号より新
44	中型	隅丸長方形	161×125	接口	甕＋甕	140＋	41°	N76°E	中期末	上下甕：内湾口縁下三角凸帯	45号より新 人骨片
45	大型	長楕円形	215×173	接口	鉢＋甕	147	26°	S45°E	中期中	上甕：T字口縁下三角凸帯、下甕：T字口縁下三角凸帯、胴大三角凸帯2本	44号より古 人骨
46	中型	不整形	100×99	接口	甕＋甕	130	58°	S42°W	中期末	上下甕：内湾口縁下三角凸帯	
47	中型	隅丸長方形	167×100	覆口	甕＋甕	135	26°	S33°E	中期末	上甕：内湾口縁下三角凸帯、下甕：胴台形凸帯2本、外甕：逆L字口縁下三角凸帯	下甕口縁打欠き、合口を別個体で覆う。人骨片、62号より古
48	小型	隅丸長方形	55×50	接口	甕＋甕	55＋	29°	S54°W	後期初	上下甕：く字口縁下凸帯なし	
49	大型	隅丸長方形	65×105	—	甕	30＋	42°	S23°E	—		下甕の上半以上破壊
50	中型	不整形	—	覆口	甕＋甕	115＋	42°	S70°E	中期中	上甕：胴大三角凸帯2本 下甕：胴台形凸帯2本	上下甕口縁打欠き 42号より古
51	大型	楕円形	185×200	接口	鉢＋甕	131	53°	S42°E	中期末	上甕：口縁反りなし、胴台形凸帯1本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯	52号より新 人骨、赤色顔料あり
52	大型	隅丸長方形	230×213	接口	甕＋甕	155	46.5°	S87°E	中期末	上甕：胴凸帯なし、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕口縁打欠き、51号より古 人骨、赤色顔料あり
53	小型	楕円形	70×60	接口	鉢＋甕	50	45°	N70°E	中期末	上下甕：逆L字口縁下凸帯なし	18号より古
54	大型	隅丸長方形	152×122	覆口	甕＋甕	125	45°	S55°E	中期後	上甕：胴コ字凸帯2本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕上半打欠き、55号より新 人骨
55	大型	隅丸長方形	185×92	呑口	甕＋甕	157	29°	S80°E	中期後	上甕：胴コ字凸帯2本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	43号より古、上甕口縁打欠き 石剣切先2個、60号より新
56	小型	—	—	接口	蓋＋甕	43	約29°	S72°E	後期初	上甕：蓋形 下甕：く字口縁下凸帯なし	
57	大型	隅丸方形	143×150	接口	甕＋甕	100＋	40°	N75°E	中期末	上甕：胴三角凸帯1本、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	上甕上半打欠き 屈葬人骨
58	小型	隅丸長方形	100×75	接口	甕＋甕	82	19°	S78°E	中期末	上下甕：逆L字口縁下凸帯なし	
59	小型	長楕円形	100×54	接口	甕＋甕	67＋	42°	S29°E	後期初	上下甕：く字口縁下凸帯なし	64号より新しい
60	大型	隅丸長方形	150×145	接口	鉢＋甕	115＋	45°	N85°W	中期前	上甕：T字口縁下凸帯なし、下甕：T字口縁下凸帯なし、胴大三角凸帯2本	12・55号より古
61	中型	不整形	125×85	接口	蓋＋甕	92	25°	S43°E	中期中	上甕：蓋形、下甕：T字口縁下三角凸帯、胴台形凸帯2本	
62	小型	不整形	80×73	接口	鉢＋甕	68	40°	S81°E	後期前	上甕：く字口縁下凸帯なし、下甕：く字口縁下凸帯なし、胴台形凸帯1本	47号より新
63	小型	—	—	接口	鉢＋甕	60＋	38.5°	S68°E	中期中	上甕：T字口縁、下甕：T字口縁下凸帯なし胴三角凸帯2本	
64	大型	隅丸長方形	165×90	接口	鉢＋甕	87＋	48.5°	S33°E	中期末	上甕：逆L字口縁下三角凸帯、下甕：逆L字口縁下三角凸帯、胴コ字凸帯2本	59号より古 屈葬人骨
65	大型	隅丸方形	119×133	接口	鉢＋甕	154	30°	S42°E	中期中	上甕：T字口縁下三角凸帯、下甕：T字口縁下三角凸帯、胴台形凸帯2本	屈葬人骨 大腿骨に朱付着

池の上遺跡の甕棺墓は，第22表のように中期前半に始まり，後期前半で終息をむかえている。調査した甕棺では，中期前半のものは60号の1例のみであったが，中期中頃でやや増加し，中期末～後期初頭頃に全盛期を迎えている。次の後期前半は急激に減少して，後期中頃以後のものは1例もない。

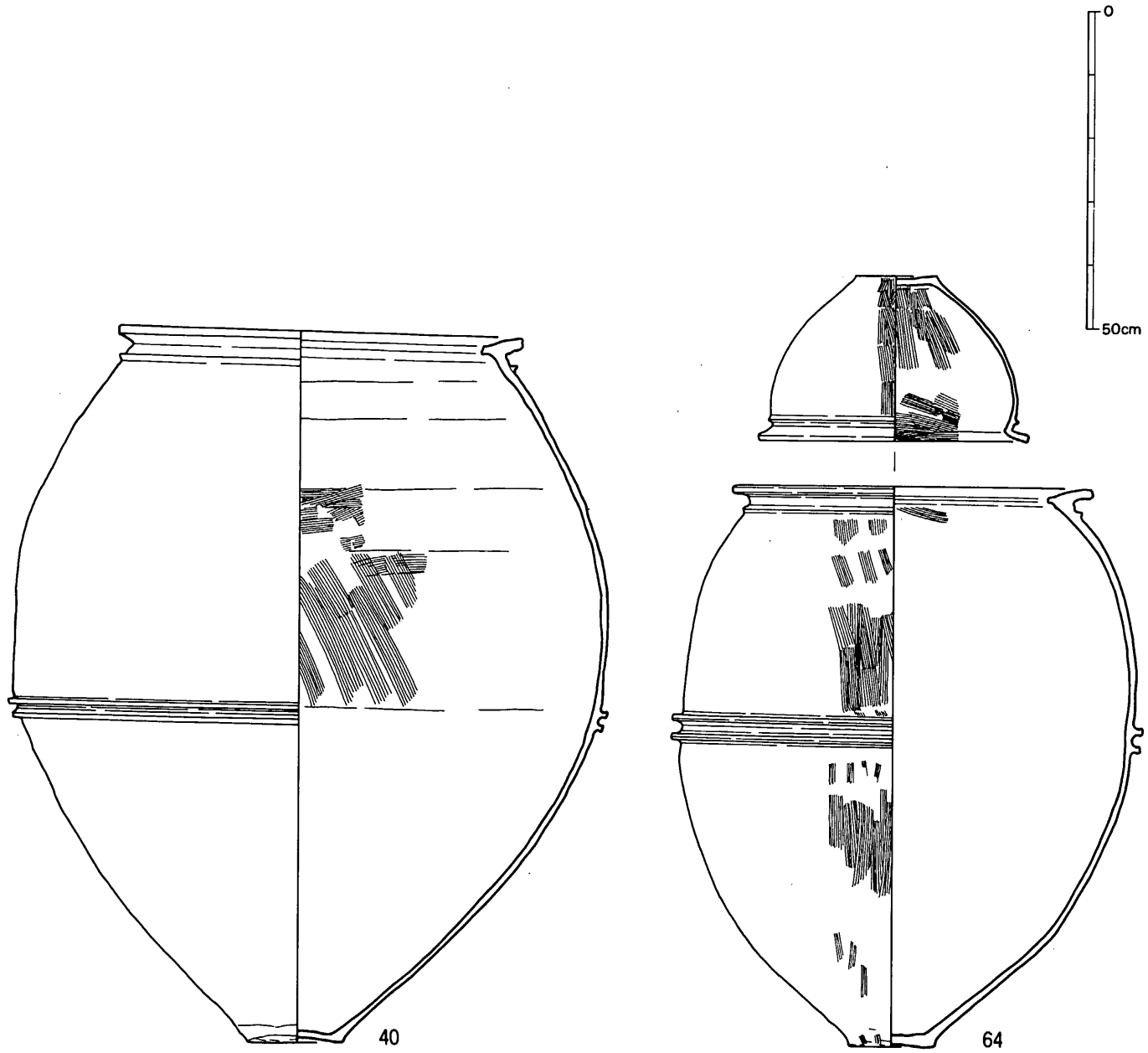
調査区内の甕棺墓の配置を見ると，いくつかの群集する単位が見られる。5号墳の墳丘内の調査をしていないので，この地区を除外すると，最も群集するのが6号墳の南半である。次に群集するのが，51・52号を中心とする1群であるが，この2群には2，3の相違点がある。そ



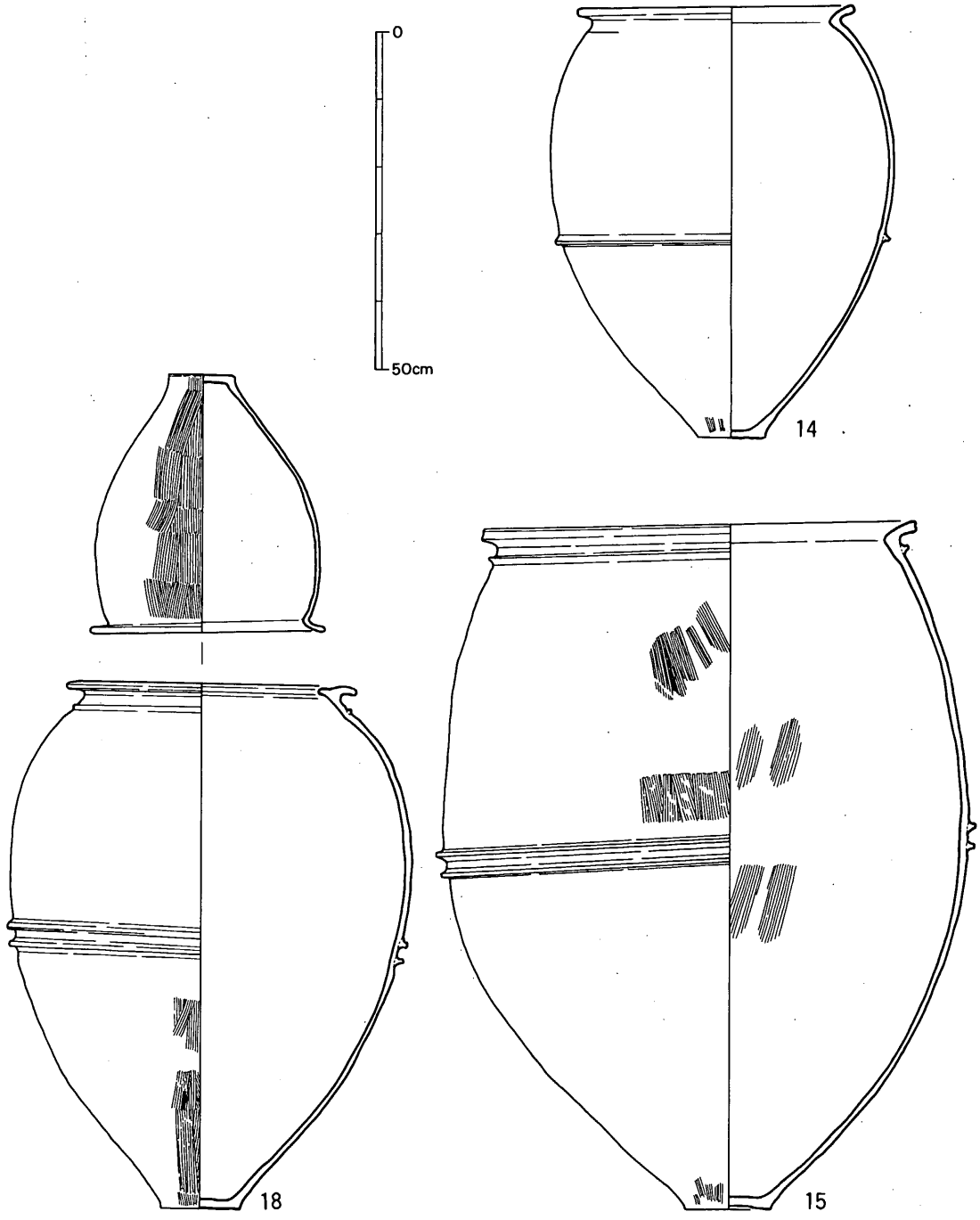
第89図　甕棺実測図②（1/10）



第90図　甕棺実測図③（1/10）



第91図　甕棺実測図④（1/10）

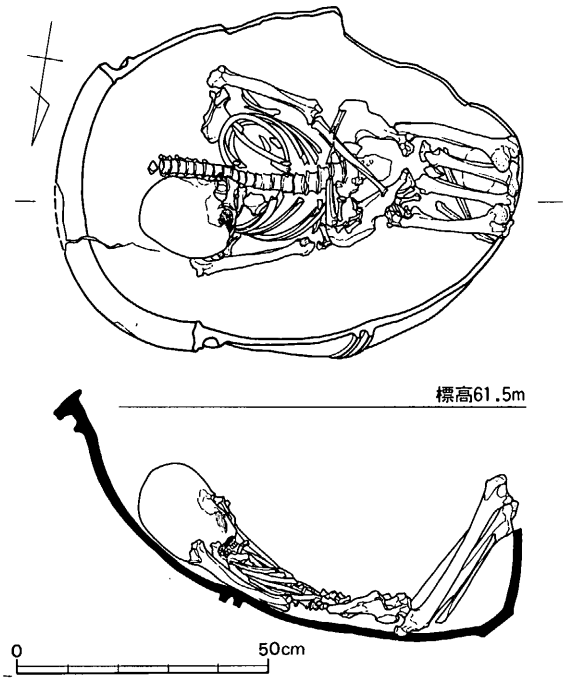


第92図　甕棺実測図⑤（1/10）

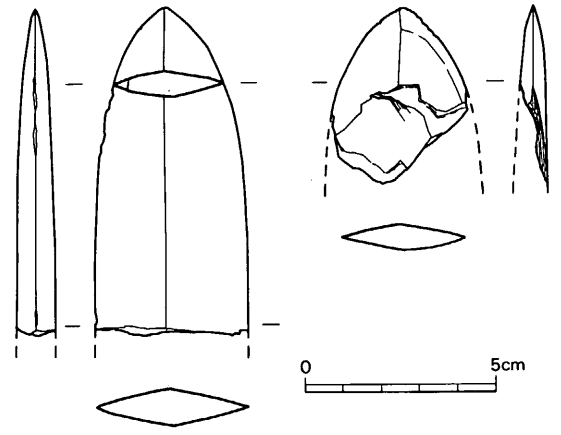
の第１が西の１群には中期中頃以前のものが含まれるが，東の群には１例もないこと。第２点は，西の群の甕棺は１・２の例外を除くと概略東から西に向って墓壙が掘られているのに対し，東の群はその逆のものや北から掘り込まれるものが含まれている。第２点は地形に左右される可能性が強いが，第１点は丘陵の高い位置から順に墓地が営まれてきた，墓地の発展過程を知ることができる。

以上の２群とは別に，独立した甕棺墓が２基ある。それは10号と29号で，２基共中期末の成人棺である。この２基は，わずかな小児棺を伴っているが，地山整形された「墳丘」の中心に位置し，「墳丘」内には他の成人棺が見あたらない。この２基を他と比較すると，10号は赤色顔料が他の５基より多く，29号は最高齢者の可能性がある。しかし，特別な副葬品を持つなど他の甕棺と大きな違いがないことから，今後の実例の増加と，この池の上墓地群の南西側の続きの調査完了を待ちたい。しかし，さきに述べた２群の性格づけも，甕棺全体の整理完了後でないと結論を出せないし，各群の中にも小単位が明らかになるであろう。

池の上甕棺墓では，祭祀用土器以外に副葬品らしきものは１例も発見できなかったが，伴出物といえるものが出土した甕棺が１基のみある。それは55号甕棺で，下甕内で多少浮いた状態で出土した磨製石剣の切先片２点である。55号甕棺は中期後半の成人用であるが，埋葬人骨は遺存していなかった。しかし，これまでの例から棺内から出土する銅剣や石剣の切先は，死者の体内に刺突されたものである可能性が多いことから，この55号の例もそのように解釈したい。１棺に２点が出土したものは，前原町石ヶ崎甕棺墓や筑紫野市永岡甕棺墓にも例がある。



第93図　29号甕棺人骨出土状態実測図（1/15）



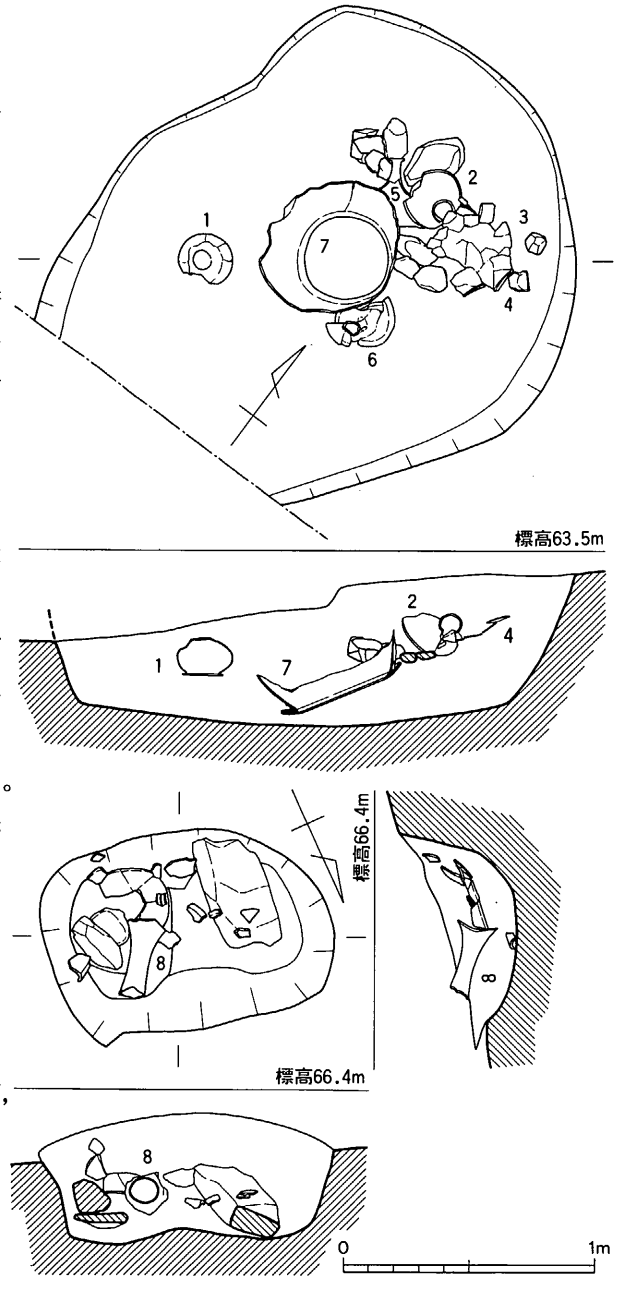
第94図　55号甕棺墓出土石剣片実測図（1/2）

(3) 祭祀遺構

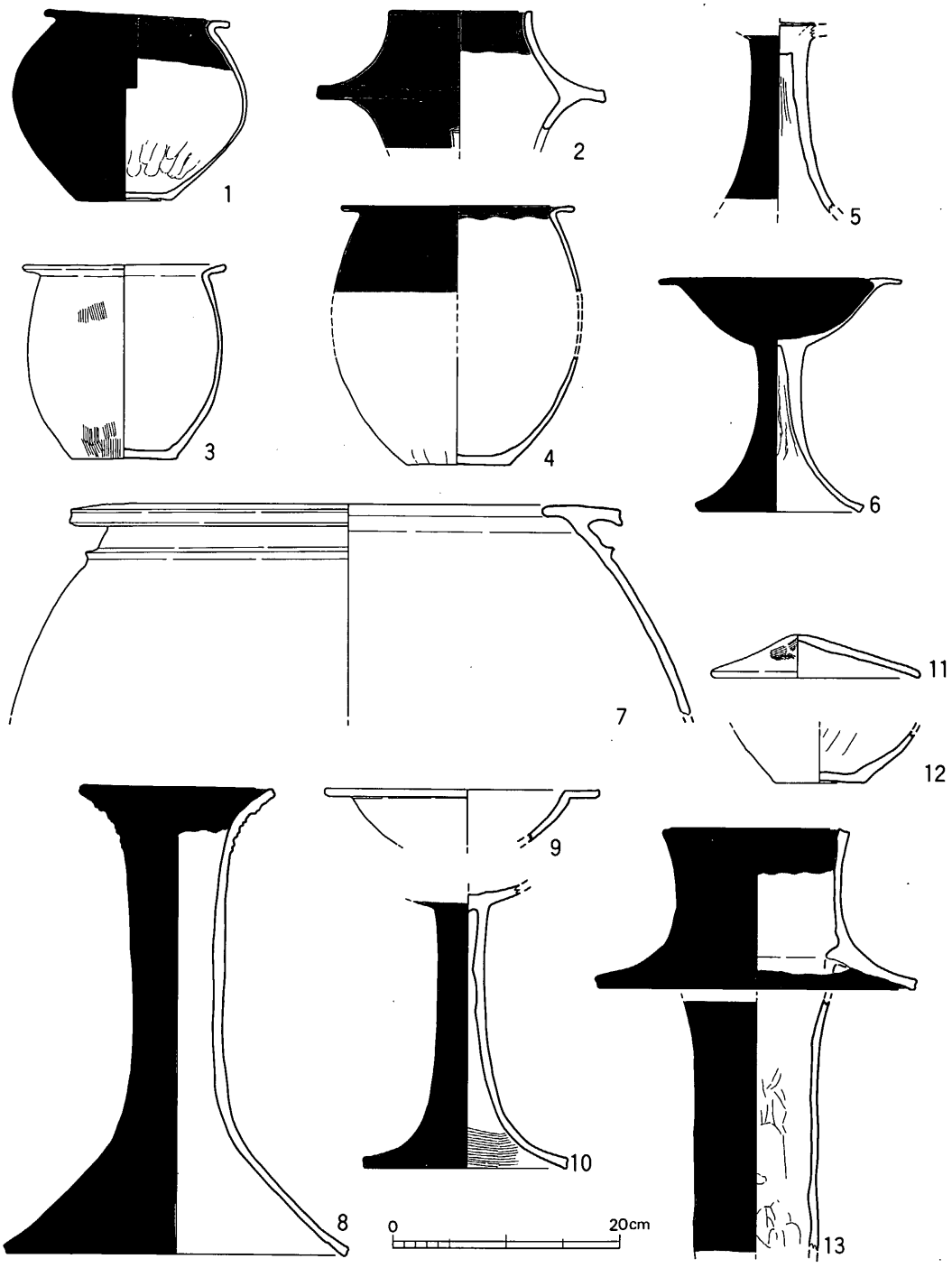
池の上遺跡では，９ヶ所以上の祭祀用土器群が検出された。これらの土器群は，水洗されていないものもあるために，ここでは概要を述べるにとどまるが，祭祀土器群は尾根線から北側で発見されている。これは先に述べたように，南側斜面が削平されていることにも関係すると思われる。尾根線上から出土する甕棺以外の土器片は，主に甕棺墓壙を検出する際に出土するもので，特定の甕棺墓に関連づけるのは困難である。しかし，墓壙埋土中にも丹塗土器が含まれているので，北斜面の土器群の整理が進めば祭祀土器群が特定の甕棺墓と関連してくる可能性がある。

丹塗磨研土器を伴った土壙状遺構を祭祀遺構として，１号から９号まで番号を付したが，これらのほかに６号墳の北側壙下や北東側斜面にも旧地表に丹塗土器群が検出されている。現状では，祭祀遺構を特定の甕棺墓に関連づけることはできないが，祭祀土器群には１号や９号および６号墳北側祭祀土器群には，大型土器の口縁部が含まれており，これらの大型土器は甕棺の上甕に使用する際に打ち欠いたものであることから，特定の甕棺墓に関連づけ可能である。また，祭祀土器の大半は，中期末～後期初頭のものである。

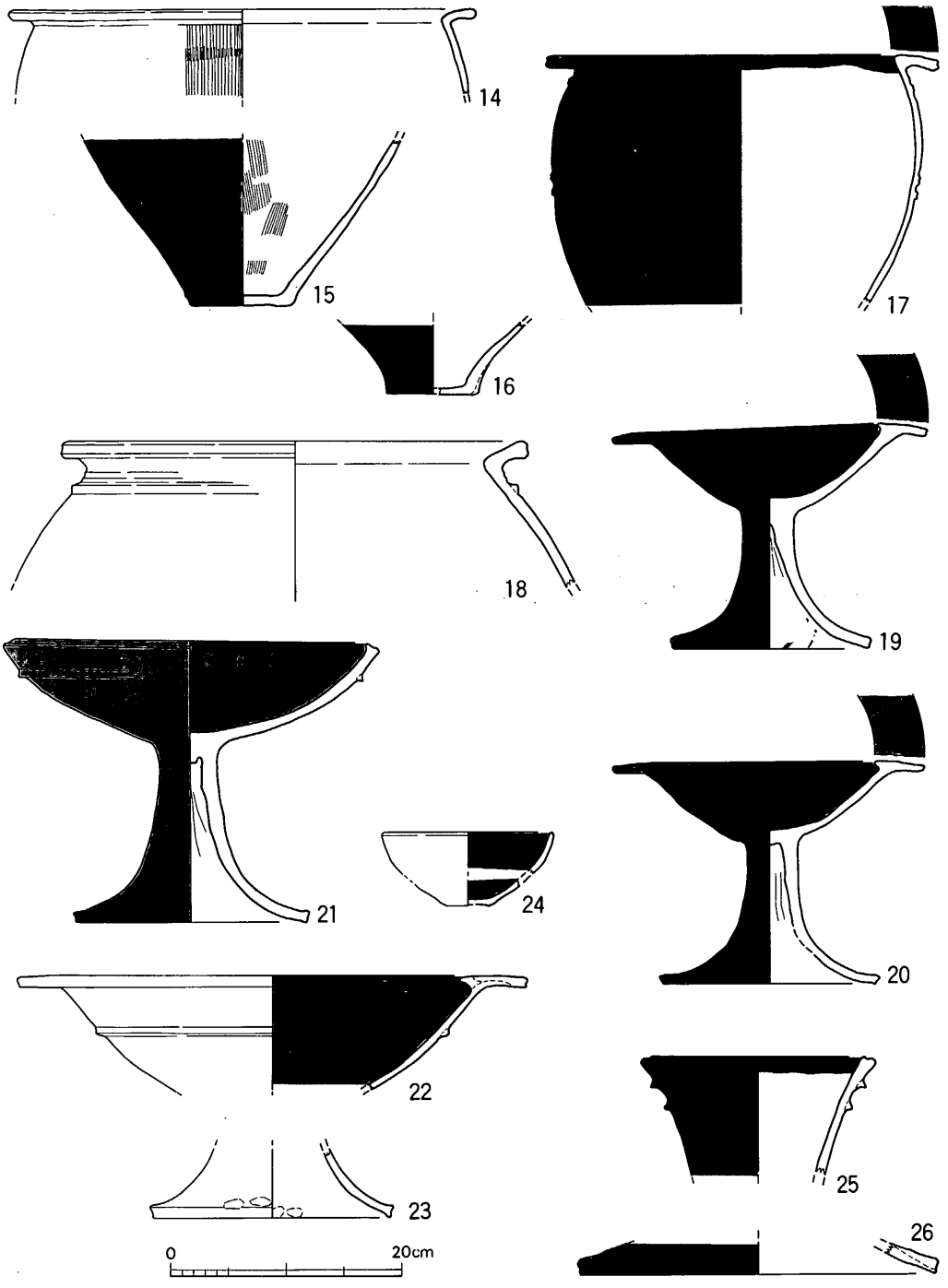
（柳田）



第95図　１・２号祭祀遺構実測図（1/30）



第96図　祭祀土器実測図①（1/6）



第97図　祭祀土器実測図②（1/6）

第23表　池の上祭祀土器一覧表（第96・97図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	無頸壺	1号祭祀土壙	①16.5 ②17.0	①細砂多く、金雲母・角閃石若干含む②橙・黄橙色③口縁内外ヨコナデ、胴下半指ナデ痕④丹塗磨研、磨滅	孔はなし
2	大型器台	1号祭祀土壙	①12.7 ②12.5＋	①細砂・金雲母若干含む②にぶ橙色③横方向ナデ、上半丹塗④全面丹塗、鍔先端ヨコナデ、他はタテミガキ	長方形透窓4ヶ所
3	小甕	1号祭祀土壙	①17.6 ②17.3	①細砂多く、赤褐色粒若干含む②にぶ橙色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④細ハケ目、底ナデ、全体に磨滅	
4	小甕	1号祭祀土壙	①20.6 ②約23.0	①細砂・黒色粒若干含む②にぶ橙色③口縁ヨコナデ胴ナデ④丹塗ナデか、底ケズリ、全体に磨滅	
5	高杯	1号祭祀土壙	— ②16.5＋	①細砂多く含む②明黄橙色③杯丹塗、磨滅脚シボリ板圧痕ナデ④丹塗タテミガキ、磨滅	
6	高杯	1号祭祀土壙	①21.5 ②20.8	①細砂多く、金雲母若干含む②黄橙色・丹赤色③杯丹塗ミガキ、脚シボリ④丹塗、磨滅	
7	大甕	1号祭祀土壙	①48.2 ②18.5＋	①細粗砂多く、赤褐色粒若干含む②黄橙色③口縁内外ヨコナデ、全体に磨滅	胴部打欠き
8	大型器台	2号祭祀土壙	①17.3 ②41.2	①微細砂多く金雲母・赤褐色粒若干含む②にぶ橙色③上端丹塗ヨコナデ、胴ナデ④丹塗、上端ヨコナデ、全体磨滅	
9	高杯	6号墳北旧表土	①24.3 ②4.8＋	①赤褐色粒多く、細砂・角閃石若干含む②明茶・にぶ橙色③口縁ヨコナデ、ミガキ④ミガキ	
10	高杯	6号墳北旧表土	裾径18.0 ②25.3＋	①細砂・角閃石少く赤褐色粒多く含む②明茶・にぶ橙色③杯ナデ、脚シボリ、ナデ、下端ヨコハケ目④丹塗タテミガキ	
11	蓋	8号祭祀土壙	①18.6 ② 3.8	①細砂多く金雲母若干含む②黄味白色③ナデ④細ハケ目、裾部磨滅	
12	壺	8号祭祀土壙	底径7.6 ②4.1＋	①細砂多く含む②赤味黄・暗黄色③横方向ナデ④磨滅で不明	
13	大型器台	8号祭祀土壙	①16.4 ②38.0＋	①細砂・黒色粒若干含む②明黄橙・赤味黄色③上端丹塗ヨコナデ、指圧痕ナデ④丹塗、上部暗文、タテミガキ	柱状部の上下は不明
14	甕	8号祭祀土壙	①40.5 ②7.3＋	①細砂多く黒色粒若干含む②にぶ橙・赤味黄色③口縁ヨコナデ、胴ナデ④胴ハケ目	
15	甕	8号祭祀土壙	底径9.0 ②14.5＋	①細砂・金雲母・角閃石・黒色粒含む②にぶ橙色③胴タテハケ目、底ナデ④タテハケ目、底ナデ	
16	甕	9号祭祀土壙	底径8.0 ②6.4＋	①細砂・黒色粒若干含む②明黄橙色③ナデ④胴丹塗タテミガキ、底ナデ	
17	甕	9号祭祀土壙	①33.8 ②21.5＋	①細砂・黒色粒若干含む②明黄橙色③口縁丹塗暗文、胴ナデ④丹塗、口縁凸帯ヨコナデ、他横方向ミガキ	
18	大甕	9号祭祀土壙	①40.4 ②12.7＋	①砂粒多く含む②明黄橙色③磨滅④口縁ヨコナデ、胴磨滅	
19	高杯	9号祭祀土壙	①27.3 ②19.5	①細砂・黒色粒若干含む②明黄橙色③口縁丹塗、暗文ヨコナデ杯ヨコナデ、脚シボリナデ④丹塗杯ヨコミガキ、脚タテミガキ	
20	高杯	9号祭祀土壙	①27.1 ②19.3	①細砂若干含む②にぶ橙・赤味橙色③口縁丹塗暗文ヨコナデ、杯ヨコミガキ、脚シボリ板圧痕④杯斜ミガキ、脚タテミガキ	
21	高杯	9号祭祀土壙	①32.5 ②24.5	①細砂・金雲母含む②明黄橙色③口縁丹塗ヨコナデ杯丹塗ヨコミガキ、脚シボリナデ④丹塗、磨滅、裾ヨコナデ	
22	高杯	9号祭祀土壙	①44.3 ②9.8＋	①細砂含む②明黄橙色③口縁丹塗ヨコナデ、杯横方向ナデか④磨滅	
23	高杯	9号祭祀土壙	裾径20.5 ②6.0＋	①細砂・金雲母若干含む②にぶ橙色③磨滅④裾ヨコナデ、磨滅、裾指圧痕	
24	鉢	9号祭祀土壙	①14.9 ② 6.4	①細砂多く金雲母・角閃石・黒色粒含む②にぶ黄橙色③丹塗ヨコナデ、ナデ④磨滅	
25	大型器台	9号祭祀土壙	①20.4 ②10.3＋	①細砂多く金雲母・角閃石含む②にぶ橙色③口縁端丹塗ヨコナデ、胴ナデ④丹塗口縁下タテミガキ	
26	大型器台	9号祭祀土壙	裾径31.2 ②2.7＋	①細砂多く、金雲母若干含む②明黄橙色③裾ヨコナデ、上半ナデ④丹塗、裾ヨコナデ	

8．平原古墳群（第5地点）

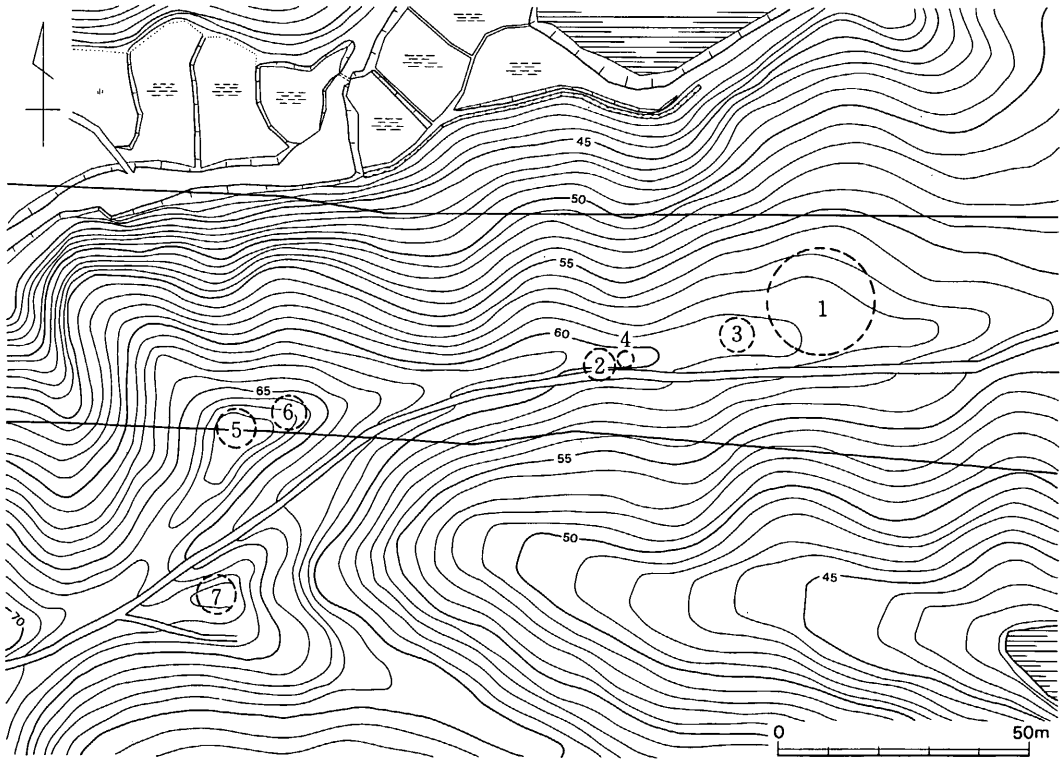
(1) はじめに

調査地点番号としては，この平原古墳古墳群の2～3基を第5地点としたもので，調査の結果は小規模墳丘を含めて6基を確認し，同一尾根には調査区外に少なくとも1基があることから，これを7号墳とした。古墳群は，1～4号墳が小字平原，5～7号墳が小字池の上に属するが，古墳群中最大の1号墳が平原に属するところから，平原古墳群としたが，外向きには大字名を頭に付して隈平原古墳群としたい。

平原古墳群は，調査の結果全部の古墳が石室の石材が抜取られていたが，これは付近の古墳群を含めて戦前に，隈集落の個人住宅の石垣として運ばれたらしく，石材の抜取りは小石室にいたるまで徹底している。

この項には，1号と2号墳周辺の土師器甕棺墓と7号世紀後半代の土壙墓群も加えた。

（柳田）



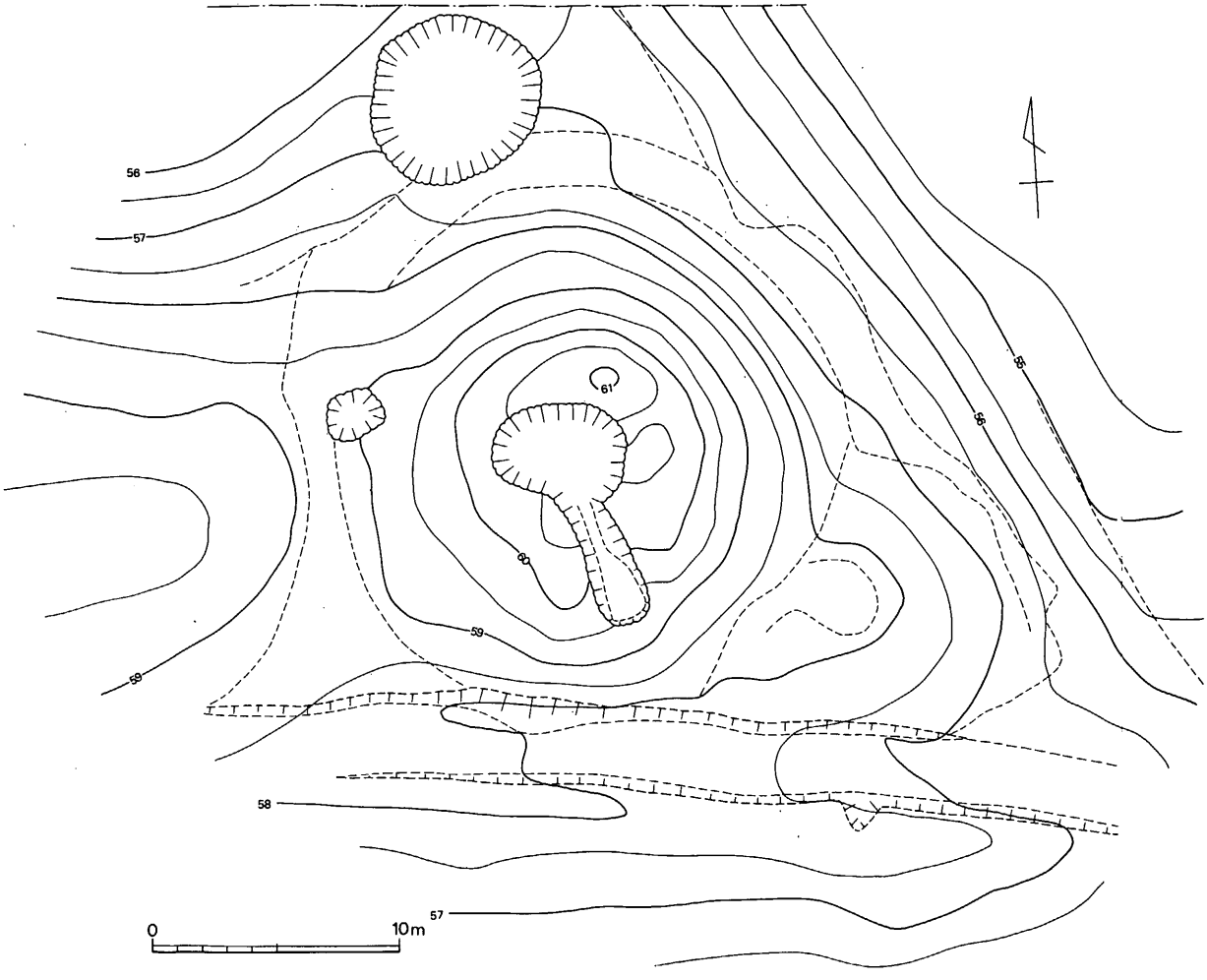
第98図　平原古墳群配置図（1/1500）

(2) 1号墳

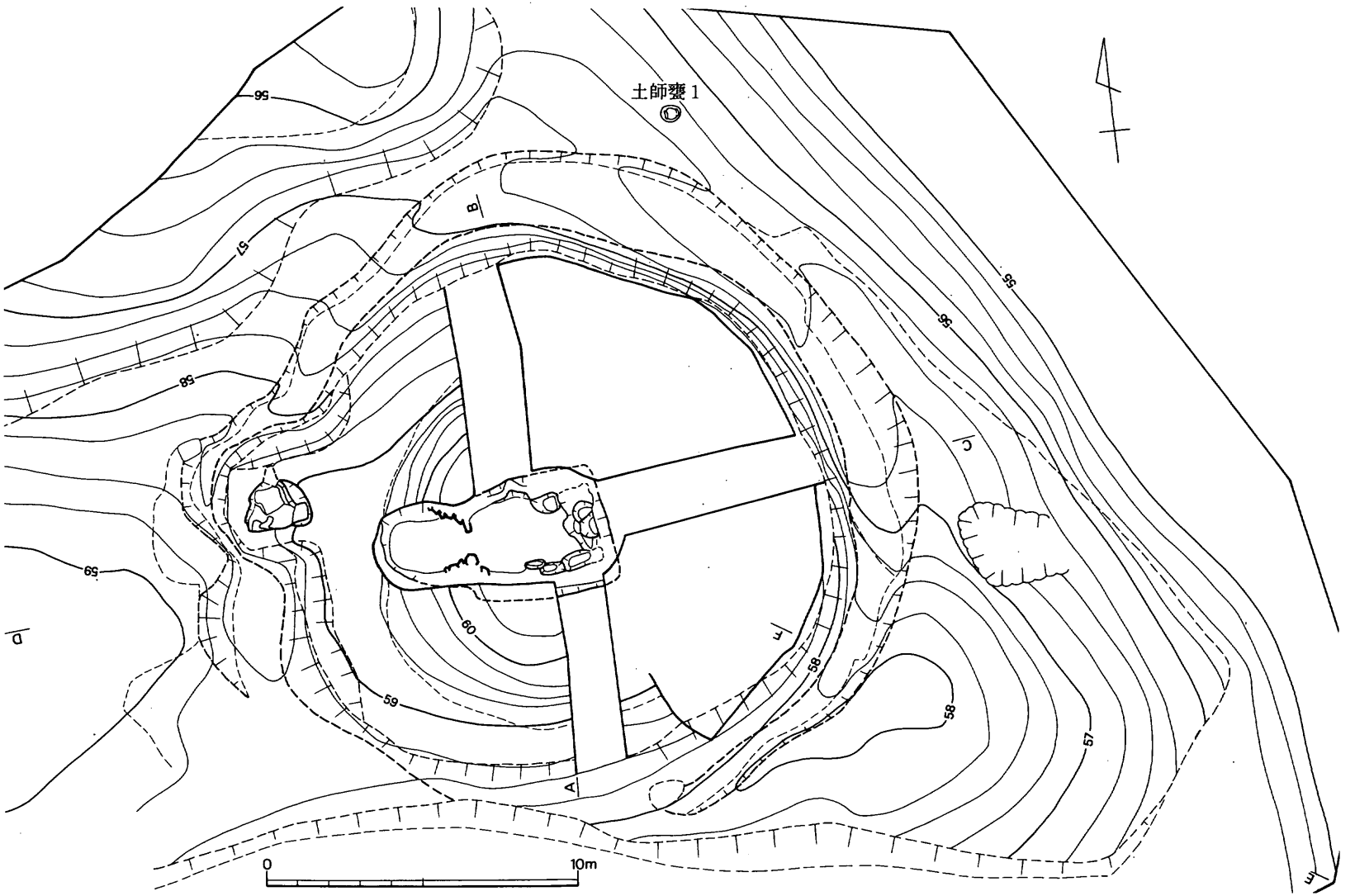
見かけ上は直径22m，高さ4mの〝後円部〟に，南東側に幅10m前後，長さ11m，高さ1.5mの低い〝前方部〟を付設する帆立貝式の前方後円墳らしくあったが，調査の結果は，直径22m，高さ3.8mで，東北側に突出した造出部を持つ二段築成の円墳であることがわかった。

①墳　丘（図版79，第99・100図）

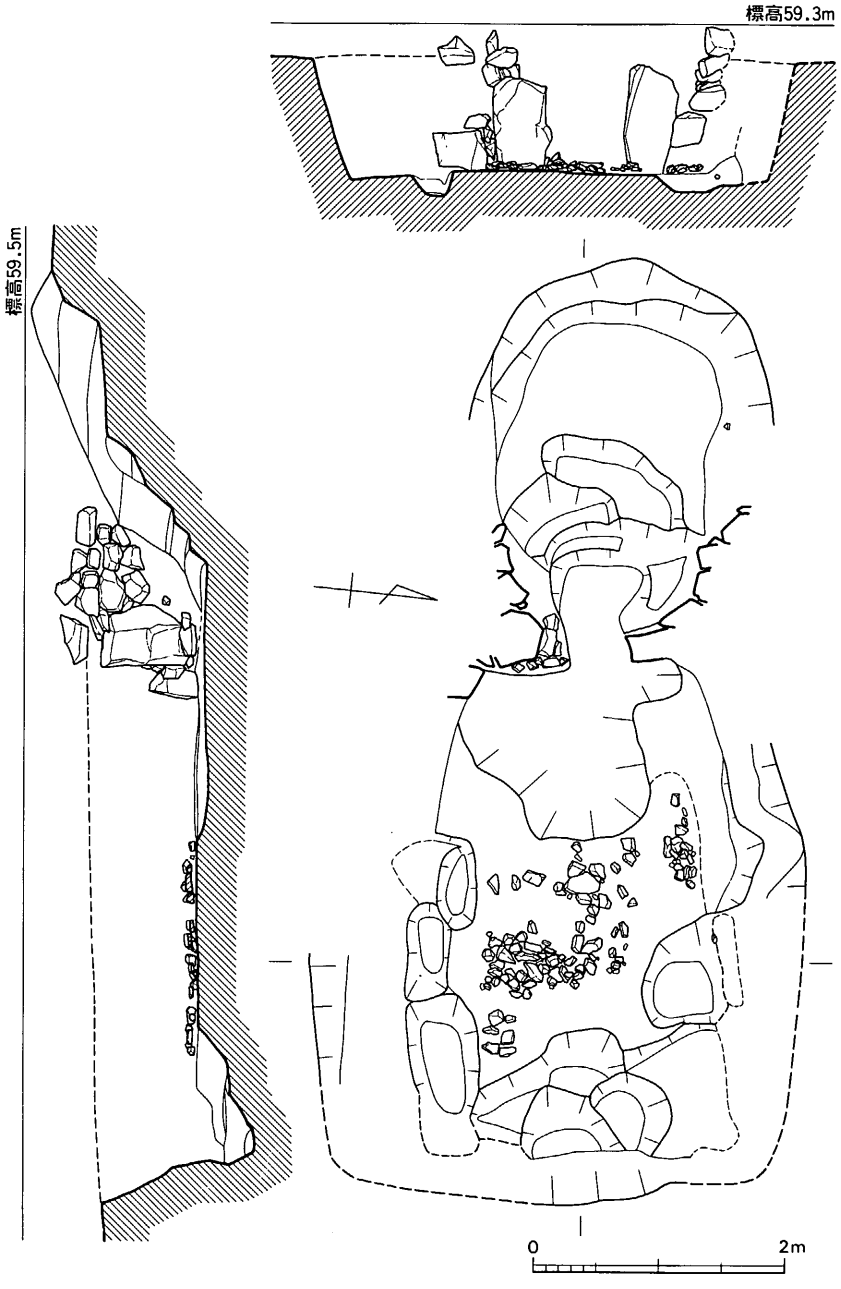
削り出しで墳裾から2m前後の高まりを持たせ，その上に盛土を行なっている。削り出しは石室中心より約7mの半径に平担に近い面を造り，そこから周溝へと緩やかに傾斜してゆく。直径14mほどの平担面の中央に石室の掘り方を持つことになる。墳丘の中心は石室の奥壁付近にあるらしい。



第99図　1号墳地形実測図（1/300）



第100図　1号墳墳丘実測図（1/200）



第101図　1号墳石室実測図（1/60）

南
A

北
標高60m B

C

標高60m D

F

E

標高57m

0 3m

第102図　1号墳墳丘土層断面実測図（1/60）

造出部は地山の削り出し若干と，多くの盛土によってつくられている。ここにも主体部があった。

② 主体部（図版80，第101図）

西に開口する竪穴系横口式石室である。主軸方位N-84°-E。盗掘が著しく，床面の敷石と玄門袖石，前庭部側壁以外の石材は全て抜き取られていた。

掘り方は長さ4～4.5m，幅4mの方形プランに墓道が付くものであるが，羽子板状の平面プランとなるかどうかはわからない。

玄室は石材の抜き跡から推して，長さ3.6m，奥壁幅1.8m，中央幅2m，玄門側幅1.5mを前後し，若干胴張りのプランとなるように見える。敷石は礫石を用いる。玄門幅0.67m。

前庭部側壁は八の字形に開いて墓道に連なるが，側壁自体は貼石と称してよいもので，4段に重箱積み風に積まれている。

墓道は長さ2mほどの短簡なもので，階段状に玄門へ降っている。

③ 造出部（図版82）

幅3～5mで4m程東北側に突き出している。1号墳本体寄りに主体部が掘られているが，盗掘が著しく本来の形状はあまり明確にしえない。

石材の破片が4点ほど見られるので石棺であった可能性が強い。主軸をN-80°-Eにとり，内法が長さ2m弱，幅0.5m内外と思われる。

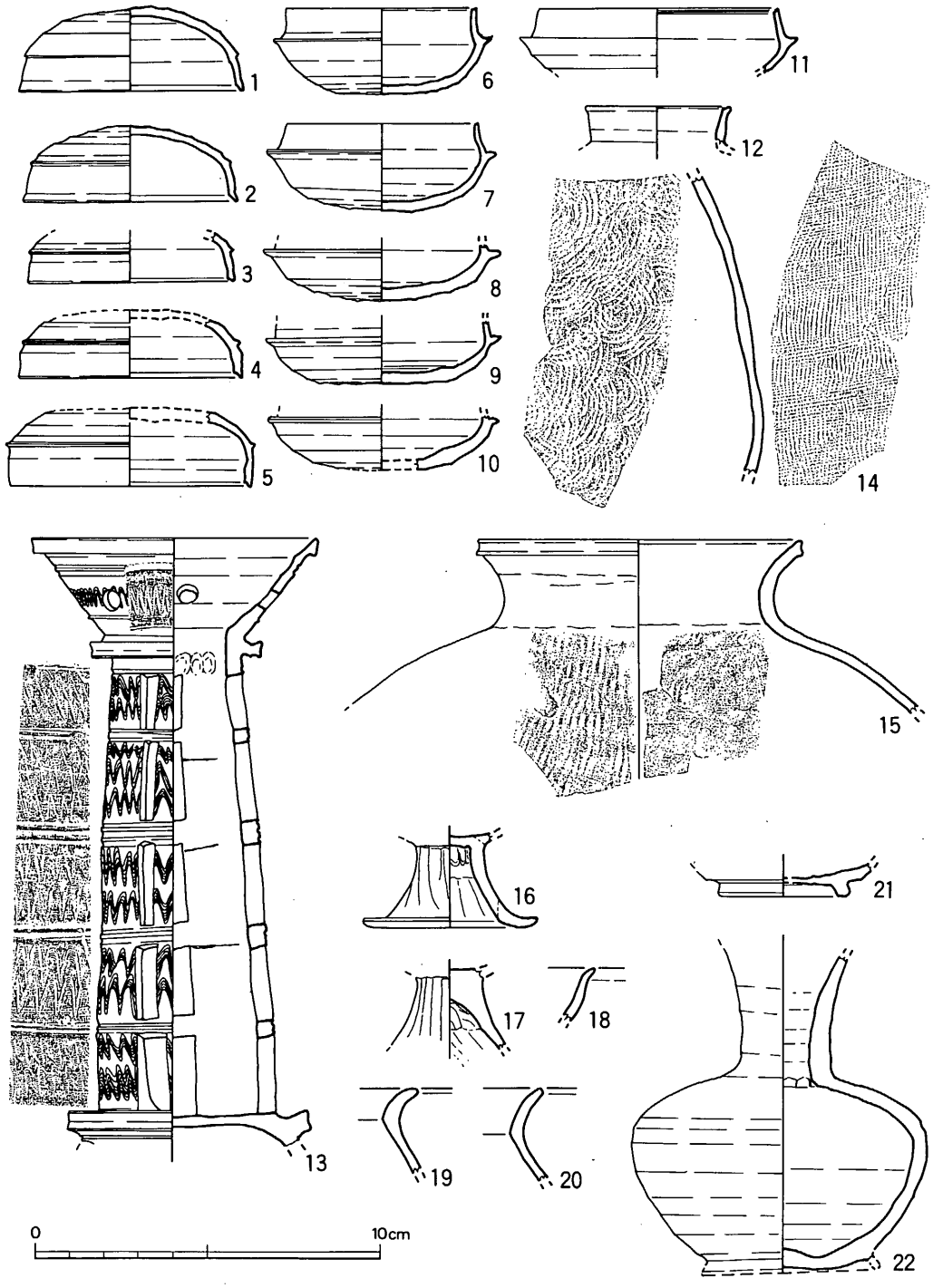
④ 出土遺物（第103図）

主体部内外から遺物の出土を見るが，原位置を留めるものはない。ガラス玉15個（第113図2～4，3個のみ図示）は玄室床面，管玉1個（同1）は造出の主体部内，鉄鏃（第114図1）は東北側墳裾の表土から，他の土器は主に造出部の周辺から出土している。図示したものについては第24表を参照されたい。

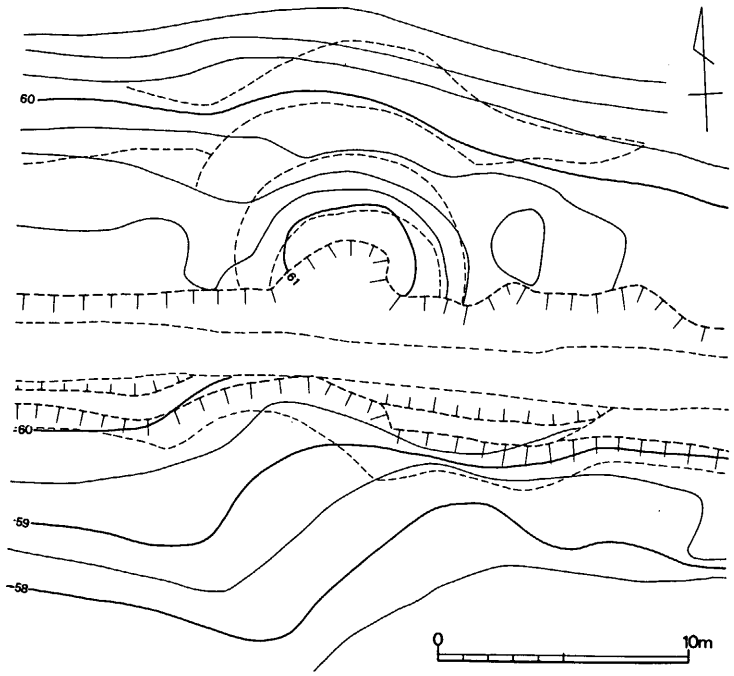
第24表　平原1号墳出土土器一覧表（第103図）

（単位cm）

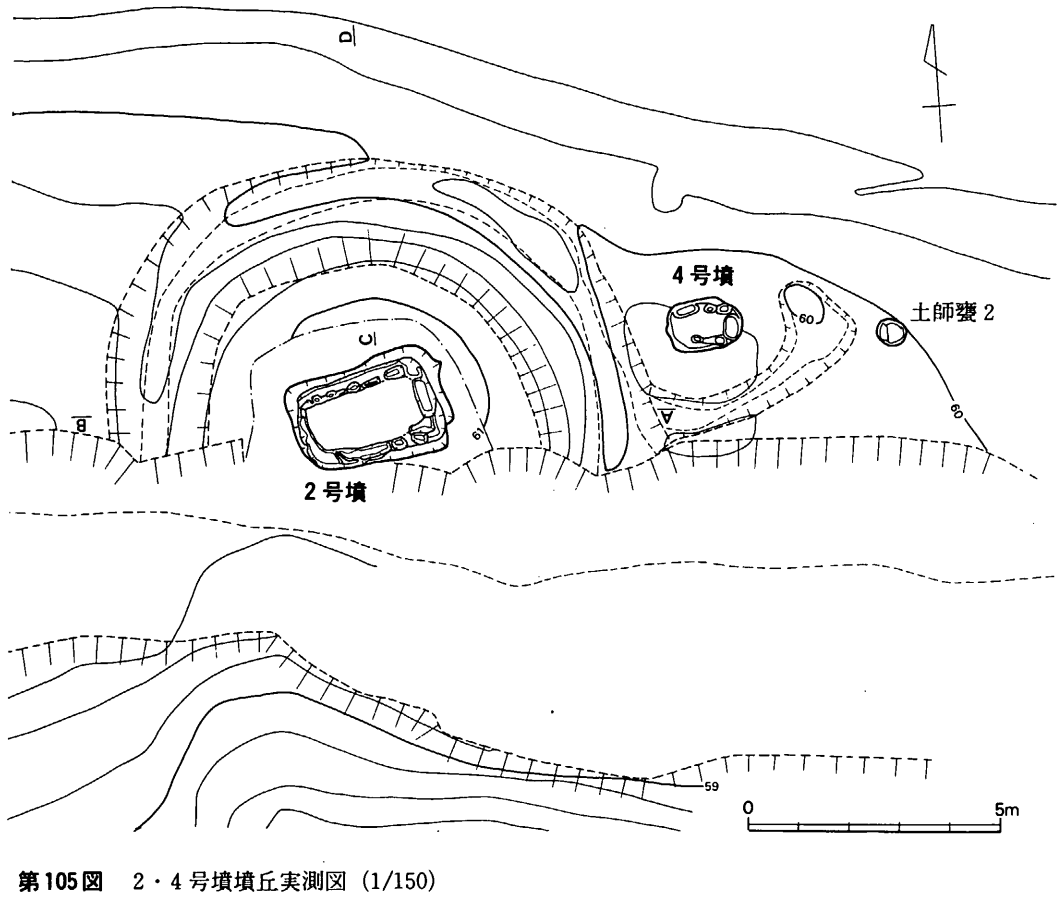
遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	杯蓋	北西裾	①13.0 ② 4.9	①良②灰黄色③なで、横なで④回転ヘラケズリと横なで	
2	杯蓋	北西裾 造出周溝	①12.4 ② 4.4	①良②灰黄色③なで、横なで④回転ヘラケズリと横なで	
3	杯蓋	造出の主体部	①12.0	①やや粗②灰色③④横なで	
4	杯蓋	墓道	①13.0 ②(4.0)	①砂粒多し②灰白色～灰色③横なで④回転ヘラケズリと横なで	
5	杯蓋	造出部上	①14.0 ②(4.5)	①良②黒っぽい灰色③横なで④回転ヘラケズリと横なで	
6	杯身	造出部上	①11.1 ② 5.0	①良②外面黒灰色、内面灰紫色③横なで④回転ヘラケズリと横なで	
7	杯身	北西裾	①11.2 ②5.05	①良②黄灰色③なでと横なで④回転ヘラケズリと横なで	



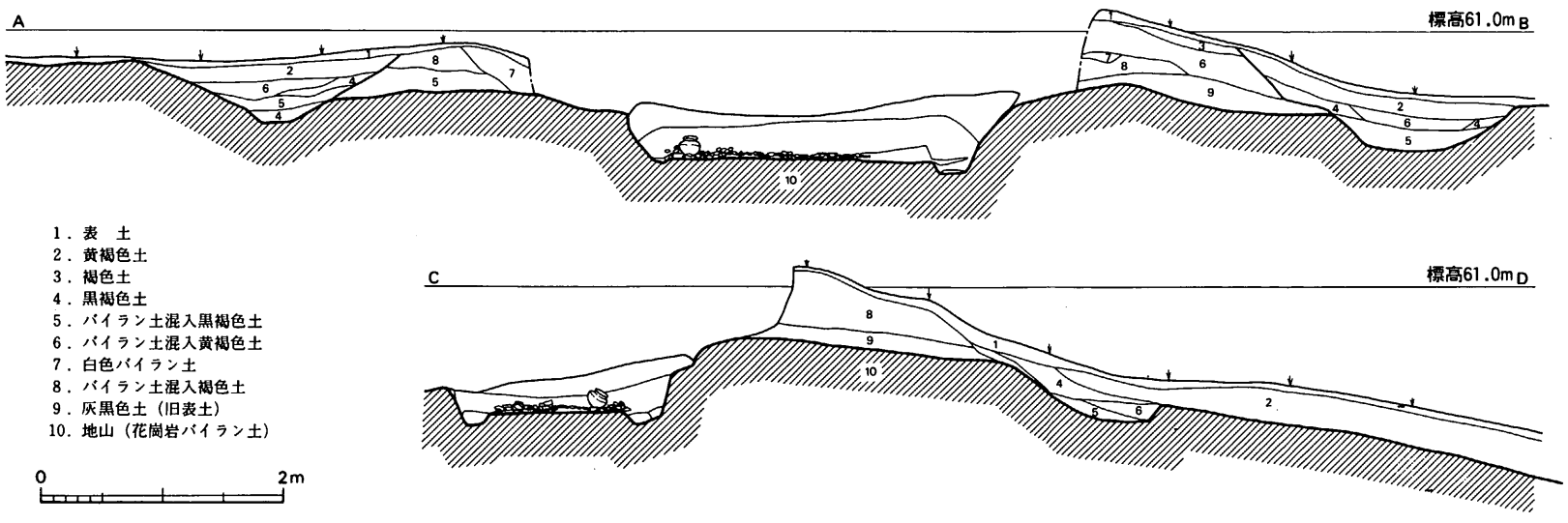
第103図　1号墳出土土器実測図（1/4）



第104図　2・4号墳地形実測図（1/300）



第105図　2・4号墳墳丘実測図（1/150）



第106図　2号墳墳丘土層断面図（1/60）

遺物番号	器　種	出土地	法量①口径②器高	特 徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備　考
8	杯　身	北西裾	受部径13.7	①良②灰黄～灰白色③なで、横なで④回転ヘラケズリ、横なで	
9	杯　身	北西裾	受部径13.5	①良②灰色③横なで④回転ヘラケズリ、横なで	
10	杯　身		受部径13.3	①砂粒多し②灰白色③なで、横なで④回転ヘラケズリ、横なで	
11	杯　身	造出の主体部	①13.6	①やや粗②黒灰色～灰色③横なで④回転ヘラケズリ、横なで	
12	坩	造出の主体部	① 8.3	①良②黒っぽい灰色③④横なで	
13	器　台	造出部上	①16.5 現在高35.5	①精良②黒っぽい灰色③④なで、横なで、筒状部・杯部の透孔とも５個所	
14	甕	造出東側旧表土下		①良②外面黒灰色、内面灰黄色③同心円の上を若干のなで④平行タタキの上をカキ目	
15	甕	北西裾北側周溝	①18.8	①精良②黄色がかった灰色③なで、同心円の上をなで④横なで、平行タタキの上をなで	
16	高　杯	南東側周　溝	脚裾径10.2	①精良②黄褐色③なで④ケズリかミガキ	土師器
17	高　杯	北西裾		①精良②黄褐色③なで④ミガキ	土師器
18	埦	造出周溝		①精良②赤みのかかった黄色③④ミガキか	土師器
19	甕	南東周溝		①粗②黄褐色③なで、ヘラケズリ④なで、タタキ	土師器
20	甕	造出周溝		①良②茶褐色③なで、ヘラケズリ④なで、刷毛目	土師器
21	埦	造出前面周溝最上	高台径7.5	①粗②灰黒色③なで④横なで	
22	長頸壺	造出前面周溝最上	胴最大径17.1	①ふつう②灰黄色③なで④回転ヘラケズリなで	

(3)　2号墳

2号墳は，墳丘の南半を山道造りによって削平され，石室も石材が完全に抜取られている。

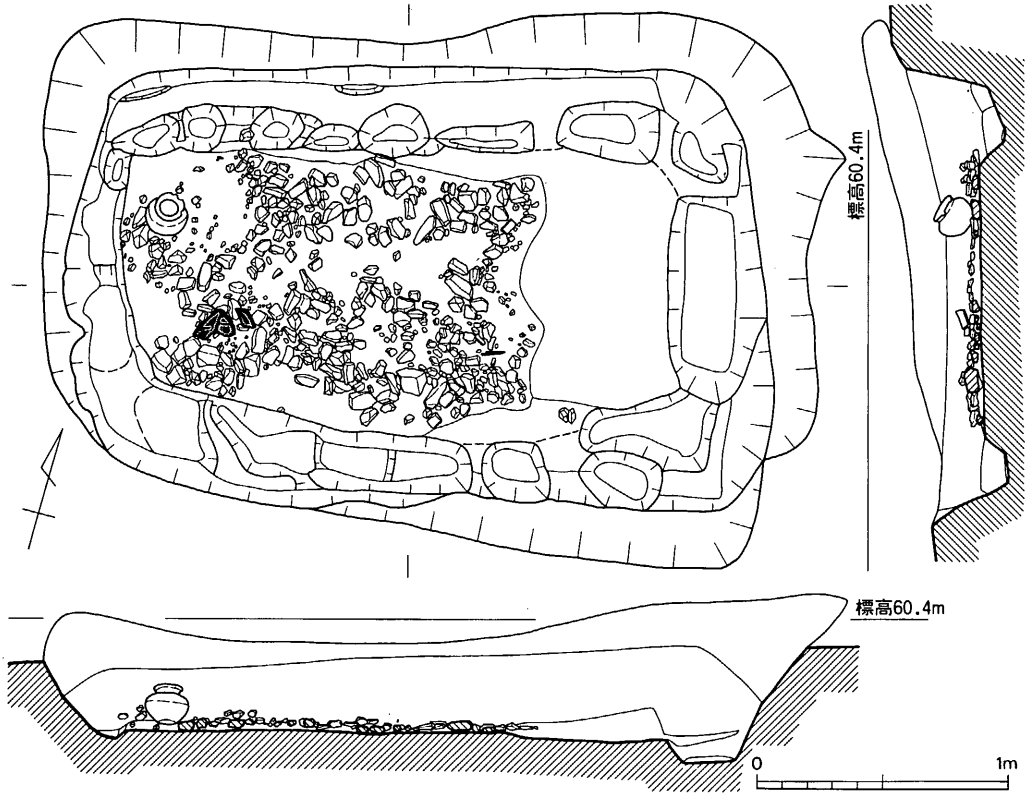
①墳　丘（図版83，第104・105図）

墳丘は，旧表土と地山に掘込だ周溝をめぐらすことによって1段目の墳丘を造出し，2段目に盛土した円墳である。大きさは，周溝外径11.1m，墳丘裾径8.6m，高さ1.3m以上。遺物は，西側周溝底と北東側墳丘から周溝底で各1個の須恵器が出土した。

②主体部（図版84-2，第107図）

主体部は，石材の抜跡から判断すると内法長さ2.25m，最大幅1.13mの長方形の竪穴式石室と思われる。床面形は，北壁は直線であるが，南壁は胴張となる。しかも，石材は平積ではなく腰石状に立てて使用されていたらしい。床面には，一面に礫と赤色顔料が敷かれ，赤色顔料の多い西側に須恵器の壺と甕が置かれ，南東側に刀子とガラス小玉1個があった。

石室の構造については，東壁が1枚石であるなど検討を要するが，1号や5号のように墓道が付設しないのは確実である。また，床面の東側に敷石がないのは，攪乱が著しかったために



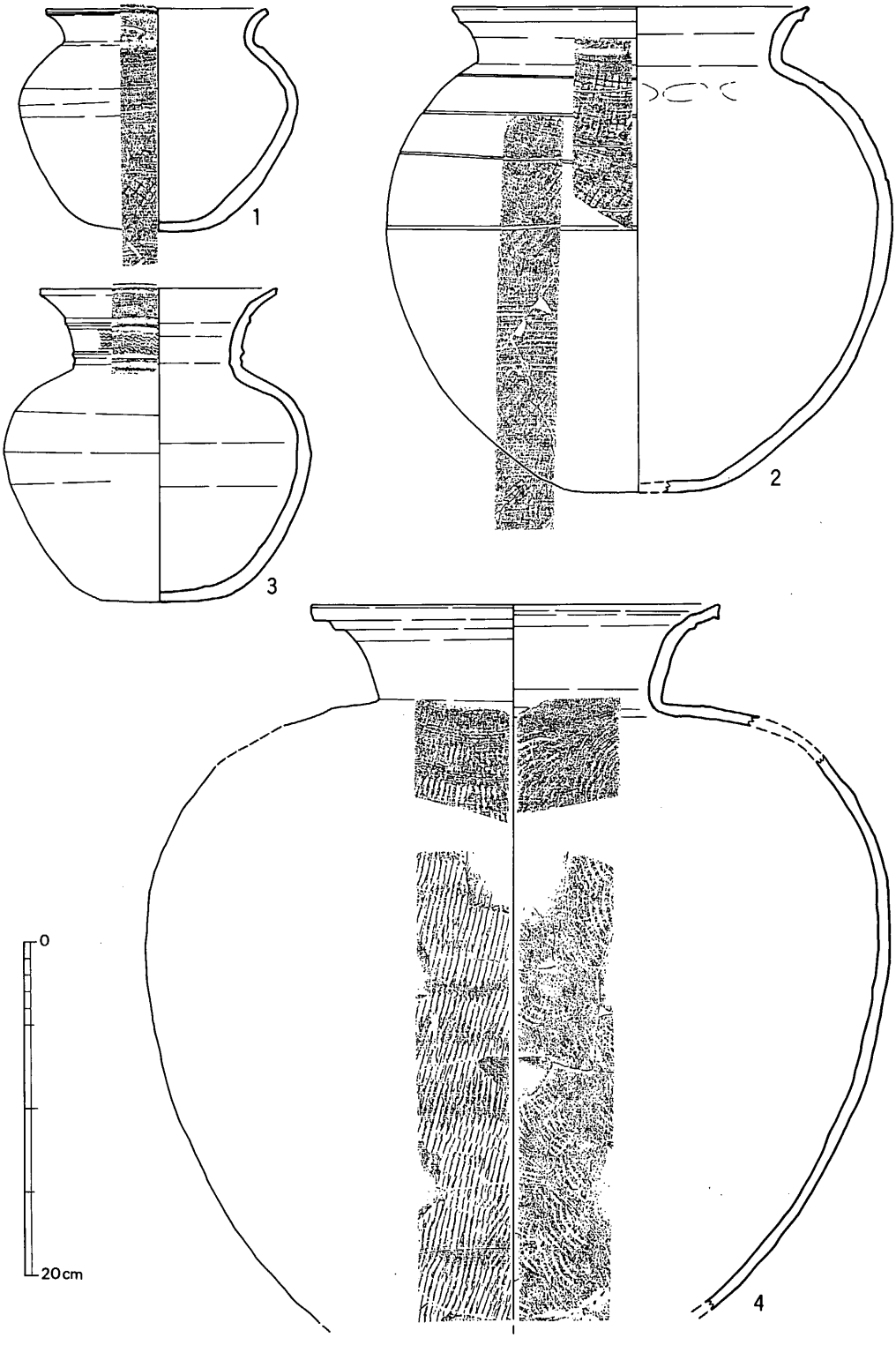
第107図　2号墳石室実測図（1/30）

除去したもので，本来は石室全面敷石に赤色顔料が敷かれ，当然として石室壁面にも赤色顔料が塗布してあったらしい。石室石材に使用されていた小石材を見ると，石材の小口のみに赤色顔料が塗られている。このことから，石材として花崗岩を使用し，腰石を立てた後に2段目以上は石材を小口積した竪穴式石室を推定することができる。なお，竪穴式石室であることを裏付ける証明として，第108図4の須恵器甕が墳丘の北東側で，墳頂部から周溝底までの間に散乱して出土したことである。この須恵器甕は，西側周溝底で出土した須恵器壺（3）と同様に，墳頂に供献されたもので，小型の壺は転落して周溝底で破砕したが，大型の甕は墳頂で破砕して散乱したものであろう。すなわち，石室の入口は墳頂にあり，竪穴式石室なのである。

③出土遺物（第108図）

石室内の遺物は，第114図15の刀子とガラス小玉1個，第108図1・2の須恵器がある。

須恵器は，2点に共通する器面調整は，大きめの格子タタキ後にケズリ状のヨコナデで消していることで，2は上半に4本の沈線をめぐらす。周溝出土の3も同様な胴部の調整であるがタタキは完全に消されている。4は，完全に調整法が違い，タタキを残す。　（柳田）



第108図　2号墳出土須恵器実測図（1/4）

第25表　平原2号墳出土土器一覧表(第108図)

(単位cm)

遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	壺	石室床面	①13.2 ②13.3	①細砂わずか含む②灰味茶・灰味オリーブ色③上半ヨコナデ下半横方向ナデ④上半ヨコナデ、下半格子タタキ後ケズリ状ヨコナデ	やや軟質
2	甕	石室床面	①21.3 ②29.0	①細砂わずか含む②オリーブ灰色③口縁ヨコナデ、胴細線同心円タタキをケズリ状ナデ消す④胴格子タタキ後ヨコナデ	上半に沈線
3	壺	西周溝底	①14.1 ②18.7	①砂をほとんど含まず②灰黒・明黄橙色③上半内外ヨコナデ、下半ヨコナデ④下半ケズリ状ヨコナデ、頸凸帯間波状文	上半灰カブリ
4	甕	墳頂～周溝底	①24.3 ②42.5＋	①細砂・黒色粒・金雲母若干含む②灰味茶色③口縁内外ヨコナデ、胴同心円タタキ④胴平行タタキ後ヨコナデ	

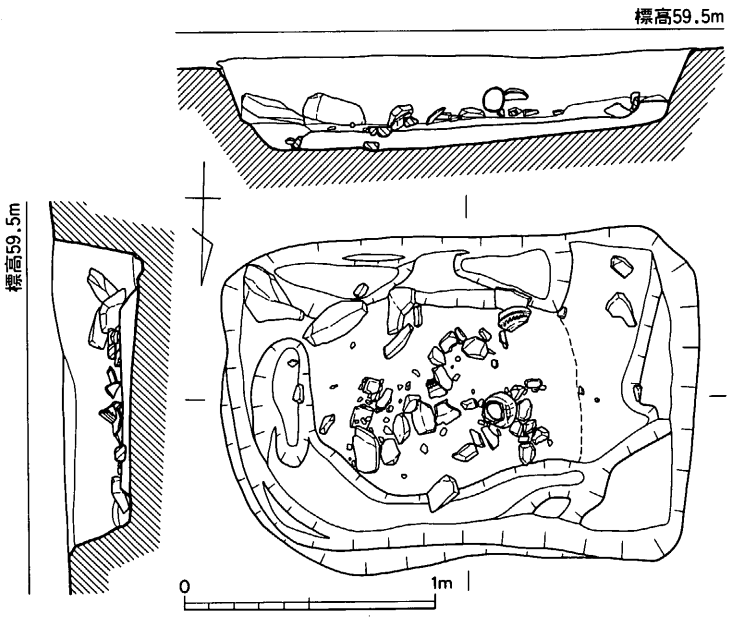
(4)　3号墳（図版85，第110図）

1号墳の西隣りに位置する小円墳で径6.6mを測る。北側と東側は浅い周溝が残存し，周溝内と墳裾とに角礫が幾つか見られる。現状では盛土はほとんどなかったが，主体部の残存状態からして1m前後の墳丘を有していたであろう。

①主体部（図版86-2，第109図）

盗掘が著しく本来どのような形状であったか明確にできないが，石材の抜き跡などから推して石棺系の石室であったろうと思われる。東西いずれかに横口部を有していた可能性もある。

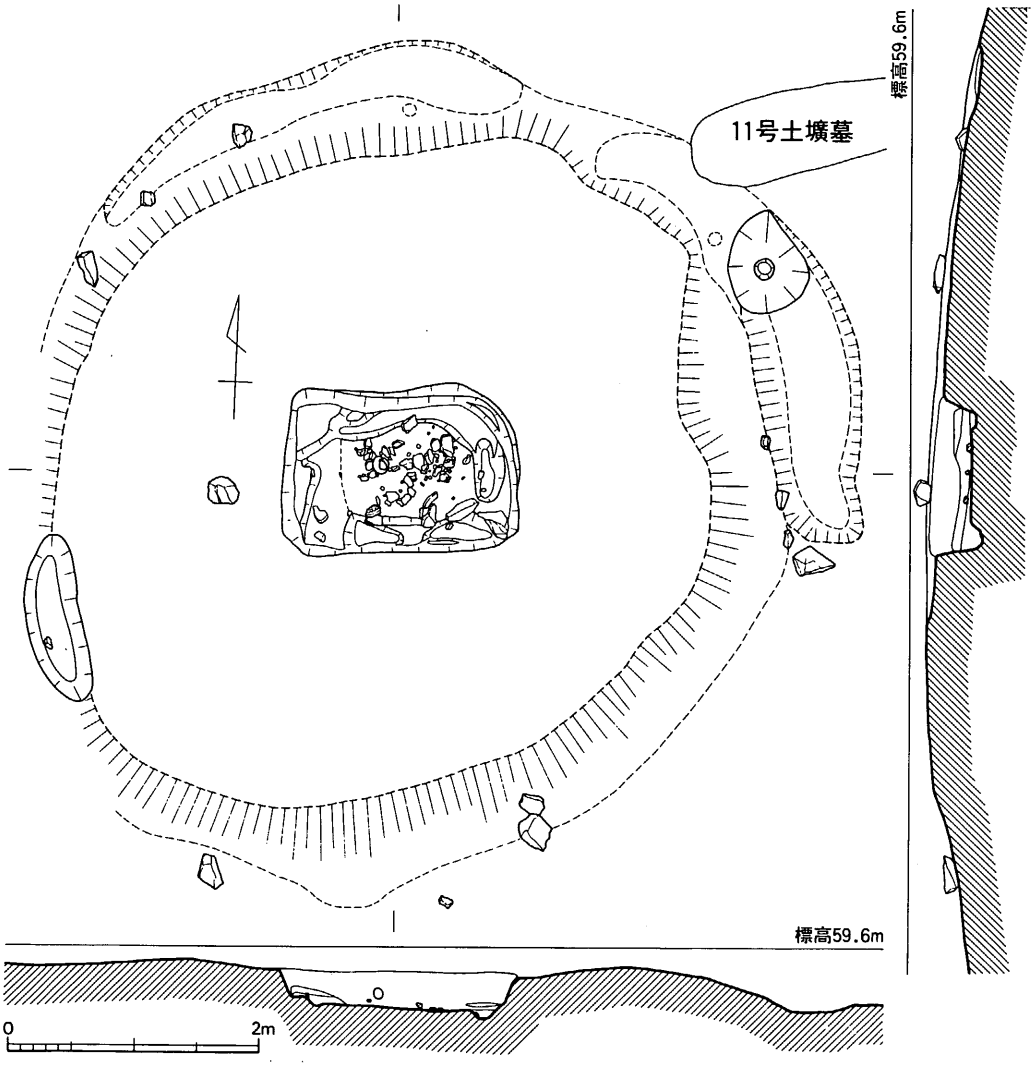
掘り方は長方形プランで，長軸1.88m，短軸1.27mを測り，ほぼ東西に主軸を持つ（N—88°—E）。主体部（棺）の内法は長軸1.2m，短軸0.8m程であろう。床面には大小の角礫が敷かれている。



第109図　3号墳石室実測図（1/30）

②出土遺物（第111・113・114図）

主体部内からガラス玉1，鉄鏃2＋，須恵器（坩・高杯），土師器（甕胴部片）が，墳裾のうち北・北東，南より須恵器（坏蓋・杯身・椀・甕胴部片），土師器（甕把手）が出

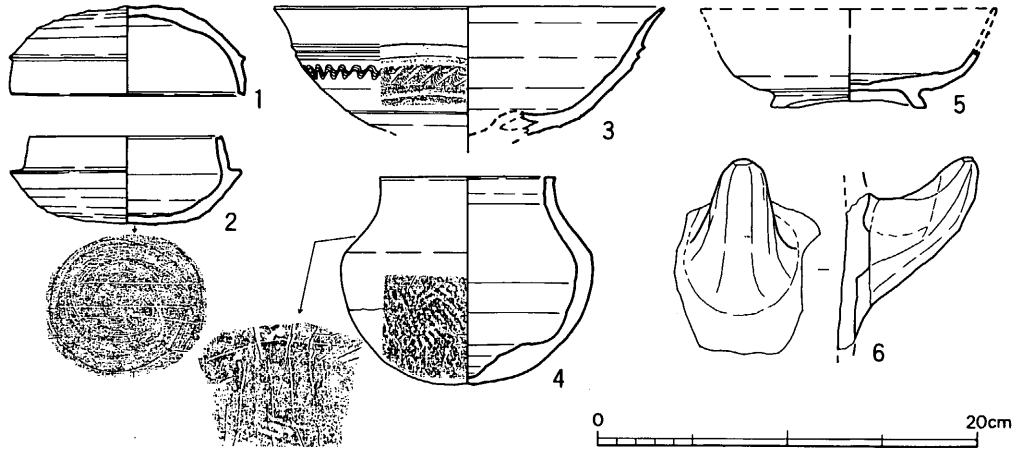


第110図　3号墳墳丘実測図（1/60）

土している。南裾より出土した須恵器椀（第111図５）はこの古墳に伴うものではない。土器で図示したものは第26表を参照。

ガラス玉（第113図５）マリンブルーを呈し幅10mm，重さ１ｇ。

鉄　鏃（第114図２～５）　片刃式のもの（２）以外は形状不明。茎には矢柄が一部残存す。



第111図　3号墳出土土器実測図

第26表　平原3号墳出土土器一覧表(第111図)

(単位cm)

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	杯蓋	北東墳裾	①12.2 ② 4.7	①良②灰色③横なで④回転ヘラケズリ、横なで	
2	杯身	北側裾	① 9.9 ② 4.6	①良②外面黒灰～黄灰色、内面灰色③なで、横なで④回転ヘラケズリ、横なで	底体部にヘラ記号
3	高杯	主体部内 南西墳裾	①20.3	①精良②外面灰～灰黄色、内面灰黄色、一部に自然釉③なで、横なで④回転ヘラケズリ横ナデ	耳はない
4	坩	主体部内	① 8.9 ②11.0	①精良だが瓦質に近い②灰白色③なで、横なで④横なで、格子目タタキ	肩部にヘラ記号
5	埦	南側裾	高台径8.2	①良②外面暗灰色、内面茶灰色③なで、横なで④横なで、なで	
6	甕把手	南側裾		①良②赤褐色③ヘラケズリ④ケズリとなで	土師器

(5)　4号墳

2号墳に東接し，南側に浅い周溝が巡る。2号墳の周溝と切り合った格好であるが，先後関係はわからない。東西長5～6m，南北長4～5mの小円墳で，2号墳に従属するが如き占地，規模である。

① 主体部（図版87，第112図）

盗掘が著しいため断定し難いが，石棺か石棺系の小石室と思われる。掘り方は隅円の長方形プランで，長軸1.51m，短軸1.05mを測り，N—89°—Wとほぼ東西に主軸を持つ。主体部の内法は長軸1m，短軸0.55m程と思われる。

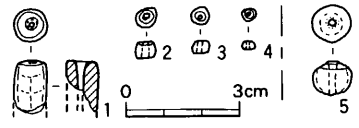
② 出土遺物（第114図）

主体部内から鉄器（鏃5＋，刀子1）と須恵器片が出土したのみである。いずれも原位置は

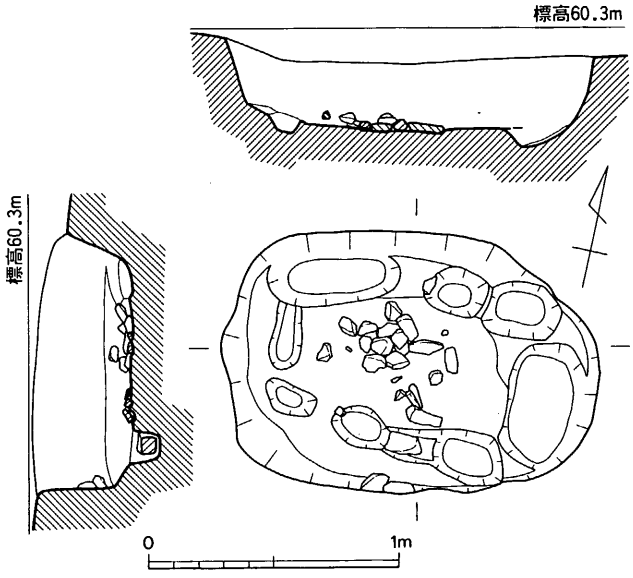
留めない。須恵器は瓦質に近い甕らしい破片と椀らしき破片がある。

鉄　鏃（6～14）　茎と身のみで鋒部分はない。茎に繊維を巻きつけた状態がよくわかる。

鉄刀子（15）　全長13.6cmの完形に復しえたものである。茎に目釘孔1個を見る。（伊崎）



第113図　古墳出土玉類実測図（1/2）



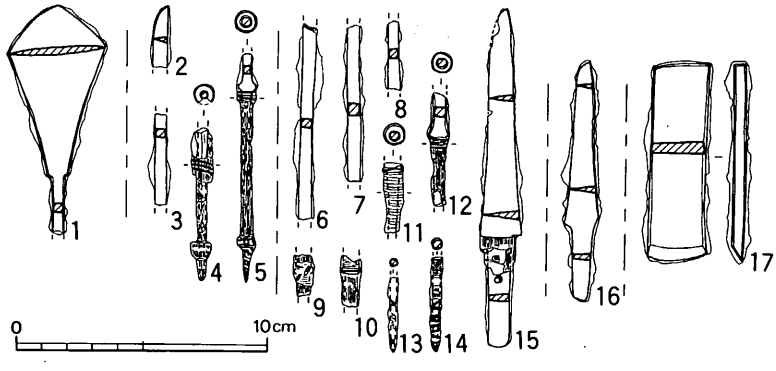
第112図　4号墳石室実測図（1/30）

(6)　5号墳

5号墳は，調査区の西端にあり，地形的に古墳群中では最高位にある。

①墳　丘

5号墳の墳丘は，墳丘の裾部を地山整形して1段目墳丘としているが，地山の高い北側と南西側は周溝の形態をとるが，南東側は周溝部分が平坦部を残し，その端は斜面となっている。墳丘は，裾径8mの円墳であるが，南北の周溝外径は10.2mの大きさとなる。墳丘の高さは，現状で約1mほどであるが，盗掘以前にもかなり流失しているようだ。盗掘時の排土は南半に出されたらしく，石室内の須恵器片が含まれていた。

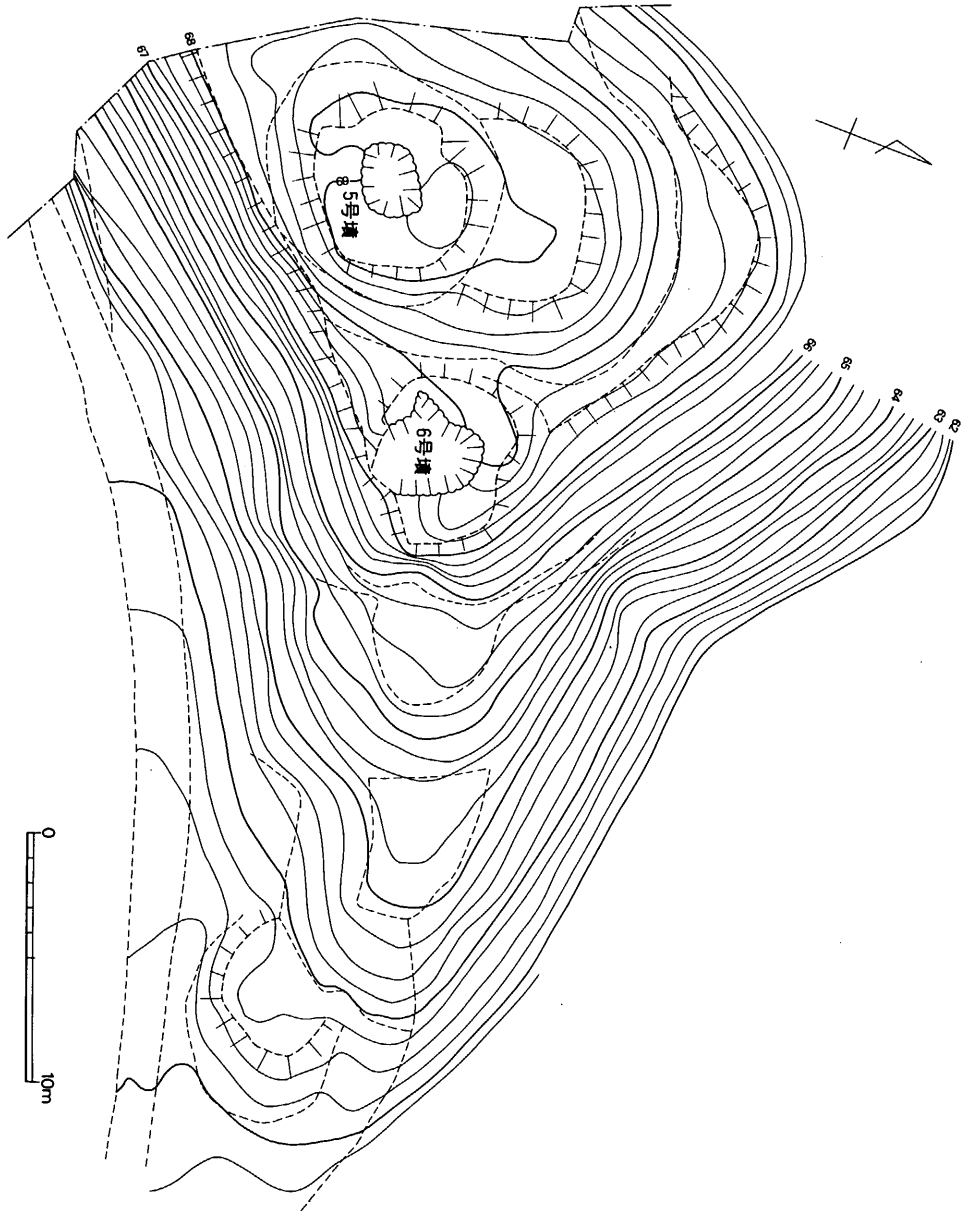


第114図　古墳出土鉄器実測図（1/3）

②主体部（図版89，第117図）

5号墳の石室は，やはり石材を抜取られているが，幸いに1個だけ北東側に残っていた。この石材は，東壁の北端のものであるが，高さ39cm，幅22cmの小型石材で，垂直に立っている。他の石材の抜跡を見ても，最下段の石材は腰石のように立てていたと思われるので，この石は偶然ではないことを示している。石室は，石材抜跡と西小口側の傾斜した素掘の墓道から，竪

穴系横口式石室といわれる古式横穴式石室である。玄室は，内法2.05ｍ，幅0.85ｍの大きさの長方形で，奥壁幅と前壁幅はほとんど同じである。奥壁には大きな石材が使用され，その両側に小型石を立てている。前壁は，両袖に大型の石が立てられ，その間に１枚の框石を立てている。



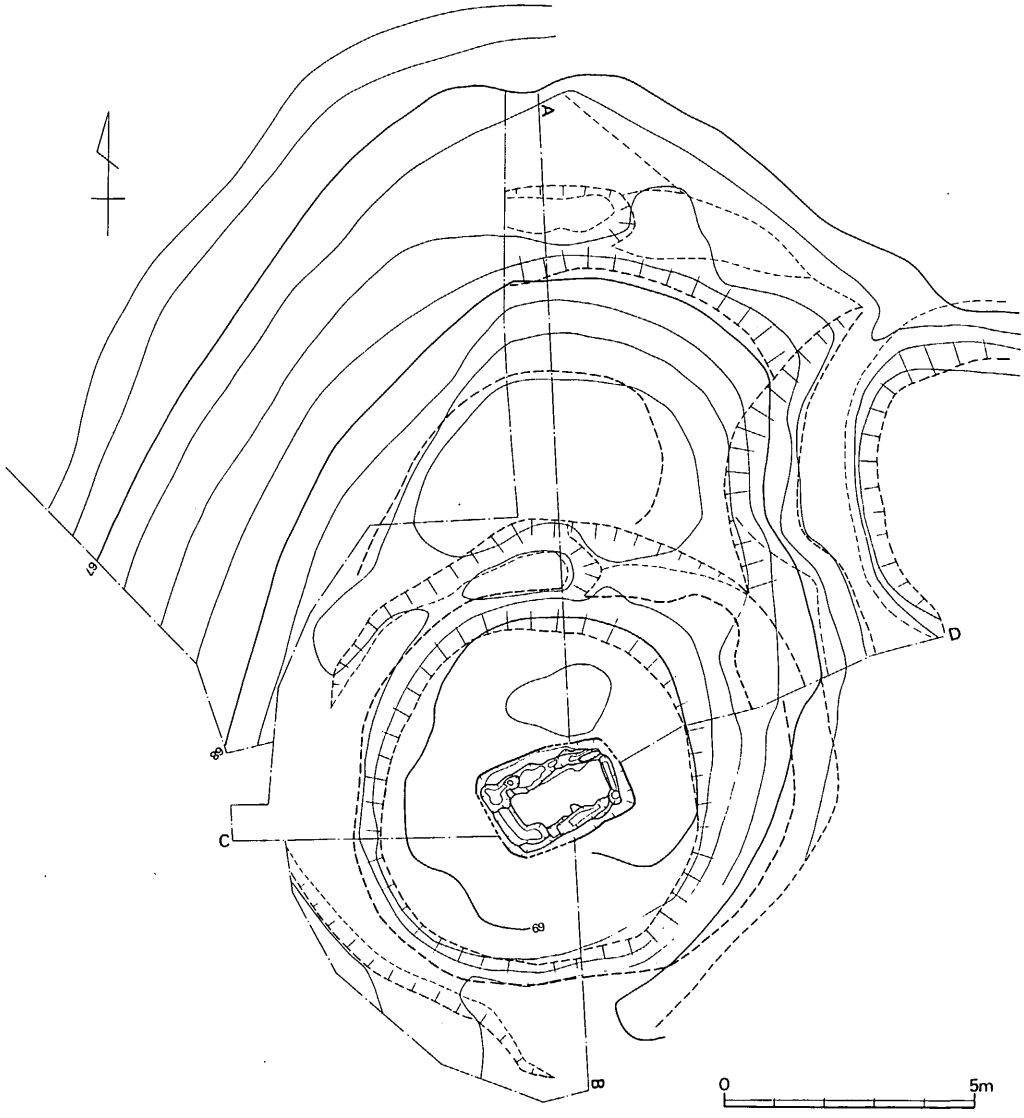
第115図　５・６号墳地形実測図（1/300）

石室床面は，小石を敷いていたらしいが，原位置にあるものは少なく，東側にそれらしい部分があり，須恵器壺２個が置かれていた。床面には，わずかに赤色顔料が残っている部分があったが，残っている石材には塗られていない。

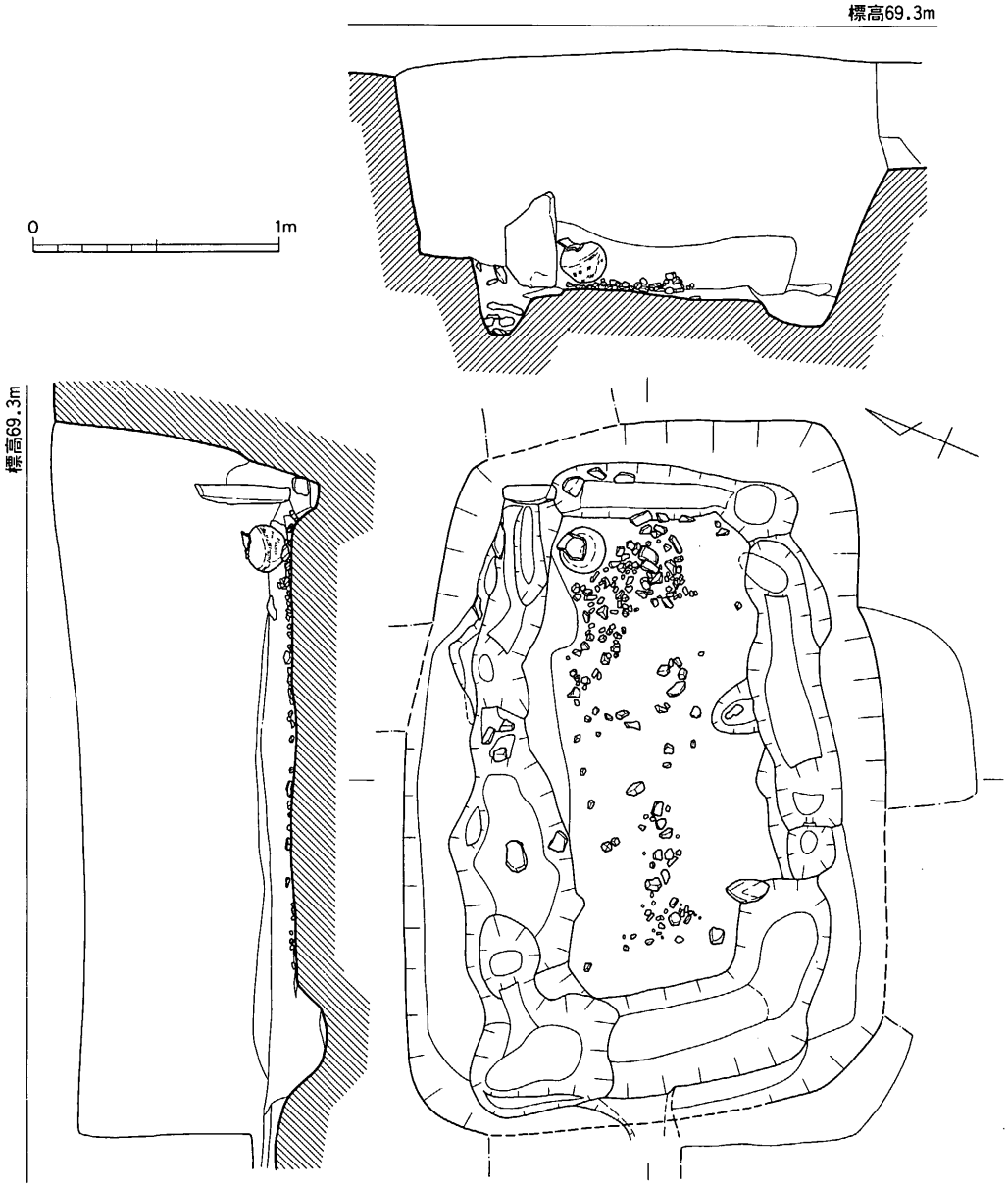
墓道は，完全に素掘りのままで，両側に石組もない。盗掘は墓道までおよんでないので確実であるが，墓道の埋立を見ると少なくとも１度の追葬があったようだ。

③出土遺物（第118図）

５号墳の出土遺物は，石室内で原位置にあった壺（２）と，その南側で多少浮いていた壺（３）があるが，石室内攪乱土と盗掘排土から壺口縁（１）が出土した。



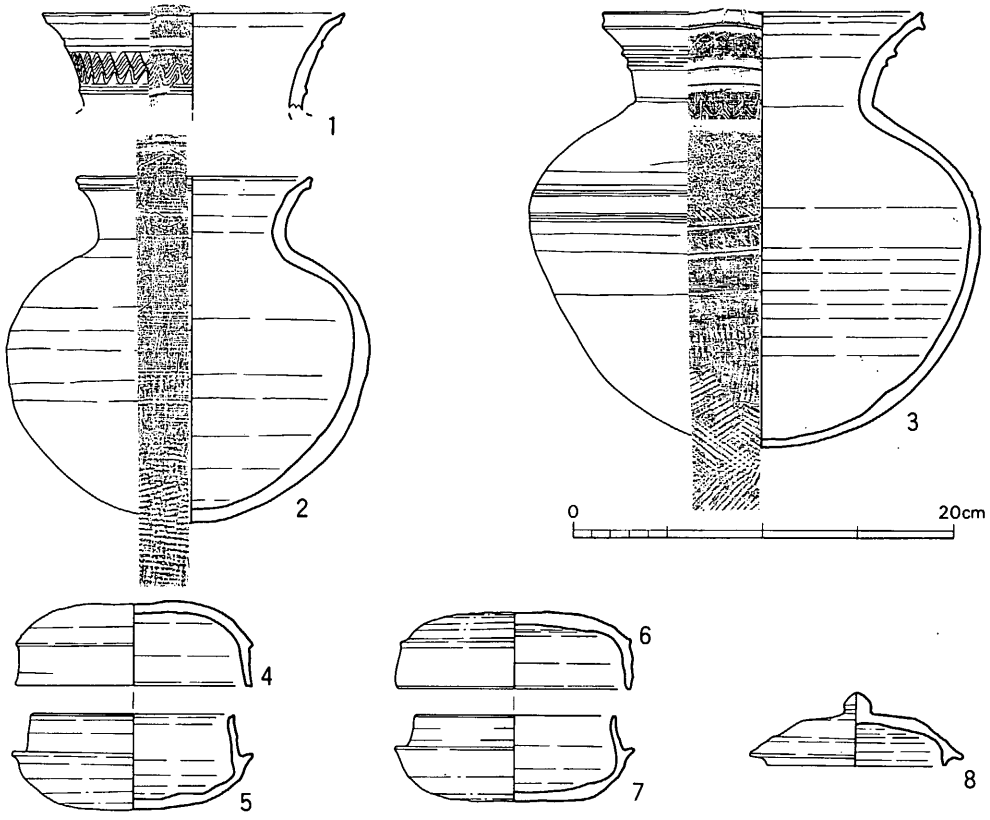
第116図　５号墳墳丘実測図（1/500）



第117図　5号墳石室実測図（1/30）

須恵器杯（4～7）は，墳丘北西側の1段目肩に散乱していたので，墓前供献品であろう。蓋（8）は墳丘西側の表土から出土したもので，5号墳には直接関係ないものであろう。

石室内の須恵器を見ると，墓道の観察と同様に追葬によると思われる時期差があり，1と2の須恵器の型式差は歴然としている。



第118図　5号墳出土須恵器実測図（1/4）

第27表　平原5号墳出土土器一覧表（第118図）

（単位cm）

遺物番号	器種	出土地	法量①口径②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	壺	石室内	①16.0 ②5.0＋	①細砂わずか含む②暗黄茶・灰色③上半ヨコナデ、下半ナデ④ヨコナデ後三角凸帯間に波状文	
2	壺	石室内 床面	①12.5 ②18.3	①砂粒・黒色粒含む②灰味黄茶色③口縁・胴上半ヨコナデ下半横方向ナデ④口縁ヨコナデ、胴上半カキ目、下半平行タタキ交差	
3	壺	石室内	①16.8 ②22.8	①砂粒なし②灰味茶・灰味黄茶色③上半ヨコナデ、下半ナデ④上半ヨコナデ、中位ケズリ状ヨコナデ、下半平行タタキ交差	上半灰カブリ、凸帯波状文・沈線・刺突文
4	杯蓋	墳丘 北西側	①12.5 ② 4.5	①細砂若干含む②縁味灰色③ヨコナデ④下半ヨコナデ、天井回転ヘラケズリ	天井にヘラ記号
5	杯身	墳丘 北西側	①10.8 ② 5.1	①砂粒を含む②暗オリーブ灰色③ヨコナデ④上半ヨコナデ、底回転ヘラケズリ	
6	杯蓋	墳丘 北西側	①12.3 ② 4.1	①細砂含む②明青味灰色③上半ヨコナデ、天井ナデ④下半ヨコナデ、天井回転ヘラケズリ	
7	杯身	墳丘 北西側	①10.6 ② 4.6	①細砂若干含む②明オリーブ灰色③上半ヨコナデ、カキ目状ヨコナデ④上半ヨコナデ、底回転ヘラケズリ	内面底にヘラ記号
8	杯蓋	墳丘 表土	① 9.3 ② 3.8	①細砂若干含む②にぶ赤味灰・青味灰色③下半ヨコナデ、天井ナデ④ヨコナデ	

(7) 6号墳

6号墳は，5号墳の北東側に接して低位置にある。

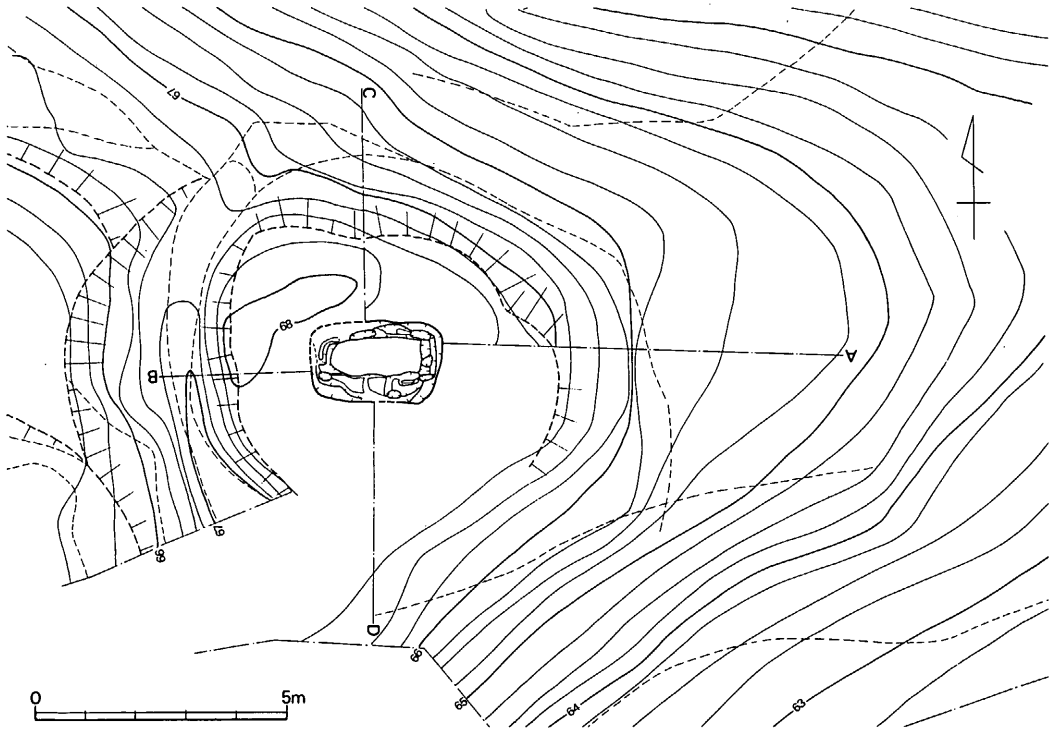
①墳　丘（図版90-1，第120図）

墳丘の大半は地山の丘尾切断による地山整形で造られ，現状では盛土が最高50cmほど残っているにすぎない。墳丘は，東西径9.2m，南北径7.5mの楕円形をしているが，北東と南側が流失したものと思われる。墳丘の高さは，西側から1m，東側から約2mとなっている。

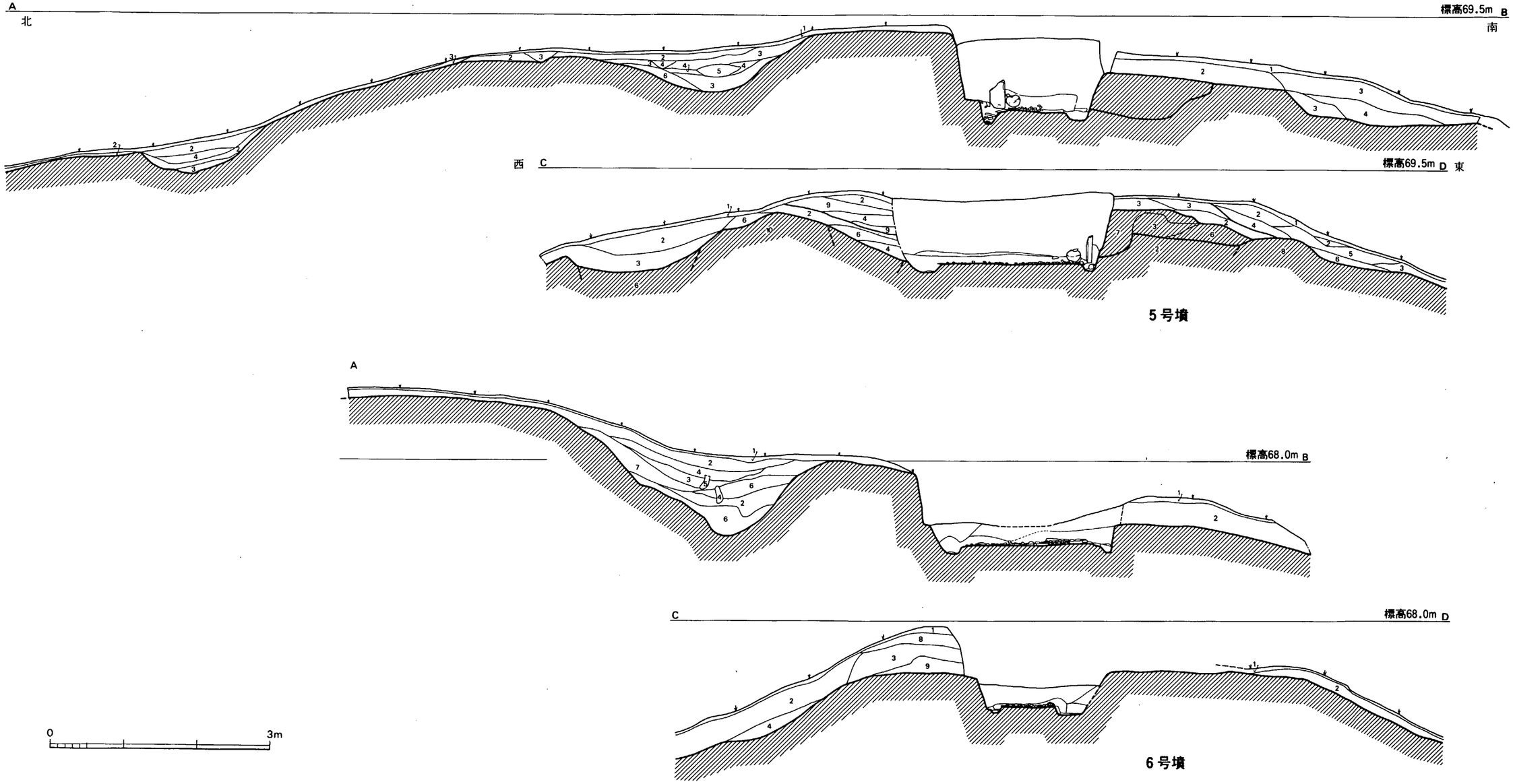
②主体部（図版90-2，第121図）

この6号墳も石室の石材を完全に抜取られていたが，石材の抜跡と攪乱内に残っていた小型石材によって，石室の構造が推測できる。石材の抜跡から，最下段の石材は箱式石棺状に立っていたことが明らかで，この石室の場合はその組合せも判明する。すなわち，箱式石棺と同様に両側壁の間に両小口を挟む組合方である。また，攪乱土中から出土した花崗岩の小型石材は，小口のみに赤色顔料が塗布されている。これも2号墳石室と同様に，腰石の上は小口積された竪穴式石室である。

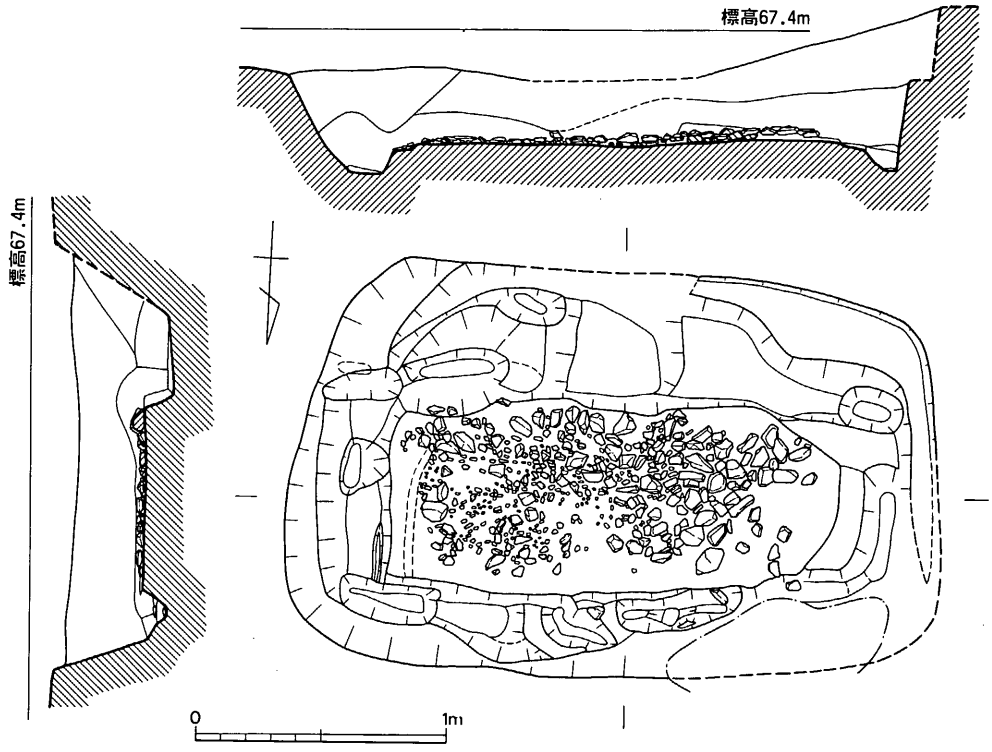
床面には小石と赤色顔料が一面に敷かれ，長軸2m，東幅85cm，西幅65cmの平面形をしている。床面東側でガラス小玉1個出土。　（柳田）



第120図　6号墳墳丘実測図（1/150）



第119図　5・6号墳墳丘土層断面図（1/60）



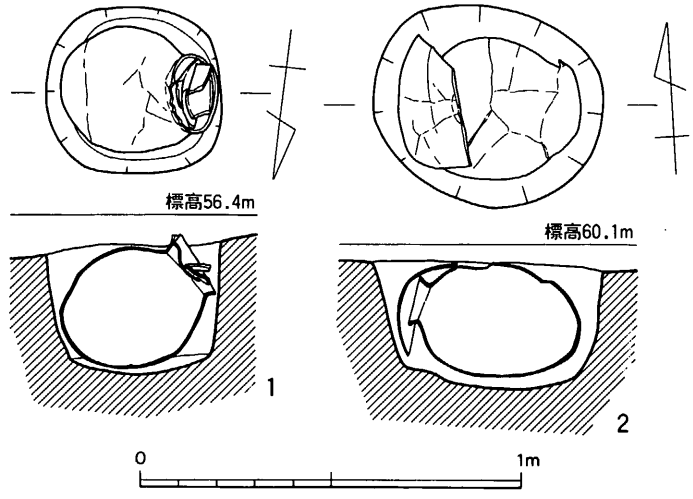
第121図　6号墳石室実測図（1/30）

(8) 甕棺墓と土壙墓群

① 甕棺墓（図版91-1・2）

1号甕棺墓（第100・122図）

1号墳の北側にあり，1号墳周溝の外肩より1.5m程離れている。円形に近い隅円方形プランで深さ35cmのピット内に，土師器の甕が33°の傾斜で埋置されていた。主軸方位N－83.5°－E。口縁付近に別個体の土師器の破片があるのは蓋としていたものであろう。



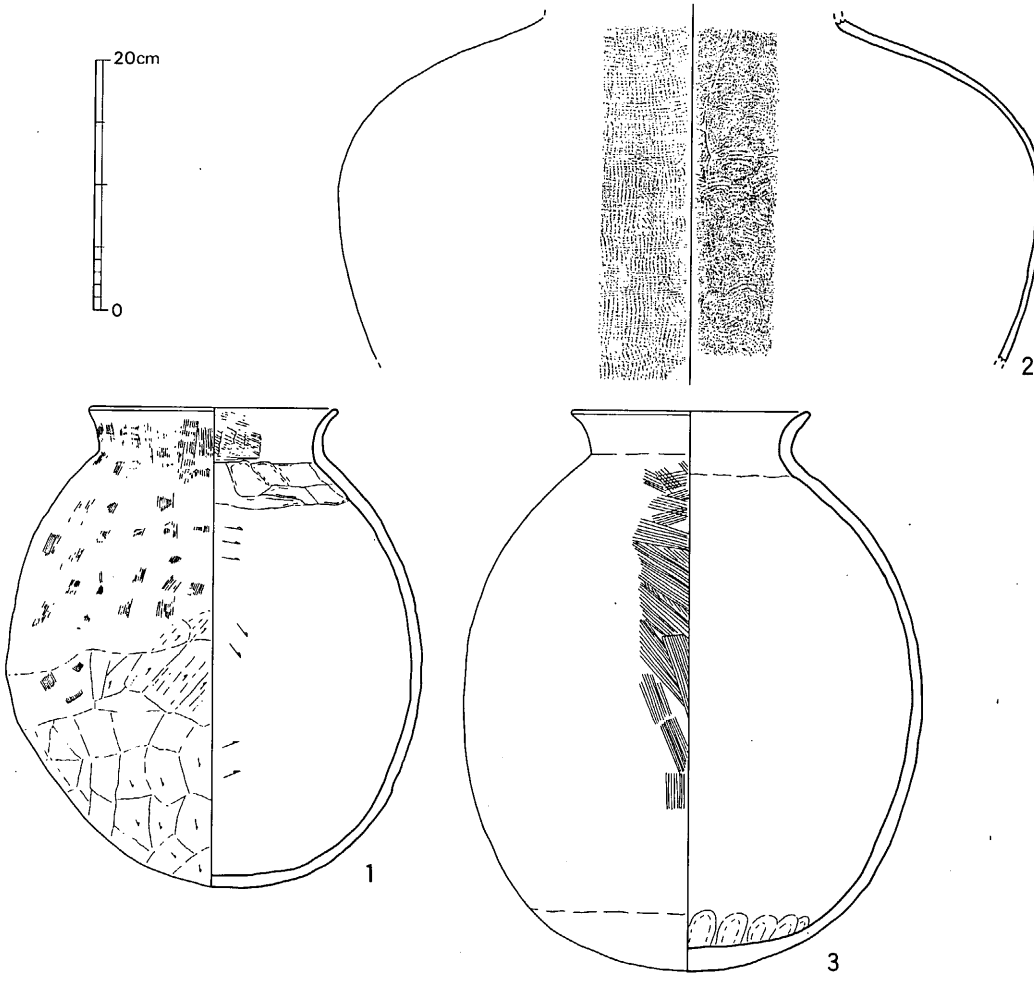
第122図　1・2号土師器甕棺墓実測図（1/20）

甕の内部には流入した茶褐色の砂質土が充満していた。

土師器甕（第122図１）　口径20cm，胴部径33.2cm，器高38.1cmを測る。全体に器壁が厚く，器表面の起伏が著しく，形状も若干いびつである。丸い底部に下ぶくれの胴部を有し，なで肩風の肩部から口縁部が外反している。外面は胴部下半がヘラ削り，上半が刷毛目の上をなで。口頸部は内外とも横なで。内面は肩部がなでつけ，胴～底部はヘラ削りを行なう。大きな石英粒と角閃石を含む。焼成はふつう。橙褐色を呈し，外面２ヶ所に黒斑を見る。

２号甕棺墓（第105・122図）

４号墳の東にあり，４号墳主体部より４ｍ程離れ，その周溝外肩からは１ｍ内外にある。楕円形プランで深さ35cmのピット内に13°の傾斜で埋置されていた。蓋には須恵器の甕の胴部片



第123図　土師・須恵器甕棺実測図（1/6）

が用いられている。主軸方位S－87°－W。

須恵器甕（第123図２）　蓋に用いられていた肩部～胴部の破片である。胴最大径は復原で55.8cm。かなり肩部が張っている。外面は肩部が縦平行タタキ→横平行タタキ→カキ目，胴部上半が擬格子状の縦平行タタキ→右斜め平行タタキ→カキ目，同下半が縦横の平行タタキという調整である。カキ目は４～５条のものを間隔をおいて施す。内面は同心円の上をなでる。焼成堅緻で灰色～灰黒色を呈す。

土師器甕（第123図３）　口径19.1cm，胴部径36.7cm，器高44.5cmを測る。器壁が厚く，全体にぼってりした感じを受ける。外面は胴下半と底部がなで，その他は２cm内に10本程の粗い刷毛目を施す。口縁内外は横なで。内面はなでている。肩部に赤色顔料の塗布痕を見る。（伊崎）

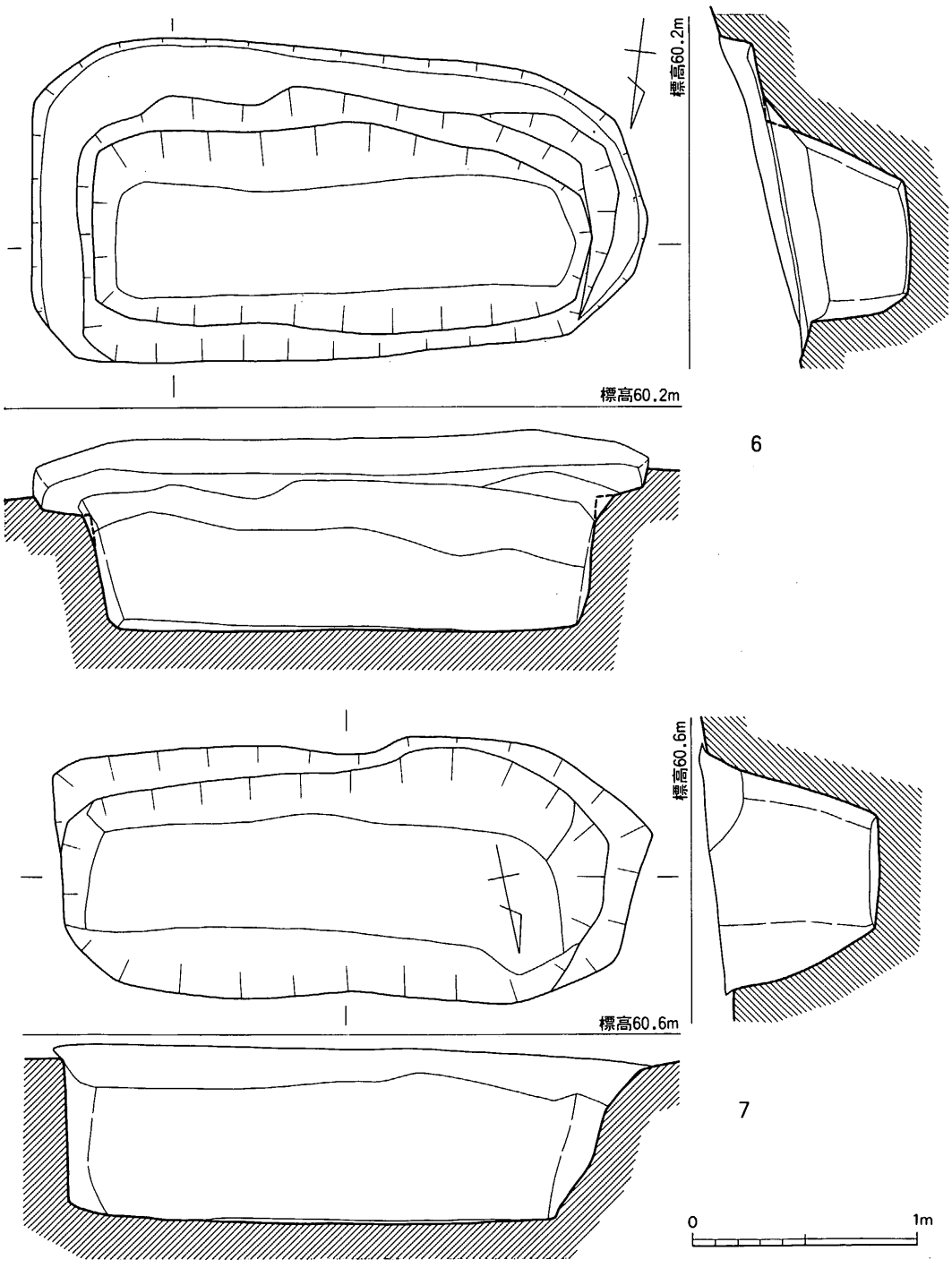
② 土壙墓（第123・124・125図，第28表）

この最も新しい土壙墓は，２号墳からその西側に集中し，しかもほぼ東西方向に主軸を向けて並ぶが，１基のみ３号墳の北東裾にある。土壙墓群の周辺の表土直下では，９号・11号で出土した須恵器と同時期のものが少量ながら採集されている。また，１号墳造出部西側周溝最上層でも長頸壺（第103図22）が出土しており，土壙墓の時期のものである。

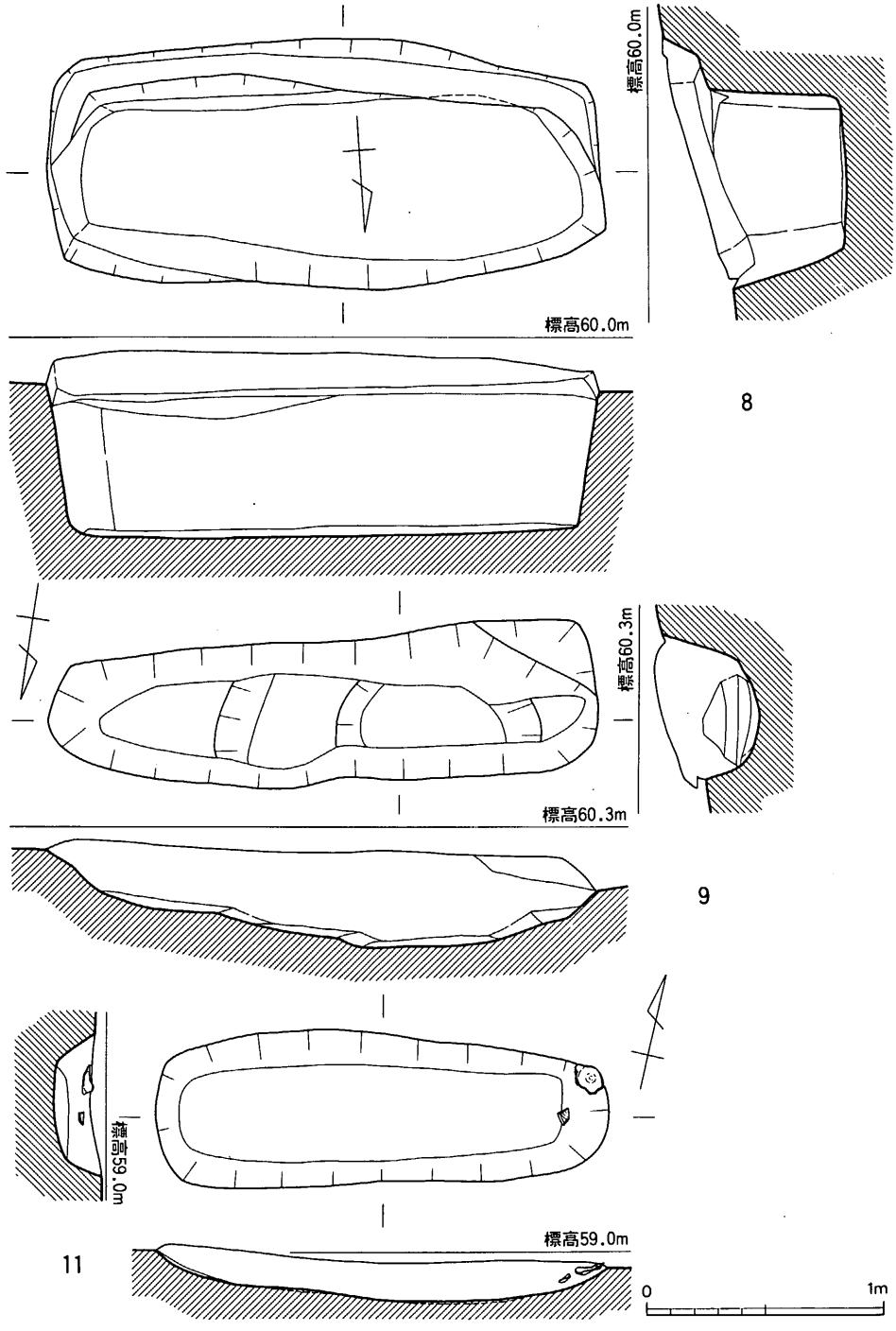
土壙墓の形態は，本来は５～８号のように２段式のものであったろうが，掘込みが浅いためか保存が悪い。あるいは，盛土状のものがあったのではなかろうか。　（柳田）

第28表　平原遺跡歴史時代土壙墓一覧表

No.	型	推定頭位	1段目			2段目			検出面からの深さ	主軸方位	出土遺物
			長辺	頭位幅	足位幅	長辺	頭位幅	足位幅			
1	中型	西	175	91	79	—	—	—	27	N67°W	—
2	小型	西	110	66	63	—	—	—	30	N82°E	—
3	中型	東	215	71	61	—	—	—	75	S84°E	須恵器片(2号墳のもの)
4	中型	東	185	55	50	—	—	—	41	N78°E	
5	大型	東	258	90	80	240	70	60	65	N84°E	
6	大型	東	274	144	110	238	110	95	85	N83°E	
7	大型	西	265	118	102	241	108	85	80	N79°W	
8	大型	西	234	74	80	220	65	64	79	N86°W	
9	大型	東	232	48	62	—	—	—	41	N81.5°E	須恵器壺片
10	小型	東	151	70	55	—	—	—	37	S88°E	
11	中型	西	192	60	45	—	—	—	24	N76°E	須恵器杯身



第124図　6・7号土壙墓実測図（1/30）



第125図　8・9・11号土壙墓実測図（1/30）

9．総　括

この国道200号線バイパス建設に先達つ発掘調査に当たっては，第1に県文化課の対応の貧弱さが指摘される。その原因は，なんといっても対応する人材の不足にあるが，県道路建設課および那珂土木事務所に対しては，度重なる調査費の追加と調査期間延長によって，多大のご迷惑をおかけしたことを，調査担当者としても深く反省する次第である。

次に，この発掘調査によって得られた成果および問題を整理しておきたい。調査区域は，道路幅という限定された範囲ではあったが，隈遺跡群といわれながらも，学術的には処女地であっただけに，その成果は多くの問題を含んでいる。

第1に，低丘陵地帯における集落構成の問題がある。この中には，弥生時代における丘陵地の利用の問題もあり，時期的なものと初期集落構成のあり方が指摘できるのではないだろうか。小郡市地区の低丘陵地帯では，津古内畑遺跡や横隈山遺跡が調査され，その実態も明らかにされつつある。夜臼期や板付Ⅱ期の弥生初期集落は，河川近くの微高地や小さな谷間に営まれるが，この三国丘陵群（旧筑前・筑後・肥前国の境界にある低丘陵群）では板付Ⅱ式以後の遺跡が急激に増加する。

今回の調査でも，全調査区域で弥生前期末～中期初頭の貯蔵穴群が検出されている。時期的な問題としては，前期末であるという点が，最も近い津古内畑遺跡が一部板付Ⅰ期に始まっていることから，遅れが目立つ。また，津古内畑遺跡と同様に貯蔵穴に伴う住居跡が確認できなかったことが，問題点として残る。削平された尾根上での竪穴住居跡の保存は悪かったにしろ，保存のよい丘陵上で，板付Ⅱ期の住居跡がほとんど確認できないということは，貯蔵穴のみ丘陵上に設け，住居は夜臼・板付Ⅰ期と同様に低地に営んでいるということになる。

この三国丘陵群では，中期初頭になると確実に円形竪穴住居の集落が営まれているが，少なくとも今回の調査区では弥生中期中頃には隅丸長方形の住居跡が集落の主体になっている。これは，甘木・朝倉平野で中期前半に方形住居跡が普及するのと相まって，糸島・福岡平野の遅れと対比できる。

貯蔵穴の問題としては，池の上遺跡（第5地点）のように弥生前期末～中期初頭の円形袋状貯蔵穴が，標高70mの狭い尾根上に設けられるということである。この貯蔵穴は4個を確認したが完掘できずに問題を残したが，大型の床面プランは隅丸方形ぎみのもので，弥生中期前半の甕棺埋葬に際して埋戻されている。貯蔵穴下層には土器細片が含まれていたが，上層には1号貯蔵穴のように甕棺墓と同時期の一括土器が含まれているものもある。このような高地の貯蔵穴は，低丘陵上の貯蔵穴以上に住居跡との関連が問題になってくる。これは，貯蔵穴内に貯蔵する物が問題になるが，2号貯蔵穴の上層では炭化物とともに若干の炭化米も出土している。

第２に，弥生集落と墓地の関連である。天神遺跡と橋詰遺跡では，中期前半の甕棺墓と土壙墓があり関連を追求できるが，それ以後最盛期を迎える中期末～後期初頭の墓地は，この付近では確認されていない。今後「中九州ニュータウン」計画に基づく発掘調査が進行すれば，前述したような集落構成も含めて解決されるものと思われる。とくに，池の上遺跡のような標高70ｍ地帯の弥生墓地と集落の関連する問題は，「中九州ニュータウン」に関するような広域発掘調査に期待したい。

第３に，古墳と集落についても，弥生時代と同様に興味がある。やはり，全調査地区で５世紀中頃から６世紀代の住居跡が検出されており，とくに５世紀代の住居跡は，平原古墳群との関連が気になる。平原古墳群とその付近にある古墳群は，同一古墳とされるべきものであるが，今後の調査によって，時期的関連が古墳群の構成に問題となる。付近の古墳群には，40ｍ級の帆立貝式らしき前方後円墳が含まれていることから，時期的にも平原古墳群との関連が重要で，五郎山古墳を中心とした６世紀代の古墳群との対比は今後の課題であろう。また，６世紀代の古墳群は，隈遺跡群の西側ばかりでなく，南側の津古内畑を中心とした地域にもあり，集落との関連は単純に解決できない。

第４に，平原古墳群の時期と須恵器の問題である。１号墳と５号墳を出土した須恵器と石室から，５世紀中頃以前に置くことに問題はなかろう。この場合，須恵器と石室構造からして，１号墳より５号墳が明らかに古いことから，５号墳を５世紀前半に含めることもできる。すなわち，５号墳の石室構造は，墓道に石組を持たず，石室基底部に板石を立てる型式で，初葬の須恵器と合わせて，すくなくとも５世紀前半の後半代には置かれるものと思う。

２号墳と６号墳は，調査した古墳群中で最も古いものである。この２基の石室が竪穴式である点から当然といえるが，２号墳出土の須恵器が何よりも証明している。

２号墳出土の須恵器は，その型式から甘木市池の上墳墓群（註１）と大阪陶邑窯跡との関連が問題になってくる。第108図３の壺は型式的に池の上Ⅱ式といわれているもと同一であるが，調整法など細部の検討が必要である。４の甕も陶邑ＴＫ87号窯出土品（註２）に近い型式で，調整法は同一といってよい。２号墳の甕（４）は，口頸部の立ち上がりが垂直に近い点や胴部の肩が張る点はより古式であることから，明らかにＴＫ87号窯に先行するものである。

２号墳の須恵器は，天神遺跡小溝出土の須恵器甕と共に胎土分析の結果を後章に載せた。結果は，地元産と陶邑産に分かれ，韓国産は含まれていなかった。すなわち，池の上墳墓群の土器群が韓国産であるにしても，同型式の土器を同時期に地元で生産しているのであり，時間的に問題があるにせよ陶邑産も関連してくる。いずれにしろ，２号墳の年代は５世紀の前半代の前半に置かれる。（柳田）

註１　甘木市教育委員会「池の上墳墓群」（『甘木市文化財調査報告』５，1979）

註２　大阪文化財センター「陶邑Ⅲ」（『大阪府文化財調査報告書』30，1978）

Ⅳ　化学分析

1．池の上遺跡甕棺墓出土人骨

九州大学　永井昌文

昭和58年の6月から9月にかけて，筑紫野市大字隈小字池の上より発掘された計20体の甕棺人骨である。甕棺の様式から弥生時代中期中頃から後期前半にかけての人骨とされる。

保存状態　概して不良である。半数以上が頭片や長骨骨体部の少量を残すのみであり，比較的良好なのはK18・29・57の3体がある。したがって多くが性別，年齢，身長などの推定に困難を感ずるのであるが，努めてその根拠を探索して下記に表示する。

第29表　池の上遺跡甕棺墓人骨観察表

人骨番号	性	年　齢	身長(cm)	備　　考	時　期
K 9	男？	成人	不明		中期末
K 10	女？	熟年	不明		中期末
K 11	不明	小児	不明		中期後半
K 12	不明	幼児	不明	5才ぐらい（天神遺跡）	中期前半
K 14	女？	熟年	不明		後期前半
K 15	不明	成年	不明		後期初頭
K 18	男	成年	159.7		後期初頭
K 19	男	熟年	不明		中期末
K 24	女	成年	146.4	下顎に赤色顔料附着	中期末
K 26	女	成年	149.1		中期末
K 29	男	熟年	155.9	他と違い全体の色調黒ずむ。	中期末
K 40	女？	成年	不明		中期末
K 44	不明	成人	不明		中期末
K 45	男	成年	160以上		中期中頃
K 51	男	熟年	166.1	高身長	中期末
K 52	女？	熟年	不明		中期末
K 54	男	熟年	157.8		中期後半
K 57	男	熟年	162.0		中期末
K 64	女	熟年	151.0		中期末
K 65	男	成人	160以上	左大腿骨下端に赤色顔料附着	中期中頃

表についての附記

年　齢　幼児（１才以上６才未満）

小児（６才以上12才未満）

成年（20才以上40才未満）

熟年（40才以上60才未満）

なお成人とは20才以上であるが成年，熟年，老年のいずれか明確でないもの。

身　長　最大長が明確に測れる大腿骨が無いので，やむなく骨体部の小転子と内転筋結節との長さから比例算出したもので，ピアーソン氏の公式に準じた。全く不明として放置するよりはと思い敢えて掲げる。男性で150㎝台後半の個体が混ずることを注意しておきたい。

最後に抜歯風習の痕跡については，多くが上下顎の保存不良のために不明であるが，K18・24・26・29・51・57などでは確かに無いので，全体としてはこの風習は終息していたと見て大過ないであろう。

2．天神遺跡小溝と平原2号墳出土の胎土分析

奈良教育大学　三辻利一

胎土分析により，天神遺跡小溝，および隈平原2号墳より出土した須恵器の産地推定を行なったので報告する。

分析資料は第30表のとおりである。

分析方法は蛍光X線分析法である。A，B，2つの方法で分析した。

（A法） 土器資料は表面を研磨したのち，200メッシュ程度に粉砕し，K（カリウム），Ca（カルシウム），Fe（鉄），Rb（ルビジウム），Sr（ストロンチウム）を定量した。標準試料は岩石標準試料JG—1である。分析値は標準試料による規格化値で示された。$\overline{K}$，$\overline{Rb}$などはJG—1による規格化値である。規格化値は一種の濃度であり，この値が大きい程，含有量も多いと考えればよい。

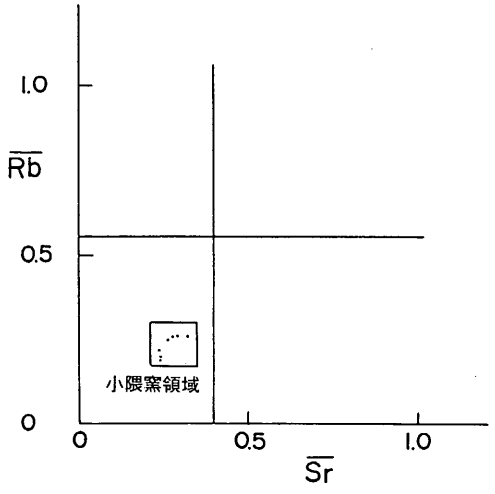
（B法） 破壊の許されない土器資料については非破壊でX線を照射した。試料の検出器に対する幾何学条件が一定していないため，標準試料による規格化値は意味をもたず，同一試料のK/Ca，Rb/Srのピーク面積比をとって土器資料を特徴づけた。

第30表　胎土分析資料一覧表

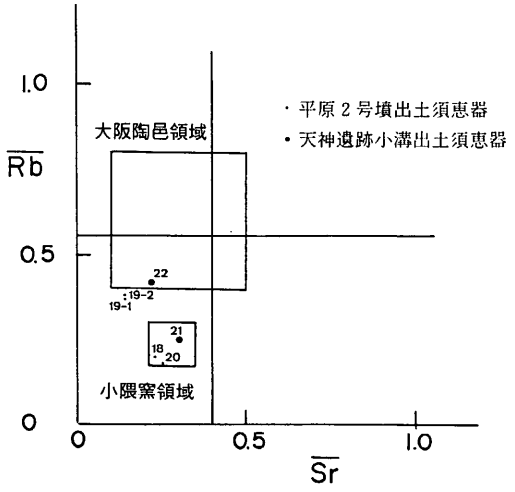
資料番号	遺跡名	器種(実測図番号)	備考
1	小隈窯跡（表採）	杯蓋片	I式（註2）
2	小隈窯跡（表採）	高杯脚片	I式
3	小隈窯跡（表採）	小甕片	外面平行タタキと横の沈線
4	小隈窯跡（表採）	小甕片	外面粗平行タタキ、内面消し
5	小隈窯跡（表採）	小甕片	外面平行タタキ、内面消し
6	小隈窯跡（表採）	小甕片	外面平行タタキ、内面消し
7	小隈窯跡（表採）	大甕片	外面平行タタキ、内面消し
18	平原2号墳(西周溝底)	壺（第108図3）	（池の上II式）（註3）
19−1	平原2号墳(北東墳丘上)	甕（第108図4）	
19−2	平原2号墳(北東墳丘上)	甕（第108図4）	
20	平原2号墳(石室内)	甕（第108図2）	
21	天神遺跡小溝内	甕（第7図5）	
22	天神遺跡小溝内	甕（第7図6）	

はじめに，土器資料を破壊した分析結果について述べる。第126図には，5世紀中葉以前と推定される小隈窯跡出土須恵器のRb—Sr分布図を示す。この分布図は各地の須恵器の地域差をよく表示する分布図として知られている(註1)。中央に引かれた新座標軸は全国の窯跡出土須恵器の

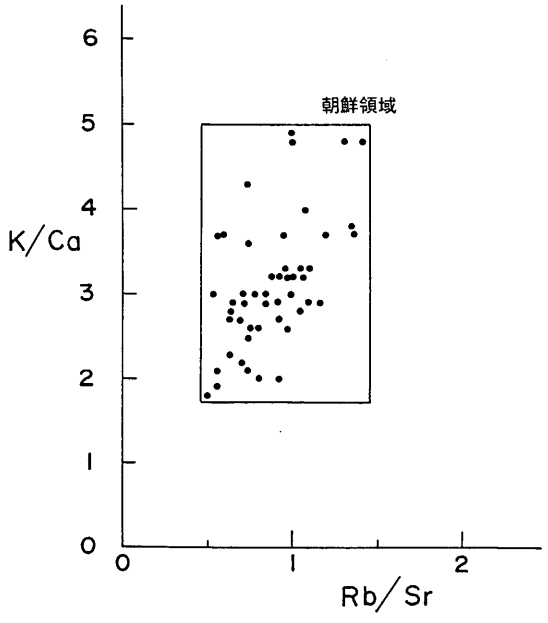
Rb，Srの平均値である。そうすると，小隈窯跡出土須恵器はよくまとまって分布し，小隈窯跡出土須恵器としての化学特性を示すことが分かる。小隈窯跡の須恵器は全国平均値に比べて



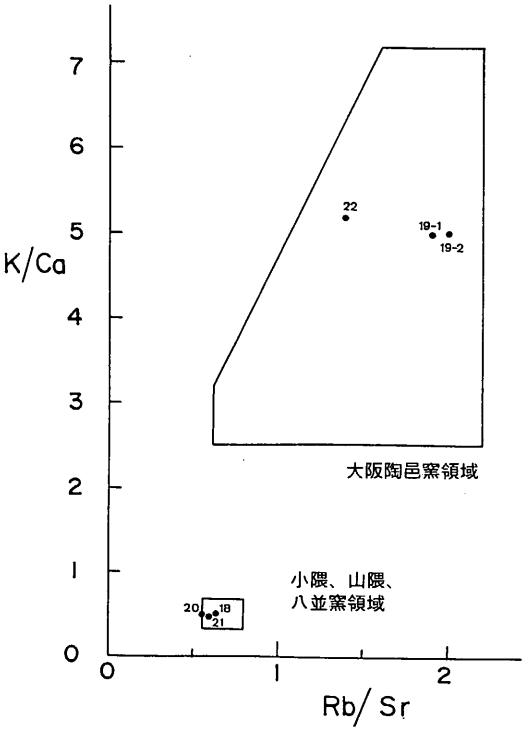
第126図　小隈窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図
（5c中）



第127図　天神遺跡小溝・平原2号墳出土須恵器の
Rb-Sr分布図　（5c前半）



第128図　朝鮮産陶質土器のK/Ca～Rb/Sr分布図



第129図　天神遺跡小溝・平原2号墳出土須恵器の
非破壊分析

Rb も，Sr 量も少ないという特徴をもつことが分かる。

次に，5 世紀前半の天神遺跡小溝・平原 2 号墳出土の須恵器の Rb—Sr 分布図を第127図に示す。試料番号は18，20，21の 3 点は小隈窯跡領域内に分布するのに対し，19—1，19—2，および22は小隈窯跡より明らかに逸脱して分布しており，小隈窯跡産でないことは明らかである。それでは，これら 3 点の須恵器の産地は何処なのか。No22は明らかに大阪陶邑領域内に分布しており大阪陶邑産である可能性が高い。一方，19—1，19—2 は大阪陶邑領域を少しはずれるが，すぐ近傍に分布しており，大阪陶邑産の可能性はなきにしもあらず。これは他の因子についても調べてみなければならない。

次に，平原 2 号墳出土の須恵器をみると，No19—1・19—2・22を除いて，他の 3 点は小隈窯グループの領域に入るのに対し，No19—1・19—2・22は小隈窯グループの領域より大きく逸脱し，大阪陶邑領域に入る。

註 1　三辻利一「古代土器の産地推定法」(『考古学ライブラリー』14，ニューサイエンス社，1983)

註 2　小田富士雄「九州の須恵器」(『世界陶磁全集』 2，日本古代，小学館，1979)

註 3　橋口達也「池の上墳墓群」(『甘木市文化財調査報告』 5，1979)

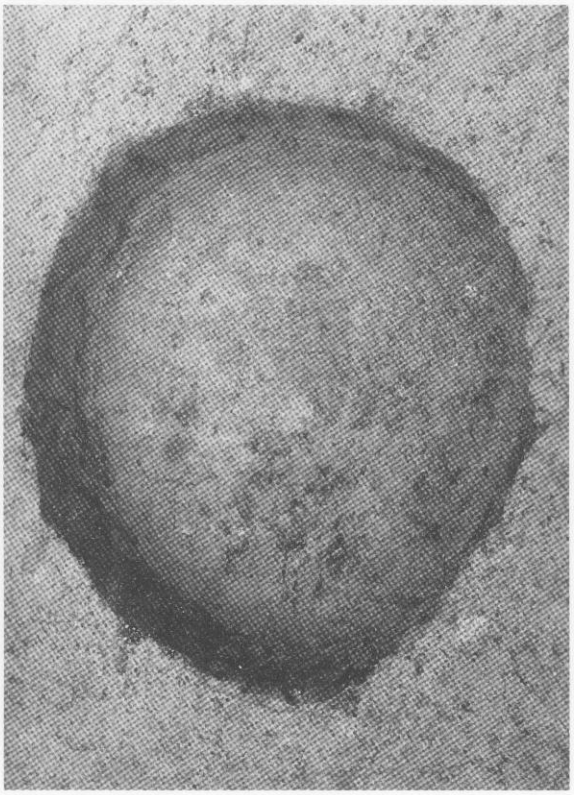
図　版



1　天神遺跡貯蔵穴・住居跡全景(西から)

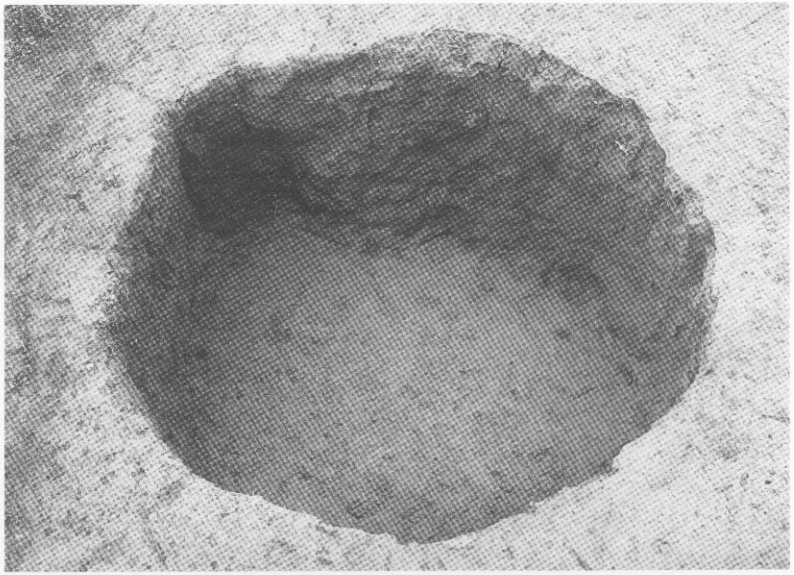


2　1・2号貯蔵穴



3　3号貯蔵穴

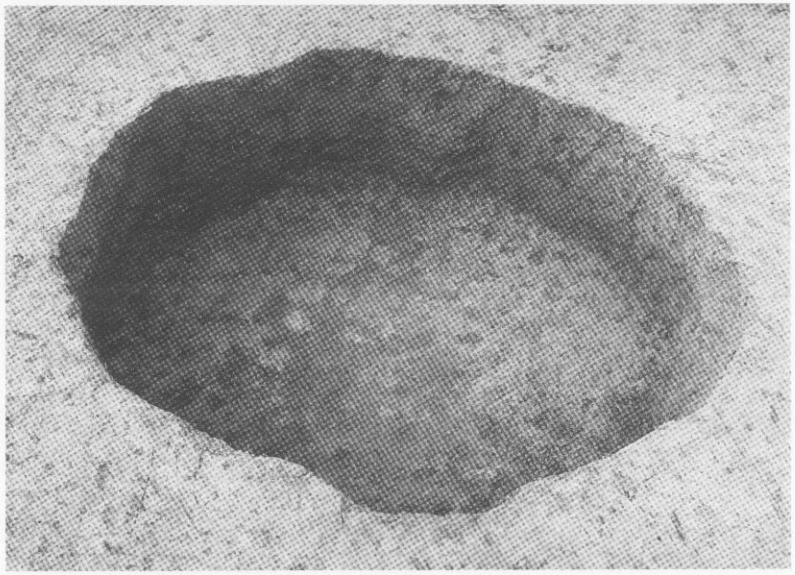
1 5号貯蔵穴



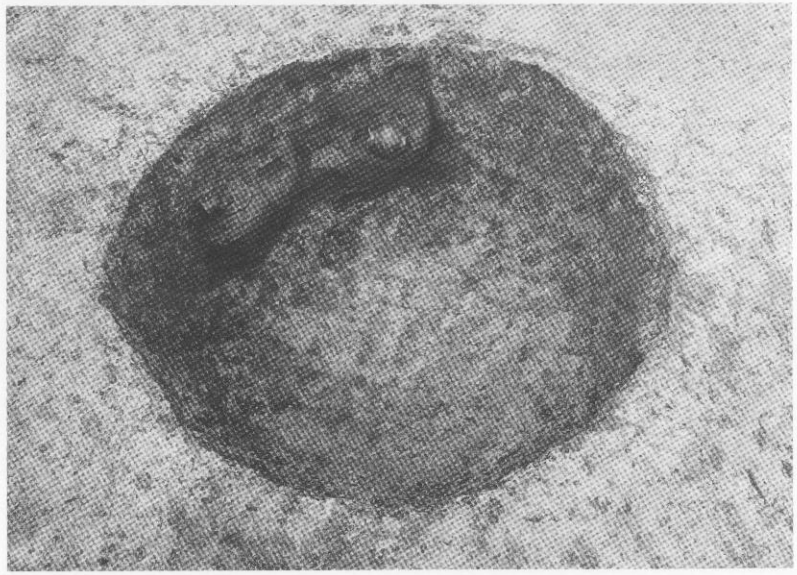
3 8号貯蔵穴



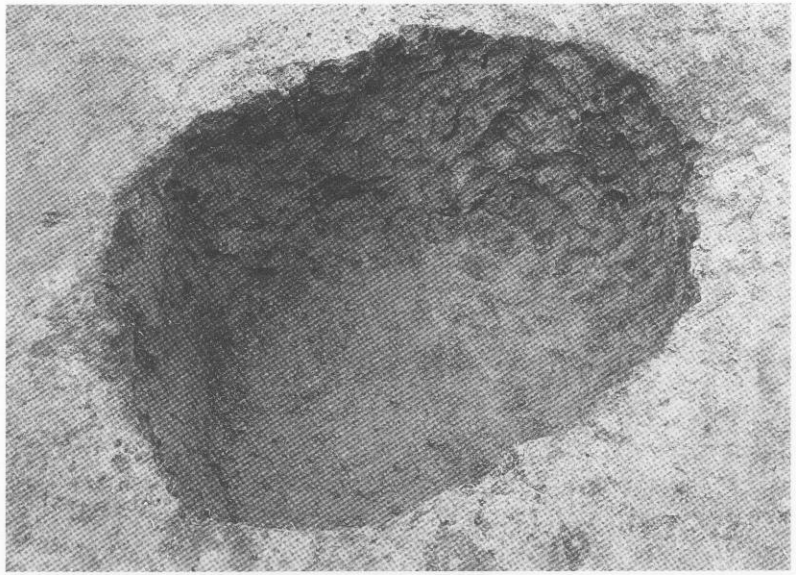
2 7号貯蔵穴



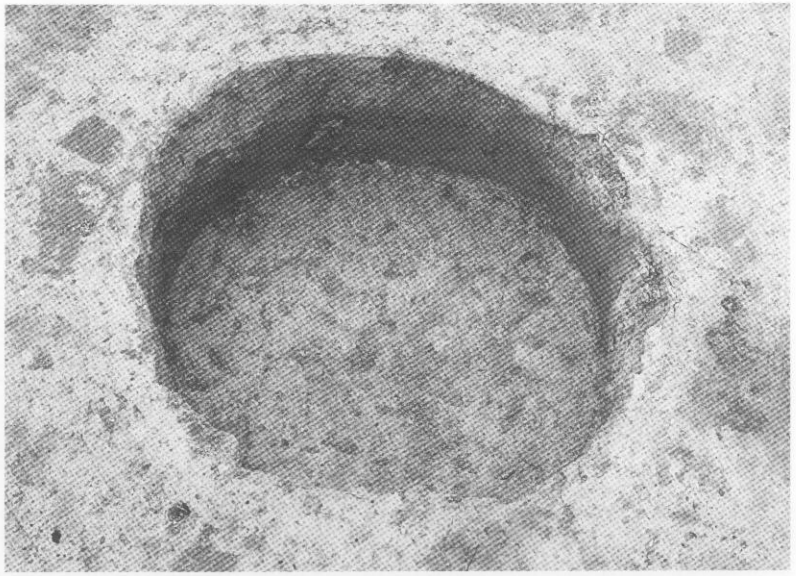
4 9号貯蔵穴



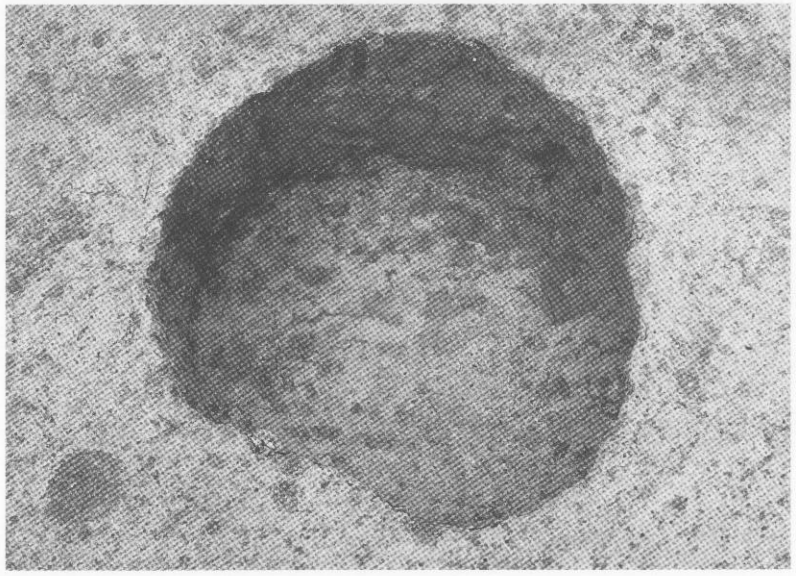
1 10号貯蔵穴



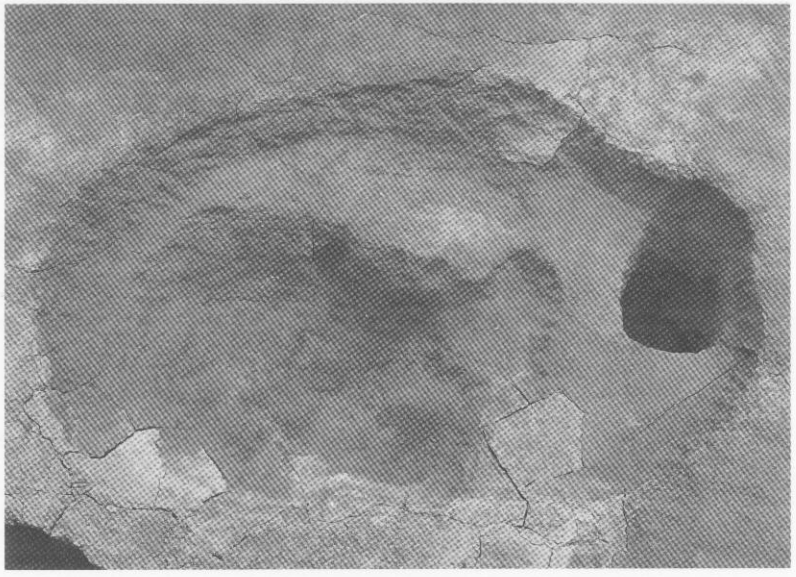
3 12号貯蔵穴



2 11号貯蔵穴



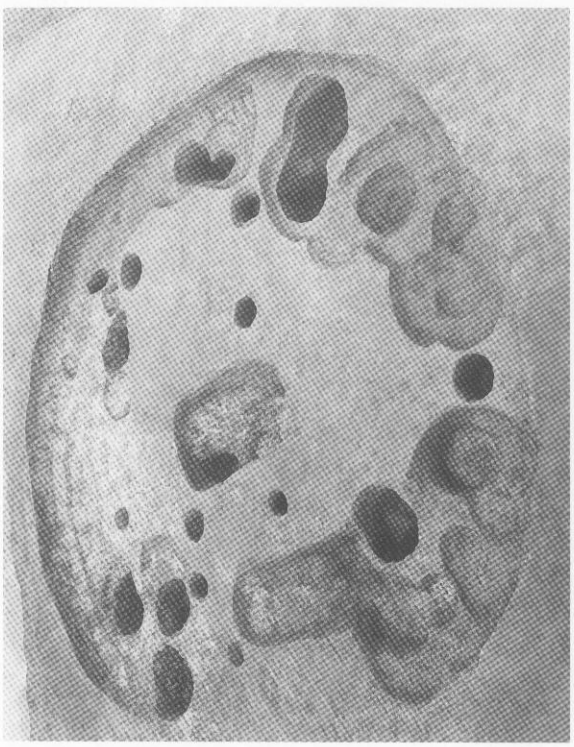
4 18号貯蔵穴



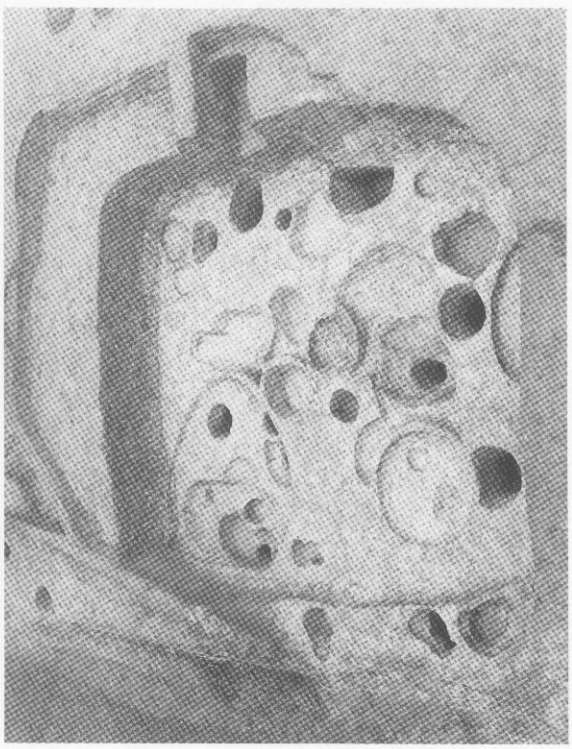
図版3



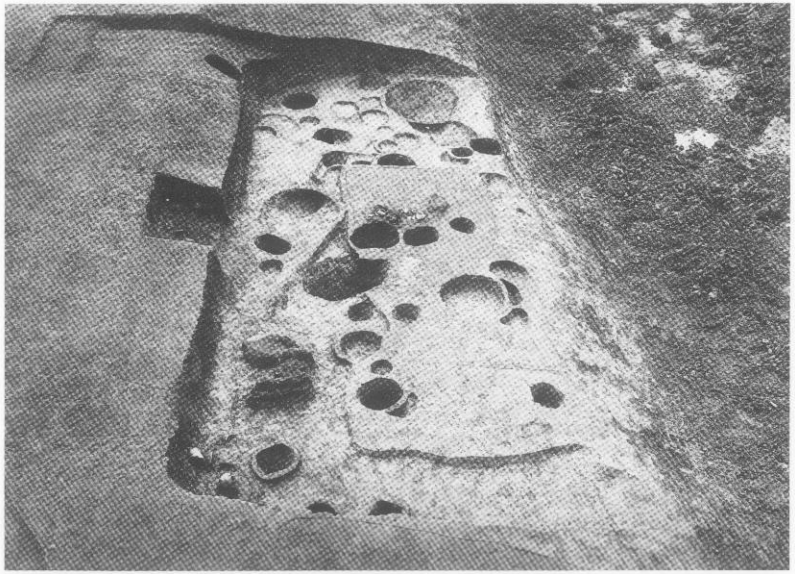
1　天神遺跡住居跡全景（西から）



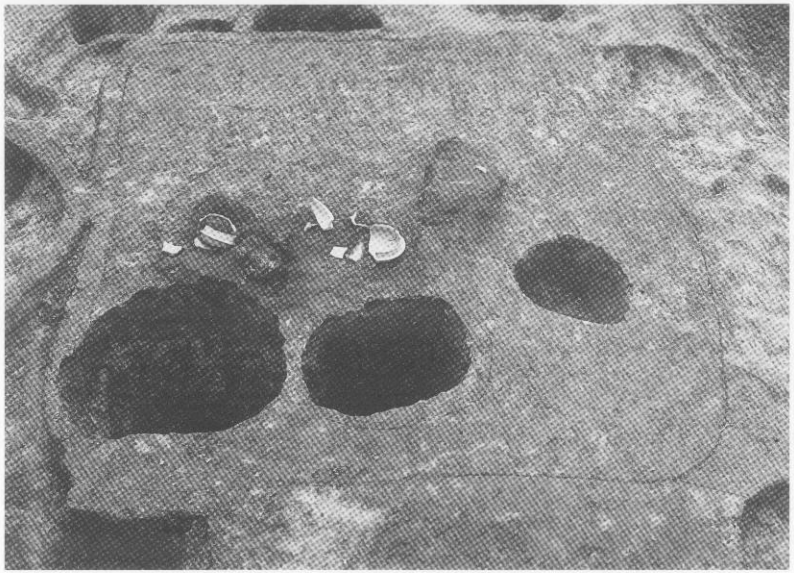
2　1号住居跡



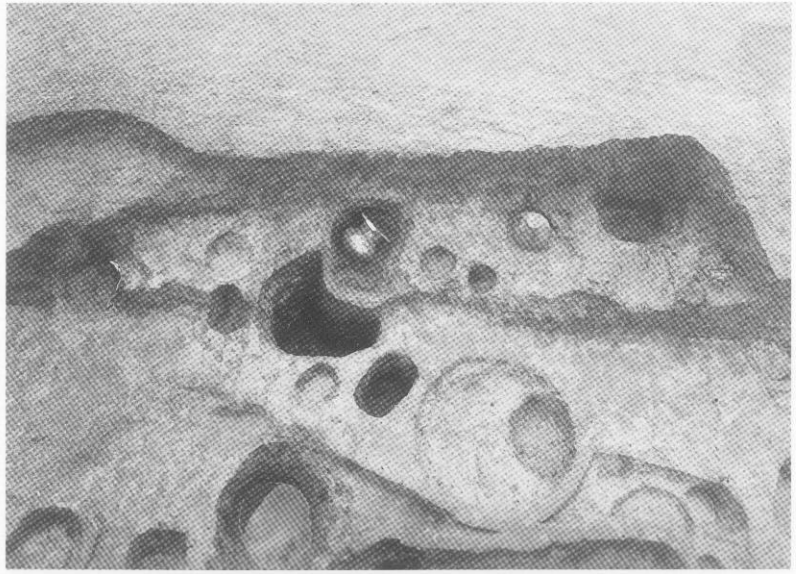
3　6号住居跡



1　2号住居跡



2　2号住居跡床面の須恵器



3　3号住居跡

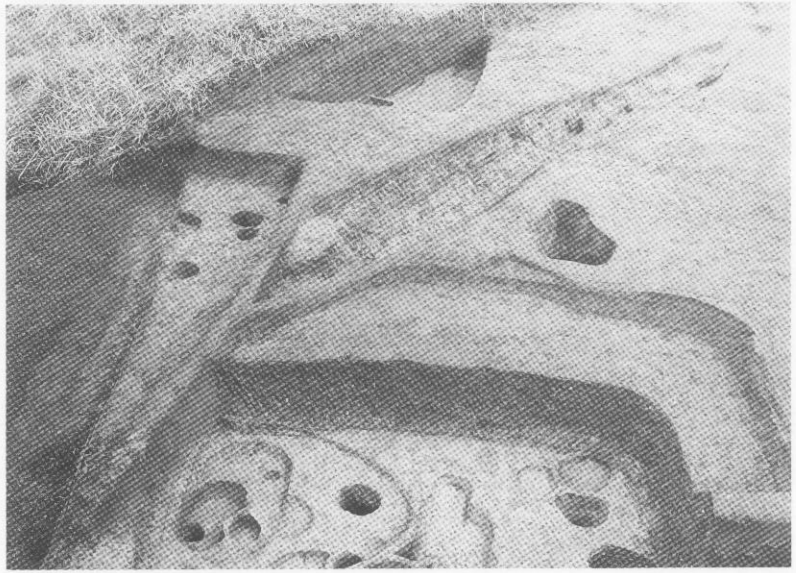


4　3号住居跡の投弾形土製品

1 7～9号住居跡



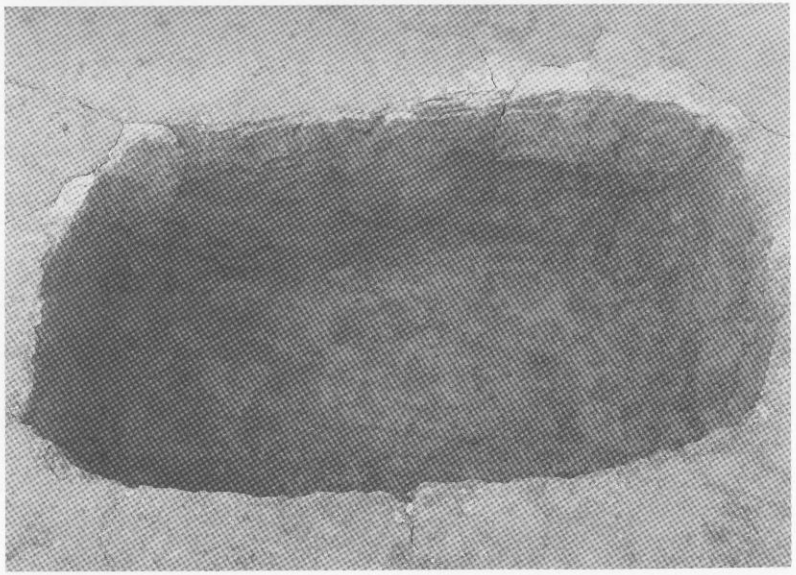
2 4～7号住居跡



3 不整形土壙



4 2号土壙





1　天神遺跡大溝全景（南から）



2　大溝中央区土層断面



3　大溝西区断面と小溝



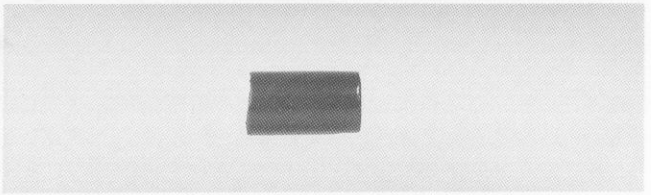
1　大溝西区中層の土器



2　大溝西区中層の土器（北から）



3　古墳時代小溝全景（北から）



4　甕棺墓地区表採の管玉（実大）

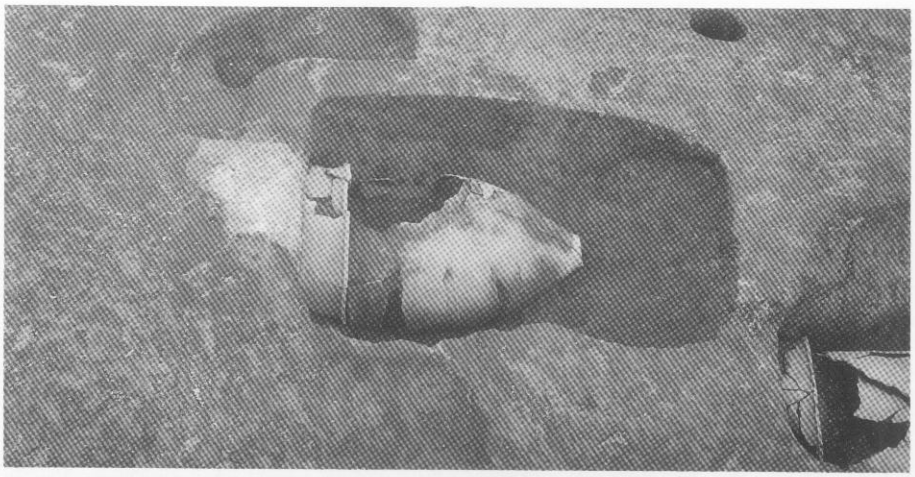
1　天神遺跡墓地群全景（北から）





2　2・3号甕棺墓

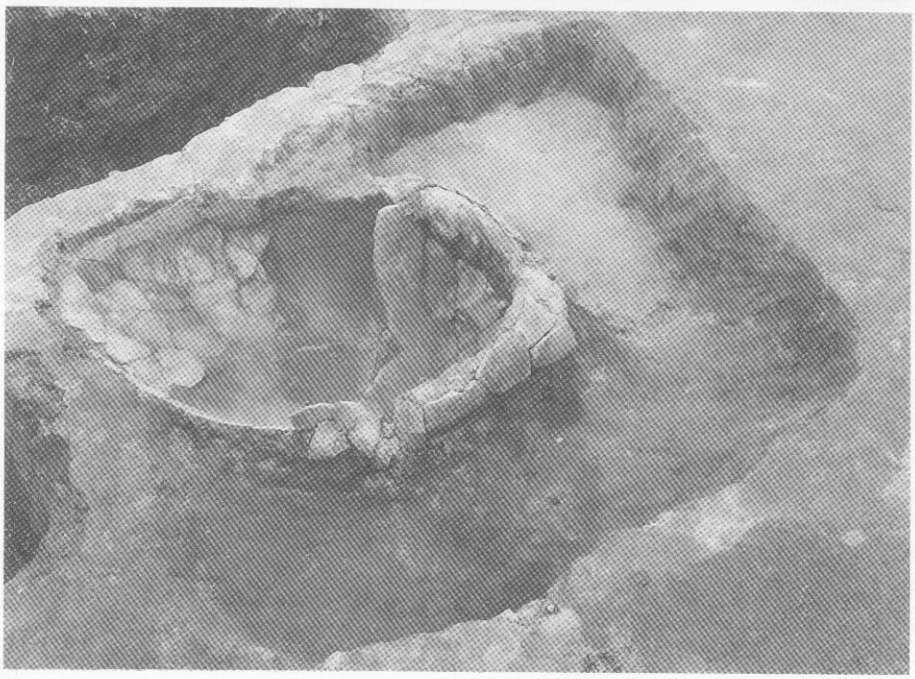
図版10



1 4号甕棺墓

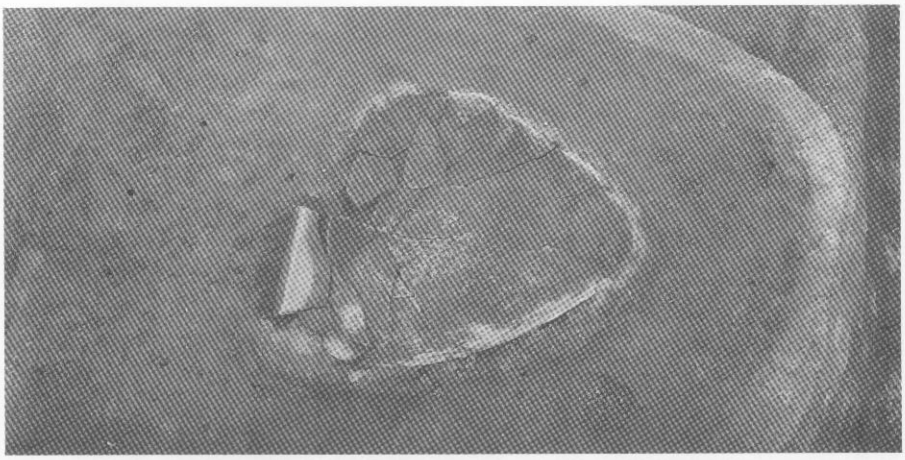


2 5号甕棺墓

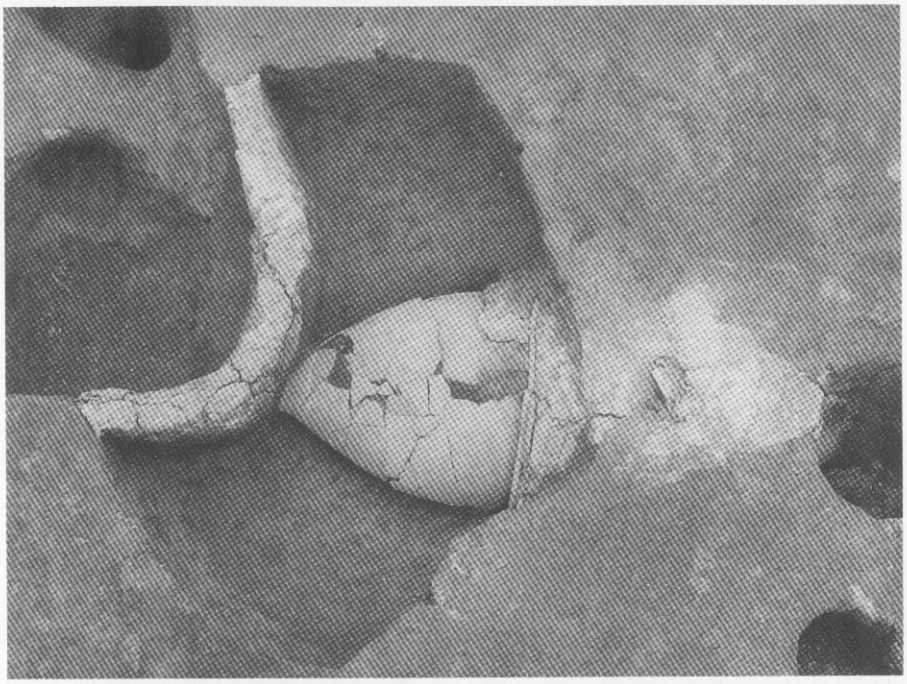


3 6号甕棺墓

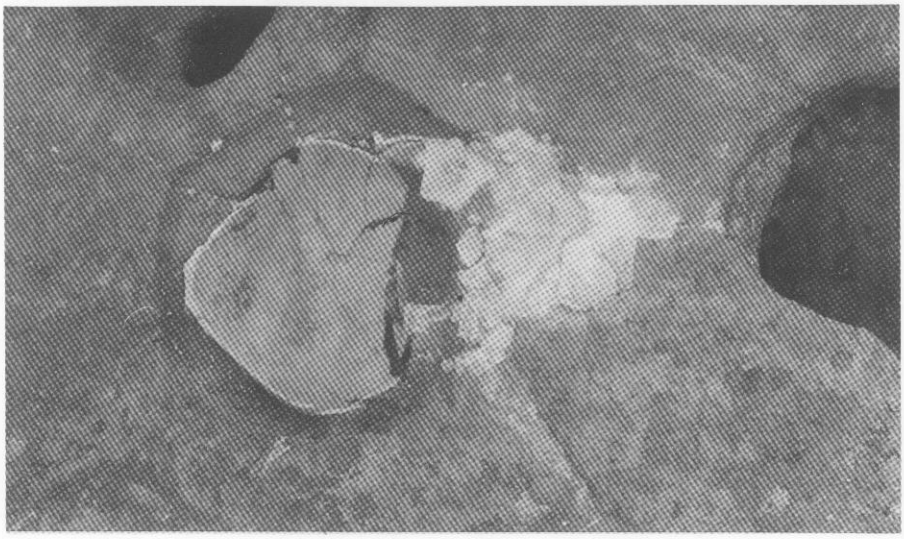
1 7号甕棺墓

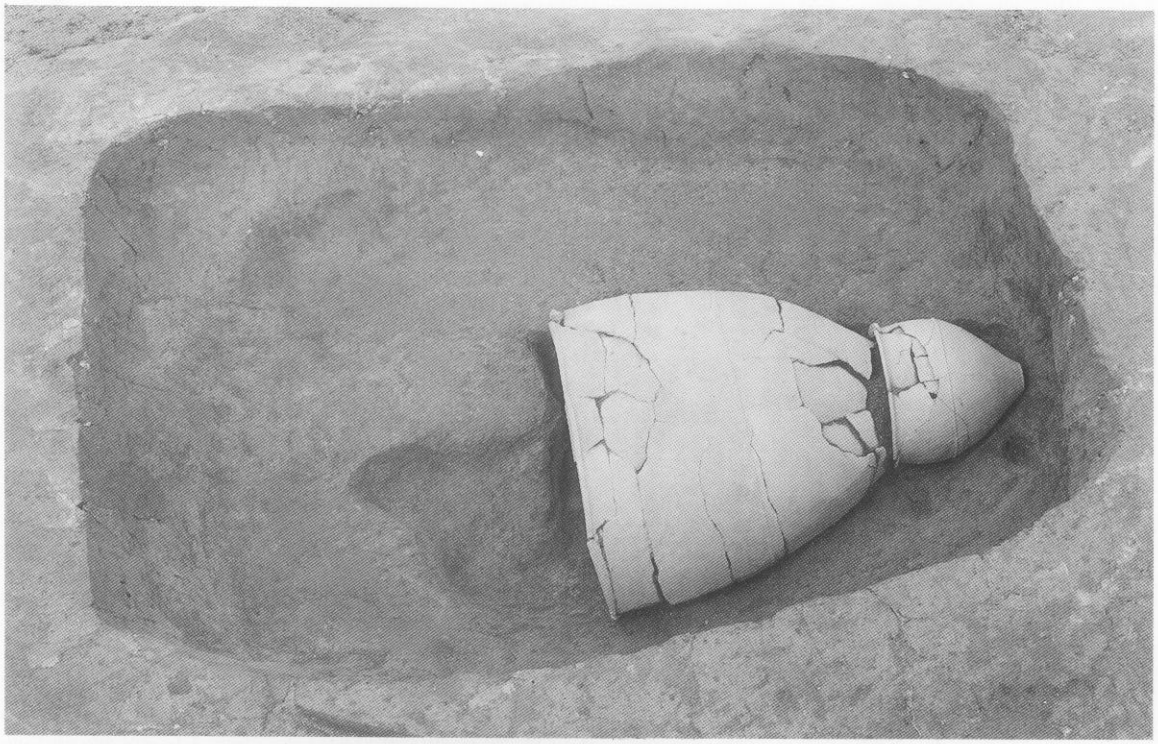


2 8号甕棺墓

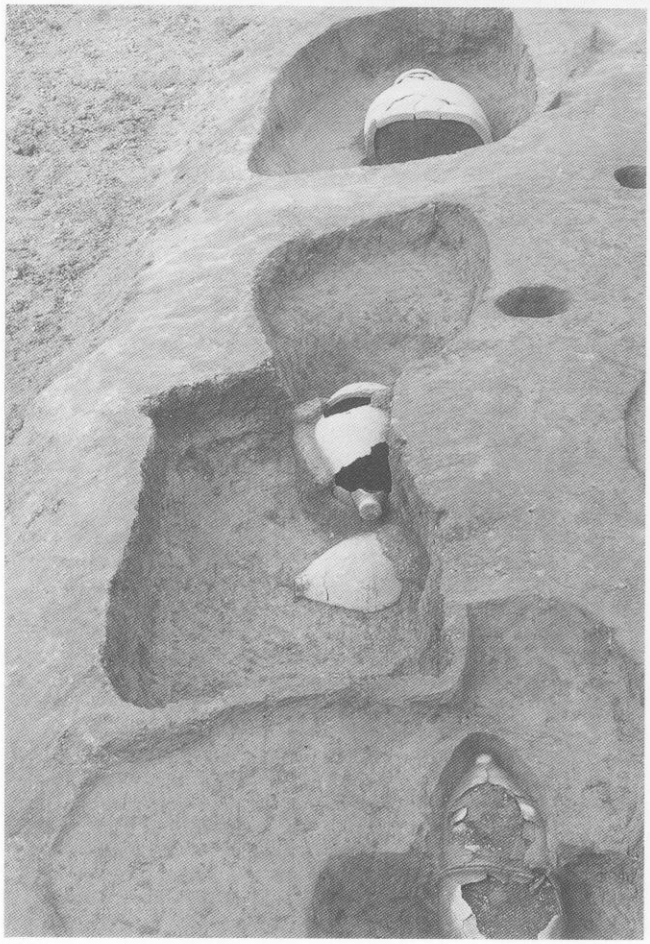


3 9号甕棺墓





1　10号甕棺墓



2　10～13号甕棺墓（南から）

1 11・12号甕棺墓



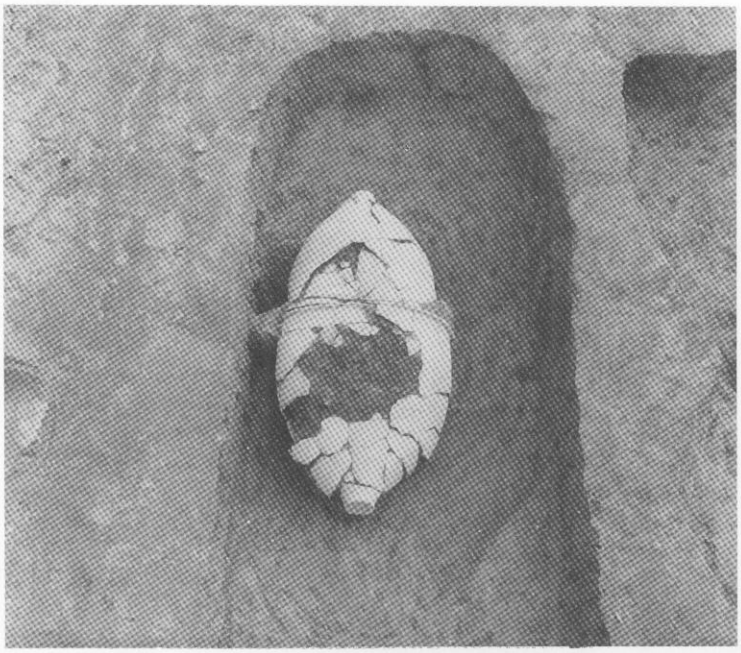
2 12号甕棺墓



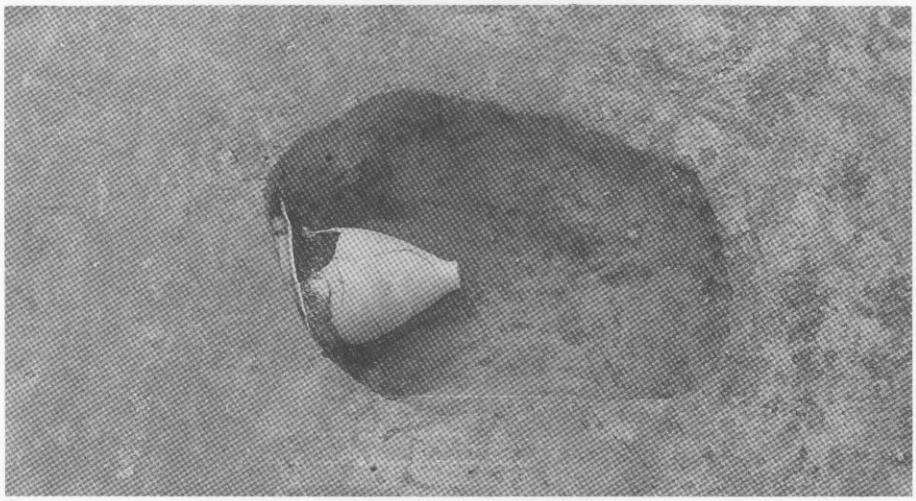
3 13号甕棺墓



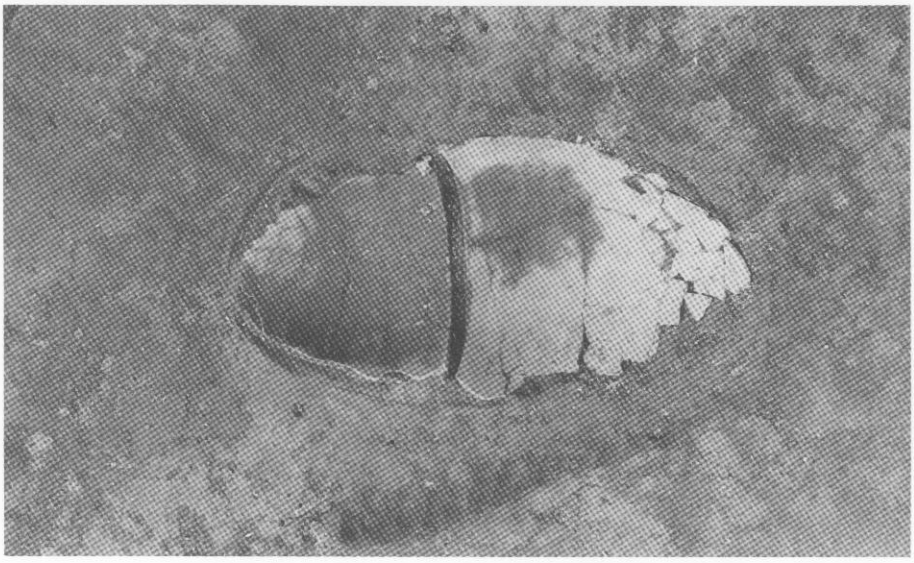
図版14



1 14号甕棺墓

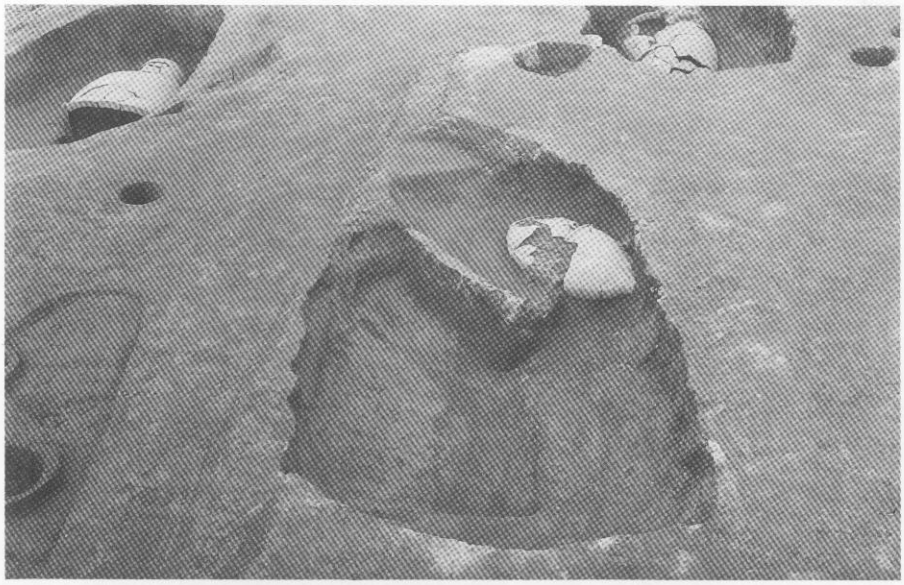


2 15号甕棺墓



3 16号甕棺墓

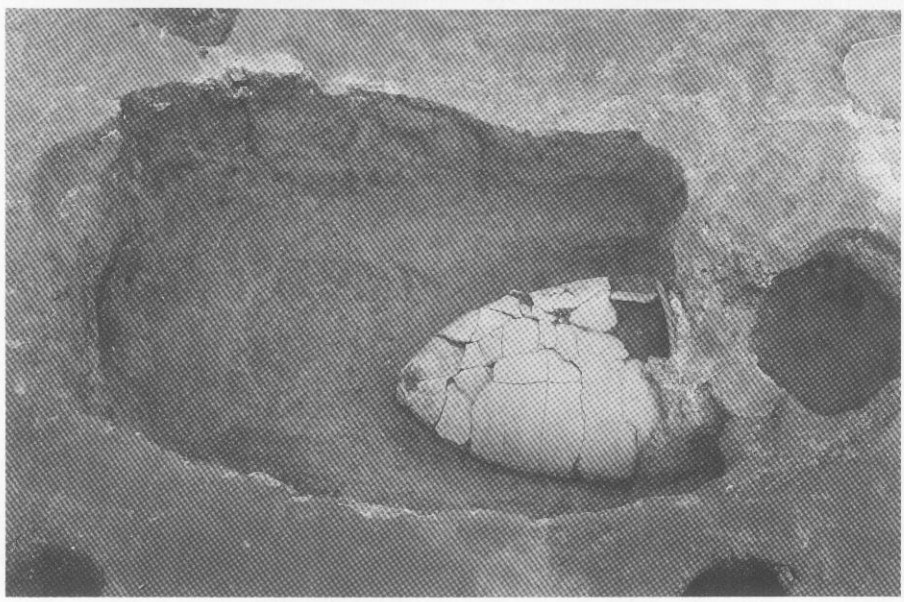
1 17号甕棺墓と4号土壙墓

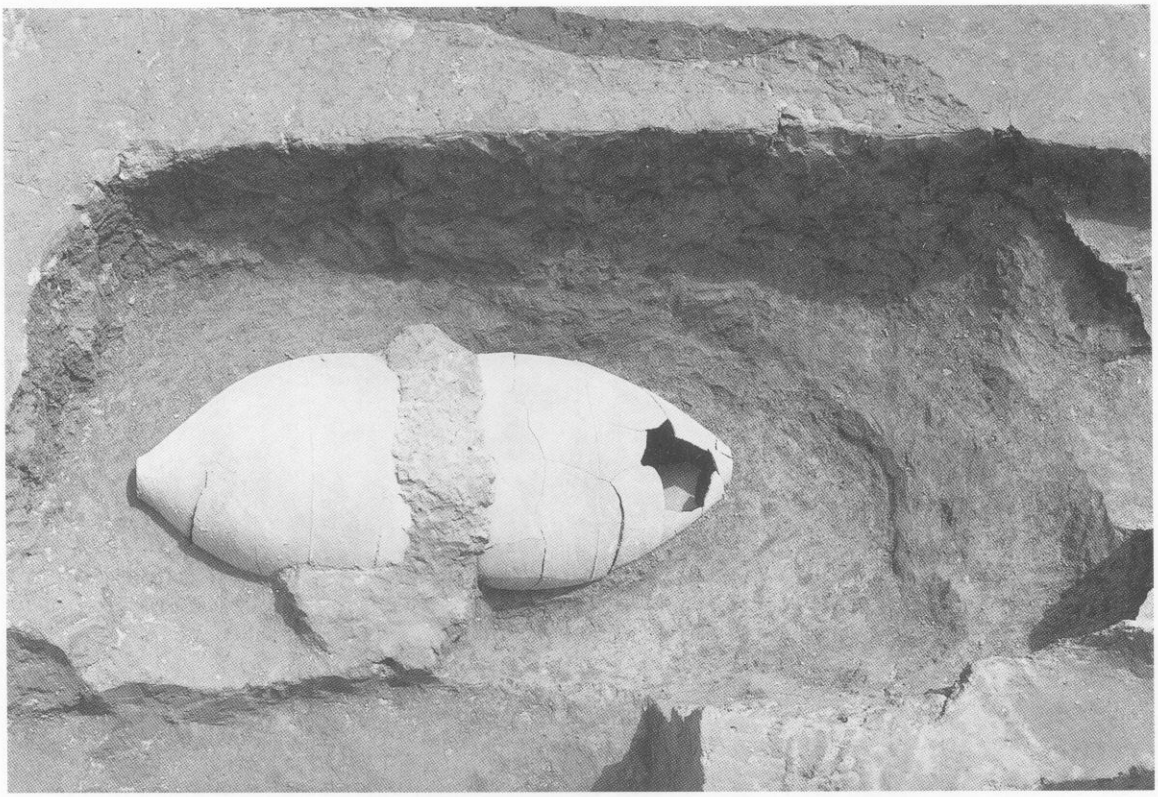


2 17号甕棺墓



3 18号甕棺墓



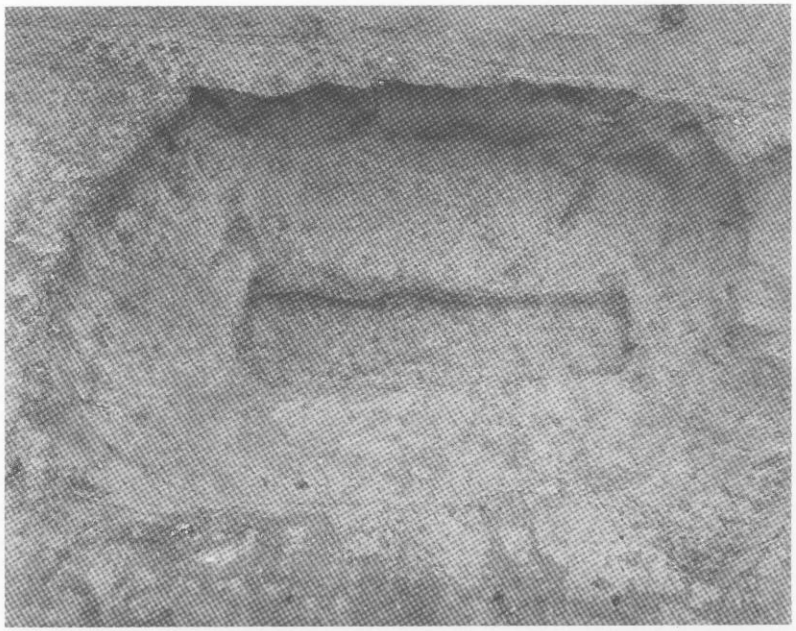


1　19号甕棺墓と粘土目張

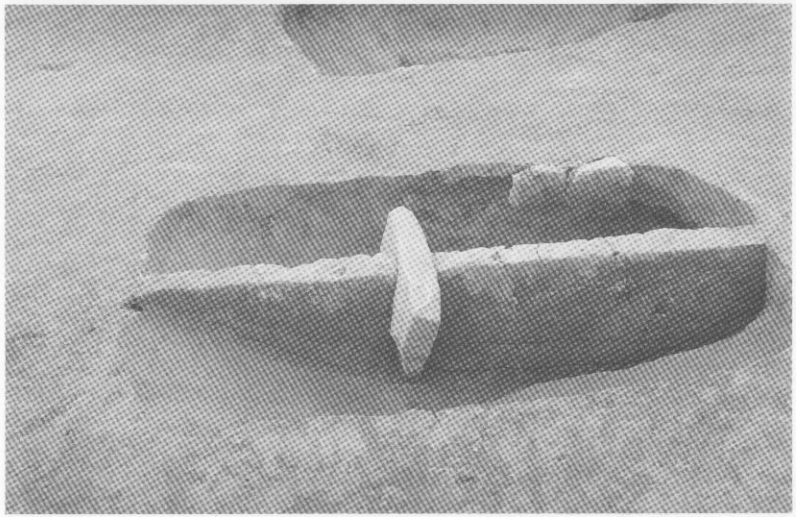


2　19号甕棺墓

1 4号土壙墓



2 5号土壙墓

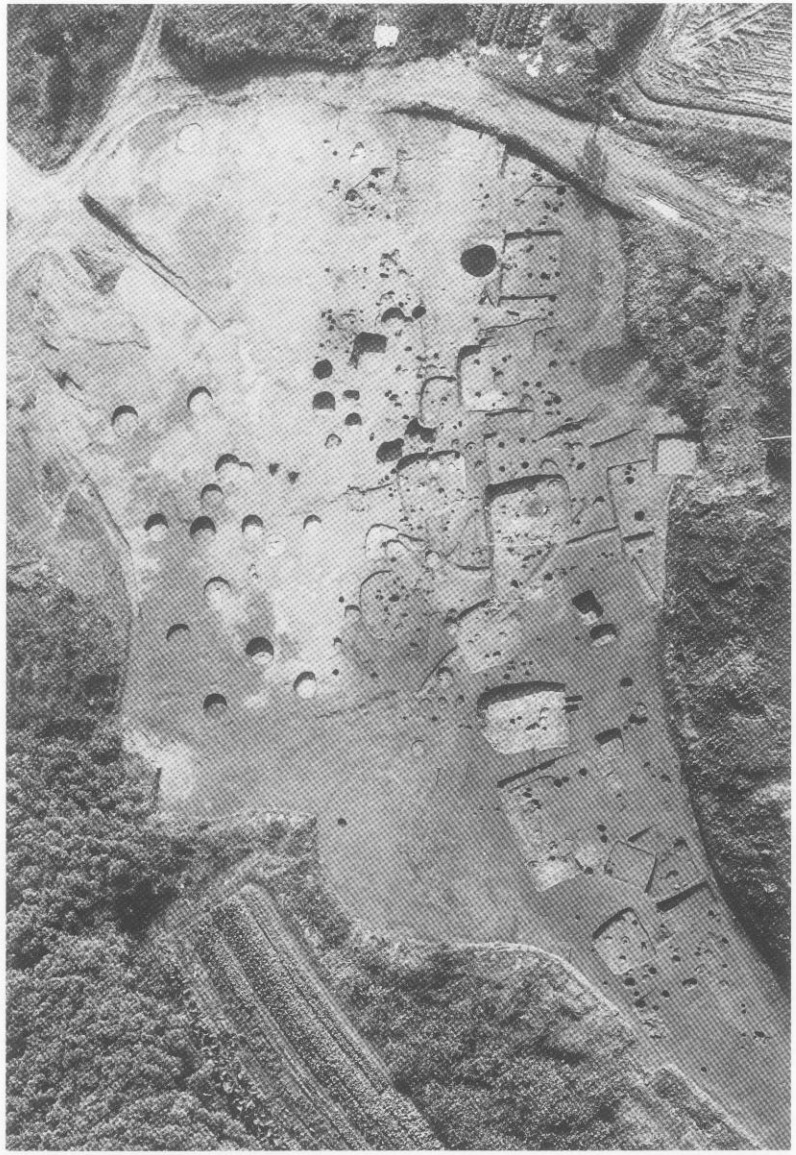


3 6号土壙墓



4 8号土壙墓





1　橋詰遺跡発掘区全景（弥生期）

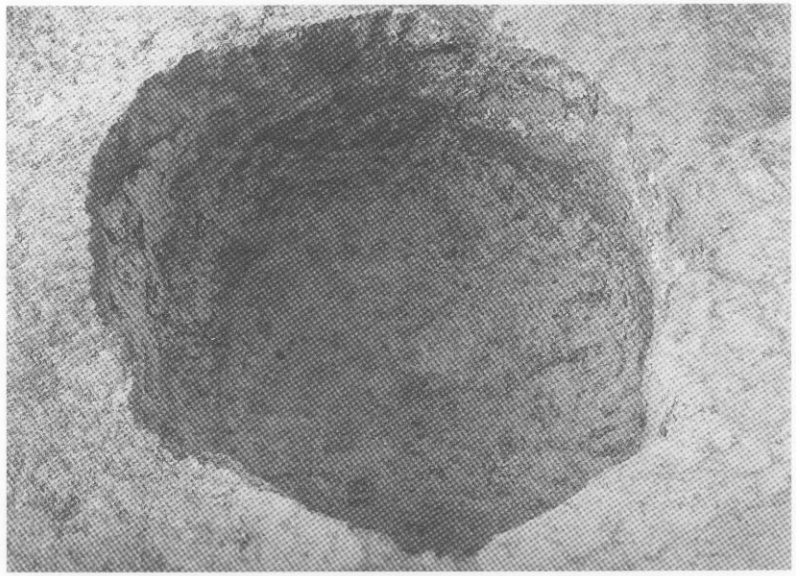


2　1号貯蔵穴

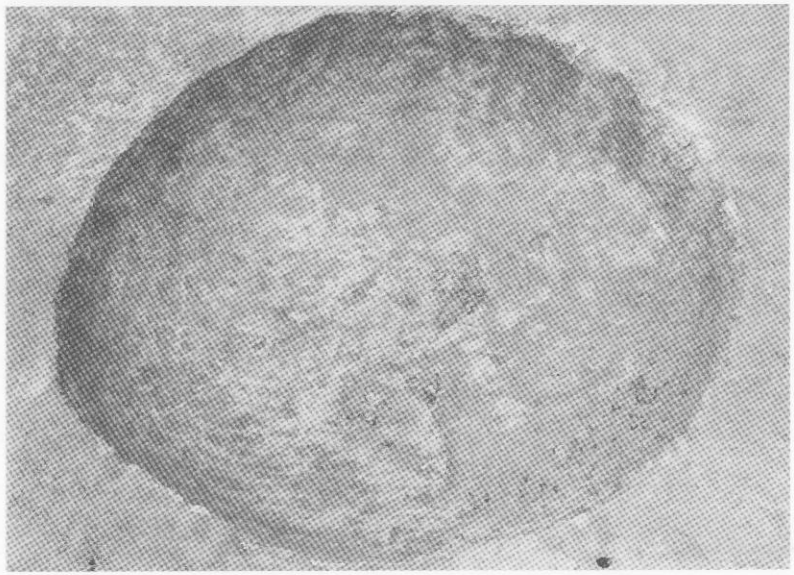


3　3号貯蔵穴

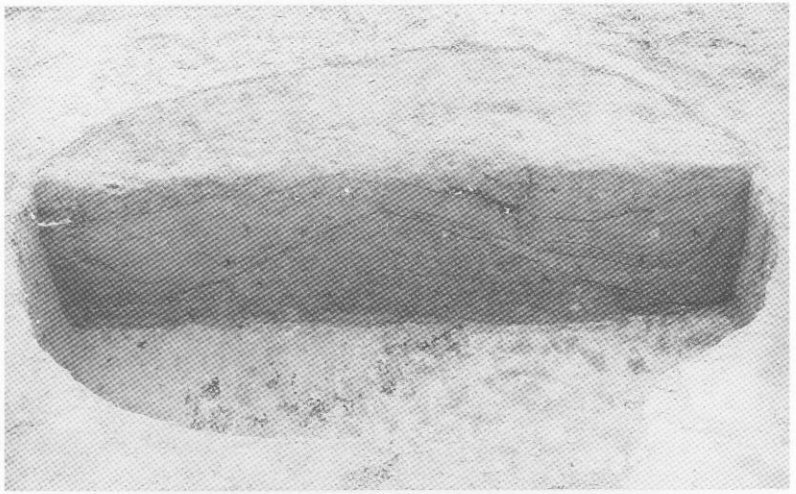
1 4号貯蔵穴



2 5号貯蔵穴



3 7号貯蔵穴土層断面

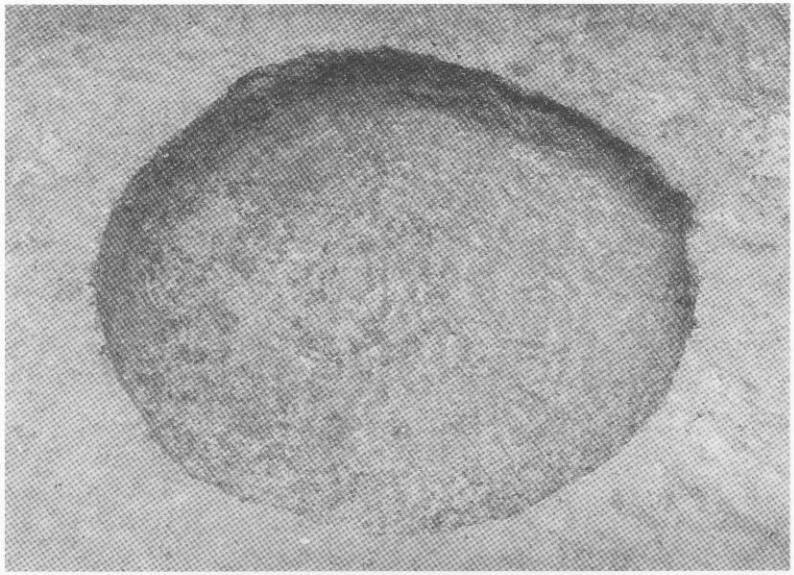


4 7号貯蔵穴

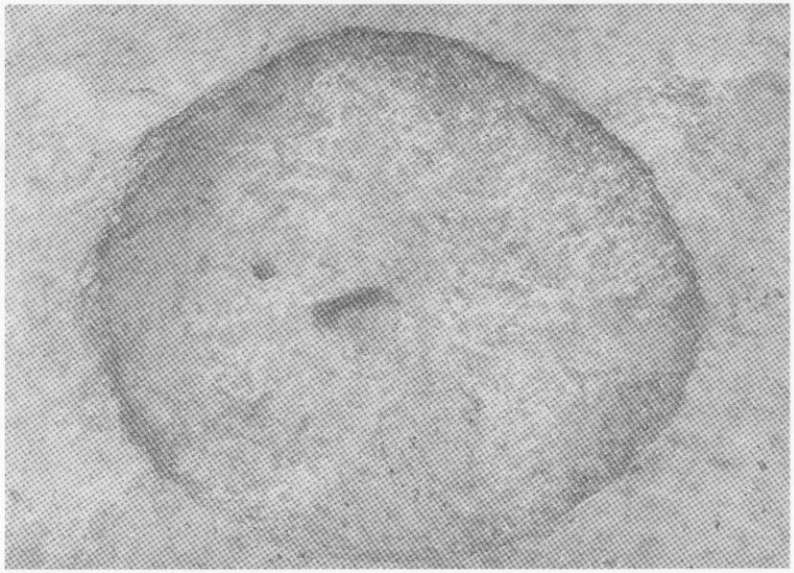


図版19

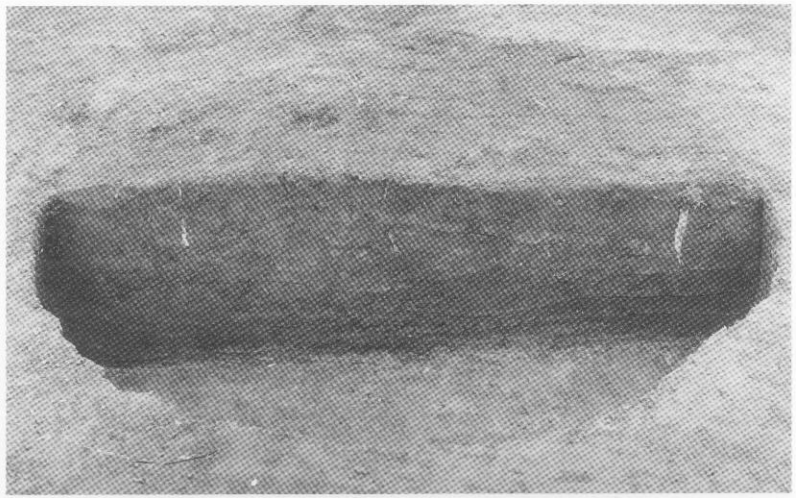
1 6号貯蔵穴



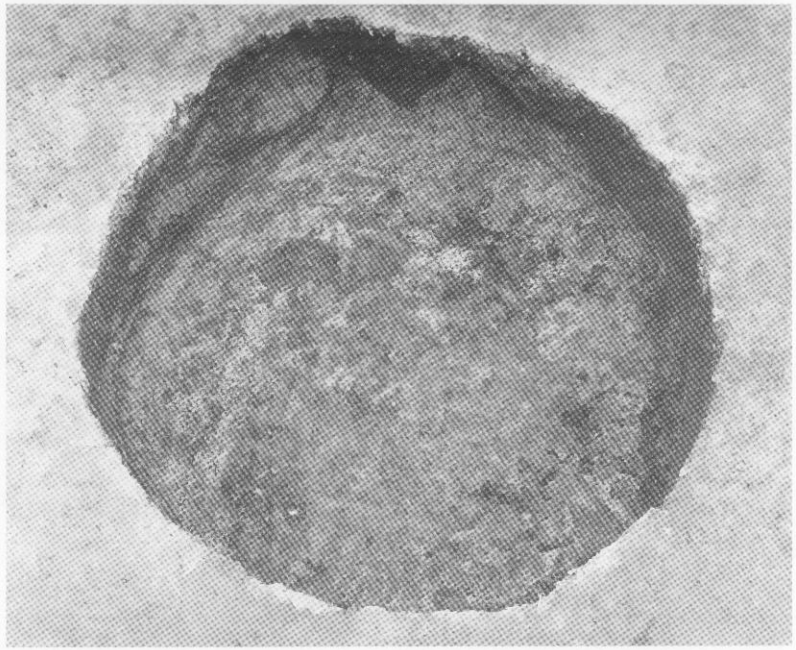
2 9号貯蔵穴



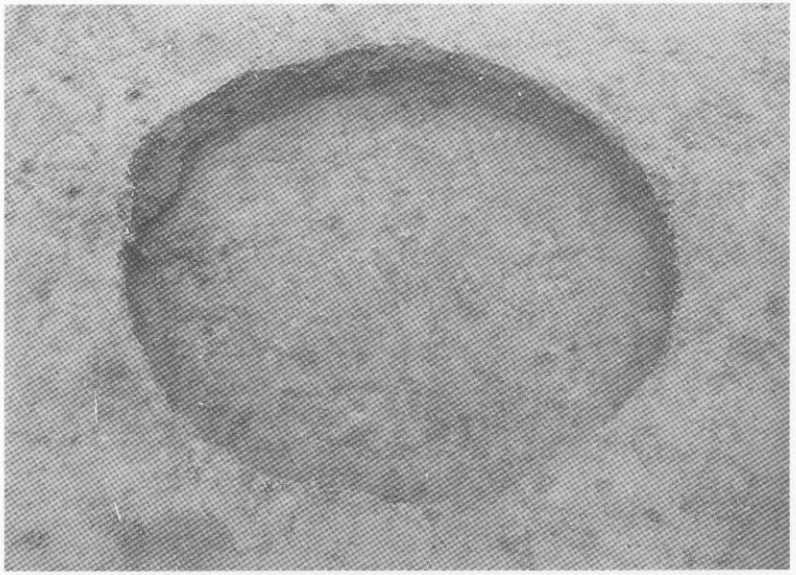
3 8号貯蔵穴土層断面



4 8号貯蔵穴



1 10号貯蔵穴



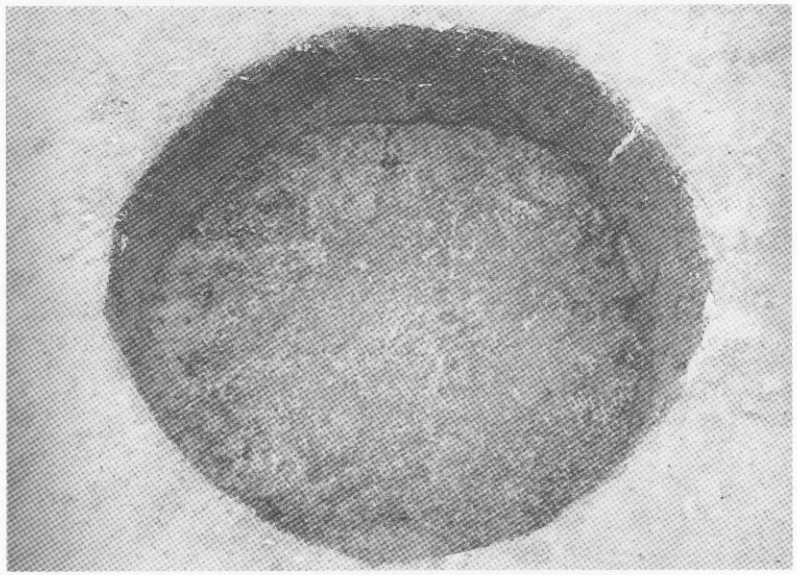
2 11号貯蔵穴



3 12号貯蔵穴

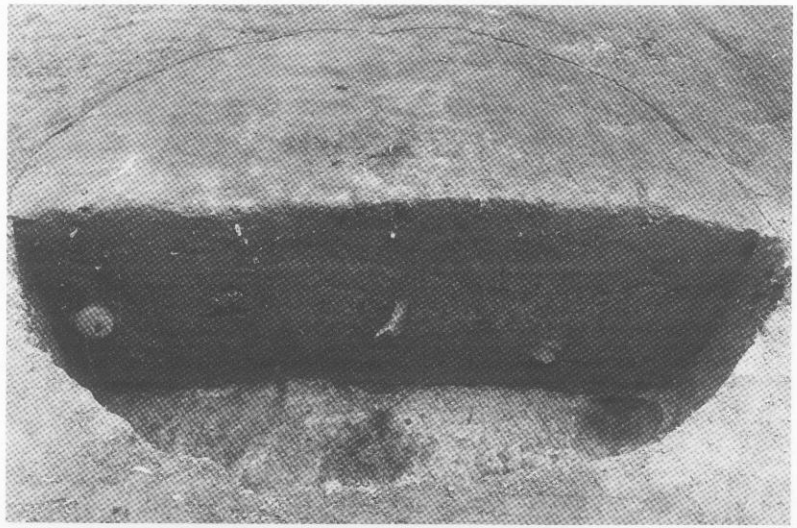


4 14号貯蔵穴

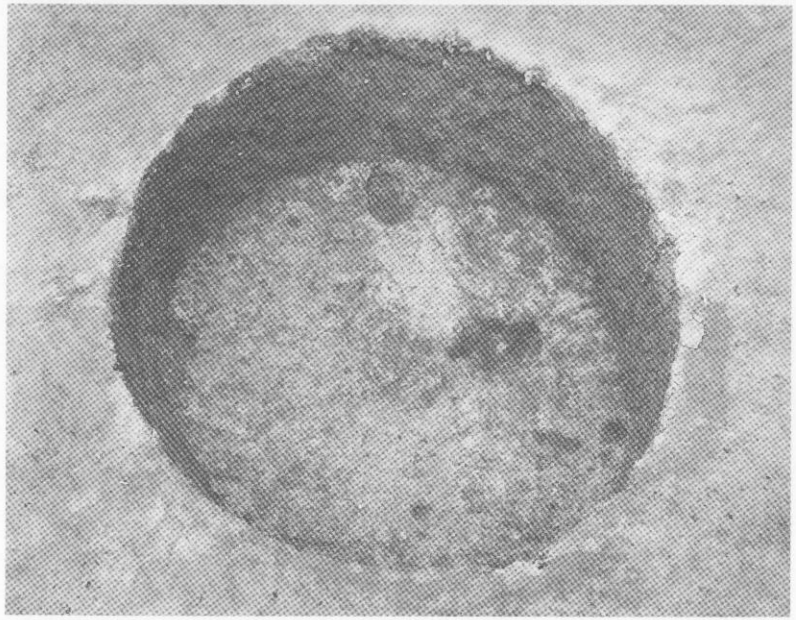


図版21

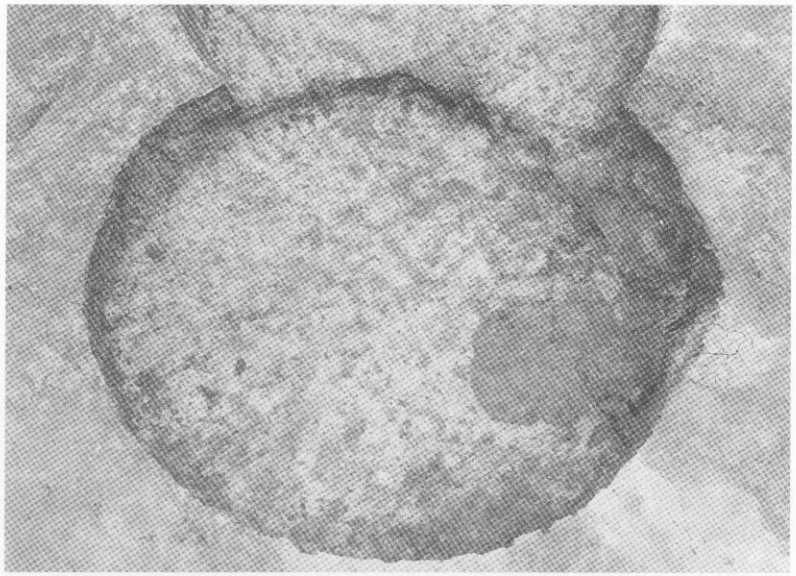
1 13号貯蔵穴土層断面



2 13号貯蔵穴



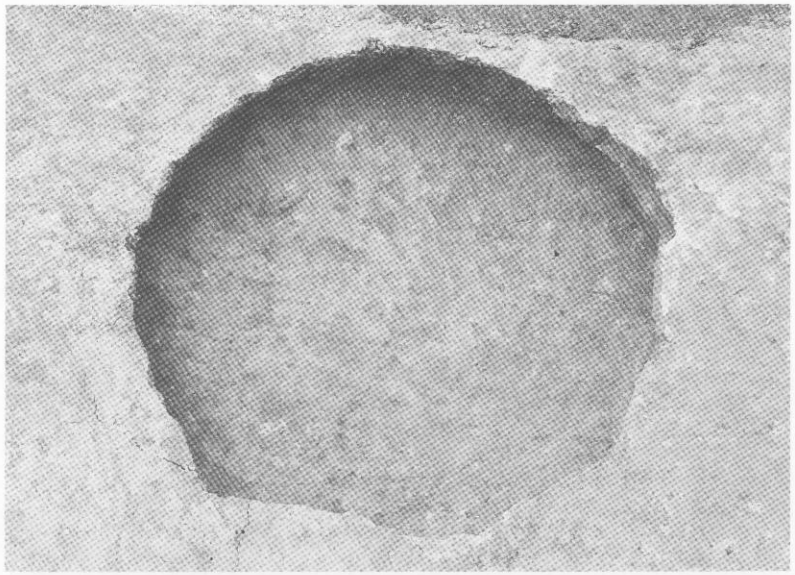
3 15号貯蔵穴



4 16号貯蔵穴



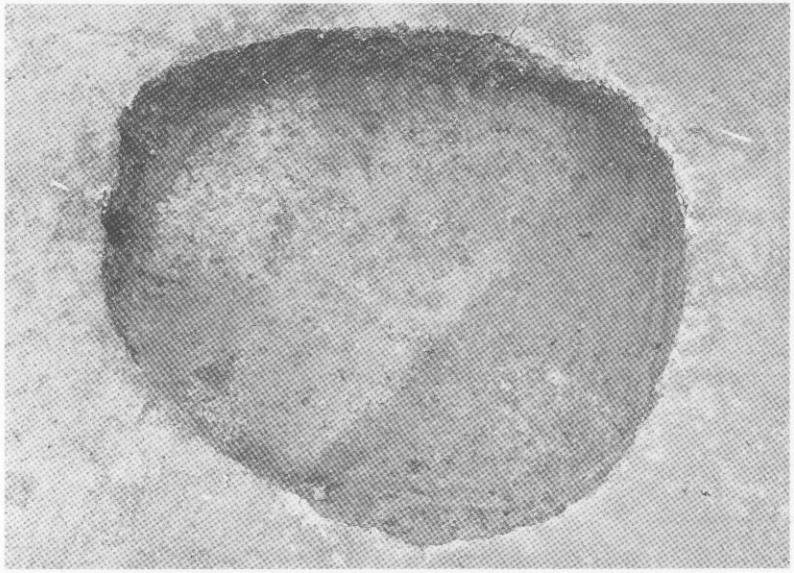
1 17号貯蔵穴



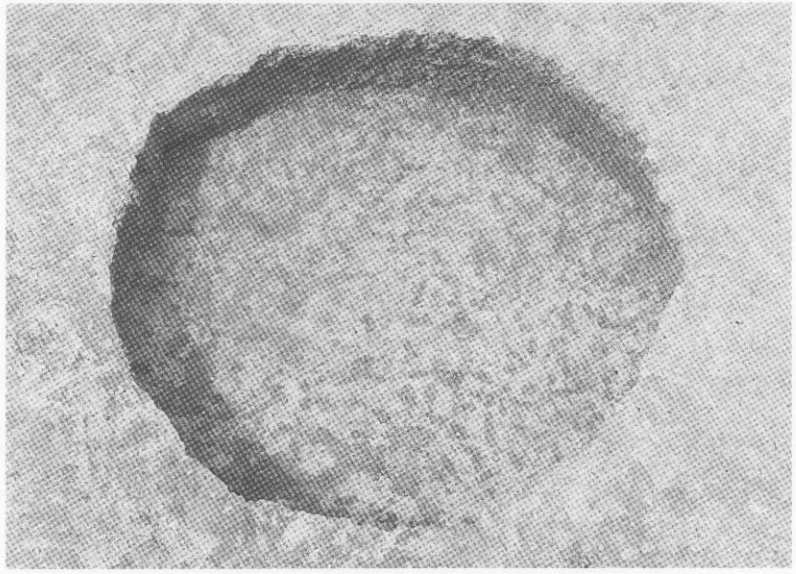
3 19号貯蔵穴



2 18号貯蔵穴



4 20号貯蔵穴

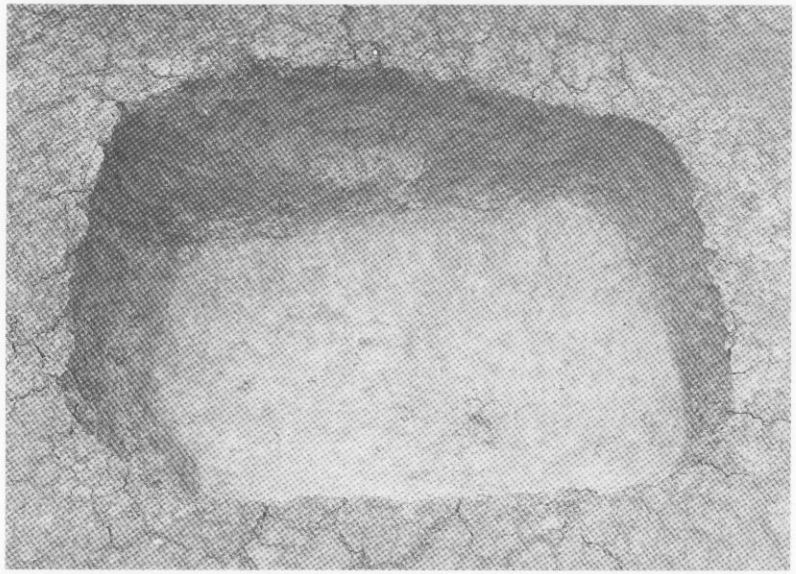


図版23

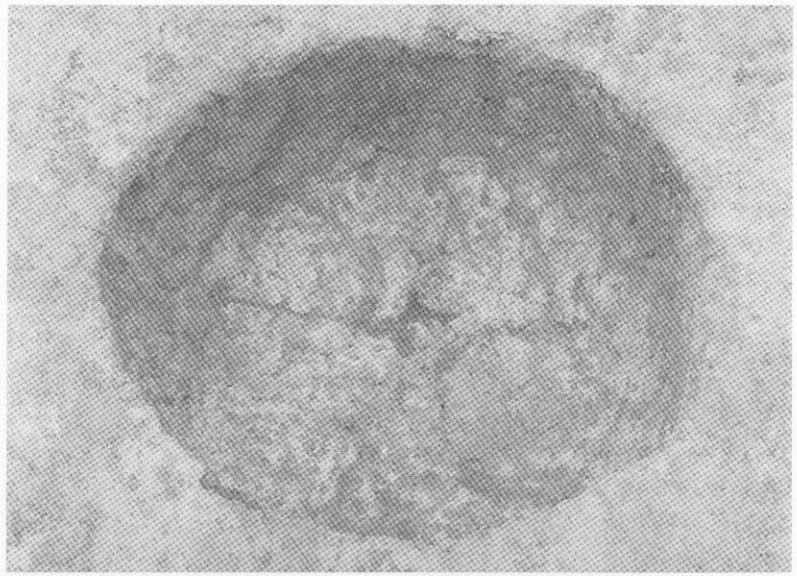
1 23号貯蔵穴



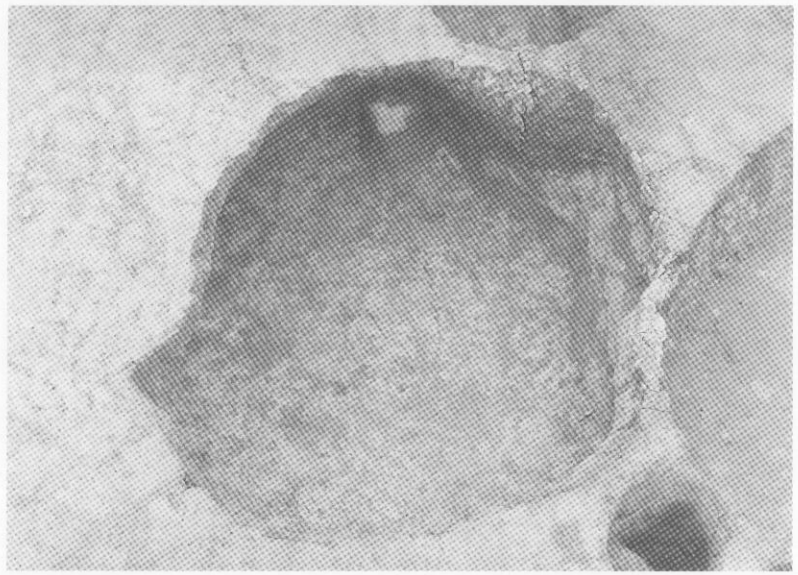
2 24号貯蔵穴

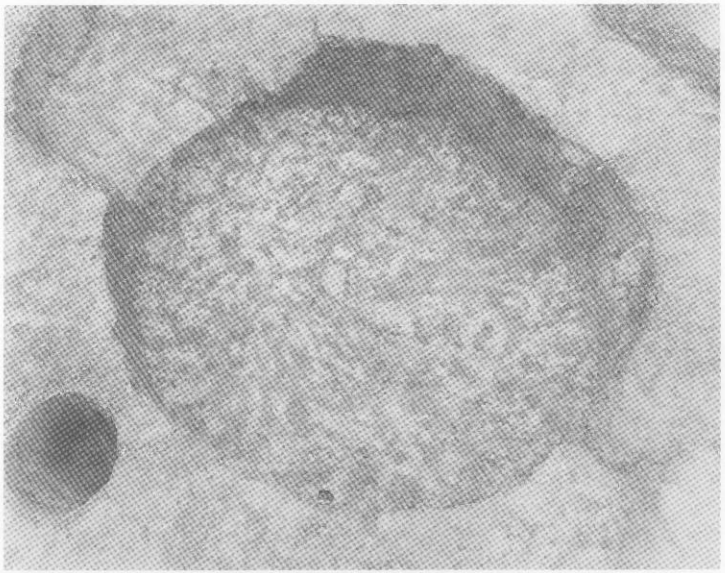


3 27号貯蔵穴

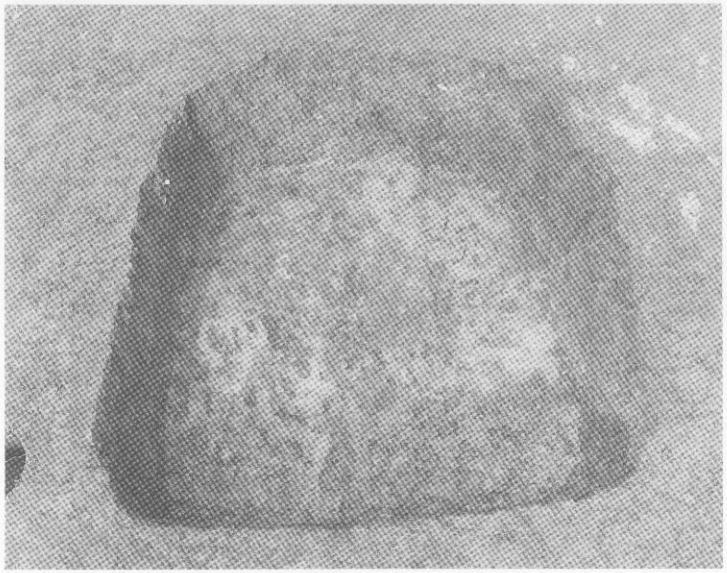


4 28号貯蔵穴





1　31号貯蔵穴



2　33号貯蔵穴



3　橋詰遺跡調査区全景（古墳期）

図版26

1 調査区全景（古墳期）



2 1号住居跡



3 1号住居跡カマド





1　2・4号住居跡

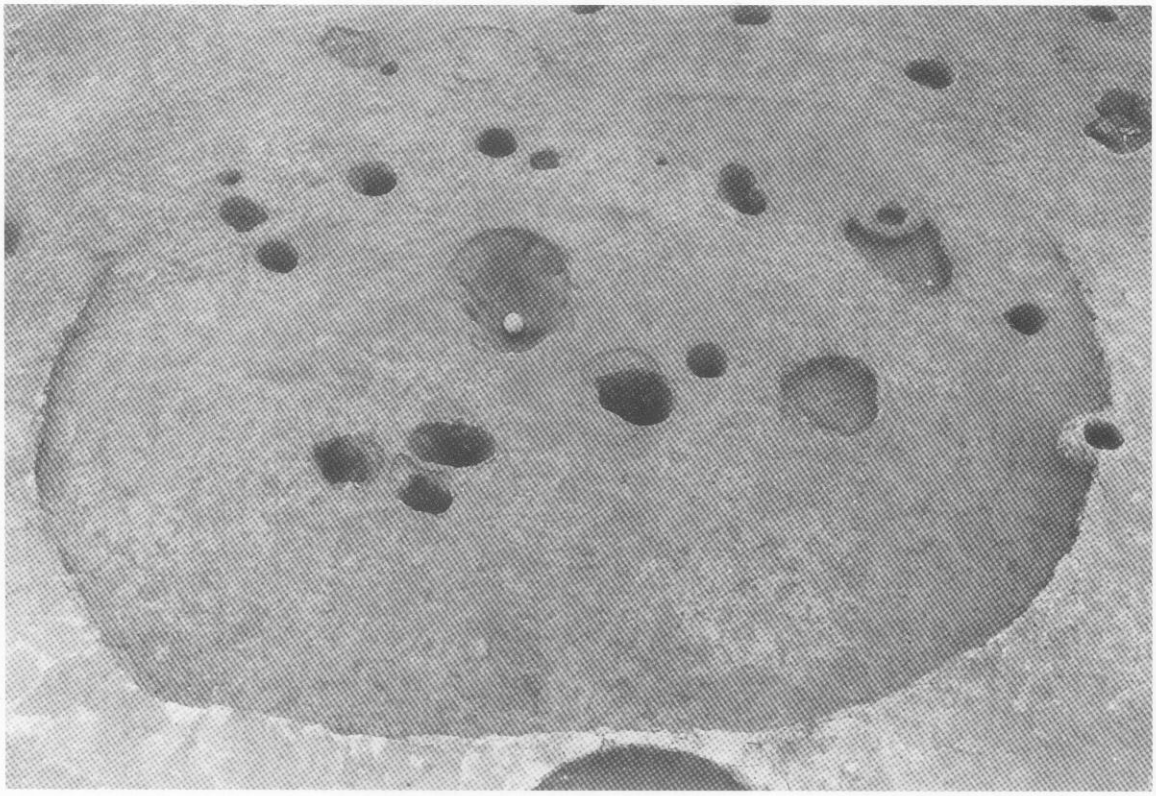


2　2号住居跡カマド



3　4号住居跡カマド

図版28



1　3号住居跡



2　5号住居跡



1　6号住居跡



2　7号住居跡

図版30



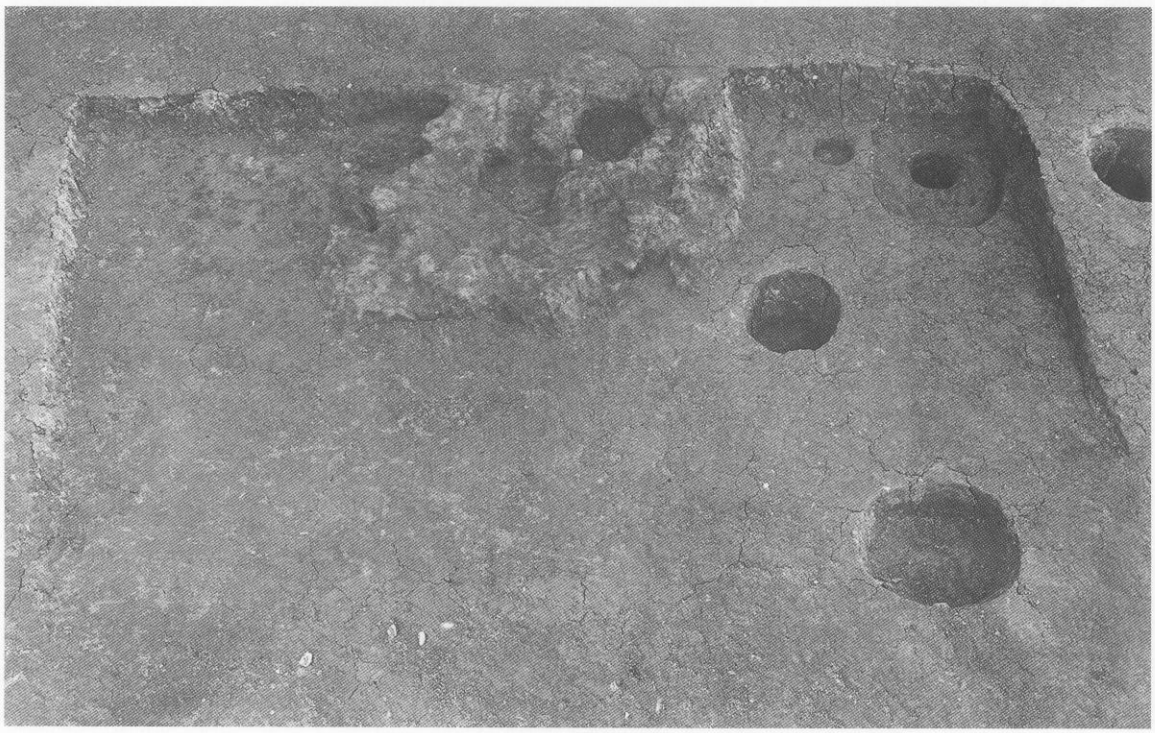
1　8号住居跡



2　9号住居跡



1　橋詰遺跡古墳時代住居跡群(北から)



2　10号住居跡

図版32



1　13号住居跡



2　14号住居跡



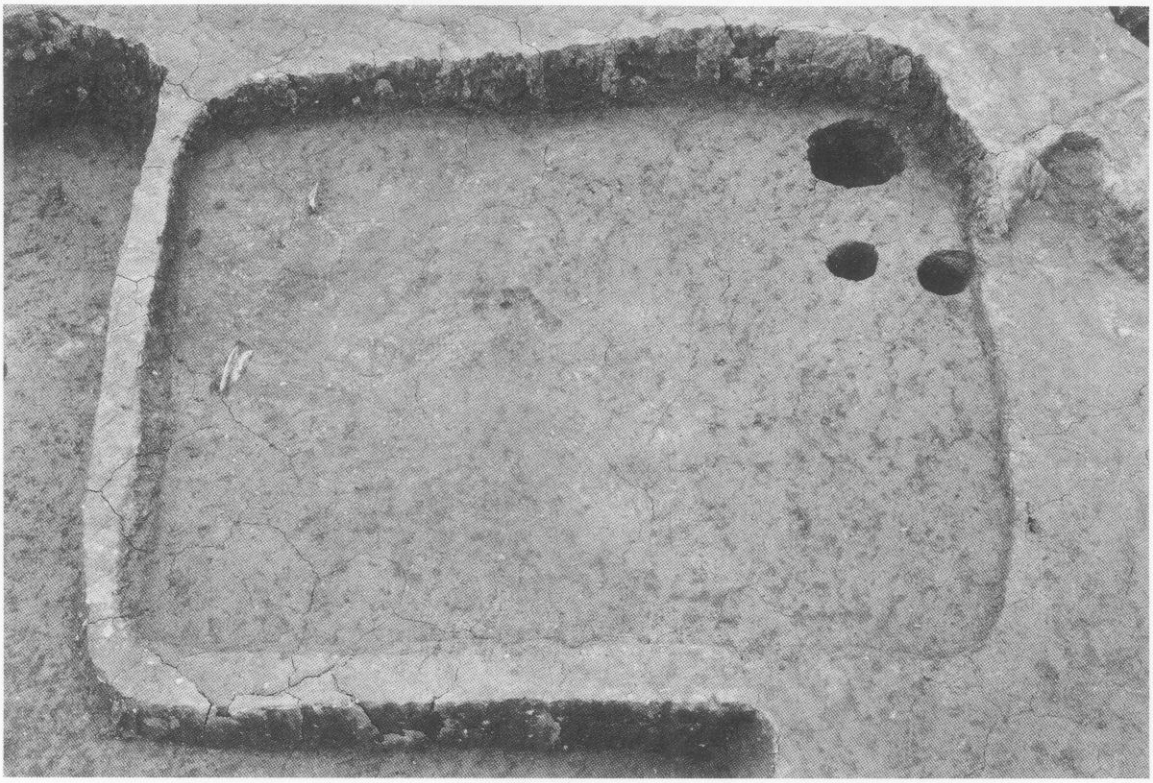
1　15号住居跡



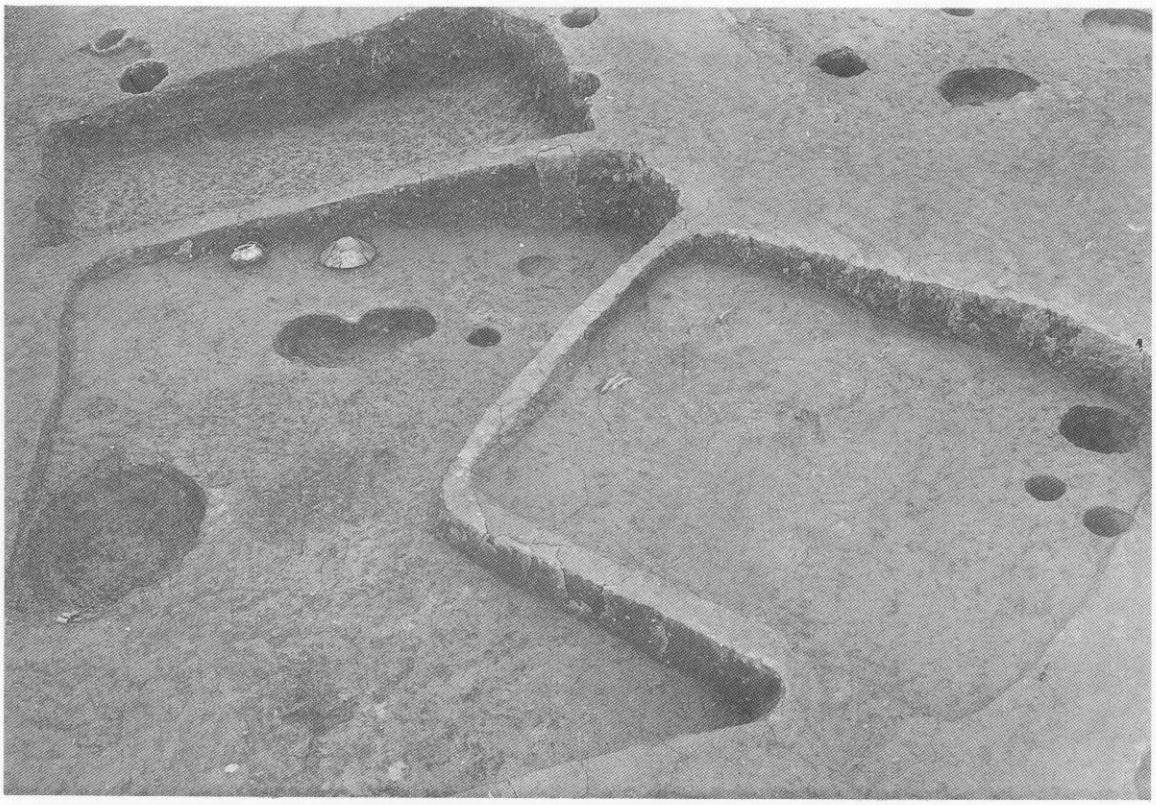
2　16号住居跡



1　10・14・17～19号住居跡



2　17号住居跡



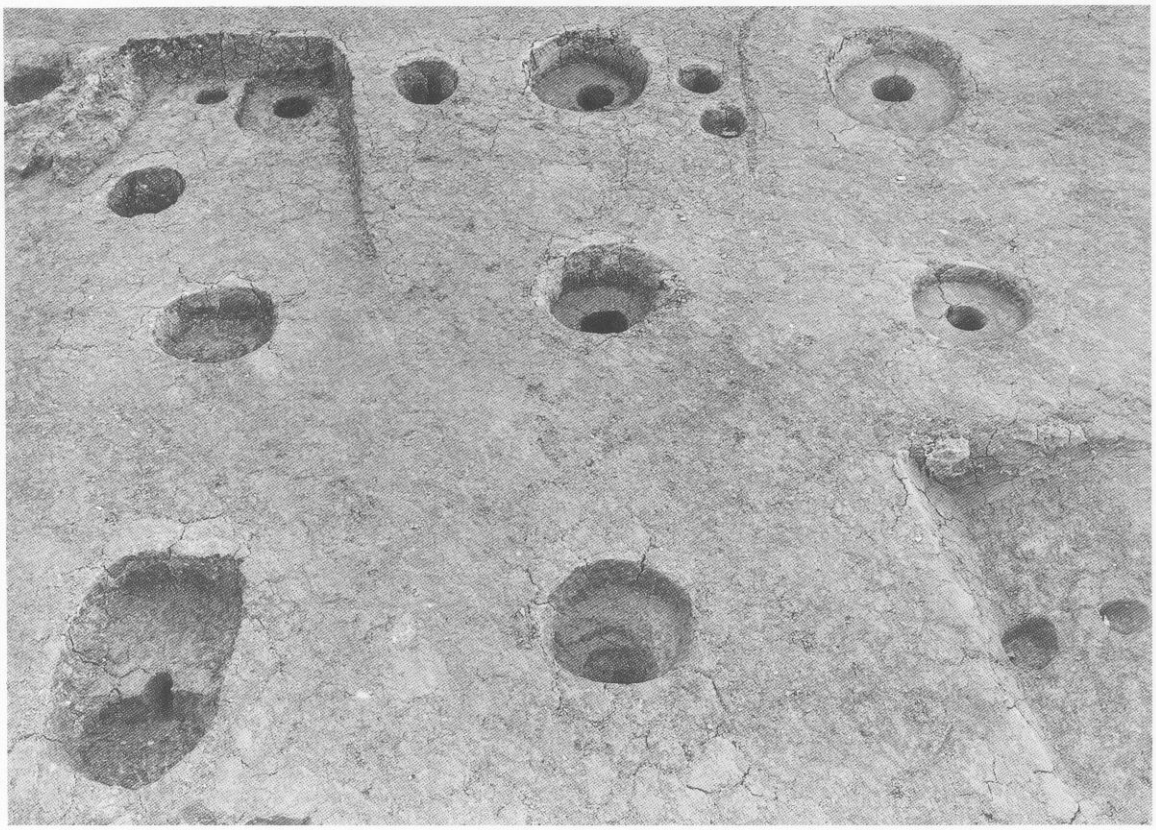
1　17～19号住居跡



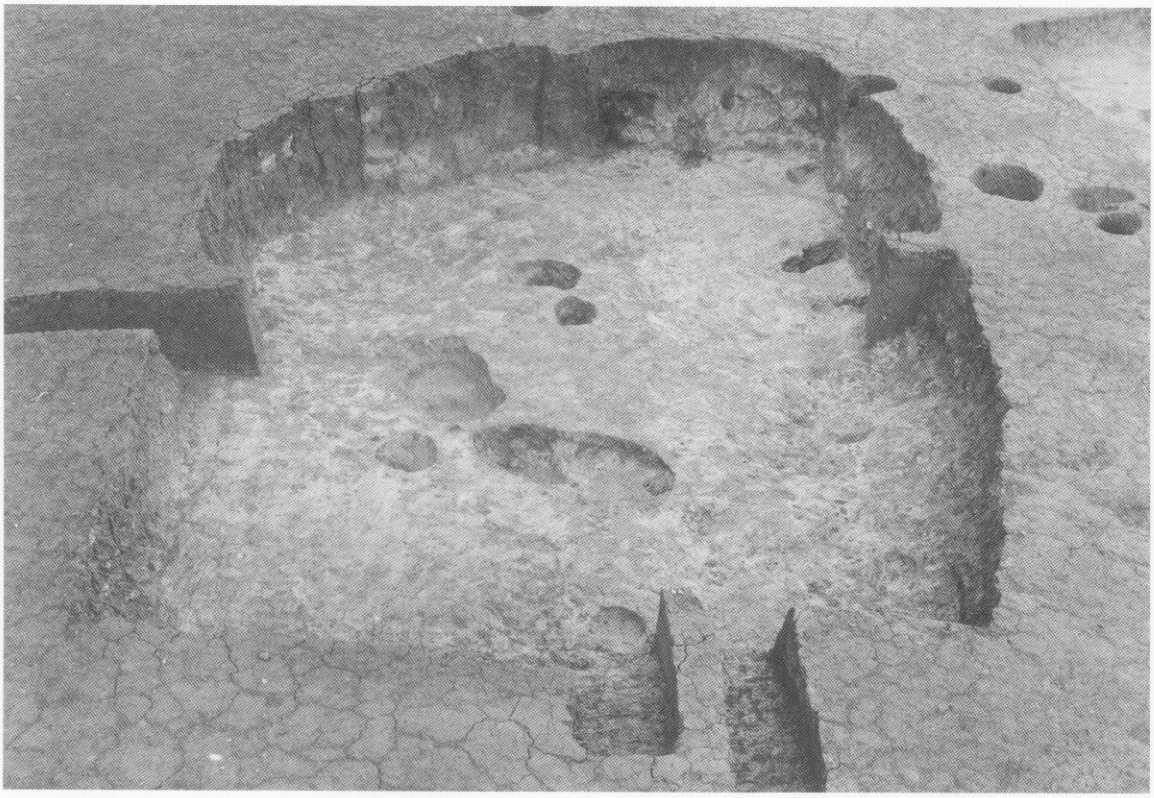
2　20号住居跡



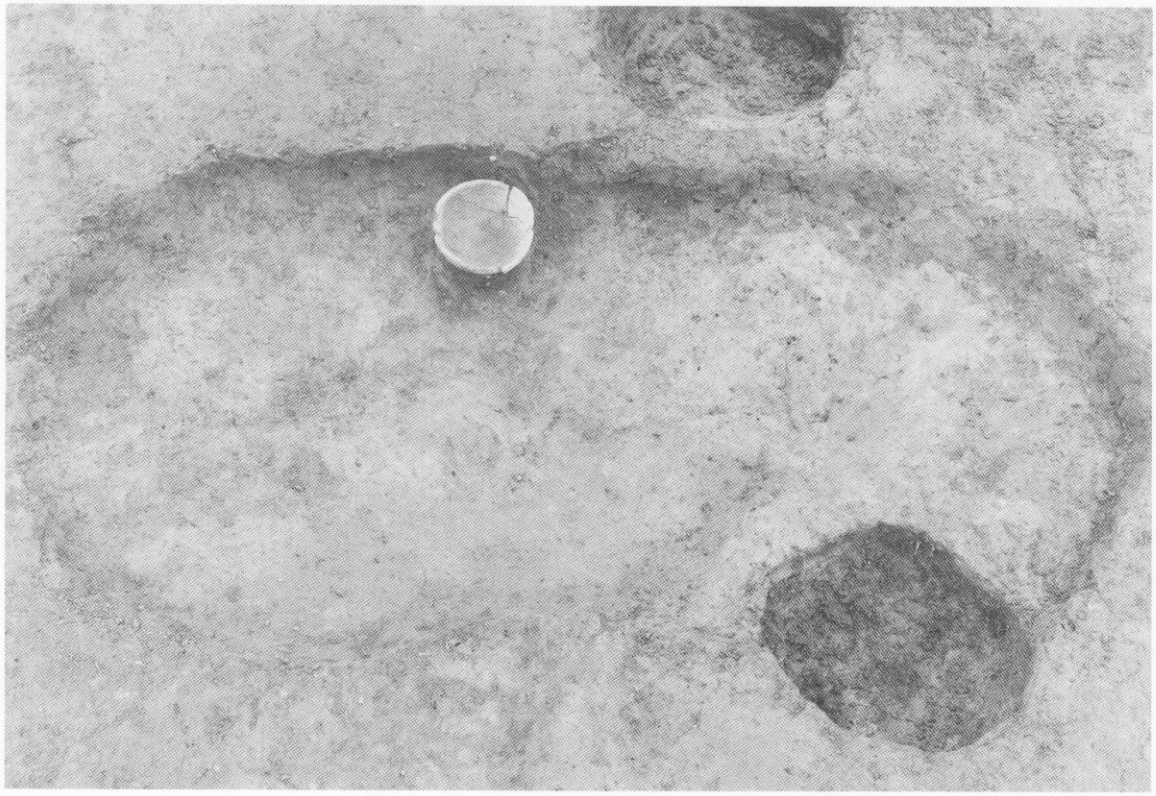
1　9・10号住居跡と掘立柱建物



2　掘立柱建物

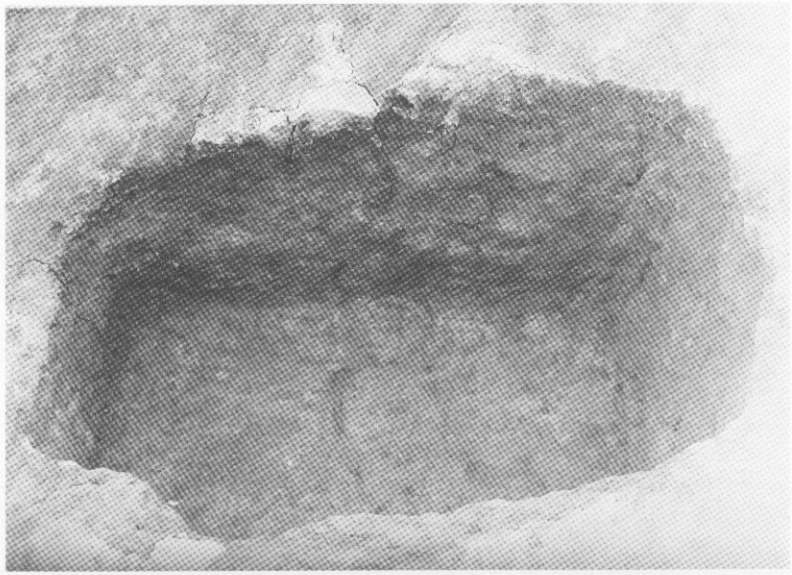


1　住居跡状遺構

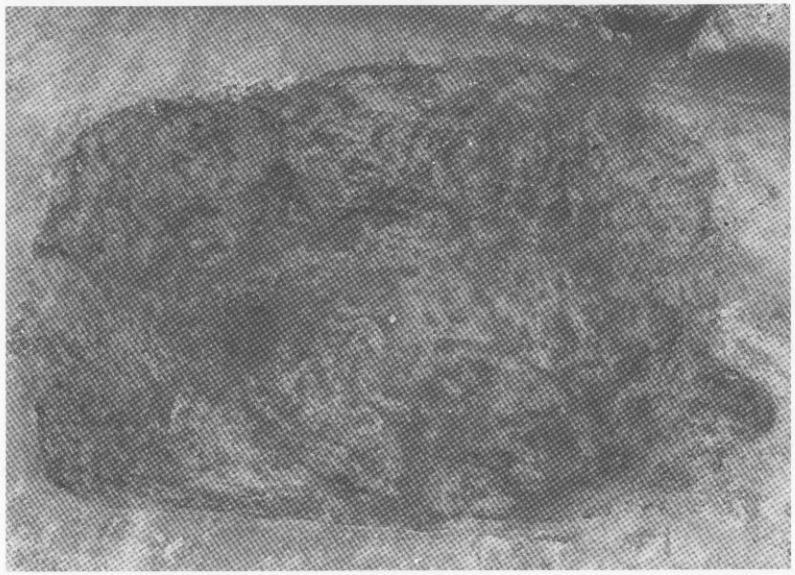


2　1号土壙墓

1 2号土壙

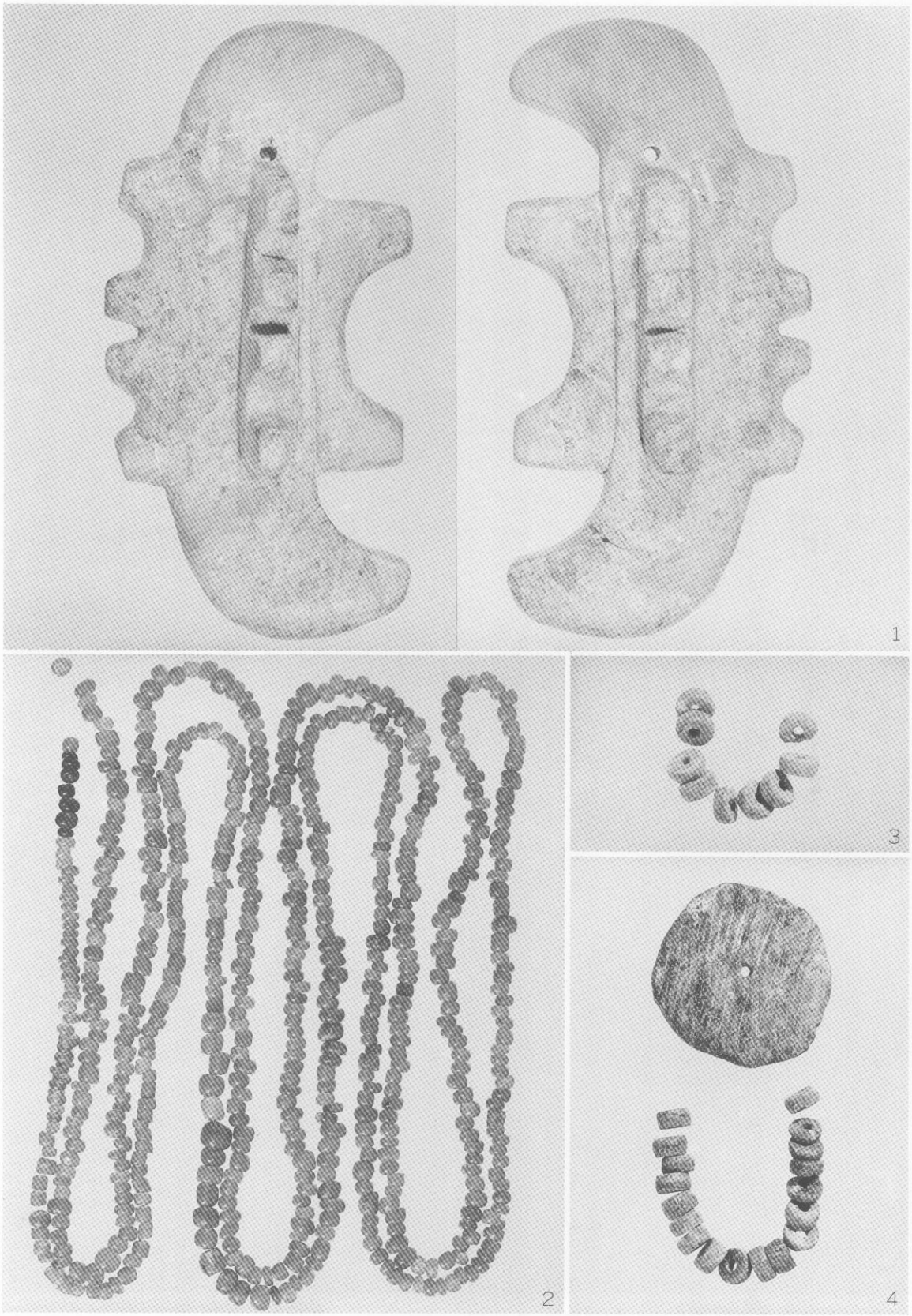


2 3号土壙



3 中世小溝





1　2号住居跡出土子持勾玉　2　1号土壙墓出土ガラス小玉　3　9号住居跡出土臼玉
4　L字溝出土有孔円盤・臼玉

図版40



橋詰遺跡・平原遺跡(第2～5地点)全景(東上空から)



1　平原遺跡発掘区全景



2　平原遺跡近景（東から）

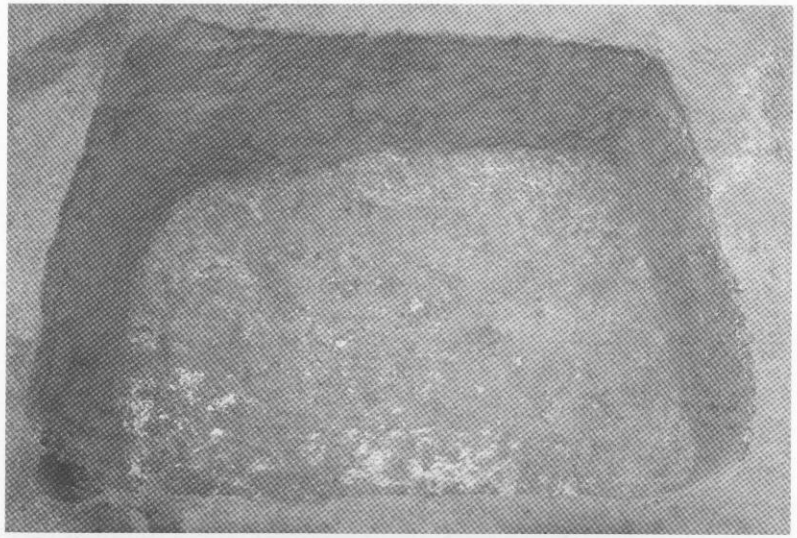
1 1号貯蔵穴土層断面



2 1号貯蔵穴



3 2号貯蔵穴

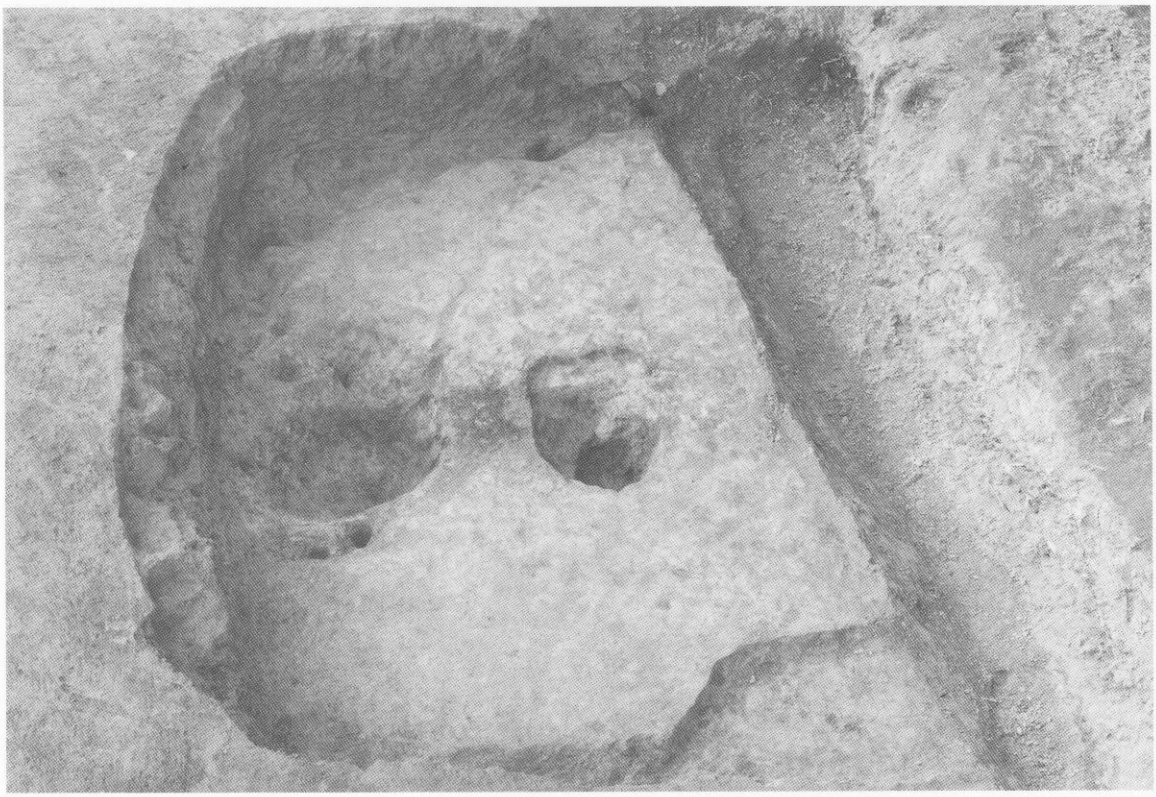


4 3号貯蔵穴



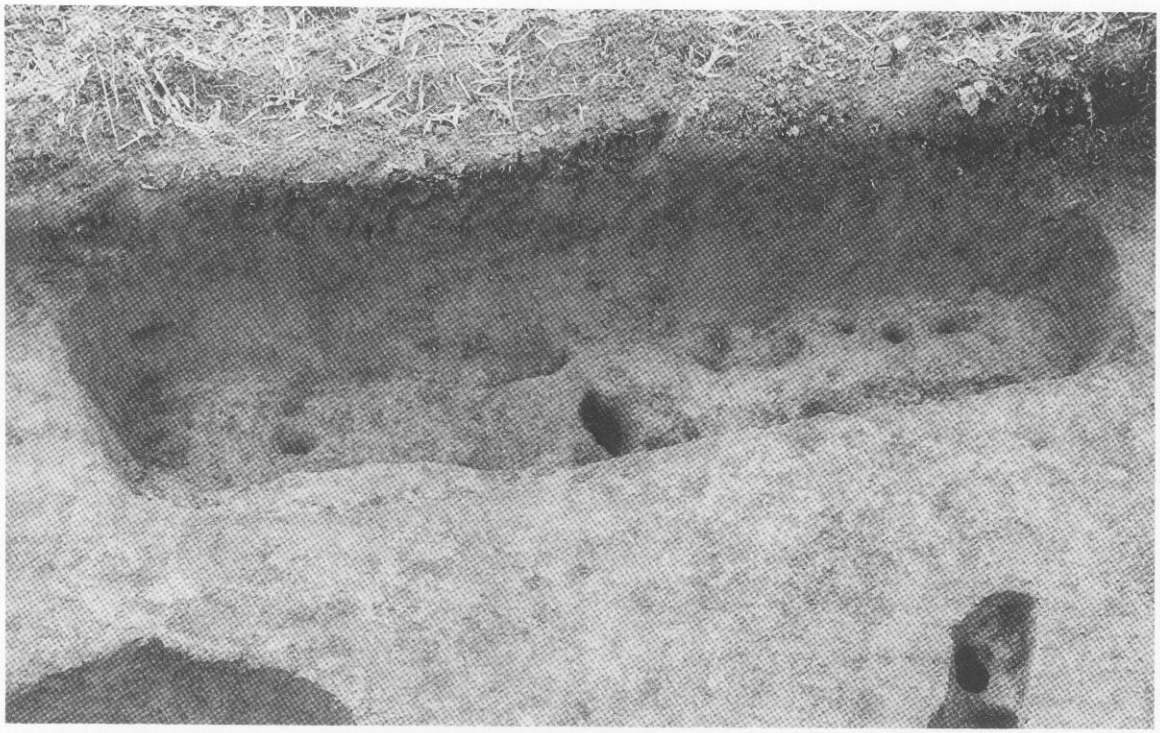


1　1号住居跡



2　2号住居跡

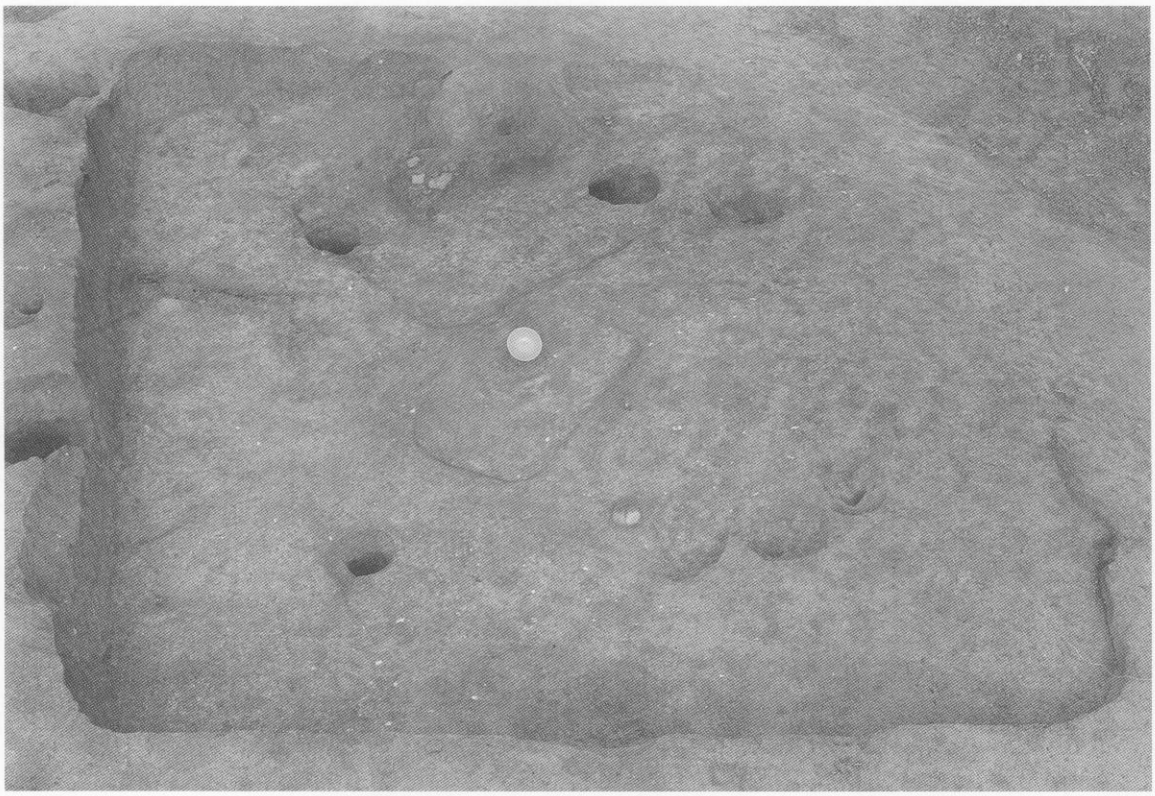
図版44



1　3号住居跡



2　4号住居跡



1　5号住居跡と2号円形周溝墓主体部



2　6号住居跡

図版46



1　円形竪穴



2　不整形土壙

1　4号ピット



2　甕棺墓



3　1・2号円形周溝墓



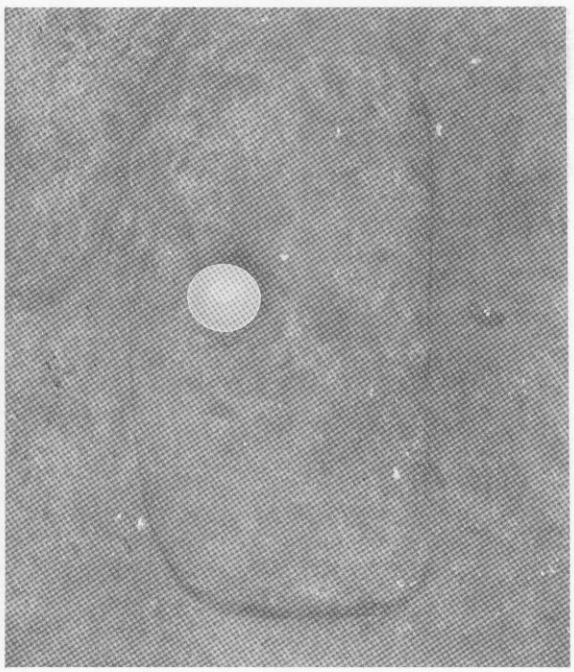
図版47



1　1号円形周溝墓



2　1号墓主体部



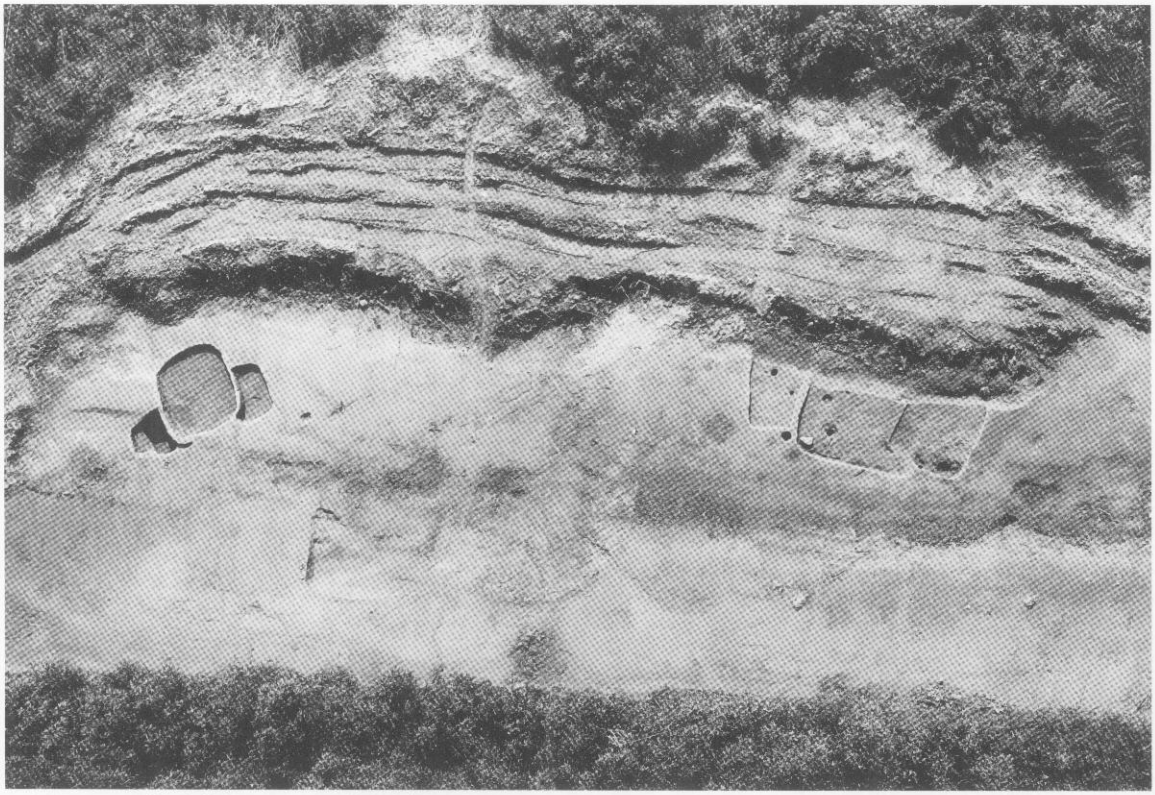
3　2号墓主体部

1　橋詰・平原・天神遺跡全景（西上空から）

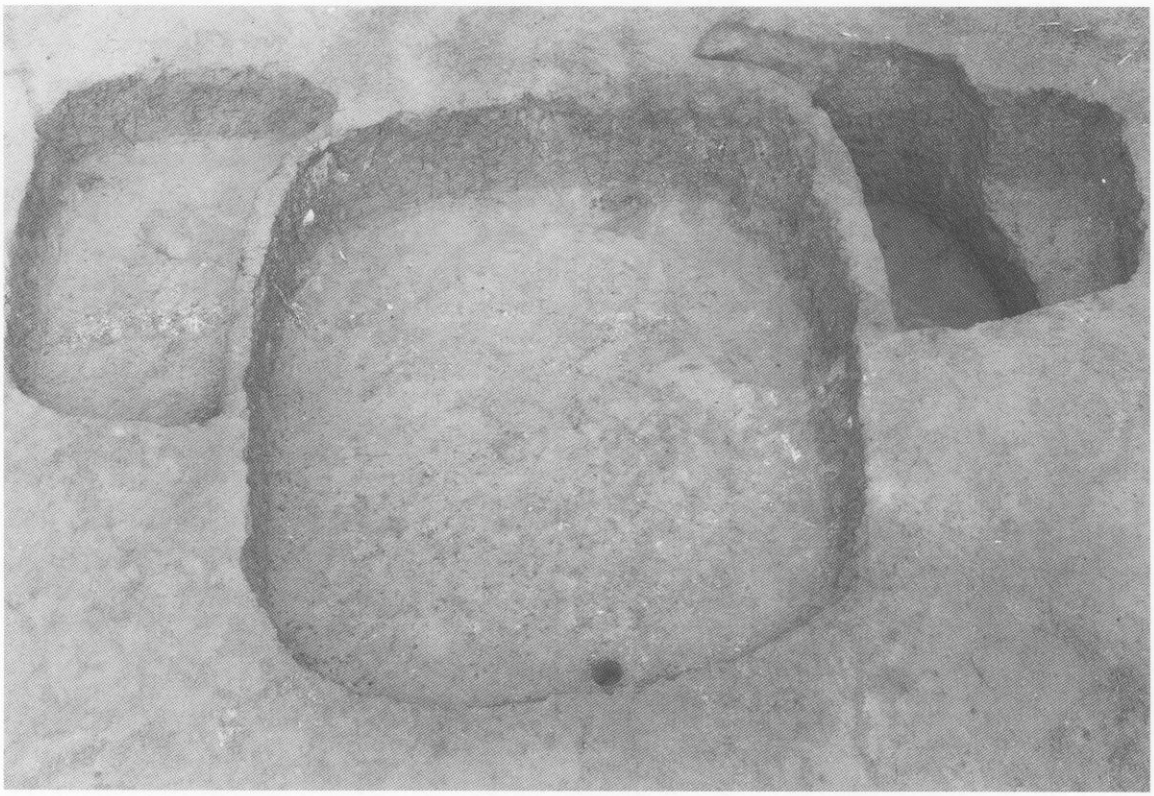
2　橋詰遺跡（第4地点）全景

図版49

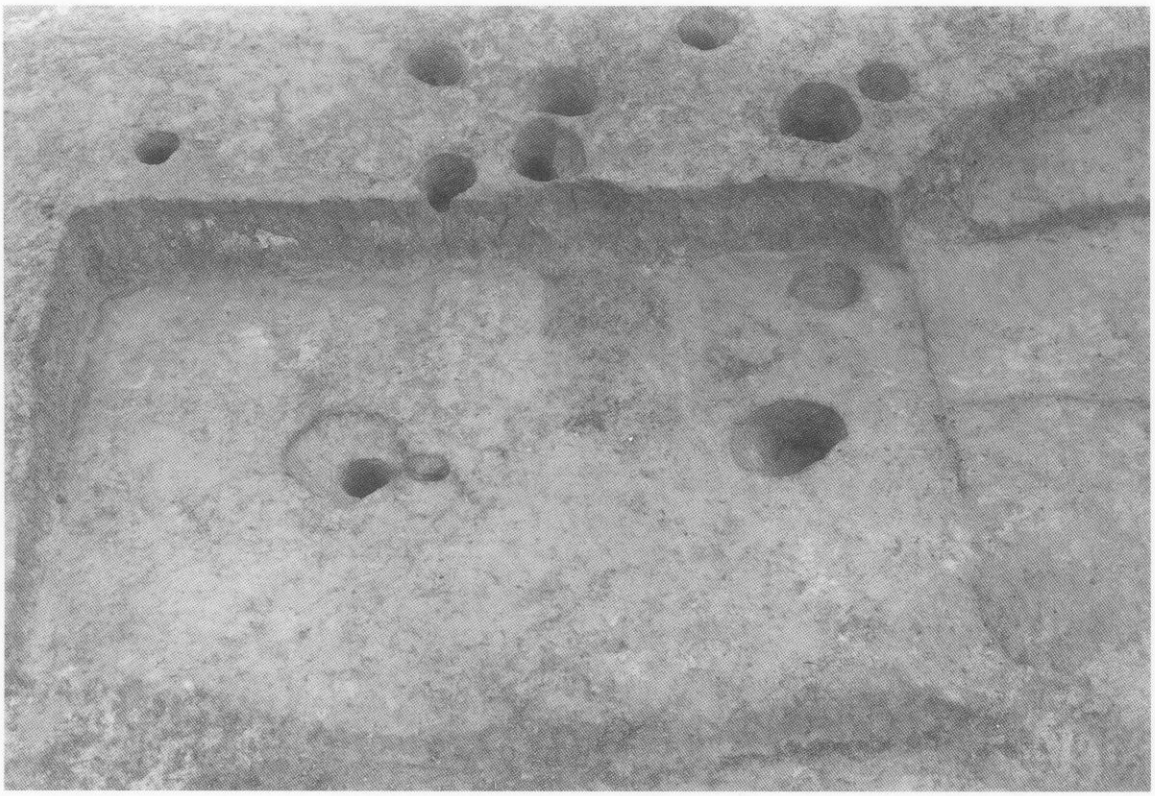
図版50



1　1～4号貯蔵穴と2～4号住居跡



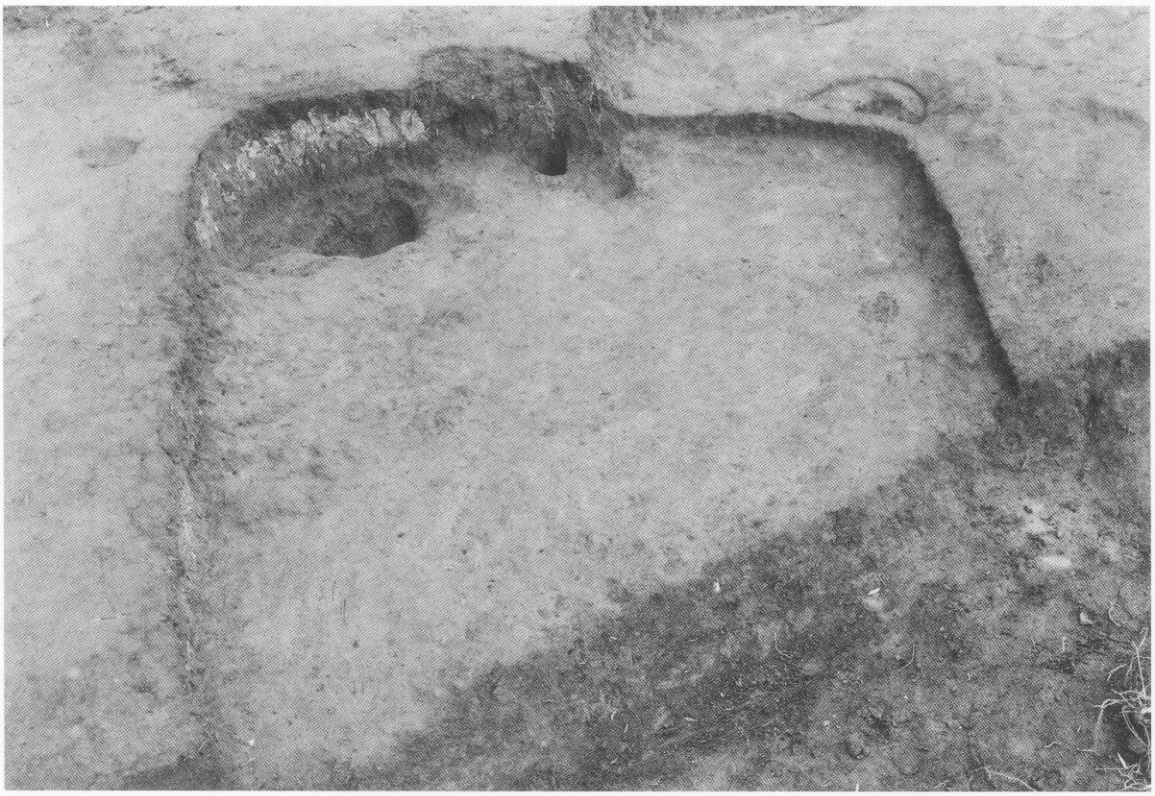
2　1～4号貯蔵穴



1　1号住居跡



2　2号住居跡

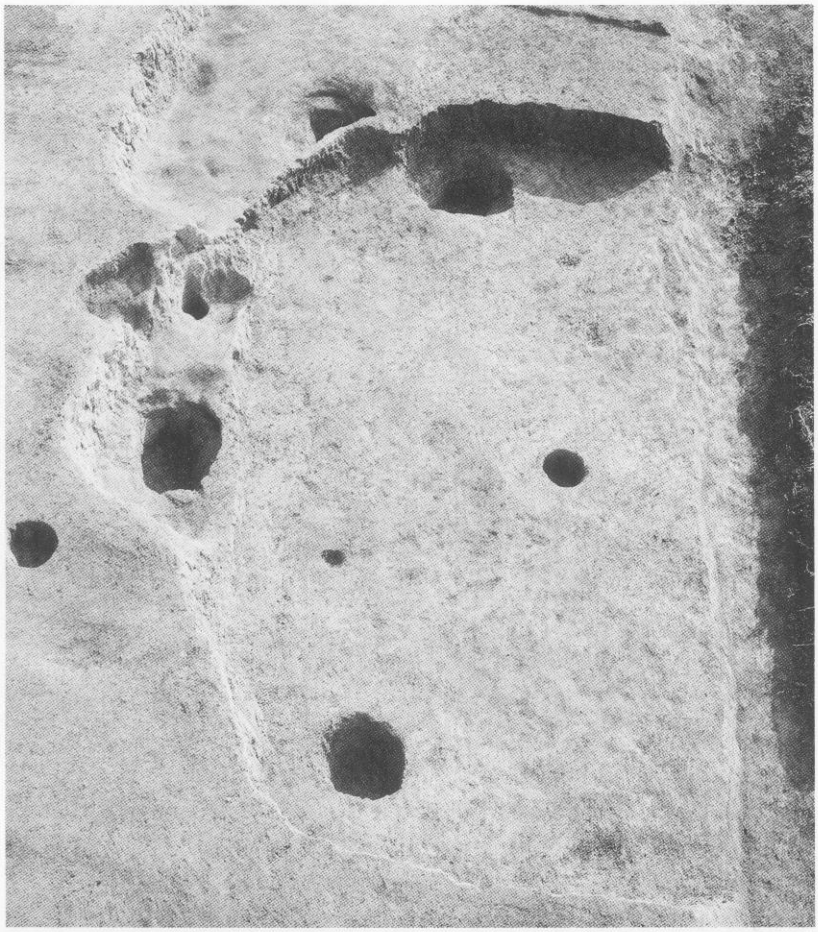


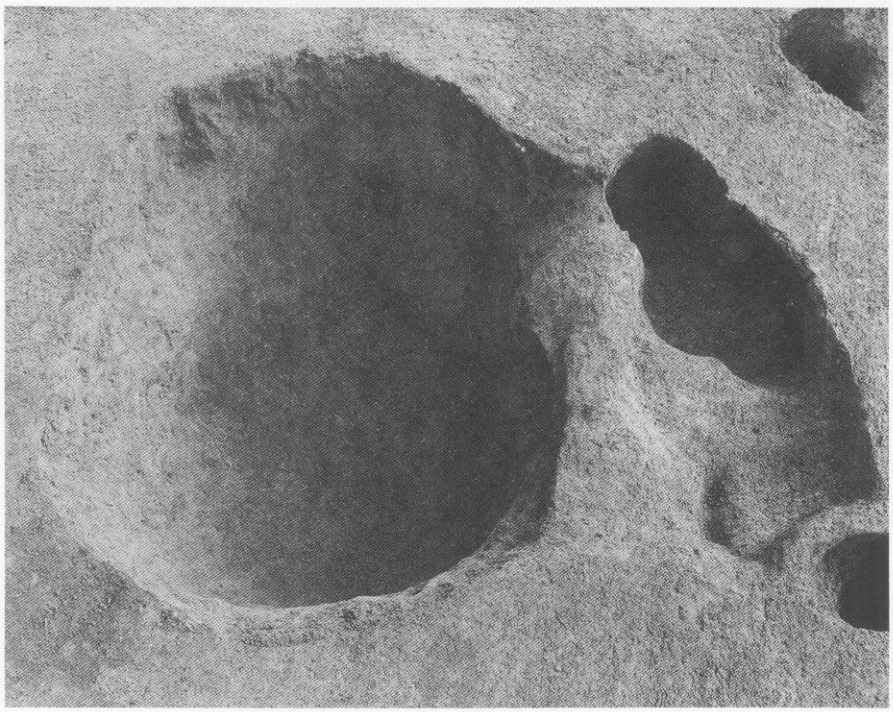
1　3号住居跡



2　4号住居跡

1　7号住居跡





2　1号土壙



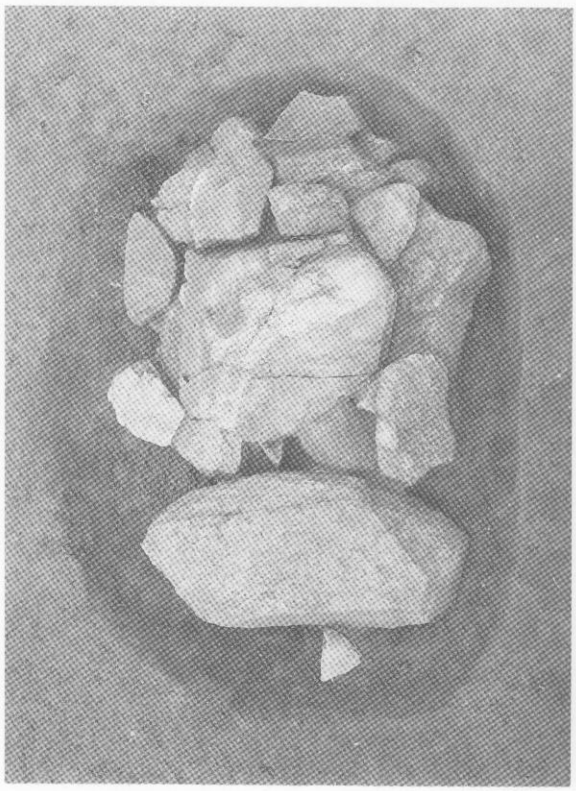
1　平原・池の上遺跡・平原古墳群遠景（北上空から）



2　上同（第５地点）全景（東上空から）



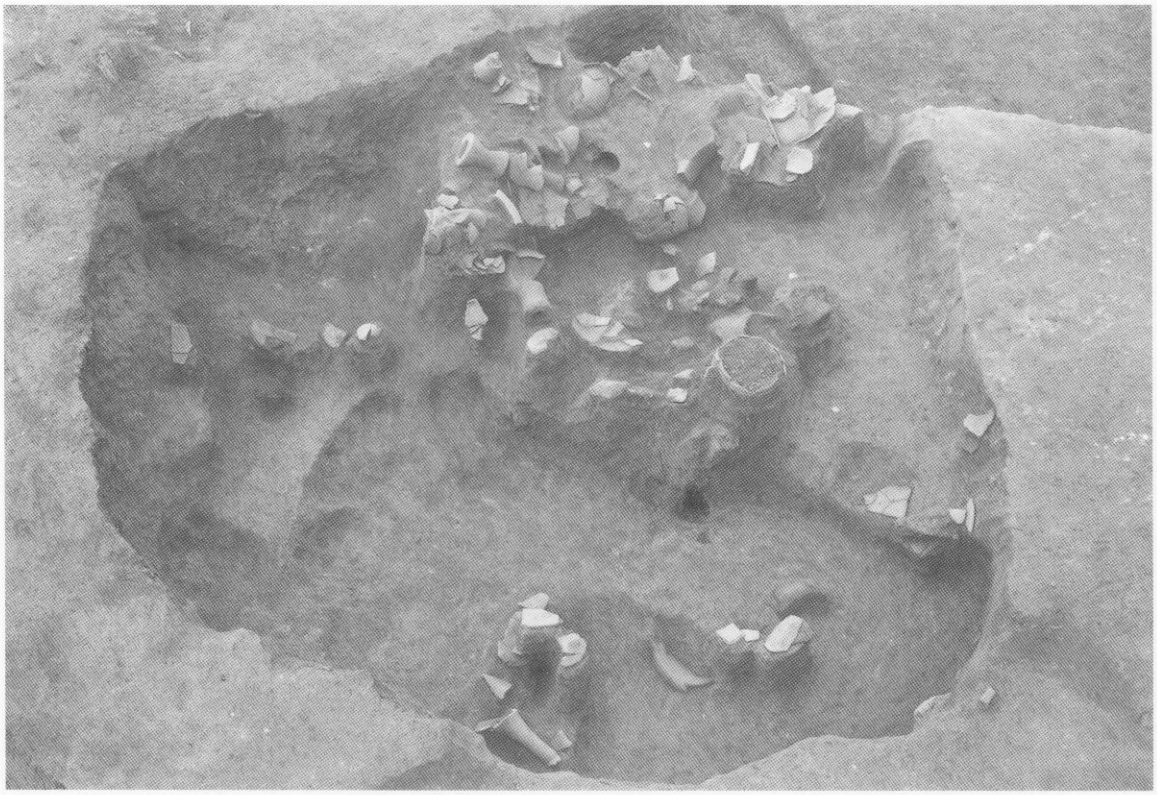
1　平原遺跡(第5地点東地区)発掘区全景



2　小石室



3　小石室(蓋石除去後)



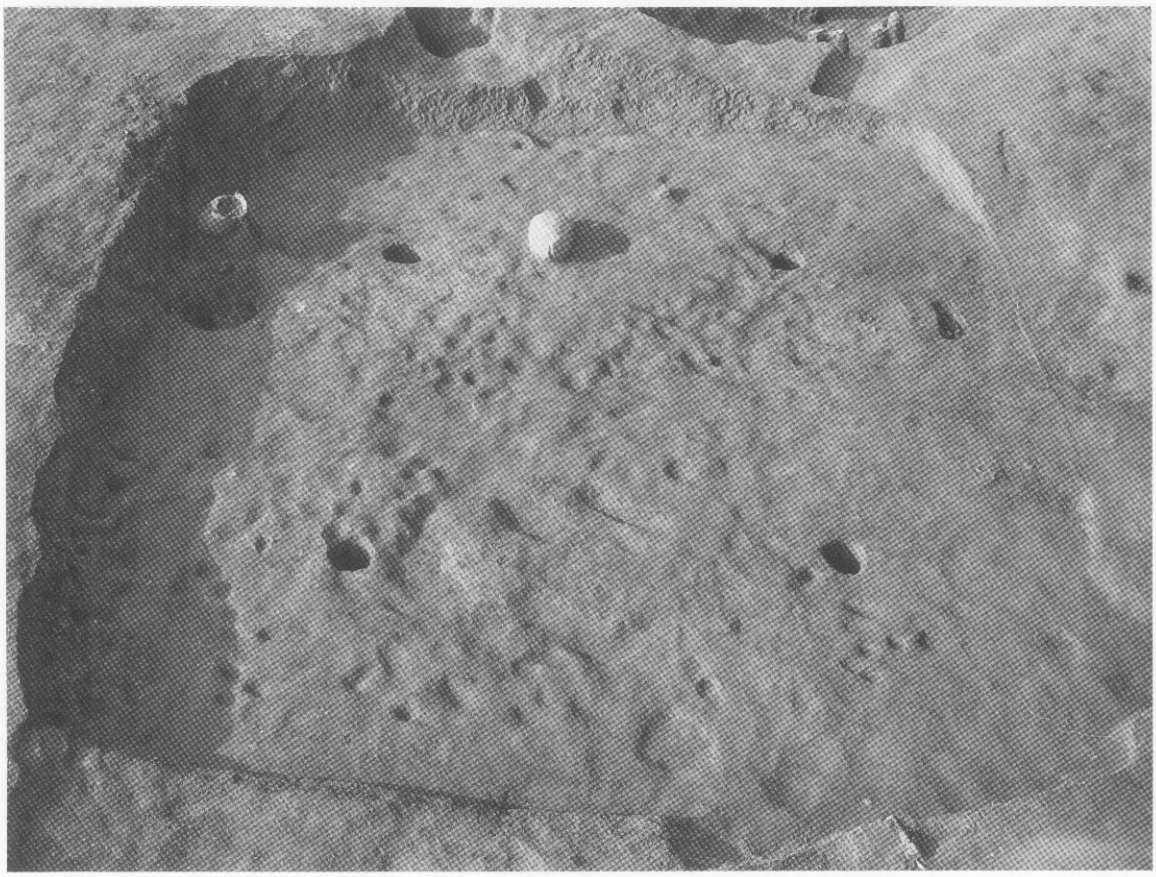
1　祭祀土壙土器出土状態



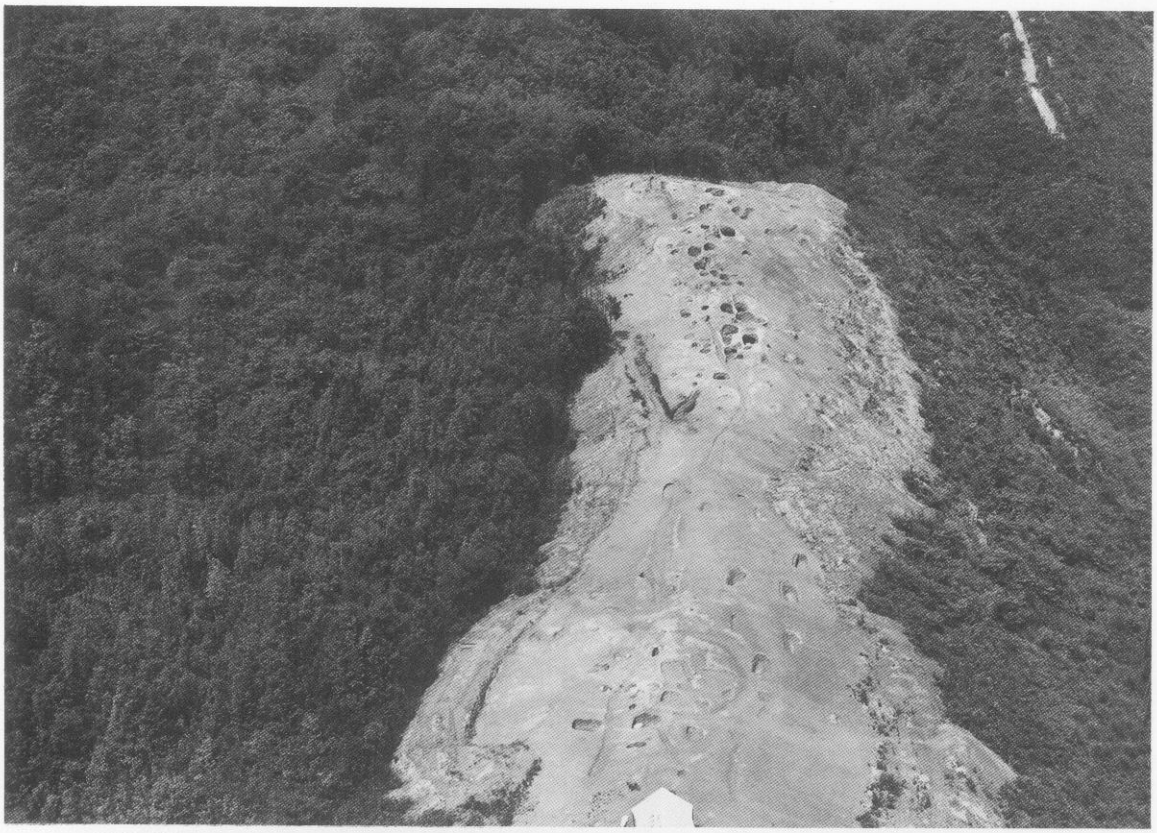
2　祭祀土壙(土器除去後)



1　1号住居跡



2　2号住居跡



1　平原・池の上遺跡全景（東上空から）



2　平原遺跡甕棺・土壙墓群（第5地点中央地区）全景



1　平原遺跡甕棺墓群（東から）



2　1号甕棺墓



3　2号甕棺墓

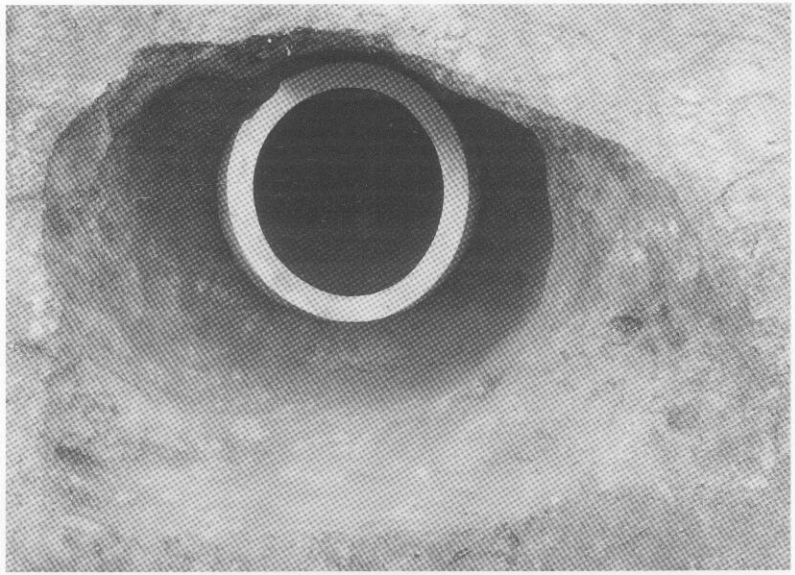
1 3号甕棺墓

2 4号甕棺墓

3 5号甕棺墓

4 6・7号甕棺墓

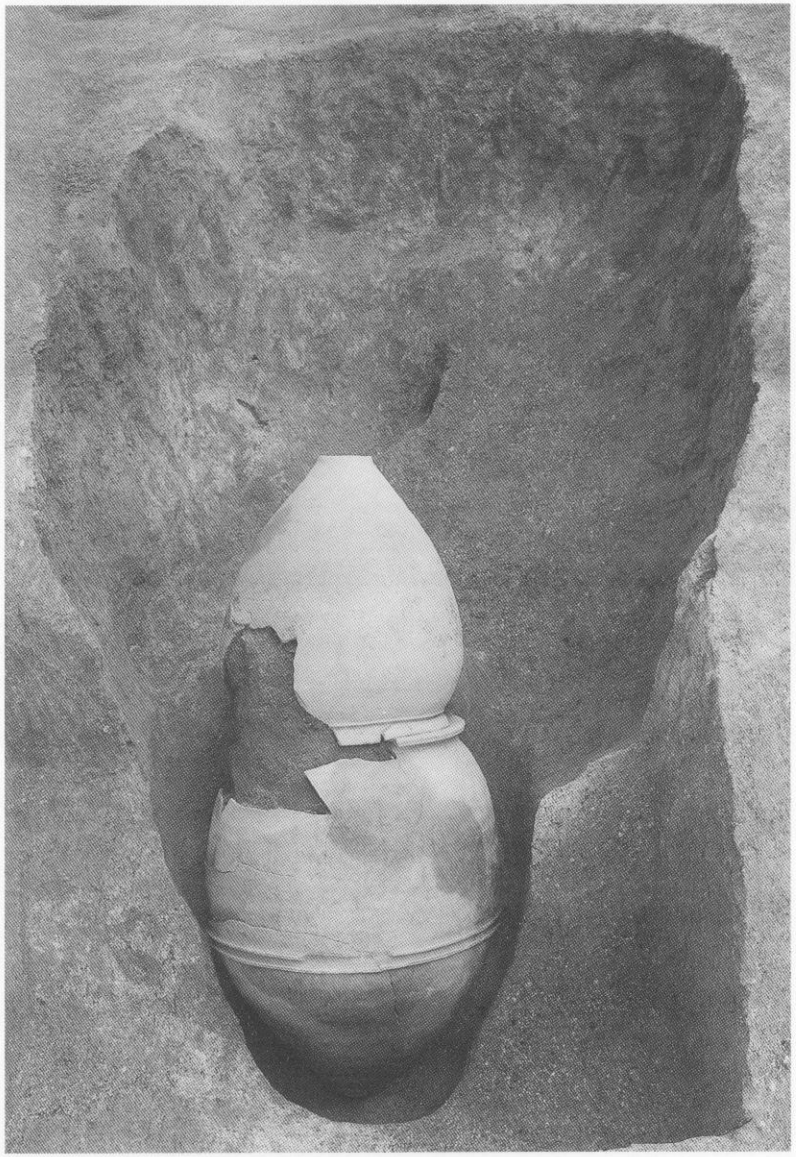
1 8号甕棺墓



2 9号甕棺墓



3 9号甕棺墓





1　1号土壙墓



2　3号土壙墓

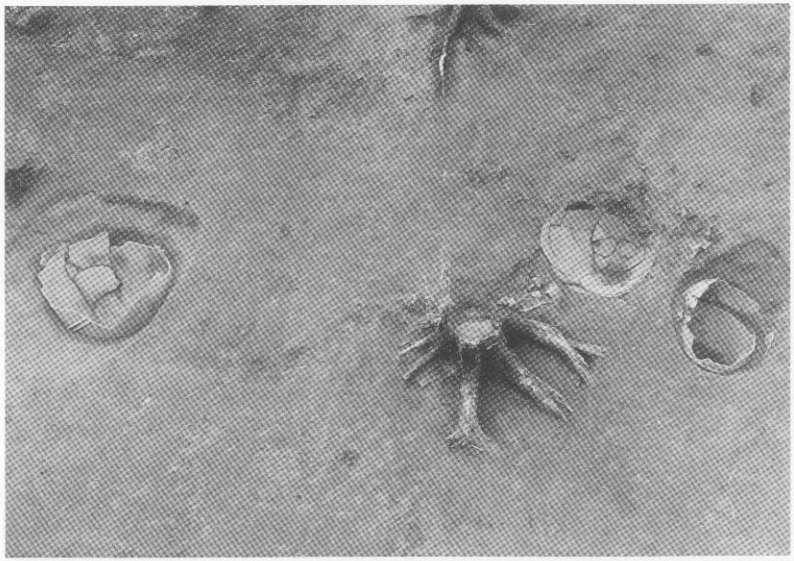


3　池の上遺跡（第5地点西地区）全景



池の上遺跡(第5地点西地区)甕棺墓群全景(東上空から)

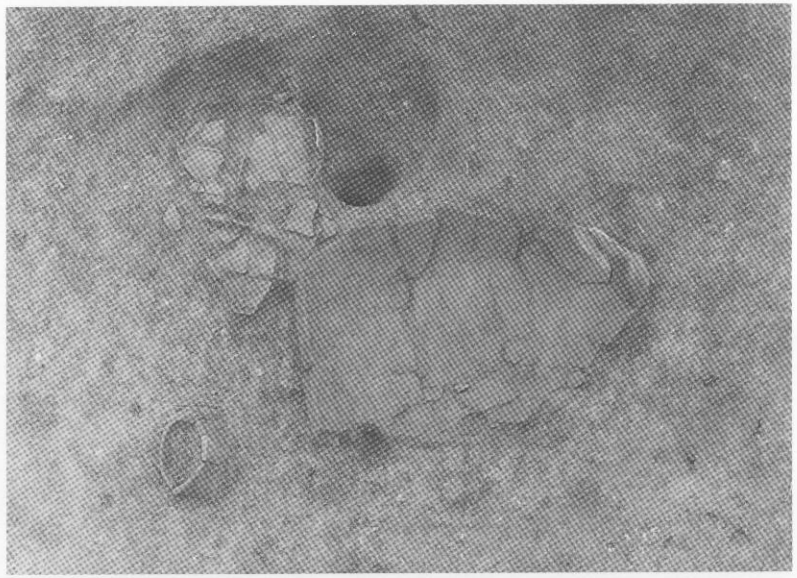
1 1〜3号甕棺墓



2 4号甕棺墓



3 5号甕棺墓



4 6号甕棺墓



1 7号甕棺墓



3 9号甕棺墓



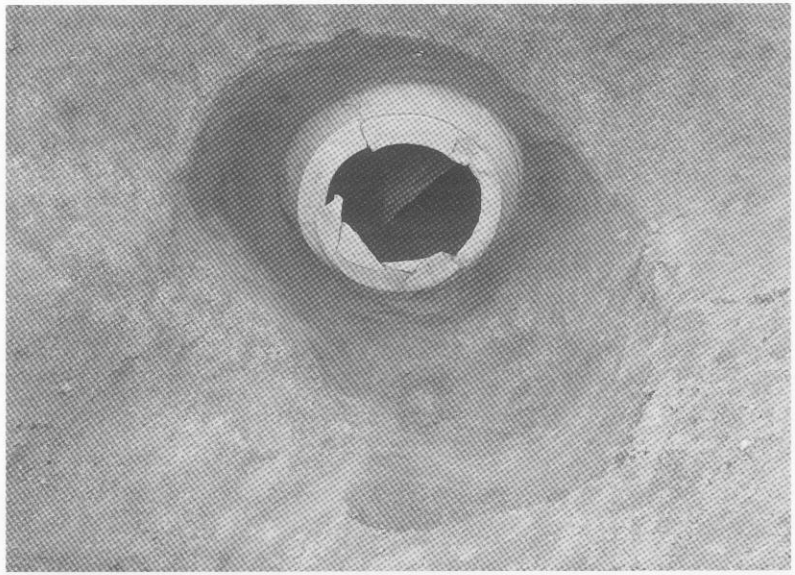
2 8号甕棺墓



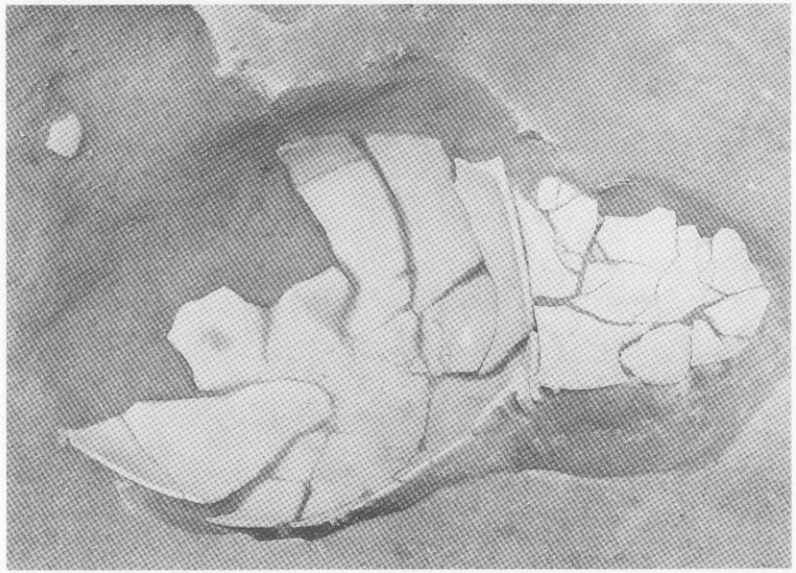
4 10号甕棺墓



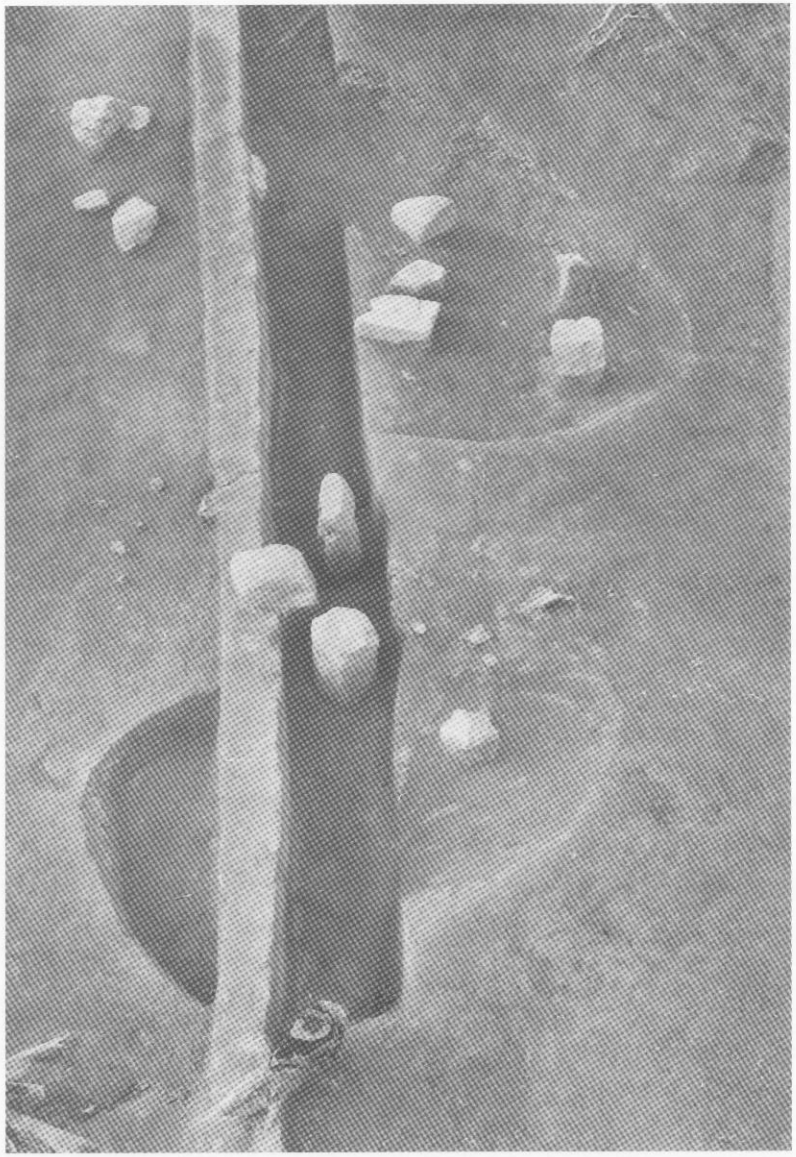
1 11号甕棺墓



2 12号甕棺墓



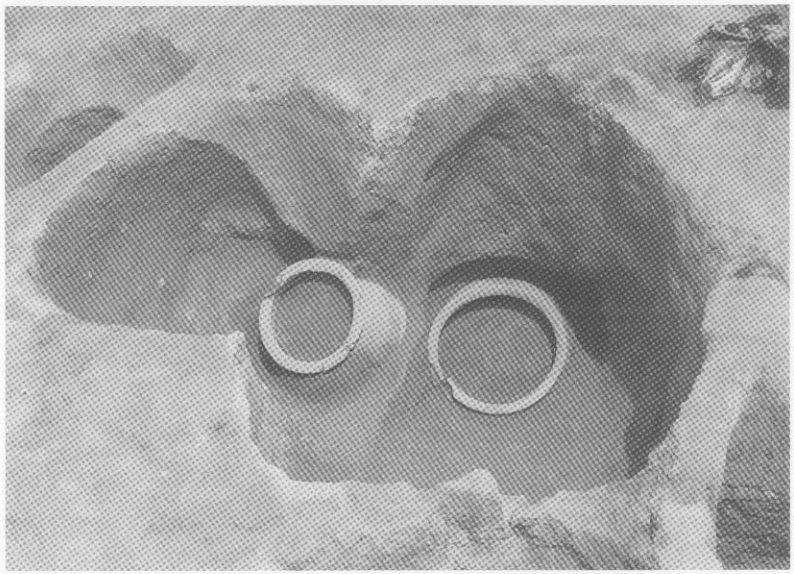
3 14～18号甕棺標石



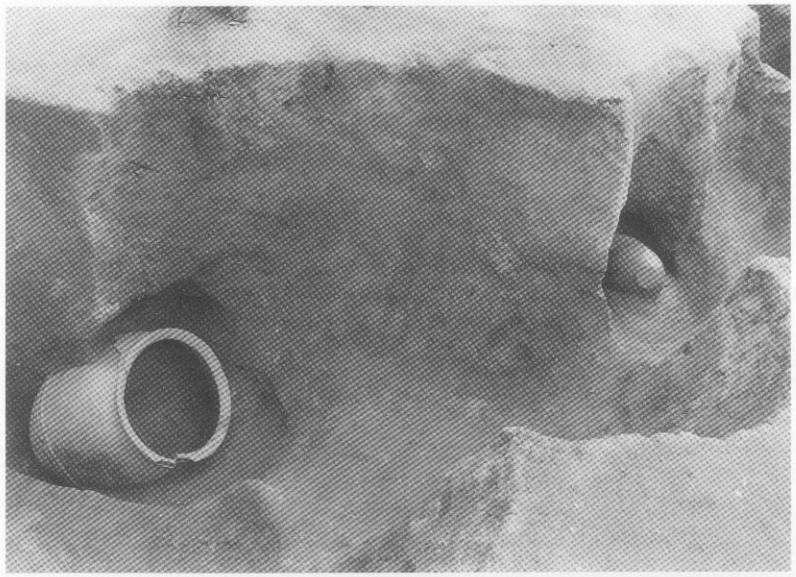
1 14号甕棺墓



2 15・16号甕棺墓



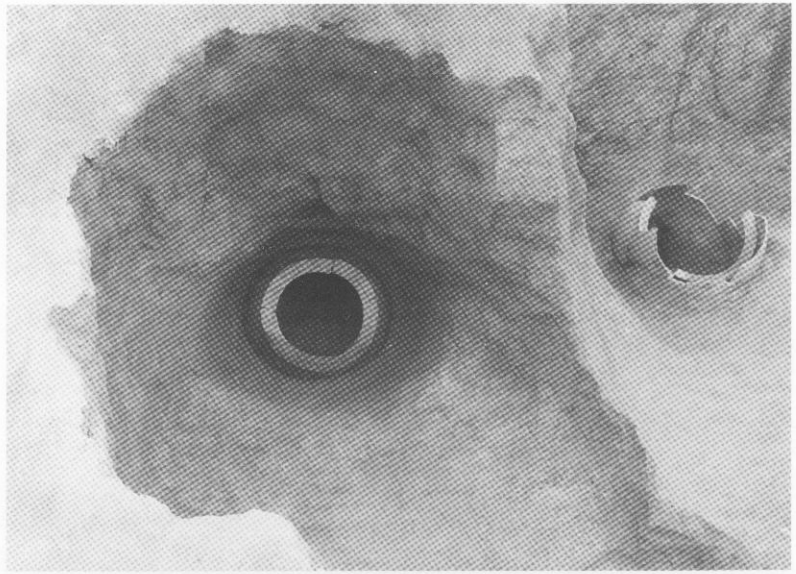
3 15号甕棺墓



4 17号甕棺墓



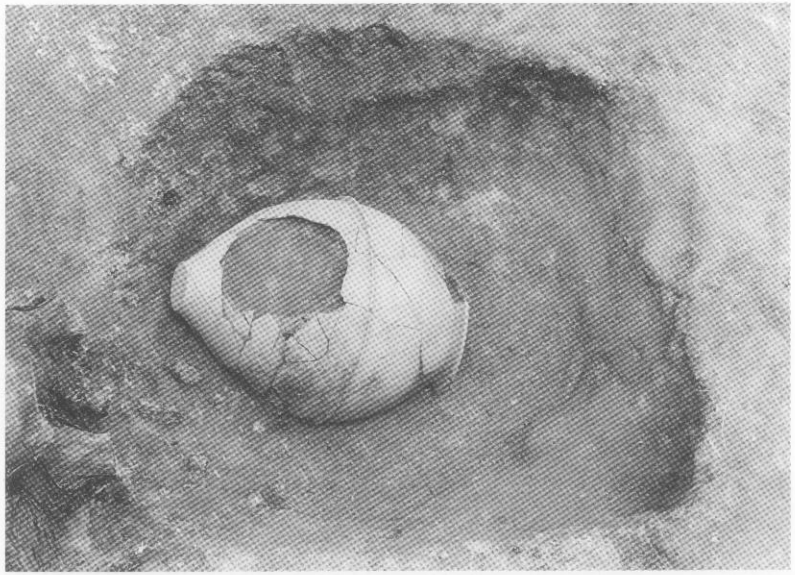
1 18号甕棺墓



2 22号甕棺墓



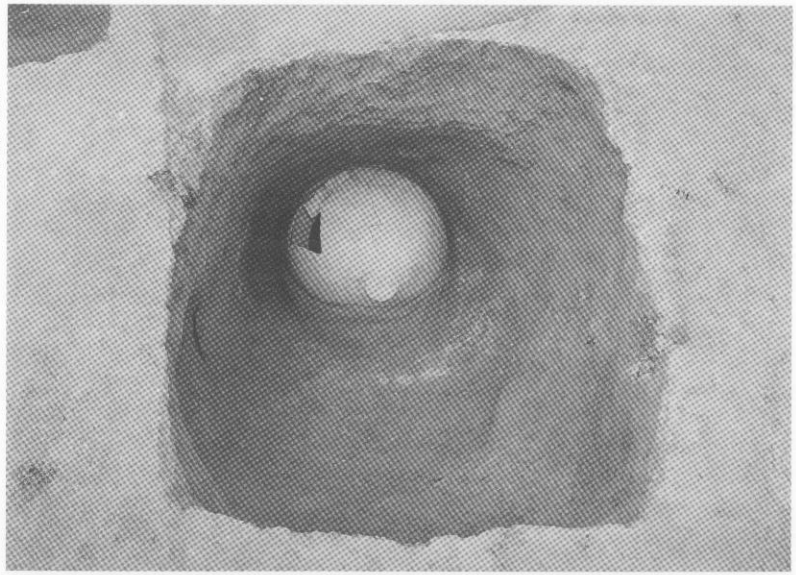
3 23号甕棺墓上甕



4 23号甕棺墓下甕



1 24号甕棺墓



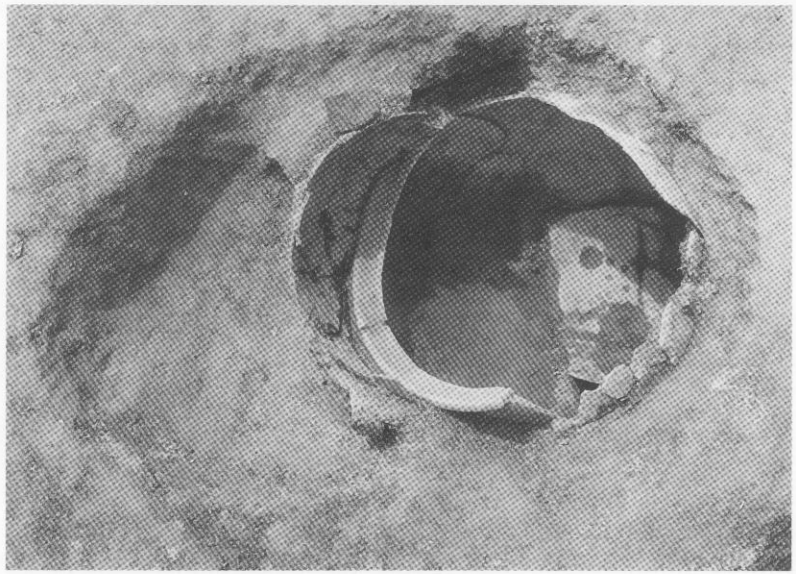
2 25号甕棺墓



3 26号甕棺墓



4 27号甕棺墓



1 29号甕棺墓



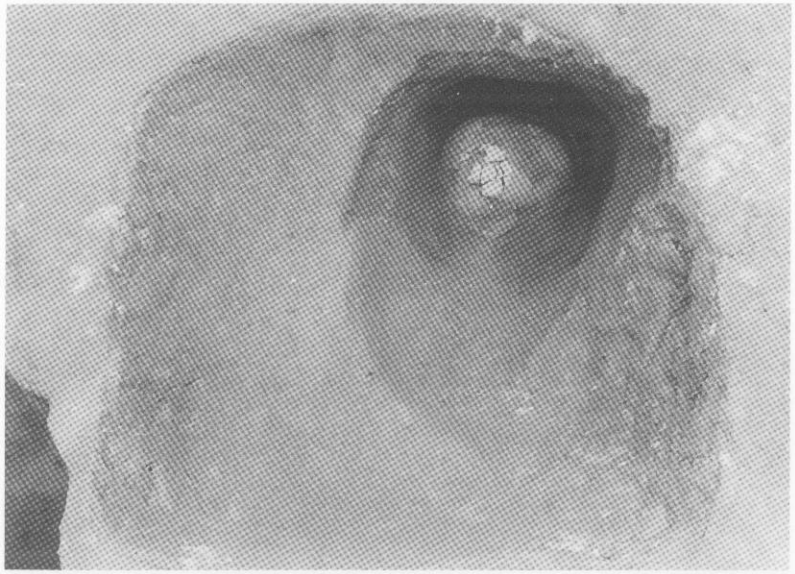
2 29号甕棺墓壙



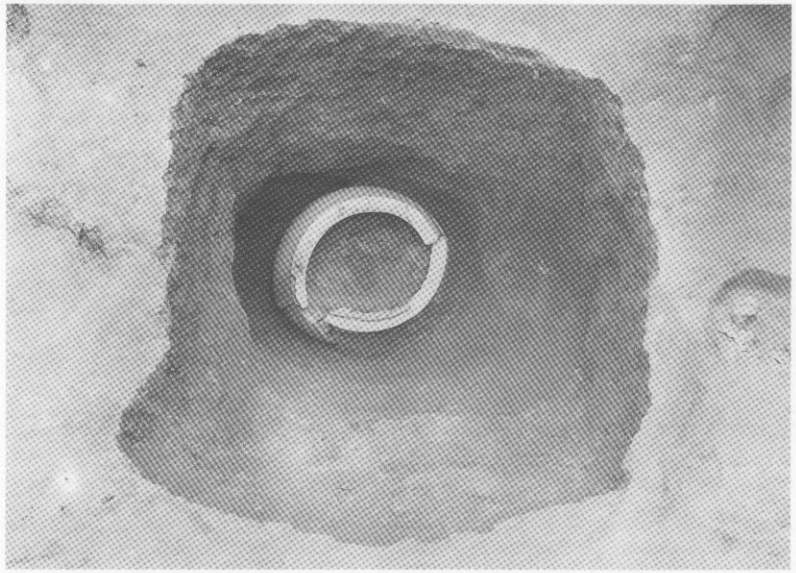
3 29号甕棺人骨



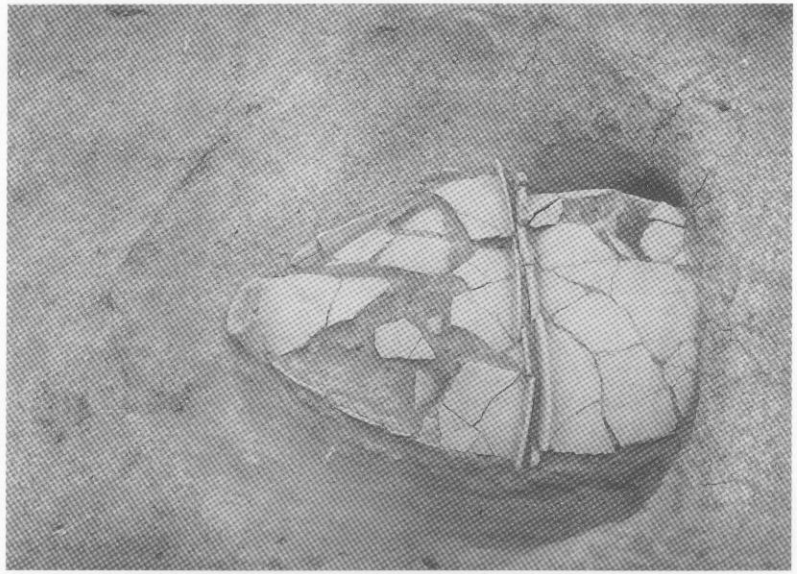
1 31号甕棺墓



2 32号甕棺墓



3 36号甕棺墓



4 40号甕棺墓



図版71

1 41号甕棺墓



2 45号甕棺墓



3 46号甕棺墓



4 47号甕棺墓



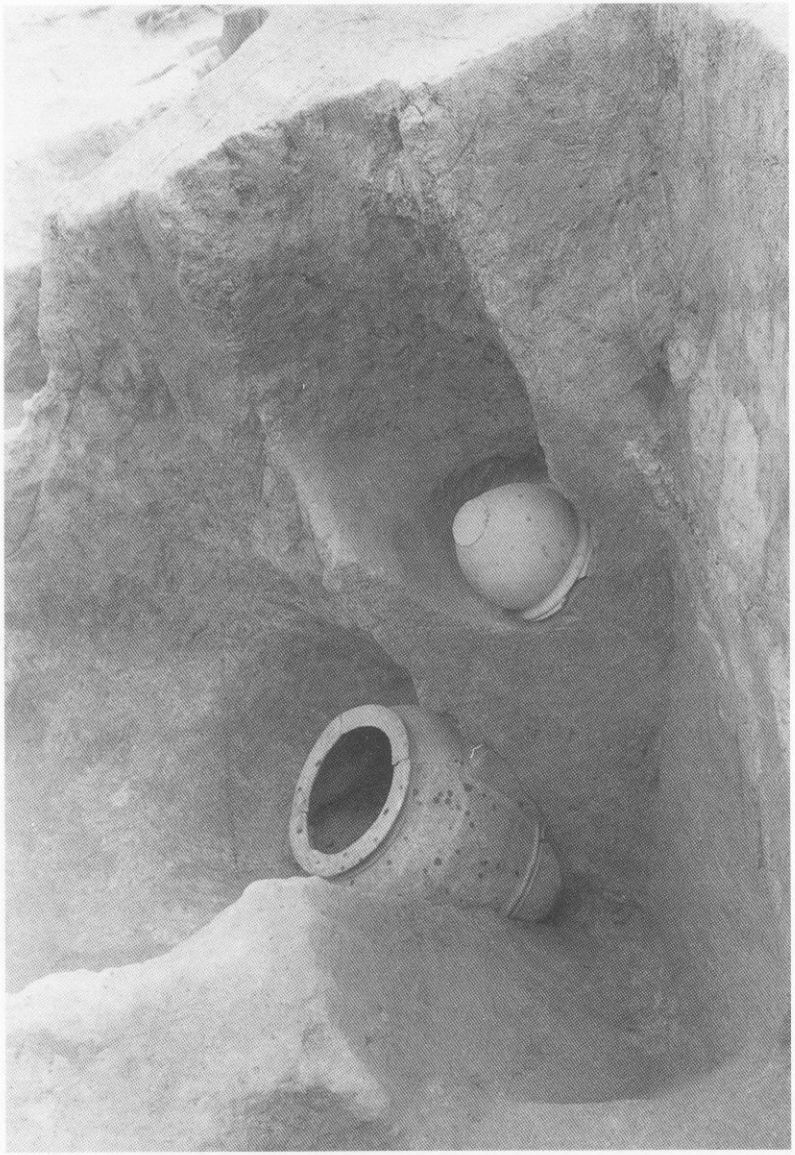
1 51号甕棺墓



2 52号甕棺墓



3 18・53号甕棺墓



1 54号甕棺墓



2 55号甕棺墓



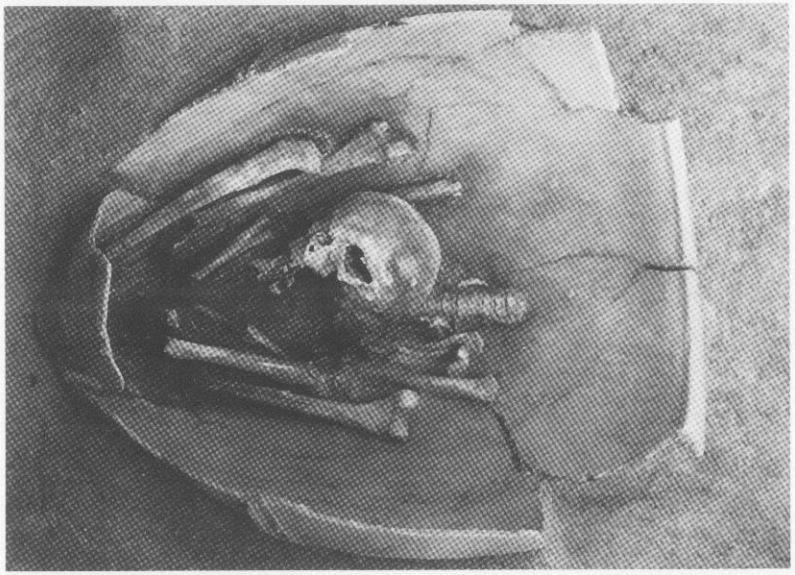
3 55号甕棺墓



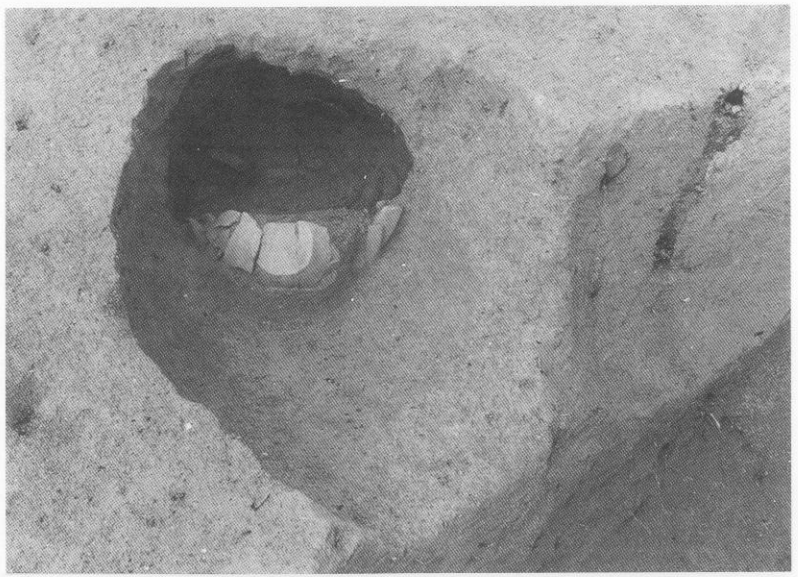
1 57号甕棺墓



2 57号甕棺人骨



3 58号甕棺墓

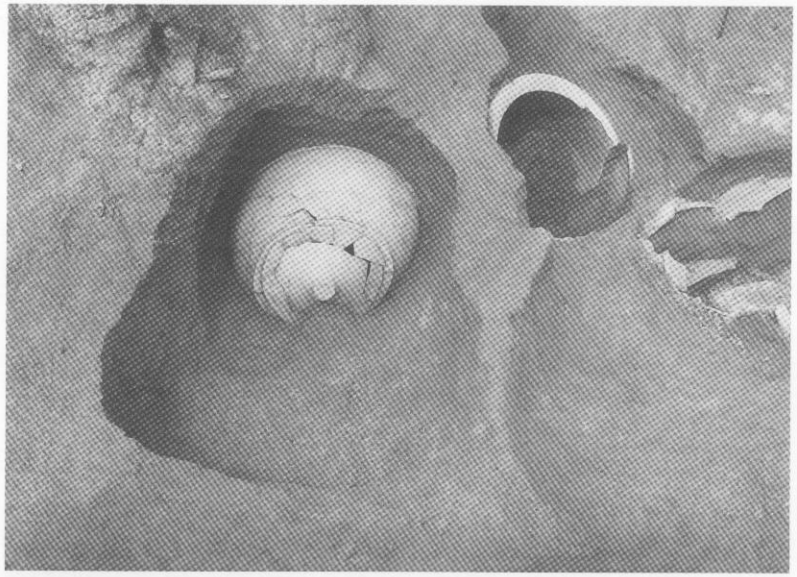


4 59号甕棺墓



図版75

1 60(右)・61(左)号甕棺墓



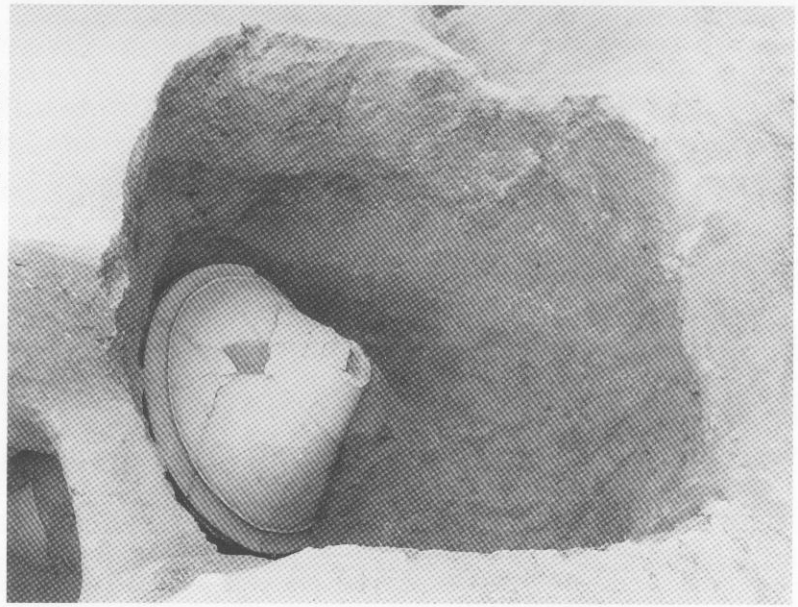
2 50(右)・63(中)・55(左)号甕棺墓



3 64号甕棺墓

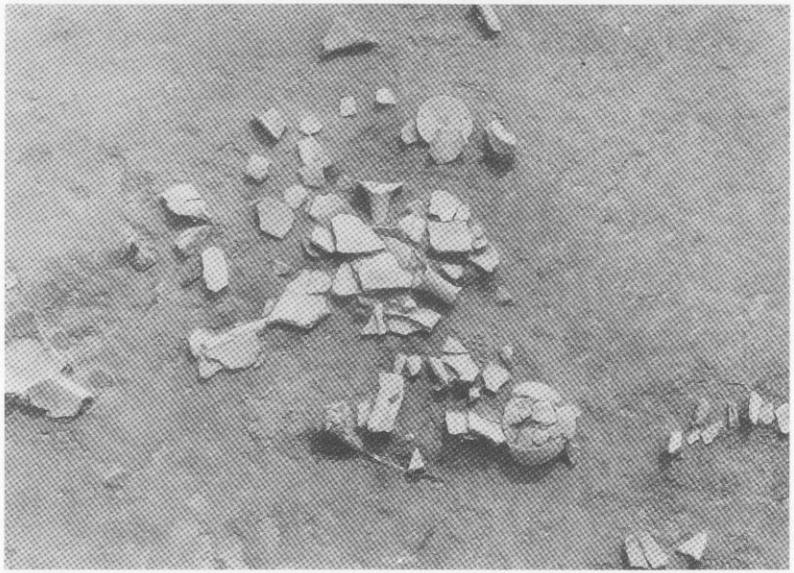


4 65号甕棺墓





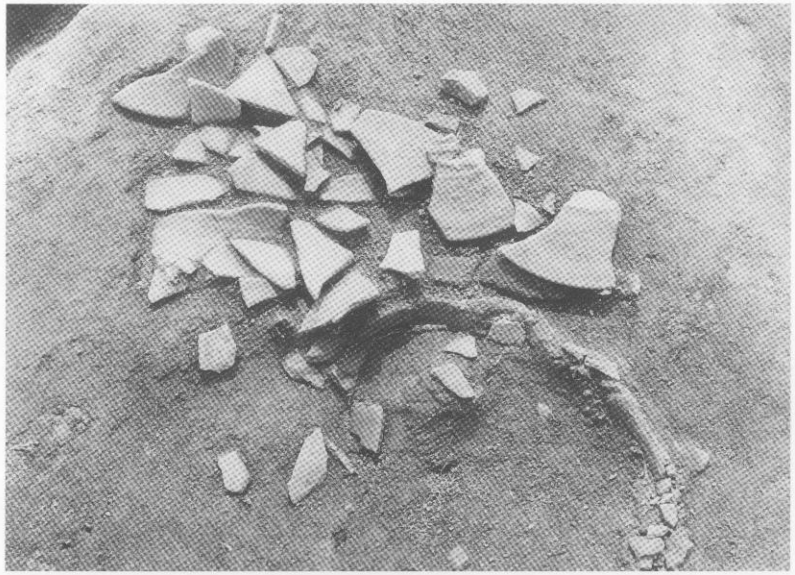
1　1号祭祀土壙



2　7号祭祀土器群



3　2号祭祀土壙と土器群



1　8号祭祀土器群



2　池の上1号貯蔵穴



3　平原5・6号墳付近の甕棺墓と祭祀土壙



1　平原古墳群全景（東上空）

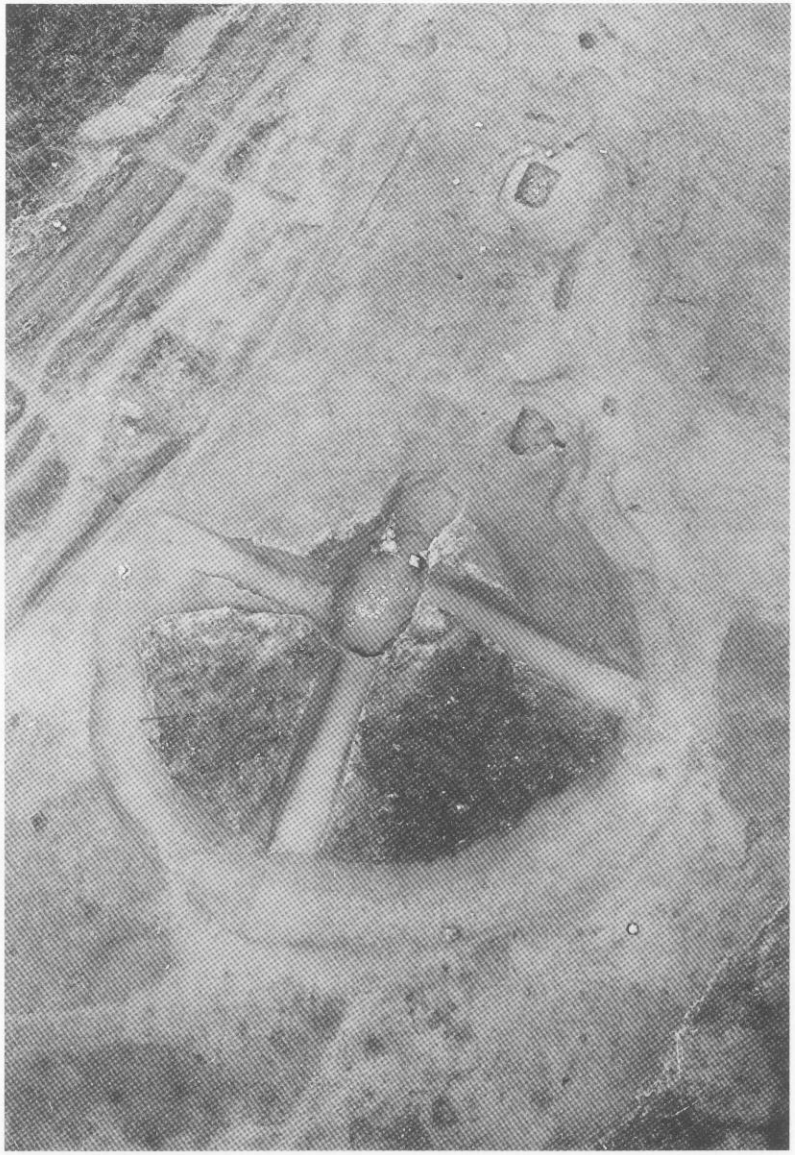


2　1号墳（調査前）



3　1号墳（調査後）

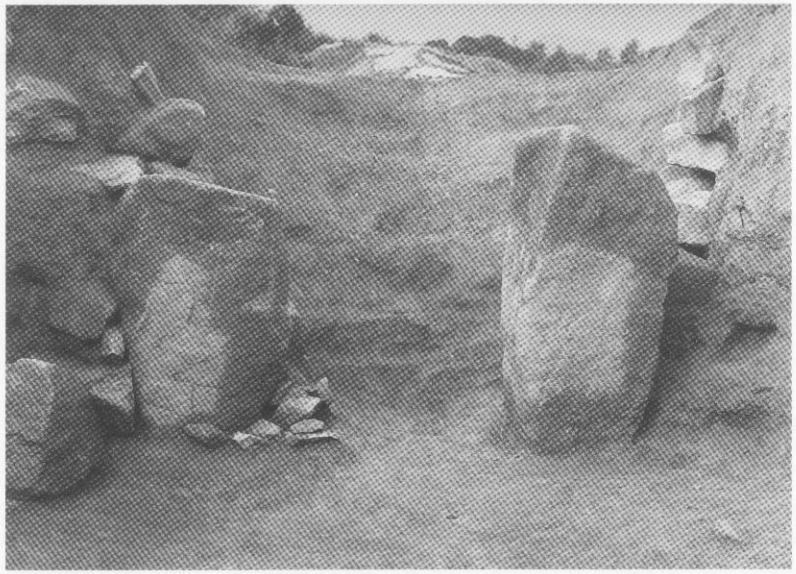
図版79



1　1・3号墳全景



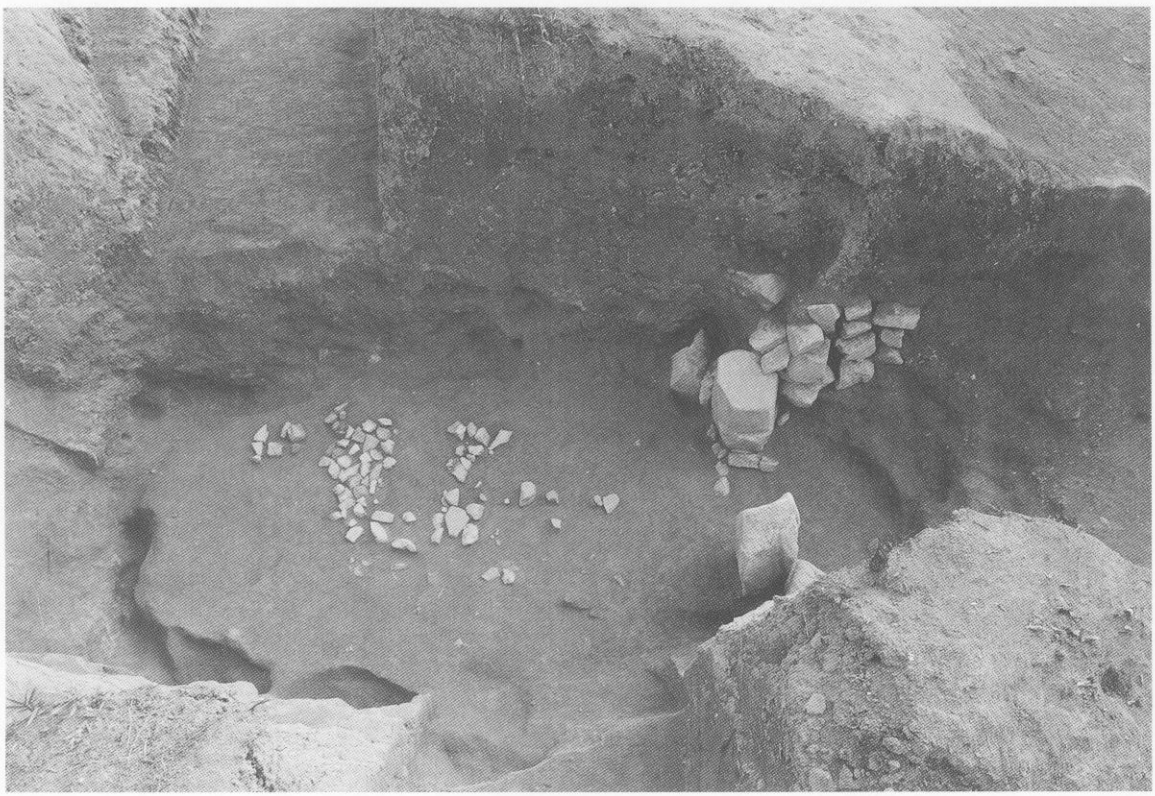
2　石室と墓道



3　石室内から見た玄門



1　1号墳と3号墳(西から)



2　1号墳石室(北上から)



1　1号墳の造出



2　造出上の須恵器



1　2号墳(調査前)



2　2号墳と4号墳全景(東から)

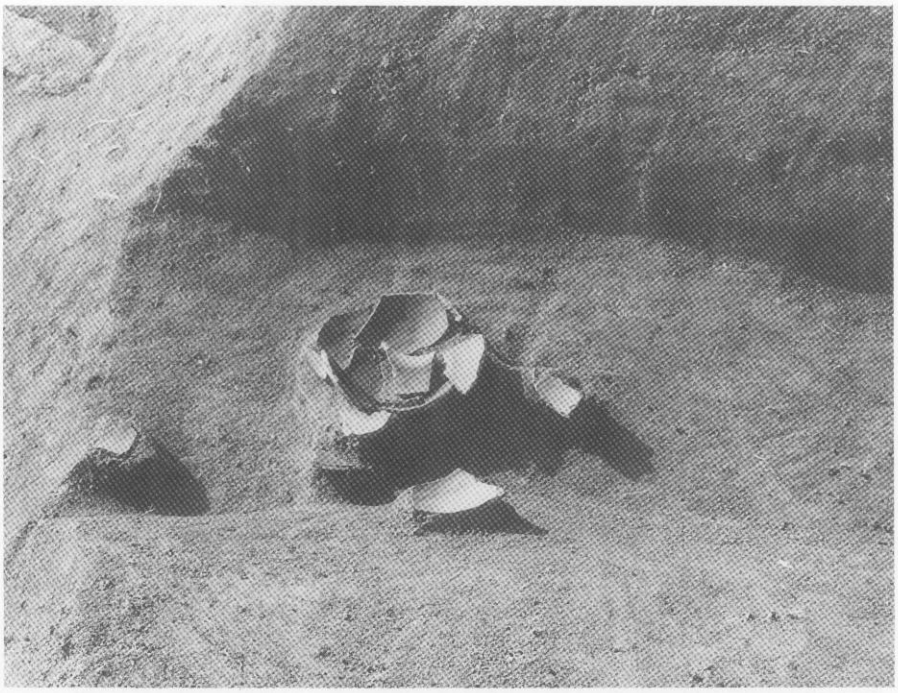


1　2号墳・4号墳全景



2　2号墳主体部

1 2号墳西側周溝内須恵器



2 3号墳（調査前）

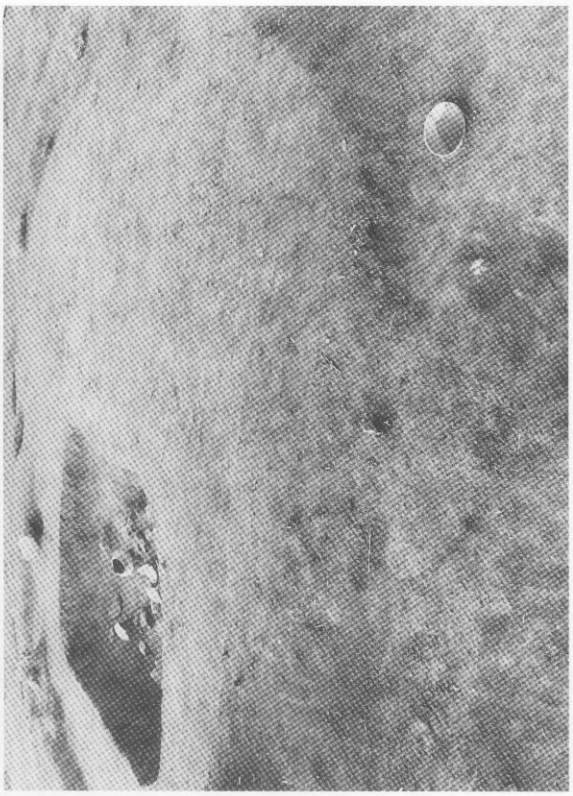


3 3号墳全景（調査後）





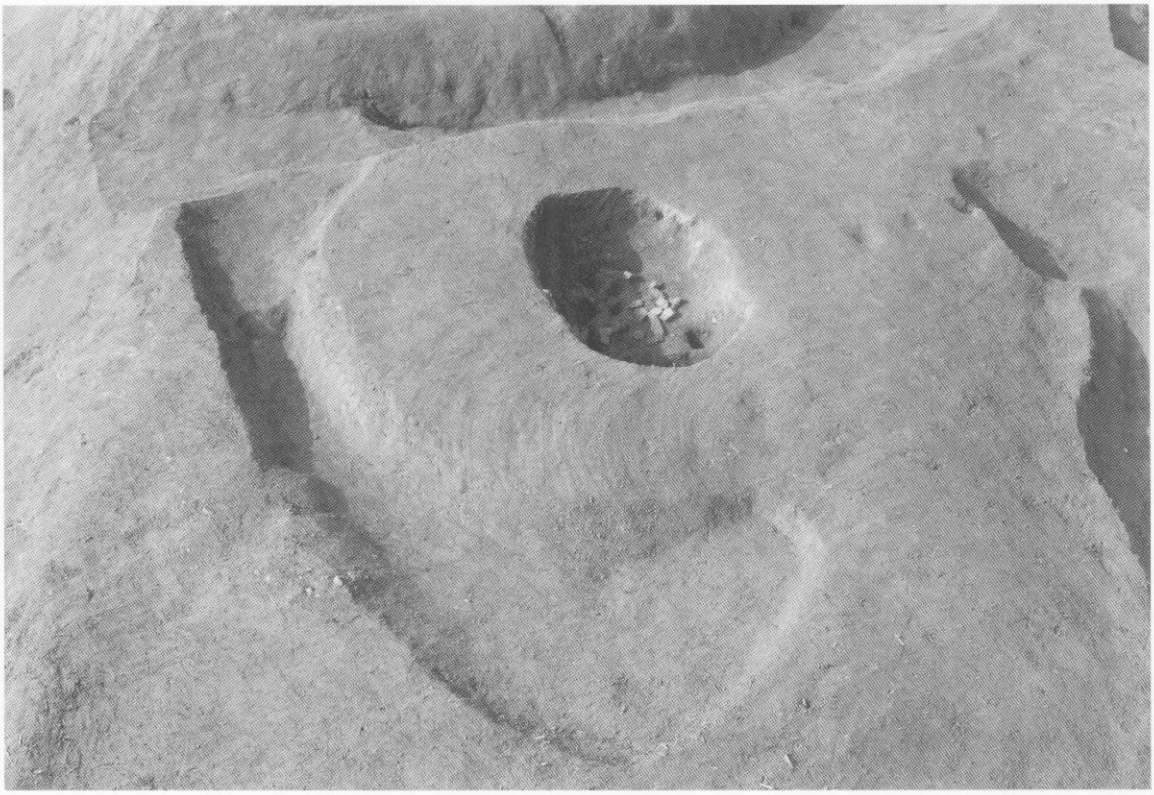
2　3号墳主体部



3　3号墳北東側裾の須恵器



1　3号墳とその付近の全景



1　4号墳全景（東から）



2　4号墳主体部



1　5・6号墳遠景(調査前)



2　5号墳(調査中)



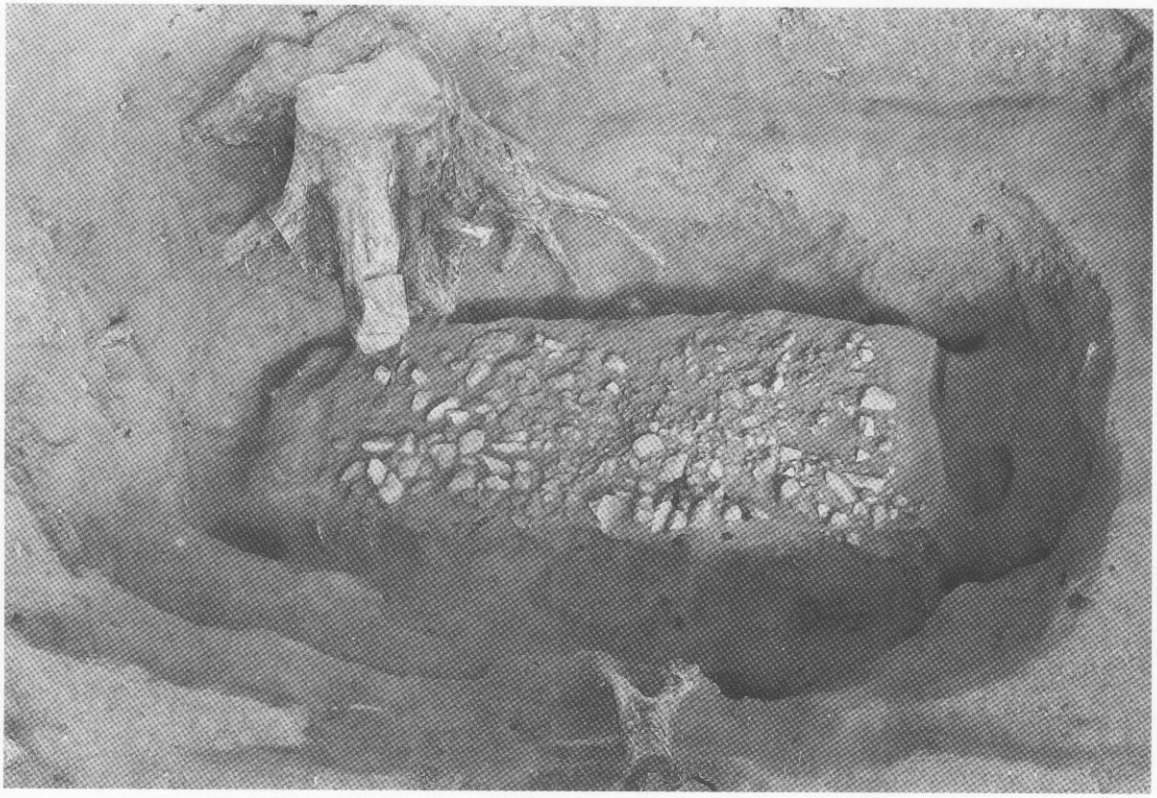
1　5号墳主体部(南から)



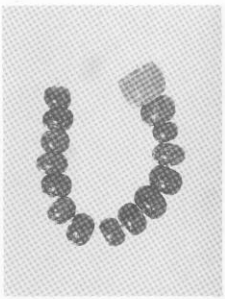
2　5号墳北西側周溝の須恵器

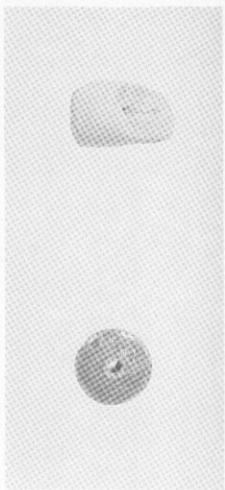


1　6号墳全景(西から)

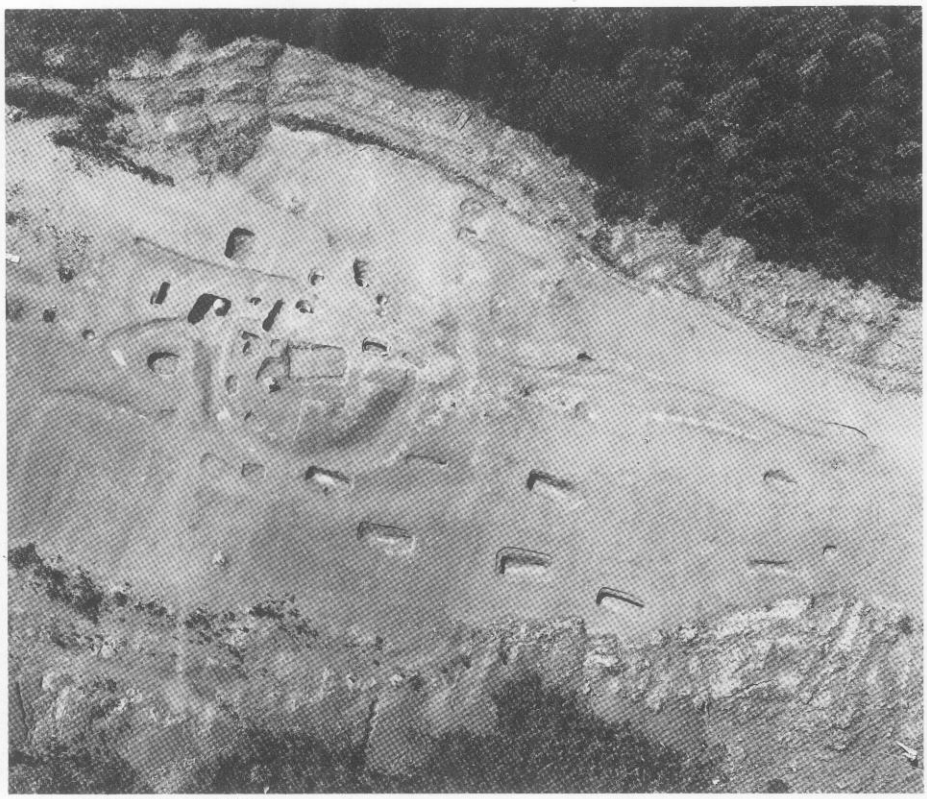


2　6号墳主体部(南から)

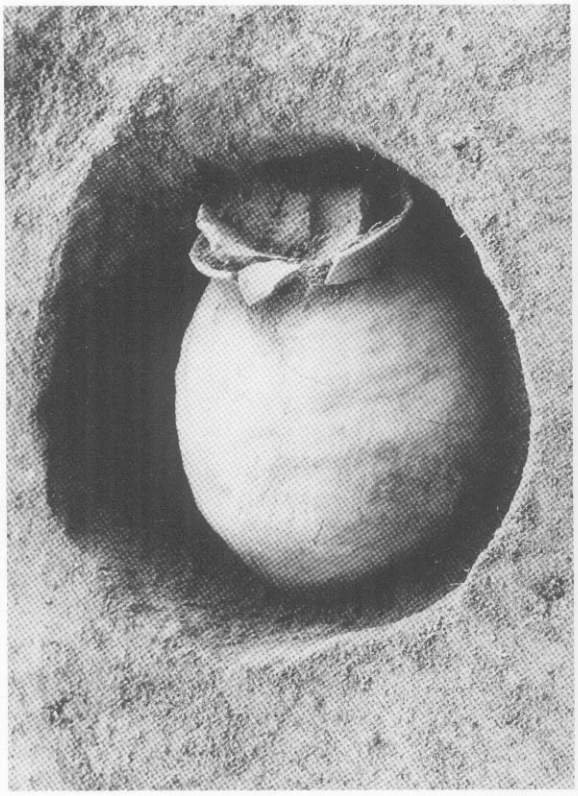




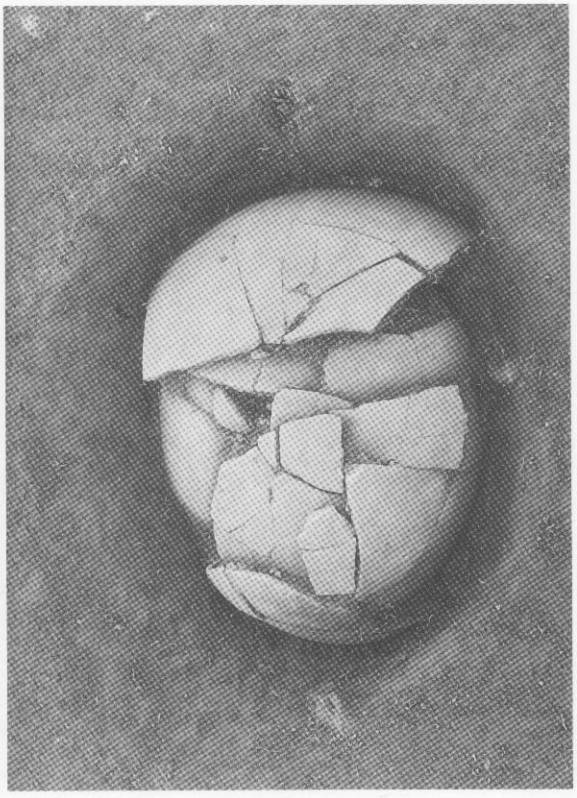
3　古墳出土玉類



4　歴史時代土壙墓全景



1　1号甕棺墓（土師器）

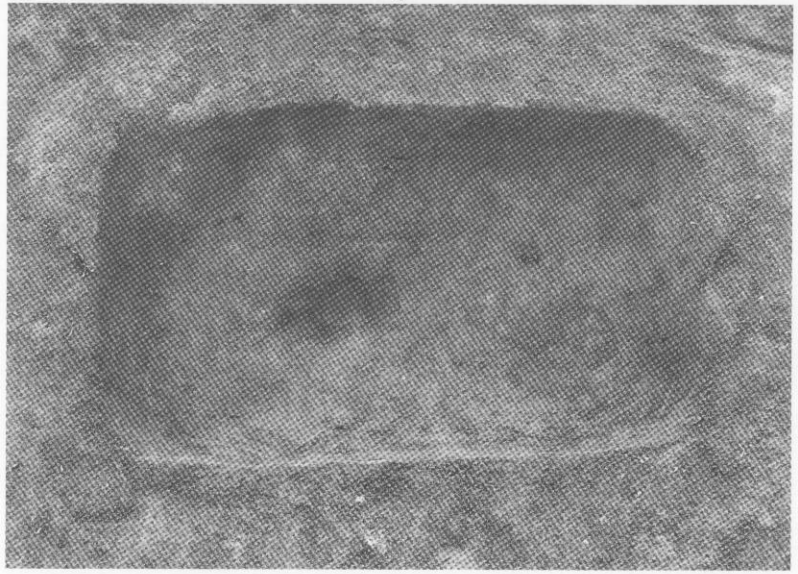


2　2号甕棺墓（須恵器＋土師器）

1 1号土壙墓



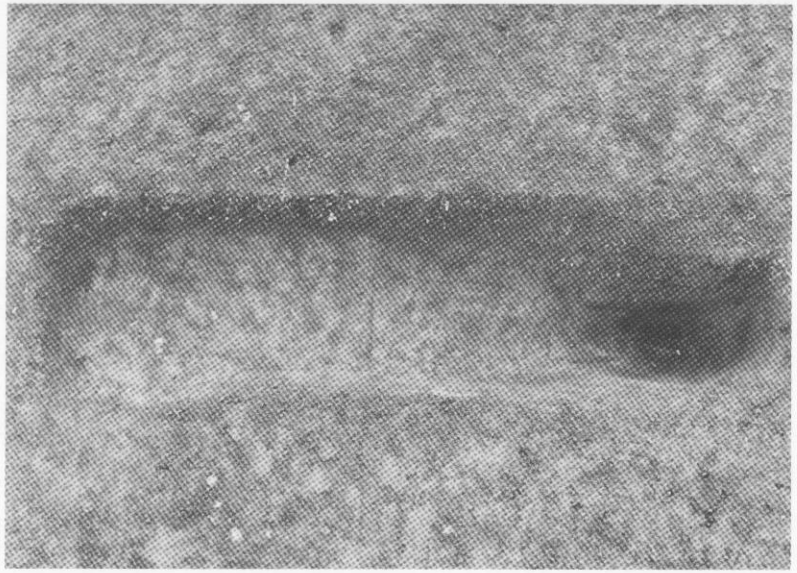
2 2号土壙墓



3 3号土壙墓



4 4号土壙墓





1　5号土壙墓



2　6号土壙墓



3　7号土壙墓



1　8号土壙墓



2　9号土壙墓



3　10号土壙墓



4　11号土壙墓

国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報

昭和59年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　瞬報社写真印刷㈱福岡営業所
福岡市中央区天神5丁目4番16号